

松原市天美西所在

大和川今池遺跡（その3・その4）

－大和川高水敷整備事業に伴う発掘調査報告書2－

2001年9月

財団法人 大阪府文化財調査研究センター



1. 調査区から大阪湾をのぞむ



2. 調査区から二上山をのぞむ



1. 調査区から大阪市内（難波宮方面）をのぞむ



2. 出土石製品



調査区全景 西地区、東地区（北から）



1. 土坑95遺物出土状況（西から）



2. 土坑192遺物出土状況（東から）



1. 焼土坑33検出状況 (南から)



2. 焼土坑33断面 {部分} (西から)



3. 焼土坑38検出状況 (南から)



1. 焼土坑50検出状況 (南から)



2. 焼土坑50断面 [部分] (東から)



4. 焼土坑144断面 (西から)



3. 焼土坑144検出状況 (南から)

序 文

大和川今池遺跡は、旧石器時代から近世にかけての遺構、遺物が検出される複合遺跡です。これまでの調査では、主に古墳時代から室町時代に至る各時代の集落跡が見つかっています。大和川今池遺跡は、遺構の範囲が広く、出土する遺物内容が豊富であり、時代も多岐にわたることから、当地域の中心となる遺跡であることが判ってきました。この遺跡を特に有名にしたのは、難波京朱雀大路の南延伸上となる「難波大道」と呼ばれる古代の官道跡が発見されたことによります。

今回の調査では、これらの集落跡や道路とは若干趣を異にし、主に古代から中世・近世の耕作地やそれに伴うと考えられる溝などを検出しました。これまでの調査で明らかになってきた集落域の周辺に農業を基盤とした生産地域が広がっていたことが判りました。さらに、古墳時代末～平安時代頃の整地層から古墳時代後期に相当する須恵器が数多く出土しており、周辺に須恵器窯跡の存在を想起させるところです。これらの成果は、大和川今池遺跡周辺地域の歴史的景観を復原するのに欠かせない資料となり、貴重な文化遺産として後世に引き継がれるであろうと確信する次第です。

本調査を実施するにあたり、国土交通省（旧 建設省）近畿地方整備局大和川工事事務所、大阪府南部流域下水道事務所をはじめ、地元関係者各位の多大なご助力を賜りましたことに、深く感謝の意を表します。今後とも文化財行政に対してより一層のご理解とご協力を賜りますとともに、当センターの事業になお一層のご支援を賜りますよう、お願い致します。

平成13年 9 月

財団法人 大阪府文化財調査研究センター
理事長 水 野 正 好

例 言

1. 本書は、大阪府松原市天美西7・8丁目地内に所在する大和川今池遺跡（その3）（その4）の発掘調査報告書である。
2. 調査は、大和川の高水敷整備事業に伴うもので、国土交通省近畿地方整備局大和川工事事務所の委託を受け、大阪府教育委員会の指導のもと、財団法人大阪府文化財調査研究センターが発掘調査を実施した。本書は、平成10年度事業である大和川今池遺跡（その3）（その4）の報告を行っている。
3. 調査体制ならびに調査期間は以下の通りである。

南部調査事務所（所長：瀬川 健） 調査第1係（係長：松岡良憲 主査：村上富喜子）
大和川今池遺跡（その3） 平成10年3月27日～平成11年3月26日
主査：入江正則 技師：杉本清美 専門調査員：池田和雅
大和川今池遺跡（その4） 平成10年5月26日～平成11年3月25日
技師：岡本圭司、後川恵太郎 専門調査員：清水一悦
資料整理期間 調査終了後～平成13年3月15日
4. 報告書に掲載した遺構写真については各調査担当者が、遺物写真については南部調査事務所 主任技師：立花正治が撮影した。
5. 調査に際し、花粉分析、植物珪酸体分析、熱残留古地磁気測定、微化石分析をはじめ各種自然科学分析を実施した。分析結果の一部を第5章 自然科学分析に掲載した。
6. 本書は、（その3）の執筆を杉本が、（その4）の執筆及び編集は岡本が行った。又編集は村上が行った。
7. 本調査に関わる出土遺物、写真、カラースライド、実測図面等は、当センターにおいて保管している。広く活用される事を希望する。
8. 発掘調査の実施にあたっては、国土交通省近畿地方整備局大和川工事事務所、大阪府南部流域下水道事務所の協力を受けるとともに、関係各機関ならびに下記の方々のご指導、ご教示を賜った。記して感謝の意を表します。（敬称略、順不同）

広瀬和夫（奈良女子大学）、森村健一（堺市教育委員会）、積山 洋、松尾信裕（大阪市教育委員会）、足立俊彦、岡本武司（松原市教育委員会）、北野 重（柏原市教育委員会）、野島 稔（四条畷市教育委員会）、西口陽一、藤田道子（大阪府教育委員会）、禰冨田佳男（文化庁）
9. 発掘調査ならびに本報告書の作成にあたり、下記の補佐員、補助員の参加を得た。（順不同）

加茂幸彦 久禮孝志 角野孝子 片木伸子 中平三紀子 浅木 薫 乾有美子 龍田かほる
内山信子 高橋由利子 中山由佳理 松村より子 秋好洋子 二宮サキ子 三島けい子
若井キヨ子 後藤佳代 加茂千歳 松井利恵 西口桂子 松本昭子

凡 例

1. 発掘調査に伴う地区割は、国土座標の第Ⅵ系に基づく表記方法をとっている。なお、本書で用いた北は座標北を基準としている。また、座標の記載はkm単位で表した。
2. 本書で用いる標高は、東京湾平均海水面（T.P.）からのプラス値である。
3. 調査地区の設定は、大和川の下流側調査区を大和川今池遺跡（その3）調査区、上流側を大和川今池遺跡（その4）調査区とした。本書では、単に（その3）、（その4）と略した。
4. 本書では、（その3）、（その4）の各調査区ごとに節を設けて調査成果を記述している。
5. 本書掲載の遺構番号は、（その3）については調査時の遺構番号をそのまま踏襲している。
（その4）については1から順に通し番号を振っている。そのため（その3）、（その4）において、同一の遺構番号が存在する。
6. 本書における遺物番号については、調査区ごとに1から通し番号を振っている。そのため（その3）、（その4）において、同一遺物番号が存在する。
7. 本文、挿図、写真図版の遺構番号および遺物番号は、各調査区内においてすべて一致する。
8. 挿図の縮尺は、その対象によって異なっており、必ずしも一致していない。挿図ごとにスケールで明示している。
9. 遺物実測図の縮尺は、1／4を基本としているが、必要に応じて異なる縮尺を用いている。各々の縮尺率については、各スケールで明示している。
10. 遺物実測図のうち土器類の断面については、須恵器・須恵質土器が黒塗り、弥生土器・土師器・土師質土器・陶磁器・石製品を白抜きとした。さらに、瓦器・瓦質土器の断面については縦線、瓦は斜線を使用した。
11. 挿図、表、写真図版の番号は、全体を通しての通し番号を付与している。
12. 土色は、小山正忠・竹原秀夫編『新版標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修に準拠した。
13. 引用文・参考文献は各章・各節、必要に応じ項の末尾に記した。
14. 本文中の用語、記載方法については、執筆者の意思を尊重し、統一されていない部分もある。

目 次

序文

例言

凡例

第1章 位置と環境	(杉本清美)	1
第2章 調査に至る経緯と調査の経過	(杉本)	8
第1節 調査に至る経緯	(杉本)	8
第2節 調査の経過	(杉本)	9
第3章 調査の方法	(杉本)	10
第4章 調査の成果		13
第1節 (その3) 調査区の成果	(杉本)	13
第2節 (その4) 調査区の成果	(岡本圭司)	87
第5章 自然科学分析		129
第1節 大和川今池遺跡(その3・その4)発掘調査に係る微化石分析	(渡辺正巳)	129
第2節 大和川今池遺跡(その4)焼土坑の自然科学的考察	(渡辺正巳・渡辺栄次)	134
第3節 大和川今池遺跡(その2)出土木製品の分析	(吉村佐紀恵)	145
第6章 まとめ	(杉本・岡本)	149

挿 図 目 次

第1図 大和川今池遺跡(その3・その4)の調査区位置図	1	第13図 第3面平面図	23
第2図 大和川今池遺跡 周辺地形分類図	2	第14図 第3面遺構平・断面図	24
第3図 明治18年 大和川今池遺跡の周辺環境	3	第15図 第3層出土遺物	25
第4図 大和川今池遺跡周辺の遺跡分布図	4	第16図 輸入陶磁器	27
第5図 大和川今池遺跡 既往調査地及び(その3・その4)トレンチ配置図	6	第17図 第4面平面図	29
第6図 国土座標系と地区割図	10	第18図 第4面畦畔・溝断面図	30
第7図 大和川今池遺跡(その3・その4)調査区の地区割設定図	11	第19図 第4面遺構平・断面図	30
第8図 (その3) 調査区位置図	13	第20図 第4面及び第4層出土遺物	31
第9図 (その3) 南壁断面図	15	第21図 第5面平面図	33
第10図 第1・2面平面図	17	第22図 第5面畦畔平・断面図	34
第11図 第1・2面鋤溝断面図	19	第23図 第5面畦畔出土遺物	34
第12図 第1・2層出土遺物	19	第24図 第5面土器溜り遺物出土状況	36
		第25図 第5面土器溜り出土遺物	36
		第26図 第5面不定形土坑32平・断面図	37
		第27図 第5面不定形土坑32出土遺物	38
		第28図 第5面不定形土坑39平・断面図	39

第29図	第5面不定形土坑39・41出土遺物 …	40	第53図	出土須恵器坏蓋・坏身拓本－ヘラ記号 (3) …	76
第30図	第5面遺構断面図 …	43	第54図	出土須恵器坏蓋拓本－同心円紋スタンプ 他 …	77
第31図	第5面遺構平・断面図 …	44	第55図	出土須恵器坏蓋拓本－口縁部調整 …	78
第32図	第5面不定形土坑50・56、ピット状土坑 44・55出土遺物 …	44	第56図	出土須恵器蓋坏属性分類 …	79
第33図	第5面不定形土坑12・13・14平・断面図 …	46	第57図	-i9地区と他遺跡出土須恵器の器種構 成比較 …	80
第34図	第5・6層出土遺物 …	49	第58図	口縁部端部に刻み目を有する須恵器の分布 …	84
第35図	第6面平面図 …	51	第59図	(その4) 調査区位置図 …	87
第36図	第6面遺構平・断面図(1) …	52	第60図	(その4) 基本層序柱状図 …	89
第37図	第6面遺構平・断面図(2) …	53	第61図	第2面全体図 …	91
第38図	第6面不定形土坑24平・断面図 …	53	第62図	溝201断面図…	92
第39図	出土石製品(1) …	57	第63図	第2層、第2面検出遺構出土遺物 …	92
第40図	出土石製品(2) …	58	第64図	第3-1・2層、第3-1・2面検出遺 構出土遺物 …	93
第41図	第5層B14-i9地区出土遺物(須恵器 坏蓋)(1) …	62	第65図	第3-1面全体図 …	94
第42図	第5層B14-i9地区出土遺物(須恵器 坏蓋)(2) …	63	第66図	第3-2面全体図 …	95
第43図	第5層B14-i9地区出土遺物(須恵器 坏身)(1) …	64	第67図	第4-1層出土遺物 …	96
第44図	第5層B14-i9地区出土遺物(須恵器 坏身)(2) …	65	第68図	第4-1面全体図 …	98
第45図	第5層B14-i9地区出土遺物(須恵器 高坏) …	66	第69図	第4-2面全体図 …	99
第46図	第5層B14-i9地区出土遺物(須恵器 壺・甕)(1) …	67	第70図	第4-1・2面検出遺構断面図 …	100
第47図	第5層B14-i9地区出土遺物(須恵器 壺・甕)(2) …	68	第71図	溝111断面図…	101
第48図	第5層B14-i9地区出土遺物(礎・器 台・その他) …	69	第72図	第4-2層、第4-1・2面検出遺構出 土遺物 …	103
第49図	出土須恵器拓本－波状文他文様(1) …	70	第73図	第5層出土遺物 …	103
第50図	出土須恵器拓本－波状文他文様(2) …	71	第74図	第5面全体図…	105・106
第51図	出土須恵器坏蓋・坏身拓本－ヘラ記号 (1) …	74	第75図	第5面検出遺構断面図1 …	107
第52図	出土須恵器坏蓋・坏身拓本－ヘラ記号 (2) …	75	第76図	第5面検出遺構断面図2 …	108
			第77図	第5面検出遺構断面図3 …	109
			第78図	溝128断面図…	109
			第79図	焼土坑33平・断面図 …	110
			第80図	焼土坑50平・断面図 …	111
			第81図	焼土坑38平・断面図 …	112
			第82図	焼土坑144平・断面図…	112
			第83図	轍状遺構1平・断面図 …	114
			第84図	第5面検出遺構出土遺物 …	115

第85図	土坑95平・断・立面図	116	第113図	焼土坑33の消磁前と消磁後の残留磁化方向の等面積投影図	138
第86図	土坑192、溝200平・断・立面図	117	第114図	焼土坑50の消磁前と消磁後の残留磁化方向の等面積投影図	138
第87図	土坑95、土坑192出土遺物	117	第115図	焼土坑144の残留磁化方向の等面積投影図	138
第88図	第6面遺構全体図	119	第116図	焼土坑33西側における加熱重量減少量変化	140
第89図	第6面検出遺構断面図1	121	第117図	焼土坑33東側における加熱重量減少量変化	141
第90図	第6面検出遺構断面図2	122	第118図	焼土坑33西側-20cm地点のXRD結果	141
第91図	第6面検出遺構断面図3	122	第119図	焼土坑33西側-20cm地点のXRD結果(600℃焼成)	141
第92図	木根跡平面図	123	第120図	焼土坑33西側-120cm地点のXRD結果	142
第93図	調査区内出土石器	124	第121図	焼土坑33西側-140cm地点(600℃焼成)のXRD結果	142
第94図	(その4)調査区内主要溝・畦畔位置関係図	127	第122図	No.17曲物側板褐色部分の断面	146
第95図	調査地点の配置	130	第123図	No.24刀子柄黒色部分の断面	146
第96図	遺構32の花粉ダイアグラム	131	第124図	No.48底板表面褐色部分の断面	146
第97図	遺構32のプラント・オパールダイアグラム	131	第125図	No.48底板表面・裏面	146
第98図	土坑192の花粉ダイアグラム	131	第126-a図	No.17側板内側黒色部分の赤外吸収スペクトル	147
第99図	土坑192のプラント・オパールダイアグラム	131	第126-b図	No.17側板木質の赤外吸収スペクトル	147
第100図	土坑95の花粉ダイアグラム	132	第127図	漆の赤外吸収スペクトル	147
第101図	土坑95のプラント・オパールダイアグラム	132	第128図	柿渋の赤外吸収スペクトル	147
第102図	試料採取地点	134	第129図	No.24刀子柄内部黒色物質の赤外吸収スペクトル	147
第103図	花粉ダイアグラム	136	第130図	木炭の赤外吸収スペクトル	147
第104図	植物珪酸体ダイアグラム	136	第131図	No.42栓上部黄白色付着物のXRFスペクトル	148
第105図	焼土坑33西側における炭素含有量の分布	137	第132図	No.42栓上部黄白色付着物の赤外吸収スペクトル	148
第106図	焼土坑33東側における炭素含有量の分布	137	第133図	No.48底板表面褐色部分の赤外吸収スペクトル	148
第107図	焼土坑33西側における窒素含有量の分布	137			
第108図	焼土坑33東側における窒素含有量の分布	137			
第109図	焼土坑50における炭素含有量の分布	137			
第110図	焼土坑50における窒素含有量の分布	137			
第111図	パイロットサンプルY1-8の直交スペクトル	138			
第112図	パイロットサンプルY1-23の直交スペクトル	138			

表 目 次

表1	既応調査刊行図書	7	表7	強熱減量試験結果	137
表2	調査区出土遺物の器種構成	61	表8	焼土坑33の熱残留磁気測定結果	139
表3	ヘラ記号分類表	73	表9	焼土坑50の熱残留磁気測定結果	139
表4	(その4) 各地区調査面・層対照表	88	表10	焼土坑144の熱残留磁気測定結果	140
表5	(その4) 遺物出土遺構一覧表	126	表11	古地磁気測定結果(平均磁化方向)	140
表6	¹⁴ C年代	136			

参考資料図版目次

1、大和川今池遺跡周辺の旧石器出土遺跡と主要旧石器時代遺跡	60
-------------------------------	----

巻頭図版目次

巻頭図版1 (その3)		2. 土坑192遺物出土状況(東から)
1. 調査区から大阪湾をのぞむ	巻頭図版5 (その4)	1. 焼土坑33検出状況(南から)
2. 調査区から二上山をのぞむ		2. 焼土坑33断面 {部分}(西から)
巻頭図版2 (その3)		3. 焼土坑38検出状況(南から)
1. 調査区から大阪市内(難波宮方面)をのぞむ	巻頭図版6 (その4)	1. 焼土坑50検出状況(南から)
2. 出土石製品		2. 焼土坑50断面 {部分}(東から)
巻頭図版3 (その4)		3. 焼土坑144検出状況(南から)
調査区全景 西地区、東地区(北から)		4. 焼土坑144断面(西から)
巻頭図版4 (その4)		
1. 土坑95遺物出土状況(西から)		

写真図版目次

図版1 調査区全景		2. 第4面 全景(南から)
1. 調査区 全景(南から)		3. 第4面 ピット22遺物出土状況(南から)
2. 南壁断面(北から)		4. 第4面 畦畔検出状況(北から)
図版2 第1面・第2面	図版4 第5面(1)	1. 第5面 全景(南から)
1. 第1面 鋤溝群(南から)		2. 第5面 畦畔全景(南から)
2. 第2面 鋤溝群(北から)		3. 第5面 足跡(南から)
3. 第2面 鋤溝群(南から)		
図版3 第3面・第4面	図版5 第5面(2)	
1. 第3面 全景(南から)		

1. 第5面 土器溜り遺物出土状況
(南から)
2. 第5面 畦畔19遺物出土状況
(北から)
3. 第5面 畦畔20遺物出土状況(西から)
4. 第5面 不定形土坑32断面(南から)
5. 第5面 不定形土坑16断面(西から)
- 図版6 第6面(1)
1. 第6面 西半全景(南から)
2. 第6面 不定形土坑24全景(南から)
3. 第6面 不定形土坑29断面(南から)
4. 第6面 不定形土坑20断面(南から)
5. 第6面 足跡
- 図版7 第6面(2)
1. 第6面 自然流路a全景(南から)
2. 第6面 自然流路a断面(南から)
3. 最終面 自然流路跡全景(南から)
- 図版8 第1層および第2面・第2層出土遺物
- 図版9 第3面および第3層出土遺物
- 図版10 輸入陶磁器
- 図版11 第4面および第4層出土遺物
- 図版12 第5面 畦畔19・20、土坑40、
ピット状土坑44・55出土遺物
- 図版13 第5面 土器溜り出土遺物
- 図版14 第5面 不定形土坑32出土遺物
- 図版15 第5面 不定形土坑39出土遺物
- 図版16 第5層および第6層出土遺物
- 図版17 第5層出土遺物(製塩土器・重焼痕・軽
石・焼土塊・他)
- 図版18 石製品
- 図版19 -i9地区出土 須恵器坏蓋
- 図版20 -i9地区出土 須恵器坏身
- 図版21 -i9地区出土 須恵器高坏
- 図版22 -i9地区出土 須恵器壺・甕
- 図版23 -i9地区出土 須恵器甕
- 図版24 調査区内出土 文様を持つ須恵器
- 図版25 出土須恵器 ヘラ記号(1)
- 図版26 出土須恵器 ヘラ記号(2)
- 図版27 出土須恵器 同心円紋スタンプ及びあて
具痕
- 図版28 出土須恵器 口縁部調整
- 図版29 出土土師器 把手(1)
- 図版30 出土土師器 把手(2)
- 図版31 (その4) 調査区断面
- 図版32 (その4) 遺構・第2面
1. 西地区第2面(南から)
2. 東地区第2面 {アルファベット順に
西から東へ撮影} (南から)
- 図版33 (その4) 遺構・第2面・第3-1面
1. 鋤溝群203(南から)
2. 同遺物出土状況
3. 溝201(南から)
4. 西地区第3-1面(南から)
- 図版34 (その4) 遺構・第3-2面
1. 西地区第3-2面(南から)
2. 東地区第3-2面西側(南から)
- 図版35 (その4) 遺構・第4-1面・第4-2面
1. 西地区第4-1面(南から)
2. 西地区第4-2面(南から)
- 図版36 (その4) 遺構・第4-1面・第4-2面
1. 東地区第4-1面(東から)
2. 東地区第4-2面(東から)
3. 拡張地区第4面(南から)
- 図版37 (その4) 遺構・第4-1面・第4-2面
1. 畦畔20(北から)
2. 畦畔19断面(東から)
3. 畦畔206断面(南から)
4. 土坑12断面(南から)
5. 溝10・溝22・溝24断面(西から)
6. 溝13断面(北から)
7. 溝15断面(北から)
8. 土坑17断面(北から)
- 図版38 (その4) 遺構・第5面
1. 西地区第5面(東から)
2. 東地区第5面(北東から)
- 図版39 (その4) 遺構・第5面

1. 溝50・溝55断面（東から）
2. 溝145断面（北から）
3. 溝128 [セクション1] (東から)
4. 溝154断面（南東から）
5. 溝118・溝119[セクションG] (東から)
6. 溝118・溝119[セクションD] (西から)
7. 溝118[セクションD(アップ)] (西から)
8. 溝119[セクションD(アップ)] (西から)

図版40 （その4）遺構・第5面

1. 焼土坑50検出状況（北から）
2. 同上断面（東から）
3. 焼土坑38検出状況（南から）
4. 同上断面（西から）
5. 轍状遺構1（南から）
6. 焼土坑144検出状況（南から）
7. 同上断面（西から）
8. 土坑177断面（西から）

図版41 （その4）遺構・第5面

1. 拡張地区第5面（南から）
2. 焼土坑33検出状況（南から）
3. 同上周辺部（南西から）
4. 同左断面（西から）
5. 同上完掘（南から）

図版42 （その4）遺構・第6面

1. 木根跡周辺（東から）
2. 土坑95断面（東から）

3. 同上遺物出土状況（西から）
4. 土坑192断面（南西から）
5. 同上遺物出土状況（東から）

図版43 （その4）遺構・第6面

1. 土坑34断面（西から）
2. 土坑53断面（東から）
3. 土坑91断面（東から）
4. 土坑92断面（西から）
5. 土坑155断面（西から）
6. 土坑212断面（西から）
7. 土坑213断面（南西から）
8. 土坑214断面（西から）

図版44 （その4）出土遺物1

第2層(洪水砂)、東地区南北セクション、溝201、第3-1~2層

図版45 （その4）出土遺物2

第3-1~2層、第4-1層

図版46 （その4）出土遺物3

第4-1層、溝10上層、第4-1面直上、第5層、溝111

図版47 （その4）出土遺物4

第5層、溝118最下層、溝128、溝156、土坑192、土坑95

図版48 （その4）出土遺物5

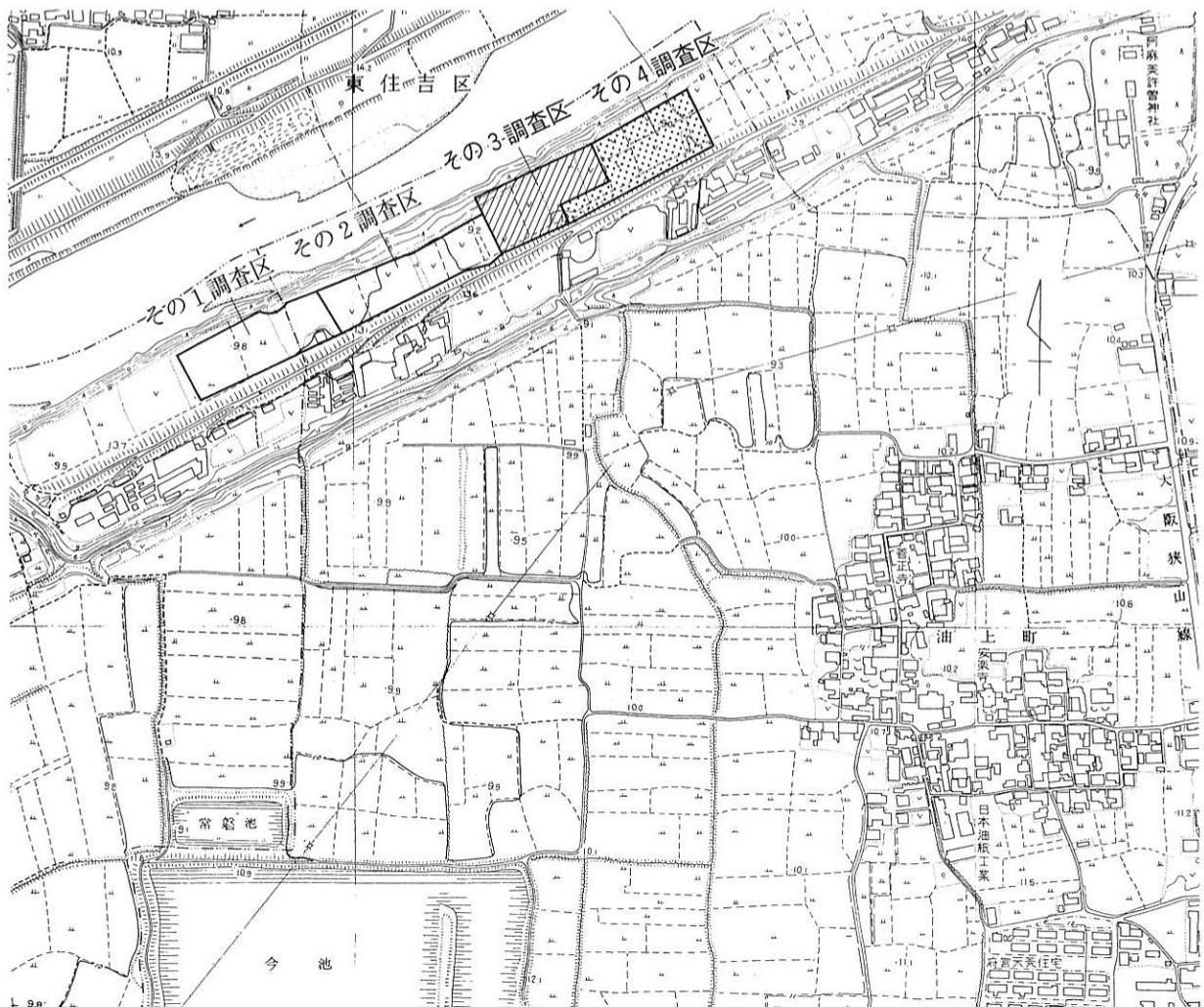
[石器] 土坑130、第5層、溝55、第6面、第6層、溝10

第1章 位置と環境

はじめに (第1図)

大和川今池遺跡は、堺市常磐町・松原市天美西・大阪市住吉区苅田・東住吉区矢田を中心とする南北約1km、東西約1.5kmの範囲に広がる広大な遺跡で、旧石器時代から近世に至る一大複合遺跡として周知されている。この遺跡は、昭和52年に大阪府教育委員会によって実施された大和川下流西部流域下水道今池処理場建設に伴う試掘調査により確認された。以来、大和川・今池遺跡調査会による発掘調査を皮切りに、大阪府教育委員会・堺市教育委員会・松原市教育委員会により調査が重ねられてきた。この結果、古墳時代の集落跡、古道、いわゆる「難波大道」の推定遺構、記紀に表れる古代の溜池である「依網池」の位置が確認されるなど多くの成果があげられている。

財団法人 大阪府文化財調査研究センターでは、平成8年度より国土交通省による大和川の高水敷整備事業に先立つ発掘調査を実施している。これまでの成果は、『大和川今池遺跡 (その1・その2)』(平成12年度)に報告されている。今回報告する(その3)(その4)の調査は、平成10年度に実施された同整備事業に先立つ発掘調査で、大阪府松原市天美西7・8丁目地内に位置するものである。

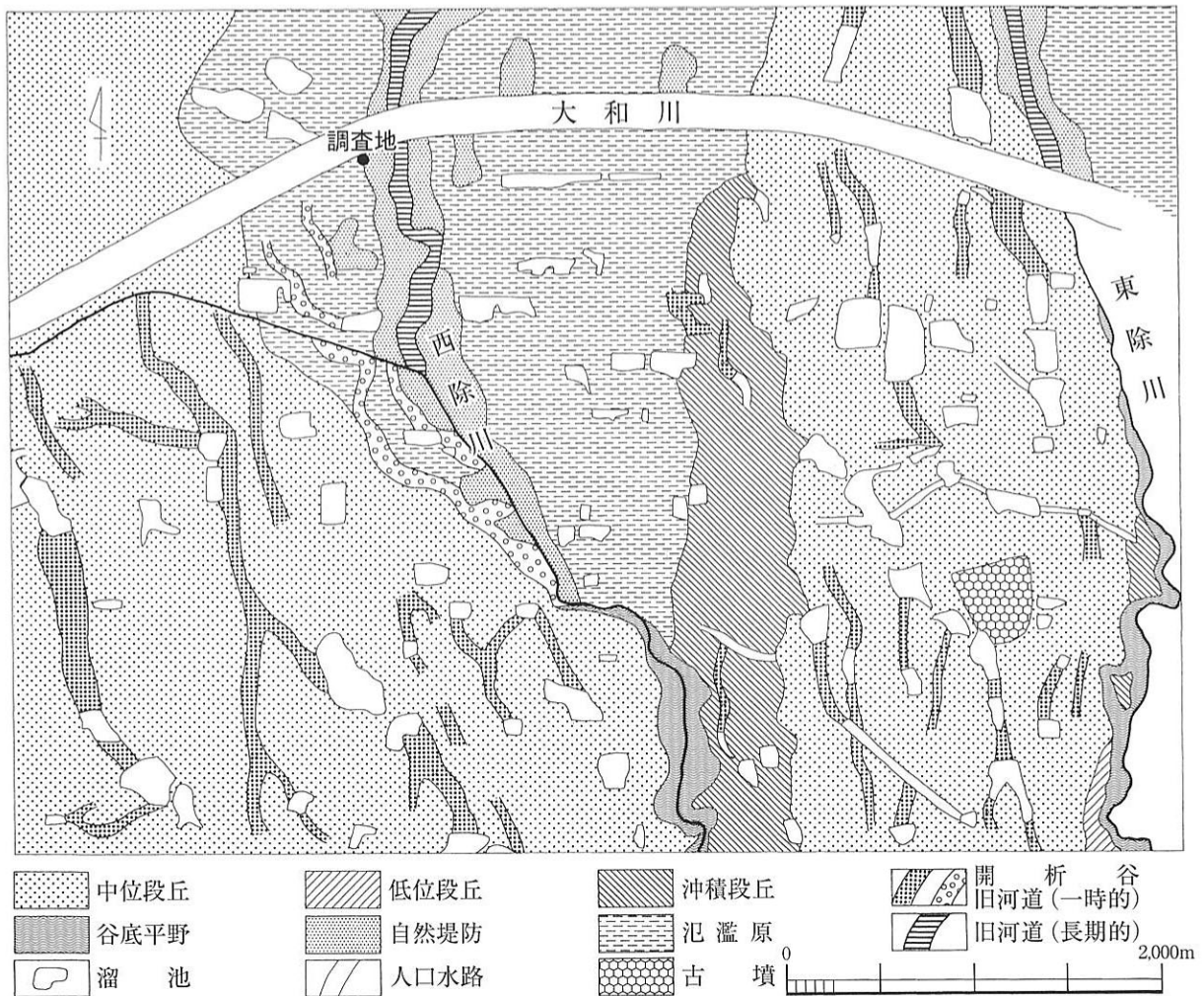


第1図 大和川今池遺跡(その3・その4)の調査区位置図(1/6000)

地理的環境（第2図）

大和川今池遺跡の立地する地域は、和泉山脈から北に伸びる洪積台地が途切れ、沖積平野へと移行してゆく地域にあたる。大和川今池遺跡は、この洪積段丘中位の東縁から、東側を流れる旧西除川の氾濫平野との境界部に位置している。標高は9.50m～10.50mである。日下雅義氏の分類によると、本遺跡は中位段丘と旧西除川の氾濫原にあたる。遺跡の東側を流れていた旧西除川の両側は段丘地形を成しており、西方の段丘面は北西に向かって緩やかに傾斜している。東方の中位段丘は4～5mの比高をもって西方の氾濫原である沖積段丘に漸次移行している。下流の氾濫原では旧西除川に沿って自然堤防状の微高地がみられる。本遺跡の東側では、この自然堤防の地形や一時的に流れた旧河道跡が確認できる。

旧西除川は、大阪狭山市に現存する古代の溜池である狭山池より流れ出て、その東方を流れる東除川とともに北方に向かって流れていた。両河川は下方浸食を行い谷底平野が発達したため、周辺の洪積台地部分では灌漑用として掘削された大小様々な溜池が点在するようになる。今池もこうした溜池のひとつであった。北上する流れは、旧大和川の流れとあいまって、本遺跡の北側に向かってラッパ状に広がる河内平野に洪水の被害をもたらした。河内平野の洪水被害を解消すべく、1704年（宝永元年）に幕府によって大和川が付け替えられ、東西方向に流れを向け大阪湾に注ぐようになる。西除川もやがてこの地域の上昇ともない、西に屈曲して大和川に流れ込むようになる。川の流れは変化したが、大和川今池遺跡の周辺では、近年まで多くの溜池が点在するのどかな田園地帯であった。



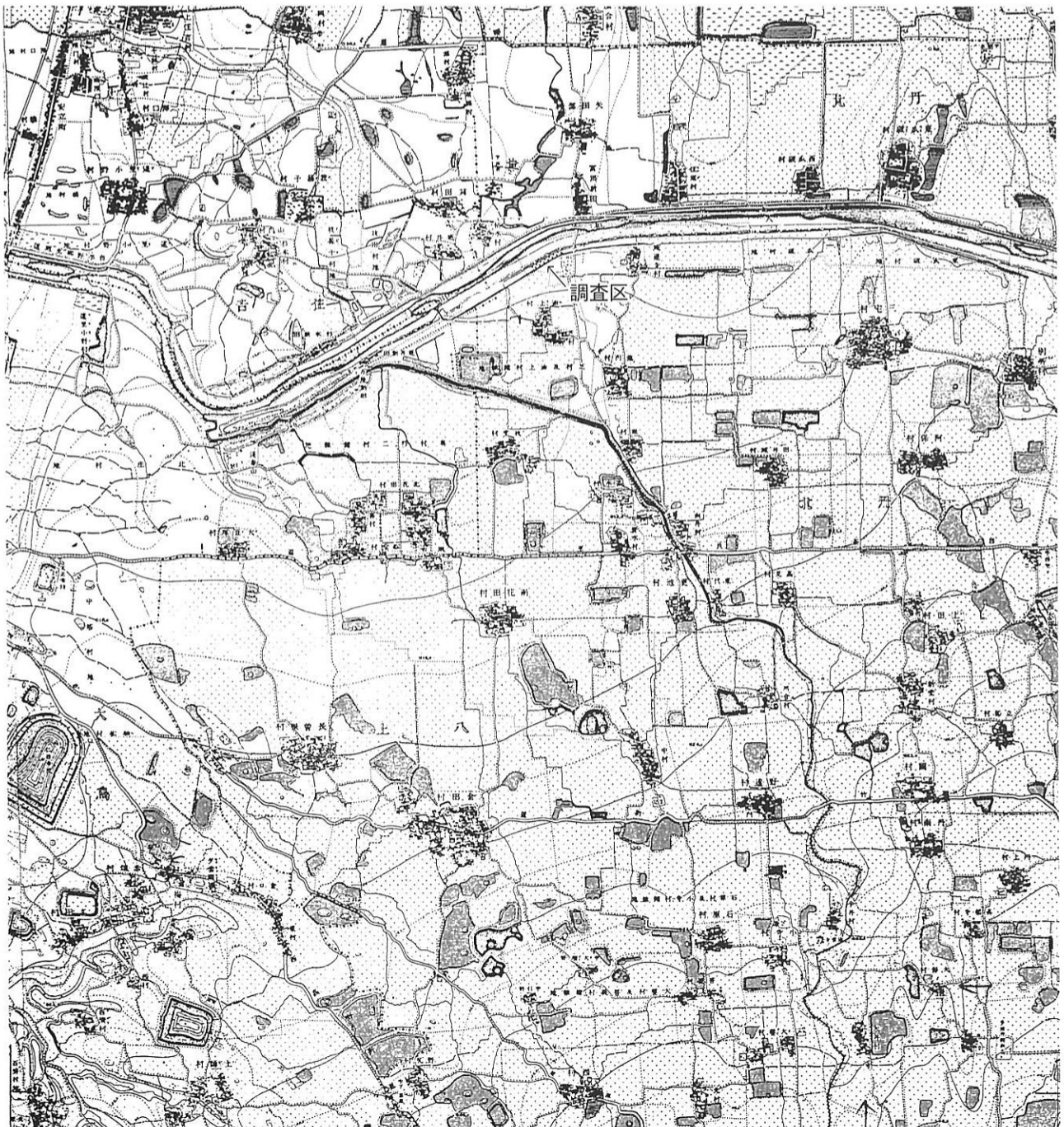
第2図 大和川今池遺跡 周辺地形分類図

歴史的環境（第3・4図）

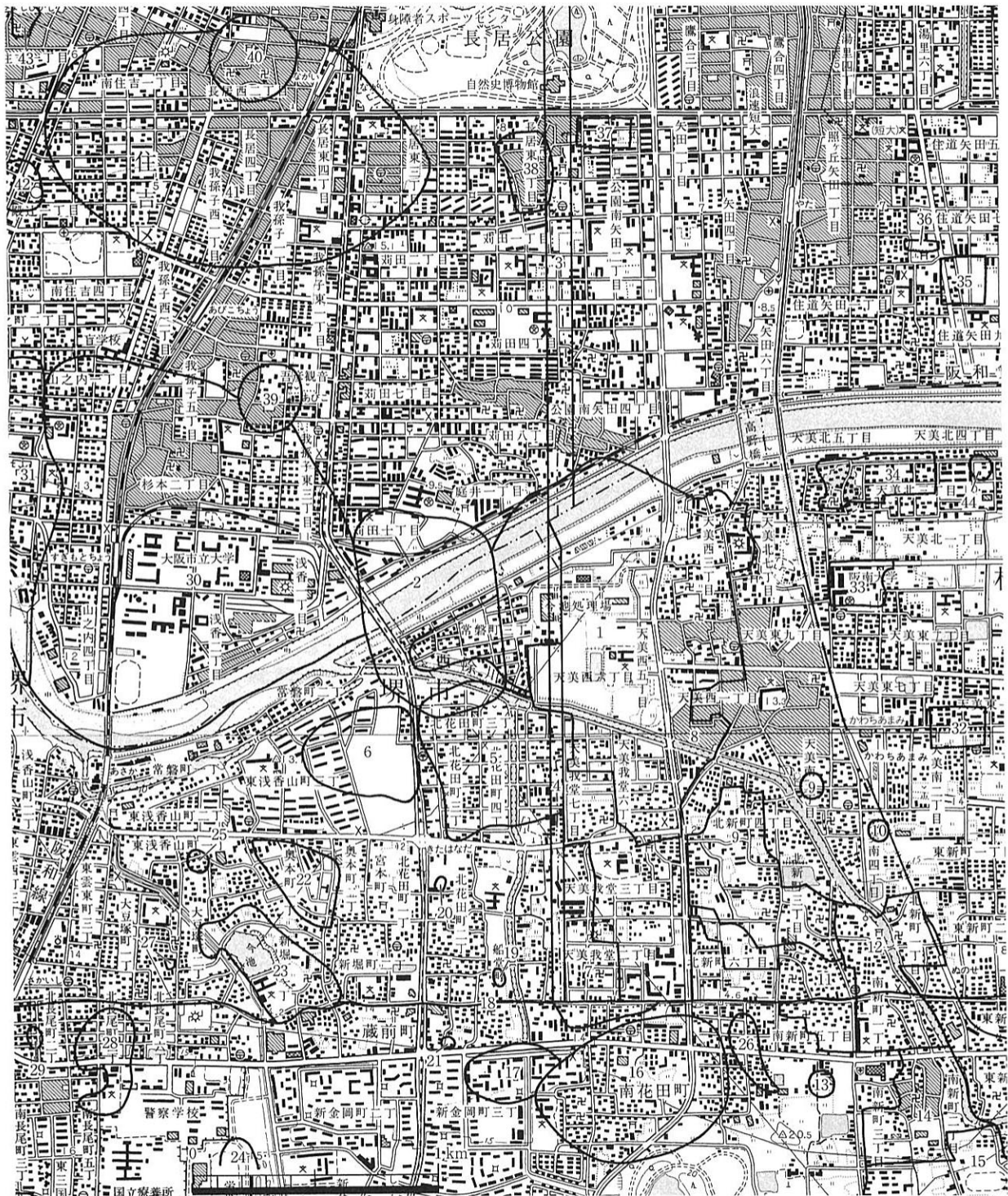
本遺跡の周辺には、『大阪府文化財分布図』（第4図）によると、多くの遺跡がみうけられる。

旧石器時代 旧石器を検出した遺跡として、当遺跡のほか、大阪市長原遺跡・瓜破遺跡・大堀遺跡・遠里小野遺跡・住吉大社境内遺跡・堺市南花田遺跡・松原市清堂遺跡・上田町遺跡などがあげられる。瓜破台地の東端に位置する長原遺跡では、無遺物層と考えられていた層からナイフ型石器などが出土している。当遺跡の東側を流れていた旧西除川の上流には清堂遺跡が位置している。また、当遺跡西側の上町台地の微高地に位置する遠里小野遺跡・住吉大社境内遺跡や、当遺跡の南方約2 kmに位置する南花田遺跡からも旧石器が出土していることから、この地域における旧石器時代の解明に期待される。

縄文時代 縄文時代の遺構・遺物を検出した遺跡として大阪市山ノ内遺跡・岸ノ里遺跡・長原遺跡・



第3図 明治18年 大和川今池遺跡の周辺環境



- | | | | |
|-------------|----------------|-----------------|-----------------|
| 1. 大和川今池遺跡 | 2. 依網池跡 | 3. 難波大道跡 (大阪市側) | 4. 難波大道跡 |
| 5. 北花田遺跡 | 6. 東浅香山遺跡 | 7. 我堂南遺跡 | 8. 狐塚古墳跡 |
| 9. 高木遺跡 | 10. 堀遺跡 | 11. 清水遺跡 | 12. 布忍遺跡 |
| 13. 鍵田遺跡 | 14. 南新町遺跡 | 15. 河合遺跡 | 16. 清堂遺跡 |
| 17. 新金岡3丁遺跡 | 18. 長尾街道 (大津道) | 19. 船堂町遺跡 | 20. 五箇荘東遺跡 |
| 21. 蔵前町遺跡 | 22. 奥本町遺跡 | 23. 今池遺跡 | 24. 金岡公園遺跡 |
| 25. 東浅香山西遺跡 | 26. 東花田遺跡 | 27. 大豆塚古墳 | 28. 北長尾遺跡 |
| 29. 山之内遺跡 | 30. 南田出井町遺跡 | 31. 遠里小野遺跡 | 32. 天美南遺跡 |
| 33. 池内遺跡 | 34. 城連寺遺跡 | 35. 住道寺跡 | 36. 中臣須牟知神社境内遺跡 |
| 37. 矢田部遺跡 | 38. 新堀城跡伝承地 | 39. 我孫子城跡伝承地 | 40. 寺岡岩跡 |
| 41. 南住吉遺跡 | 42. 津守庵寺 | 43. 荘厳浄土寺境内・同遺跡 | 44. 城連寺東遺跡 |

第4図 大和川今池遺跡周辺の遺跡分布図 (大阪府教育委員会 1996 大阪府文化財分布図)

瓜破遺跡・八尾市八尾南遺跡・堺市南榎町遺跡などがあげられる。おおむね縄文時代前期から晩期にかけての遺物が出土している。中でも長原遺跡・八尾南遺跡からは、縄文晩期に相当する遺構、「長原式」に代表される遺物が検出されている。しかしながら、この他の遺跡からは明確な遺構が確認されていない。旧石器時代同様、この地域における縄文時代の解明が期待される。

弥生時代 弥生時代になると当遺跡の周辺において遺跡が幾つかみられるようになる。当遺跡の南側では、堺市北花田遺跡や南花田遺跡がある。当遺跡と近接しており、同じ旧西除川水系にあたる事から密接な関係にあると思われる。北花田遺跡では土坑と多数の弥生土器片が出土している。西側では、上町台地の微高地に大阪市遠里小野遺跡・住吉大社境内遺跡・南住吉遺跡・東浅香山遺跡などが集中して分布している。遠里小野遺跡からは石製品のほか、蛸壺形土製品などが出土している。この地周辺においては、海岸沿いの漁業を中心とした生活形態が推定される。

当遺跡から現大和川を挟んだ対岸（北東側）では、瓜破台地の先端に位置する大阪市瓜破遺跡・瓜破北遺跡・長原遺跡・桑津遺跡・加美遺跡などがある。この他、堺市田出井遺跡・三国ヶ丘遺跡・松原市天美南遺跡・城連寺遺跡・河合遺跡・布施遺跡などがあげられる。

河内平野南部では特定地域に長期間継続して集落が営まれる傾向がみられ、中心的集落が出現してくる。瓜破北遺跡・長原遺跡・四ツ池遺跡などがこれにあたる。河内湖が堆積作用で縮小化する中、水田耕作に適した土地で水田耕作を生業とする集落によって、急速に開発が進んだことがうかがえる。

古墳時代 古墳時代になると、遺跡数はさらに多さを増す。

当遺跡から現大和川を挟んだ対岸（北東側）では、瓜破北遺跡・喜連東遺跡・長原古墳群・加美古墳群などがある。長原古墳群は地下に埋もれていた古墳群で、4世紀後半～6世紀前半頃の古墳が、現在までに約150基以上発見されている。また、塚ノ本古墳からは円筒埴輪棺や各種の形象埴輪などが出土している。加美遺跡などでは方形周溝墓、木棺直葬墓などが見つかった。埋没古墳がさらに存在する可能性を示唆する発見であった。

堺市域では、田出井山古墳（伝反正陵）・天王古墳・鈴山古墳などがある。これらの古墳は共に百舌鳥古墳群の北側に位置するものである。松原市域では、新堂遺跡（伝丹比柴籠宮跡）、三宅遺跡、上町遺跡などがある。遺構としては未確認であるが、反正天皇の宮殿と伝えられている丹比柴籠宮跡や「依網屯倉」跡推定地などが近接している。堺市の今池遺跡では祭祀遺構を検出しており、河川に対する水霊祭祀跡と考えられている。

当地域は河内地域と和泉地域の接点であり、この地域を挟むように南東には古市古墳群、南西には百舌鳥古墳群、さらに北東には長原古墳群が造営される。また、泉北丘陵における陶邑古窯址群や松原市樋野ヶ池古窯跡などが営まれるなど、当遺跡周辺ではこの時代の開発地域として物流的・経済的・政治的にも重要な地域であったことがうかがえる。

奈良・平安時代 奈良時代の遺構となると、この地域周辺の遺跡数は激減する。平安時代になると、その数はさらに少なくなる。大阪市域では、山之内遺跡・津守廃寺・瓜破廃寺などがあるが、確実な遺構がまだ確認されていない。堺市域では、新金岡3丁遺跡・北三国ヶ丘遺跡などがある。

本遺跡内では古代の官道とされる、いわゆる「難波大道」の存在が確認されている。難波宮朱雀門から南延伸したものと考えられている道路の遺構で、その側溝などが検出されている。長尾街道なども近接する。また、この周辺では条里制遺構も広がっている。大和川今池遺跡の近辺では、「依網屯倉」跡推定地や、記紀に記載されている溜池である依網池跡の築造など、伝承として伝わるものも多い。難波

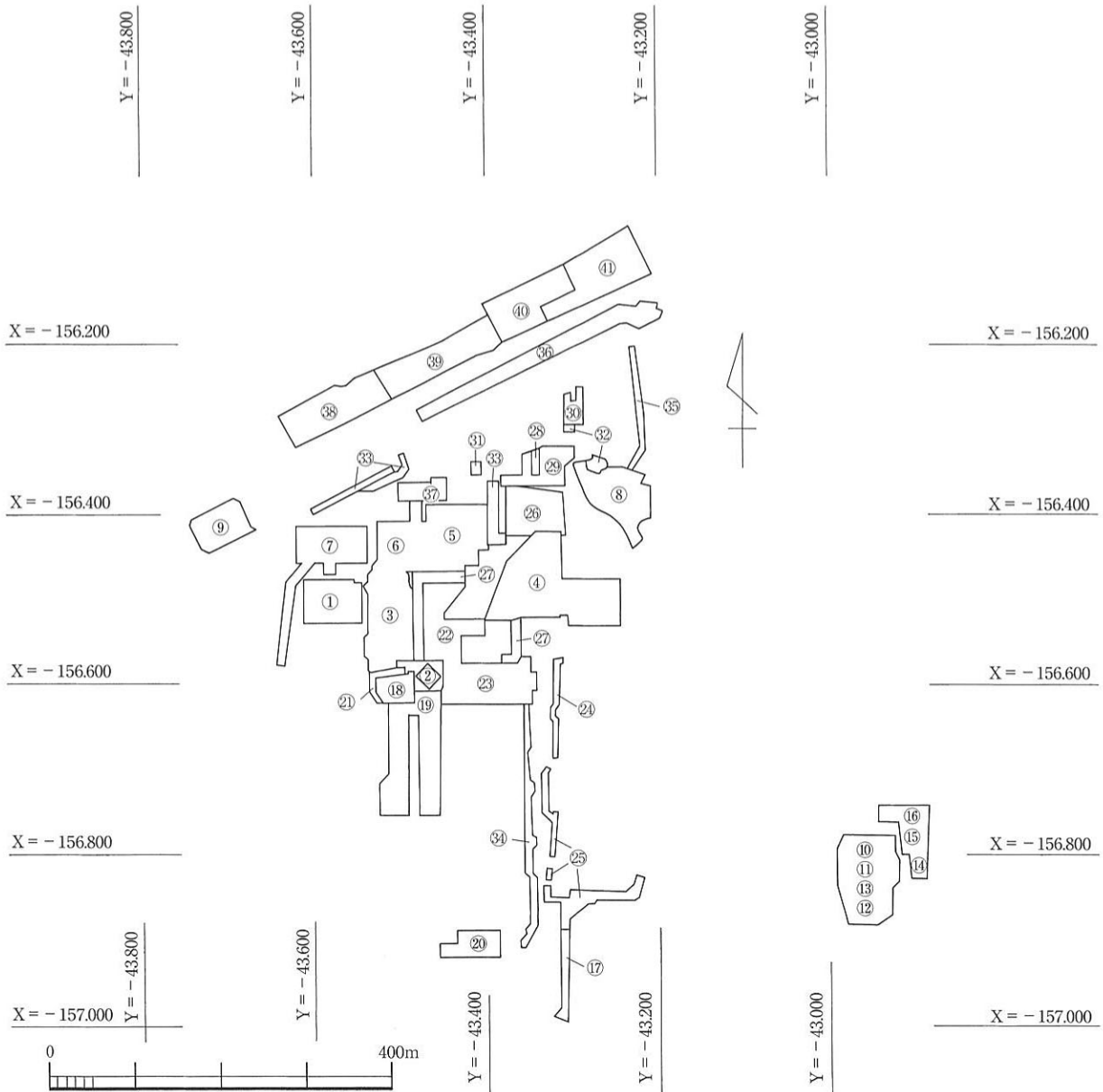
宮と河内を結ぶ交通の要所に立地していたことを示している。

しかしながら、難波宮から宮が奈良、さらに京都へ移ると、政治・経済・交通の中心も移動する。遺跡数はさらに減少する。本遺跡では平安時代の建物跡・土坑・井戸などが確認されているが、遺構は希薄である。

鎌倉時代・室町時代以降 当遺跡周辺では、わずかながら中世の遺跡は点在する。

長曾根遺跡・新金岡町遺跡・北三国ヶ丘遺跡・高木遺跡・五箇荘東遺跡・寺岡砦跡・我孫子城跡伝承地・新堀城跡伝承地などである。平安時代末から始まる新田開発に伴って、洪積段丘上の削平が目立つこの周辺では、明確な遺構があまり確認されておらず、遺跡数はさほど多くはない。

本遺跡内では大阪府の平成7年度調査で「瓦溜り」を検出している。また、(その2)では、豪族居館跡を囲んだとされる方形区画溝跡と瓦器坑をともなう井戸などを検出していることなどから、徐々に中世の遺構も増えつつある。大和川今池遺跡周辺においても、条里制遺構が顕著にみられるなど、生産域としての傾向がうかがえるのみである。今後の調査の成果が待たれるところである。



第5図 大和川今池遺跡 既往調査地及び(その3・その4)トレンチ配置図(1/8000)

表1 既往調査刊行図書

編 集 機 関	出版年	収 録 書	番 号
大和川・今池遺跡調査会	1978	『大和川今池遺跡』－発掘調査資料その1	①
大和川・今池遺跡調査会	1979	『大和川・今池遺跡－第1地区発掘調査報告－』	②
大和川・今池遺跡調査会	1979	『大和川今池遺跡』－発掘調査資料その2	
大和川・今池遺跡調査会	1979	『大和川今池遺跡』－発掘調査資料その3	
大和川・今池遺跡調査会	1979	『大和川今池遺跡』－発掘調査資料その4	
大和川・今池遺跡調査会	1980	『大和川・今池遺跡Ⅱ－第3・4・5発掘調査報告－』	③、④、⑤
大和川・今池遺跡調査会	1980	『大和川今池遺跡』－発掘調査資料その5	
大和川・今池遺跡調査会	1980	『大和川今池遺跡』－発掘調査資料その6	
大和川・今池遺跡調査会	1981	『大和川・今池遺跡Ⅲ－第6地区・「古道」発掘調査報告書－』	⑦
大阪府教育委員会	1983	『大和川今池遺跡発掘調査概要』	⑧、⑨、⑩、⑪
松原市教育委員会	1984	『松原市遺跡発掘調査概要』昭和59年度	
大阪府教育委員会	1985	『大和川今池遺跡発掘調査概要・Ⅱ』	⑫、⑬、⑭
大阪府教育委員会	1986	『大和川・今池遺跡発掘調査概要・Ⅲ』	⑮
松原市教育委員会	1986	『松原市遺跡発掘調査概要』昭和60年度	
松原市教育委員会	1987	『松原市遺跡発掘調査概要』昭和61年度	
大阪府教育委員会	1988	『大和川今池遺跡発掘調査概要・Ⅳ』	⑯
大阪府教育委員会	1988	『大和川今池遺跡発掘調査概要・Ⅴ』	⑰、⑱
松原市教育委員会	1988	『松原市遺跡発掘調査概要』昭和62年度	
松原市教育委員会	1989	『松原市遺跡発掘調査概要』昭和63年度	㉑
大阪府教育委員会	1990	『大和川・今池遺跡発掘調査整理概要・Ⅵ』	㉒、㉓、㉔
大阪府教育委員会	1990	『大和川今池遺跡発掘調査整理概要・Ⅶ』	㉕、㉖、㉗
大阪府教育委員会	1991	『大和川今池遺跡発掘調査概要・Ⅷ』	㉘
大阪府教育委員会	1992	『大和川今池遺跡発掘調査概要・Ⅸ』	㉙、㉚、㉛
大阪府教育委員会	1992	『大和川今池遺跡・Ⅹ』『南花田遺跡・Ⅵ』	
大阪府教育委員会	1993	『大和川今池遺跡発掘調査概要・Ⅺ』『清堂遺跡発掘調査概要・Ⅰ』	㉜
大阪府教育委員会	1995	『大和川今池遺跡発掘調査概要・Ⅻ』	㉝
大阪府教育委員会	1996	『大和川今池遺跡発掘調査概要・Ⅼ』	㉞、㉟、㊱
大阪府教育委員会	1997	『大和川今池遺跡発掘調査概要・Ⅽ』	㊲
大阪府教育委員会	1998	『大和川今池遺跡』	㊳
財大阪府文化財調査研究センター	1998	『大和川今池遺跡現地説明会資料』	㊴
財大阪府文化財調査研究センター	2000	『大和川今池遺跡（その1・その2）』	㊵、㊶
財大阪府文化財調査研究センター	2000	『大和川今池遺跡現地説明会資料』	
財大阪府文化財調査研究センター	2001	『大和川今池遺跡（その3・その4）』（本書）	㊷、㊸

既往の調査（第5図、表1）

大和川今池遺跡に関する既往の調査内容については、当センターの『大和川今池遺跡（その1・その2）』において詳細に述べられているため、今回は前記の報告書との重複をさけた。なお、既往の調査に対し新たに付した番号は、各調査報告書との対応も含め、前記の報告書に準じて番号を付与している。

当センターにおいては、平成8年度に実施した（その1）㉞、平成9年度に実施した（その2）㊲の調査に続き、平成10年度事業として、（その3）㊵、（その4）㊶の調査を実施した（本書）。またこれ以降、平成11～12年度事業として（その5）の調査と、平成11年度には新たに国土交通省による大和川の高規格堤防整備事業に先立つ発掘調査が順次実施、予定されている。

（参考文献）

・足利健亮・桑原公徳「2 松原市の地形」『松原市史』

（第1図は「2 松原市の地形」を一部改変・作図）

・日下雅義「大和川・今池遺跡付近の地理的環境」『大和川・今池遺跡Ⅱ』1980 大和川・今池調査会

・日下雅義『歴史時代の地形環境』1980 古今書院

・大阪府教育委員会『大阪府文化財分布図』1996を一部改変・作図

・大阪府教育委員会『大阪府文化財地名表』1997

・『日本地名大辞典』27 大阪府 角川書店

第2章 調査に至る経緯と調査の経過

第1節 調査に至る経緯

大和川は大阪府のほぼ中央部を西流する大阪府第2の一級河川である。府の北部を流れる淀川とともに古くから大阪平野と深い関わりを持つ河川である。現在の和川は奈良盆地の河川を集め、生駒山地の南端部で奈良県と大阪府の県境の谷部を通過し、河内平野に出る。そして、北上してきた石川を合わせて西流し、さらに河内平野を北上してきた東除川、西除川を合わせて、大阪湾に流れ入る。石川との合流点から下流は、江戸期の宝永元年（1704年）に造られた人工の河川である。これ以前の旧大和川は、柏原付近から幾筋かに分かれて北流していた。旧大和川流域である河内低地は、その流れが形成した肥沃な平野で、広大な農業生産地帯として発展したが、洪水など厳しい自然環境との闘いの場でもあった。旧大和川の河道は連続堤のため天井川化し、流域の水害はますます激化していった。洪水対策として、まず、江戸期の宝永元年（1704年）には、「大和川の付け替え工事」が行われた。この付け替え工事により、旧大和川の下流域である河内低地の洪水被害は減少した。しかしながら、新大和川の下流域では新大和川がもたらす土砂の堆積により水深が浅くなった。また、これまで北流していた東除川や西除川の流れが変化したことにより、流域の排水能力が減退し、台風や集中豪雨などによる増水時には、堤防の決壊や浸水など周辺地域への洪水被害が深刻化していった。

このような状況を改善すべく、国土交通省や大阪府は、大和川の「スーパー堤防（高規格堤防）整備事業」などによる堤防の強化事業を計画し、整備が進められているところである。この事業計画は、まず過去の洪水の最高水位などから「計画高水位」を定め、さらに波や川底の変動などを考慮して「余裕高」を設定し、堤防の高さを決める。次に「計画高水位」以下の川の断面で流すべき洪水流量を「計画高水量」と定め、川の断面積を確保するため、河道を掘削や浚渫して広げるというものである。さらに、計画を上回る洪水に対しては、堤防の決壊を防ぎ、被害を最小限にする事を目的に、従来より幅が広く、地震にも強い堤防を造るというものである。

「スーパー堤防（高規格堤防）整備事業」計画に伴って、対象地域にあたる大和川の河川敷および周辺地域の埋蔵文化財包蔵地における発掘調査が必要となった。大和川今池遺跡は、この対象地域に含まれる遺跡である。整備事業の工事範囲となる河川敷部分については国土交通省地方整備局大和川工事事務所と大阪府教育委員会の間で協議が行われた。この結果、試掘調査による遺跡の遺構状況の確認が必要という結論に達し、平成7年度、大和川の左岸河川敷部分を対象とした試掘調査が大阪府教育委員会により実施された。この試掘調査の結果をもとに、遺構・遺物の包含層の存在が確認された範囲において本調査が必要と判断された。本調査に関しては、国土交通省地方整備局大和川工事事務所と大阪府教育委員会および（財）大阪府文化財調査研究センターが協議を重ね、平成8年度に契約を結び、当センターが発掘調査を行うことになった。

（参考資料）

- ・『散策しよう知識の森』（財）河川情報センター

第2節 調査の経過

大和川今池遺跡の発掘調査は、国土交通省近畿地方整備局大和川工事事務所の大和川の高水敷整備事業に伴うもので、大阪府教育委員会の指導のもと、(財)大阪府文化財調査研究センターが発掘調査を実施するものである。平成10年度の調査は、(その3)(その4)の2調査区を対象とした。(その3)は、平成9年度に実施された(その2)に隣接する大和川の上流側に位置する。(その4)は、(その3)のさらに上流側に位置する。

- ・(その3)は、平成10年3月に開始し、平成11年3月に終了した。

平成10年6月25日、現況測量に着手。順次、機械掘削を開始する。

7月14日、機械掘削時に、瓦礫土および産業廃棄物などが検出されたため、機械掘削を中断する。

瓦礫土および産業廃棄物の処分方法について、建設省近畿地方整備局大和川工事事務所と大阪府教育委員会および(財)大阪府文化財調査研究センターが協議し、土壌分析検査を行った。この結果、有害物質の基準値を下回っていたため、瓦礫土として指定地処分する事となった。これにより機械掘削は約3カ月間中断し、再開後、機械掘削終了まで約20日を要した。

11月11日、人力掘削に着手。

12月28日、第3面の検出中であるが、年内の作業を終え、遺構養生する。

平成11年1月5日、作業再開。第3面の調査を進める。

1月11日、調査区の北側(その3-2区)について、第3面の航空撮影を実施する。

1月21日、調査区の南側(その3-1区)について、第3面の航空撮影を実施する。

2月10日、調査区の北側(その3-2区)について、第5面の航空撮影を実施する。

2月23日、調査区の南側(その3-1区)について、第5面の航空撮影を実施する。

3月2日、遺構の調査を終了。

3月16日、最終計画高まで埋め戻し等の機械掘削を実施し、現場での作業をすべて終える。

- ・(その4)は、平成10年5月に開始し、平成11年3月に終了した。

平成10年6月25日、現況測量に着手。順次、機械掘削を開始する。

8月20日、人力掘削に着手。

11月5日、調査区の中央部西地区について、第5面の航空撮影を実施する。

12月11日、調査区の東側東地区について、第5面の航空撮影を実施する。

12月28日、第5面検出中であるが、年内の作業を終え、遺構養生する。

平成11年1月5日、作業再開。拡張地区の調査を進める。

2月17日、調査区の西側拡張地区について、第3面の航空撮影を実施する。

3月9日、遺構の調査を終了。

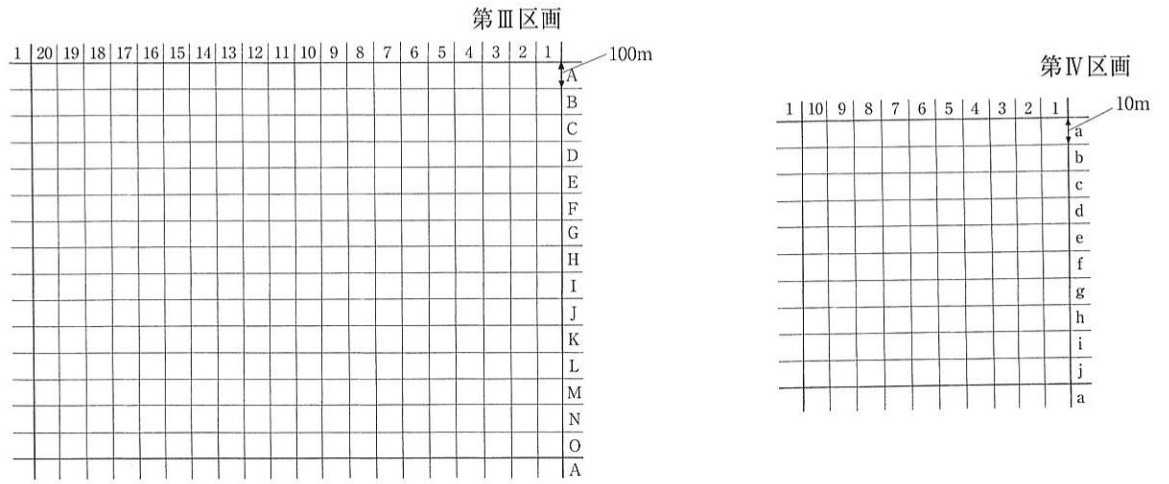
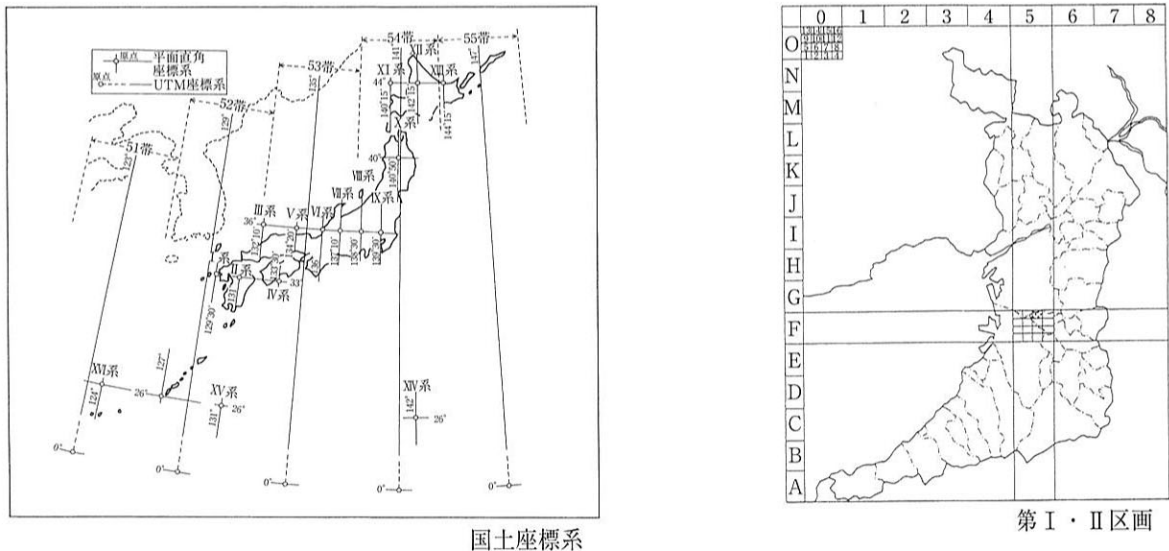
3月19日、最終計画高まで埋め戻し等の機械掘削を実施し、現場での作業をすべて終える。

(その3)(その4)調査とも現地での作業を終了した後、引き続き南部調査事務所において、出土遺物や記録図面、写真資料などの基礎整理作業を実施した。

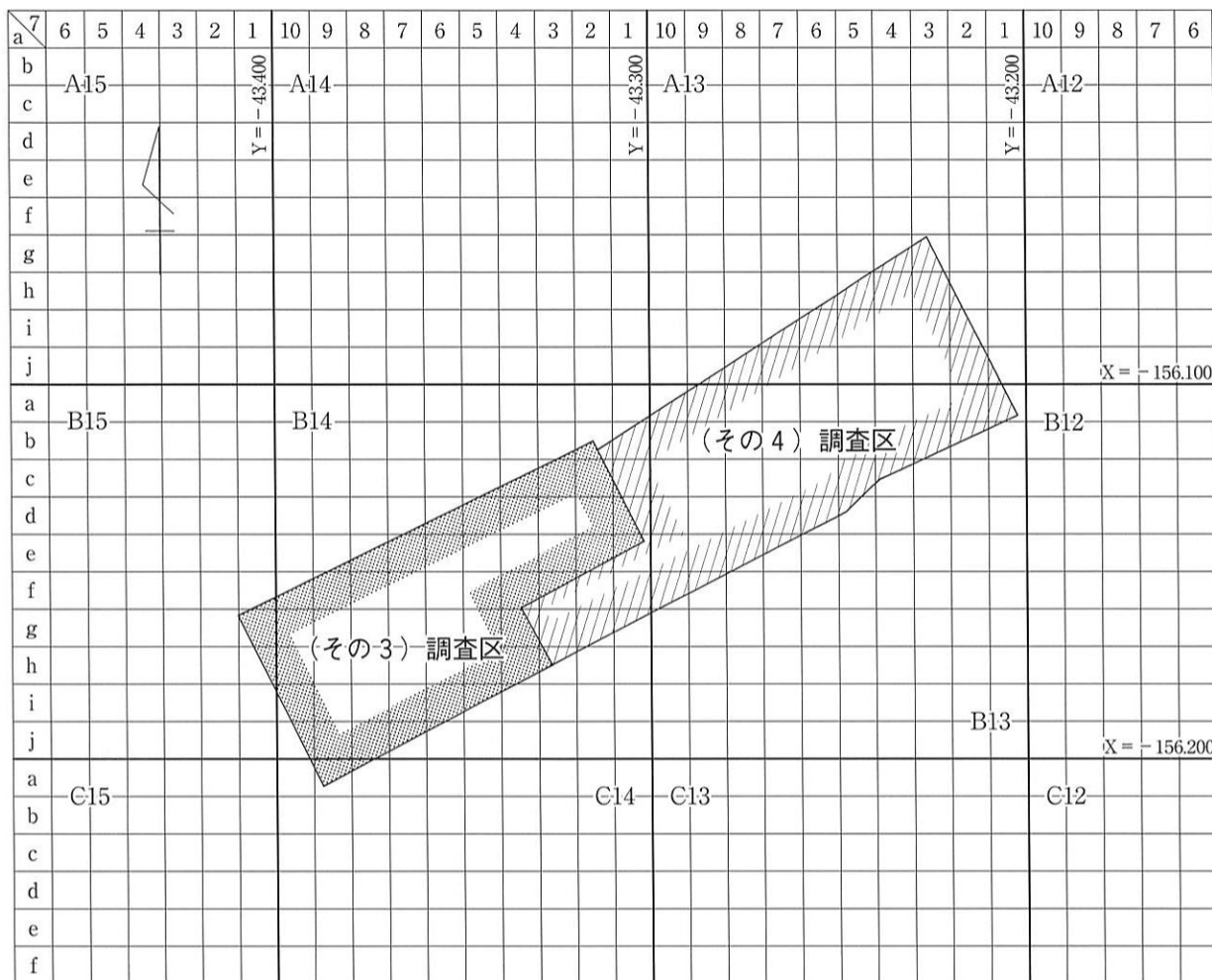
第3章 調査の方法

大和川今池遺跡の発掘調査は、当センターの前身の1つである 財団法人 大阪文化財センターが規定した『遺跡調査基本マニュアル』1988に則って実施している。

地区割 (第6図) 地区割については、国土座標の平面直角座標系 (17系) を使用している。地区割の基準線は、東経136° 0′、北緯36° 0′ を原点とする国土座標軸 (第VI系) を使用し、大阪府全域を共通の方式で区割りできるように、大小6段階の区画を設定している。第I区画は、1/10,000地形図の地区割図をそのまま利用したもので、縦6 km、横8 kmが1区画となる。南西端を基準として、縦軸をA～O、横軸を0～8で表示する。第II区画は、1/2,500地形図の地区割図を利用したもので、第I区画を縦1.5km、横2.0kmに16分割している。南西端を1とし、南東端が16とするもので、東方向への平行式の地区名表示である。第III区画は、第II区画内を100m単位で区画したもので、縦を15、横を20に区分している。表示は北東端を基準に縦軸がA～O、横軸が1～20となる。第IV区画は、第III区画を一辺10m単位で区画するもので、縦軸・横軸各10に区分される。表示は北東端を基点に縦軸はa～j、横軸は1～10となる。通常、包含層や広範囲にわたる遺構から出土した遺物を取り上げる場合には、この第IV区画までを使用する場合が大半である。第V区画は、第IV区画内を5m単位に4分割している。



第6図 国土座標系と地区割図



第7図 大和川今池遺跡（その3・その4）調査区の地区割設定図（1/2000）

表示は北東側がⅠ、北西側がⅡ、南東側がⅢ、南西側をⅣとするもの。遺物の取り上げや遺構実測等の際に使用する区分であるが、第Ⅳ区画を面として細分する場合や、遺構内で出土する遺物を細かく区分する場合に使用する。第Ⅵ区画は、第Ⅳ区画内を5m単位ではなく、任意に細分する際に使用し、北東端を基点として必要な桁まで表示するものである。

なお、調査全般にわたってこの地区割を用いており、遺物取り上げ時や遺構全体図のみならず、個々の遺構図に示した座標値も上記の国土座標に準拠している（第7図）。

方位 方位は座標北を使用している。座標北を用いる理由としては、先述した地区割の他、測量基準線も国土座標を使用していることがあげられる。ちなみに、座標北と他の方位との関係は、真北が東へ $0^{\circ} 15' 39''$ 、磁北が西へ $6^{\circ} 30'$ 振っている。

水準 水準は全国的に共通基準となっている東京湾平均海水面（T.P.）を使用している。大阪ではこのT.P.の他に大阪湾平均海水面（O.P.）も併用されているが、一般的にT.P.を採用している報告書が多い。なお、両者のレベル差は $T.P. 0m = O.P. + 1.3m$ と定められている。

測量 今回の調査では、遺構全体図の主要な遺構面については、ヘリコプターを用いた航空測量を行い、 $1/20$ および $1/50$ の遺構平面図とそれを縮小編纂した $1/100$ の遺構平面図を作成している。また、遺構検出状況や遺物の出土状況などについては、必要に応じ、国土座標に則って打設された調査基準杭を基に、現地ですべての遺構面を実測図面を作成している。

調査区（第7図） 大和川今池遺跡の調査では、これまで大和川の下流側から上流側に向かって調査区を設定し、平成8年度の調査を（その1）、平成9年度の調査を（その2）としている。これと同様に、平成10年度の調査区である2調査区のうち下流側を（その3）、上流側を（その4）としている。調査面積は（その3）が4,800㎡、（その4）が5,800㎡である。調査区の位置については、第7図に示す通りである。なお、調査区内では、調査時の事情に合わせて調査区をさらに細分している。調査区内での区分に関しては、第4章 調査の成果 の各節に詳しく記載している。

遺構番号 基本的には調査時に付けた名称を使用している。（その3）については、遺構の種別に関わらず、遺構面ごとに1番から番号を付与している。調査区内において同じ数字の遺構番号が存在する。（その4）については、上層面から検出順に通し番号をつけている。このため、（その3）（その4）において、同一遺構番号が存在することになる。調査区内での混乱を解消するため、（その3）では、遺構の性格を表す日本語名称を遺構番号の前に付けて表示した。調査区により遺構番号の付け方が異なるが、各調査区の記述が現場記録と一貫性を持つことを重視した。

遺構面 遺構面の名称については、基本的には各調査区において検出順に上層から遺構面番号を与えている。新しい遺構面ほど遺構面の数字が小さい。ただし（その4）については、同一遺構面を細分しているところもある。このため、調査区によって遺構面数および遺構面番号が異なるので、各調査区間の遺構面の対照は行っていない。混乱を避けるため、本報告書の記述ではこの発掘調査時の遺構面の名称に基づき、遺構面番号の小さいものから順に記載するものとする。

掘削 掘削の方法として、基本的には現地表面より近代の大和川洪水砂層までの約1mを機械で掘削し、おおむね近世以降の土層については人力で掘削した。今回の調査では、特に（その3）において、現地表面下に産業廃棄物などを伴う一般土砂として取り扱うことができない瓦礫土が含まれていた。このため、国土交通省地方整備局大和川工事事務所と大阪府教育委員会および（財）大阪府文化財調査研究センターが協議を行い、土壌分析検査を実施することになった。検査の結果、一部の土壌については瓦礫土と判断され、指定地処分土として搬出した。瓦礫土を含む浅い攪乱については、全て機械で掘削するものとした。ただし、遺構直上に攪乱内の瓦礫土が及ぶ場合は、機械による掘削に伴う遺構面の削平を最小限度に押さえるよう注意した。遺構および遺物包含層より深い攪乱については、遺構検出の最層より約50cm下層までを機械で掘削するものとし、調査時に影響が無いよう配慮した。

写真 記録保存のために、各調査区において遺構全体、検出遺構、遺物出土状況、土層断面などを状況に応じて写真撮影を行った。使用したカメラは、35mm（モノクロ・リバーサル）と6×7（モノクロ・リバーサル）である。撮影に関しては、主に調査担当者による撮影が基本であるが、必要に応じて写真技師 立花正治による撮影も行っている。検出遺構・遺物の写真、スライドなどは登録・整理され、当センターにて保管している。

遺物・遺構図面等の整理 遺物整理作業は、可能な限り発掘調査時に併行して出土遺物の登録、洗浄、注記といった基礎的作業を行った。発掘調査後は、直ちに出土遺物の登録、洗浄、注記、接合、遺物実測、遺物復元、遺物写真撮影などを行い、あわせて報告書刊行の準備作業を行った。遺構面図面、遺物出土状況など、図面整理、撮影写真の整理などについても同様である。

第4章 調査の成果

第1節 (その3) 調査区の成果

1. 調査の方法 (第8図)

基本的な調査の方法については、第3章 調査の方法 で述べているとおりである。ここでは、(その3) 内における地区分けと、層序と遺構面の対応について略記する。

(その3) では委託契約の関係から、まず、調査区を大和川の流に平行してほぼ中央部で横方向に二分し、南側を(その3-1区)、北側を(その3-2区)とした。また後に、新たな調査区として追加された東側の地域を(拡張区)と呼称した。(その3-1区) および(その3-2区) は、調査時においてほぼ同時期に遺構面の掘り下げを行っているため、地区による遺構面および層位の相違は見られない。ただし、(拡張区) についてはその限りではないため、必要に応じ遺構面の対応を行った。

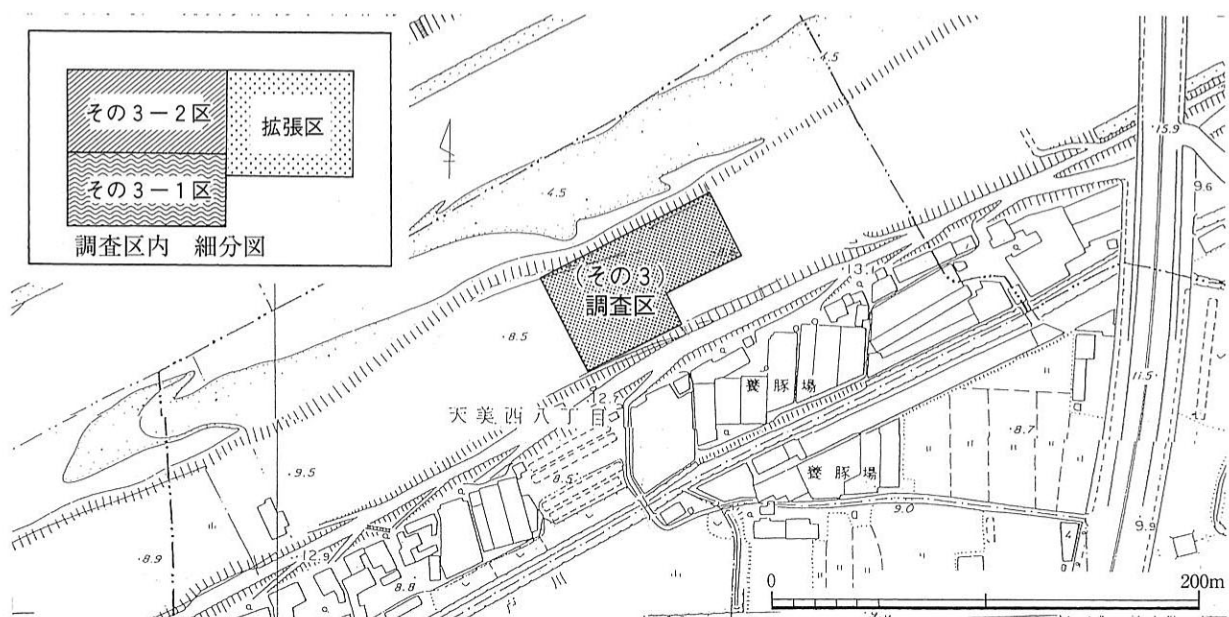
(その3) では、あらかじめ機械掘削で現代の表土・盛土・現代の大和川の洪水砂層を取り除いた後、人力掘削で遺構面を掘り下げた。基本層序では、機械掘削部分を一括して取り扱う。さらに、既往の調査および(その4) の基本層序とはそれぞれ一致しない部分がある。また、検出遺構面においても同様に相違が見られる。今回は混乱を避けるため、あえて対応関係を明示しなかった。

遺物取り上げについては、当センターで行った大和川今池遺跡の既往の調査と同様に、調査規定に則って10m区画の地区割をもとに行っている。小区画である10区画の名称および地区については、『遺跡調査基本マニュアル』¹⁾に則っている。

土色については、『新版標準土色帖』²⁾に基づいた表記を基本とする。ただし、土層認識の上で必要に応じ個別名称を用いたものもある。本文中でその都度、注釈を付けるものとする。

註) 1) (財) 大阪文化財センター『遺跡調査基本マニュアル』1988

2) 小山正忠・竹原秀夫編『新版標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修



第8図 (その3) 調査区位置図

2. 基本層序 (第9図)

調査区の基本層序については、調査区の南側に位置する堤防に沿って設けた側溝を利用し、土層断面観察用に実測・記録を行った。側溝は南側側溝と呼称した。しかしながら、調査区内では攪乱が著しく、層断面の観察が出来ない箇所もみられた。今回の基本層序は、南側側溝で攪乱の影響を受けない部分について図示した。

当調査区での土層堆積状況として、7層に大別することができた。

地山層は北西方向から南東方向に向かって緩やかに傾斜しているが、大和川の洪水堆積および中世以降の整地層によって、現状地盤は大和川の流れて西側にわずかに傾斜している。大和川の付け替えにより土砂の堆積状況が変化したことを示している。上層においては、川の氾濫が繰り返され、一定期間冠水状態にあったことを示す状況がみられた。古代末から中世初頭頃の開発のものと考えられる整地層などもみられた。また、当調査区は旧西除川の氾濫原に位置していることから、砂、シルト等の部分堆積やレンズ状堆積が多くみられた。わずかに下層において、シルト、粘質シルト、植物遺体層を含む粘質シルトなどが整合的に堆積している状況が観察できた。ただし、これらの土層は調査区全体に普遍的に堆積しているのではなく、地形や削平をうける場合などはこの限りではない。さらに、個別に層序を扱う場合は、本文中で基本層序との対応関係を示す。以下、各層序について記述する。

第0層

現代の表土・盛土・攪乱・および現代の大和川の洪水砂層である。機械により掘削を行った。70～75cmの厚さを測る。調査区全域に分布する。今回の調査区では現代の攪乱が広範囲に分散し、地山まで達するものもあったため、全体的に遺構面の損傷は著しかった。

第1層

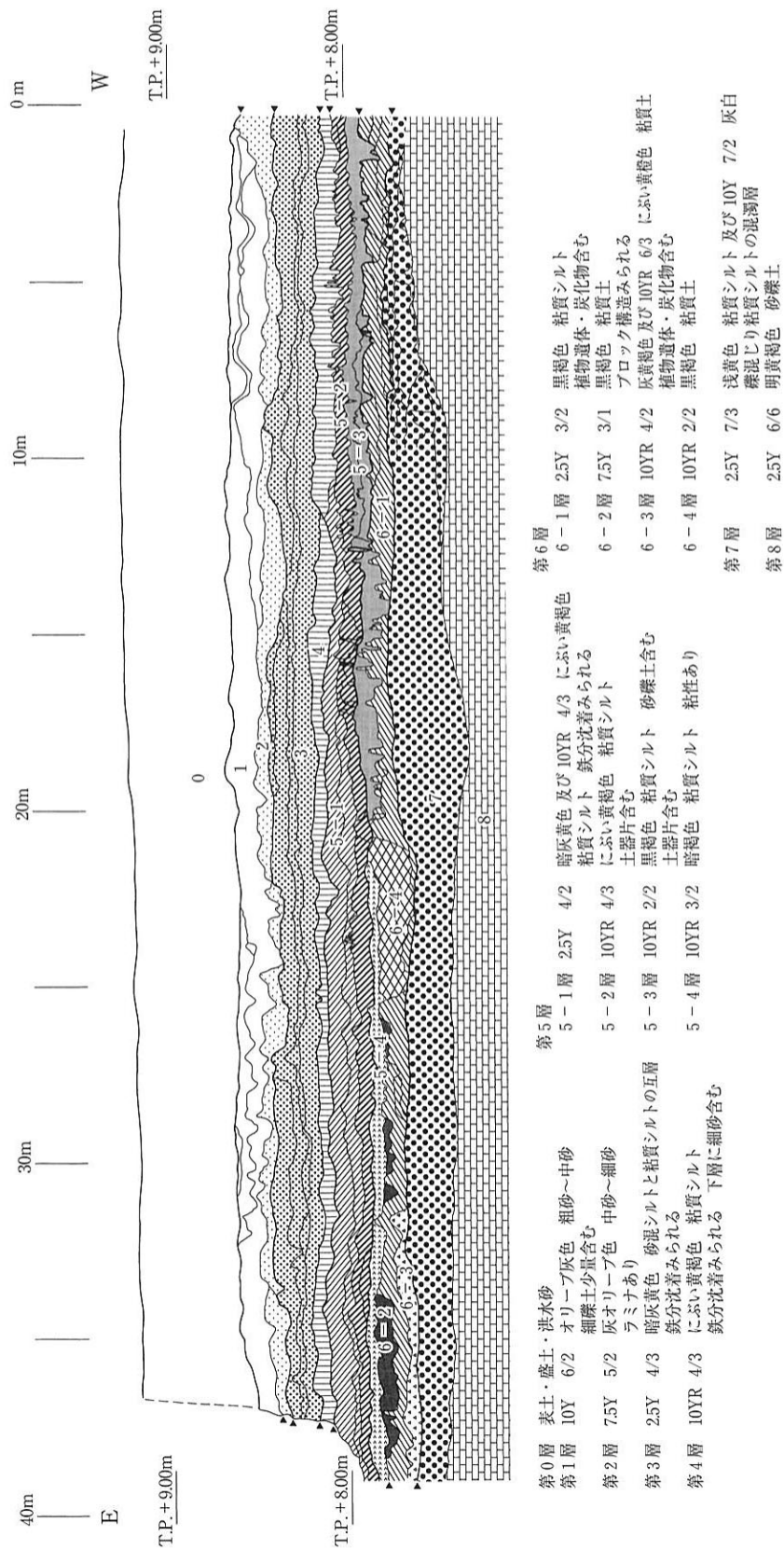
オリーブ灰色砂質土の粗砂～中砂層で、近・現代の耕作土層である。大和川の洪水砂が土壌化した土層である。10～20cmの厚さを測る。この層は細分が可能で、厚い部分では下層に暗灰黄色砂質土の粗砂～細砂を成すラミナが顕著にみられる。この層を掘削した面が第1面で、現大和川に直交する耕作溝跡を検出した。陶磁器・瓦・土師質土器など近世代の遺物を含む。

第2層

灰オリーブ色砂質土の中砂～細砂層で、近世代の洪水砂の流水堆積層である。調査区の西側で顕著にみられる。東側は第1層によって削平されている。約10cmの厚さを測る。下層にラミナがみられる。この層は単一時期の堆積ではなく、幾度かの流水（洪水）と細砂の堆積を繰り返した結果、形成されたものと考えられる。この層を掘削した面が第2面で、正方位にのった南北方向の耕作溝跡を検出した。陶磁器・土師質土器・瓦質土器・瓦などの遺物を含む。

第3層

暗灰黄色砂混じりシルトが主を成す。鉄分沈着による褐色化したシルトと粘質シルトが互層を成す。20～30cmの厚さを測る。鉄分沈着層はシルトと粘質シルトの間に帯状にみられる部分もある。近世から中世の耕作土層であると考えられる。土層中には溝状の掘り込みや踏み込みなどが観察できる。この層を掘削した面が第3面で、南北方向の溝や建物ピットなどを検出した。陶磁器・青白磁・須恵質片口鉢片・瓦質土器片などの遺物を含む。



第9図 (その3) 南壁断面図 (縦1/40・横1/200)

第4層

にぶい黄褐色粘質シルトが主を成す。下層に鉄分沈着がみられる。調査区の東側でやや厚く堆積する。5～10cmの厚さを測る。第4層は地形的に低い部分を中心に堆積した土層であると考えられる。一時的に湿地状況であったことがうかがえる。この層を掘削した面が第4層で、南北方向を示す畦畔やピットなどを検出したが、遺構の分布は希薄である。調査区の中央部あたりから西側では、遺構の遺存状況が悪く、本来の遺構面を検出することはできなかった。瓦器碗片・須恵質土器片などの遺物を含む。

第5層

黒褐色粘質シルトを主体とする砂混じり土層である。調査区全域で薄茶色の帯状に堆積する。須恵器、土師器片などの出土が顕著な土層である。調査区の全域にみられるが、徐々に南東方向へ低くなる傾向をみせる。東側でやや厚みを増す。層厚は20～30cmを測る。第5面のベース層では層境においては踏み込みが顕著にみられ、下層にはシルトが堆積している。シルト層には炭化物や有機物が含まれる。水成堆積によるものと考えられ、一時的に湿地状況であったことがうかがえる。第5層を成す土層は湿地にともなう地形の凹面を補充、整地する堆積様相を示す。平安時代末から中世にかけての耕地開発の一貫と考えられる。第5層では、堆積状況の違いから層中を5-1層、5-2層、5-3層、5-4層に細分することができる。5-1層は暗灰黄色およびにぶい黄褐色粘質シルトで、鉄分を多く含む土層である。5-2層はにぶい黄褐色粘質シルトで、土器片が含まれる土層である。5-3層は黒褐色粘質シルトで、土器片を多く含む土層である。主に古墳時代後期（6世紀後半頃）の土器片を多く含む。おそらく、近隣の古墳時代の遺構を削平し、その土砂を利用して低地部分を整地したものと思われる。5-4層は暗褐色粘質シルトで、土器を含む土層である。これらの整地層を掘削した面が第5面で、畦畔やピットその他、溝状遺構、不定形土坑、多くの足跡などを検出した。特に5-3層、5-4層のB14-i9地区付近から須恵器片、土師器片が一括して出土した。

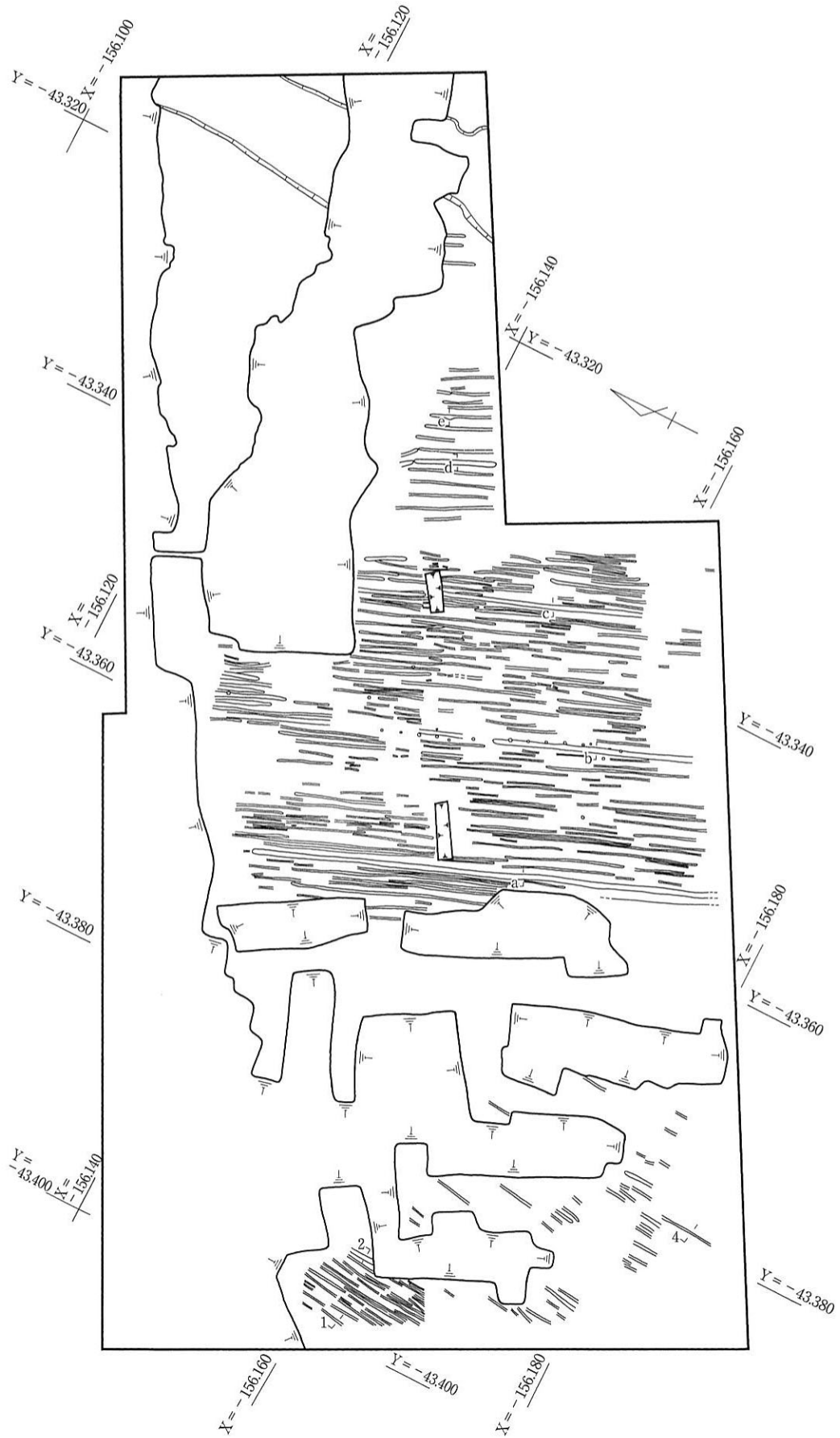
第6層

黒褐色粘質土が主体であるが、下層では灰褐色粘質土および暗灰黄色粘質土が互層を成す。層中に植物遺体が多く含まれている。調査区の東側でやや厚みを増し、土層が細分される。層厚は10～25cmを測る。6-1層、6-2層、6-3層、6-4層に細分することができる。6-1層は黒褐色粘質シルトで、わずかに須恵器や土師器などの土器片が含まれるが、下層には遺物がほとんど含まれず、植物遺体や炭化物を含む層となる。6-2層は黒褐色粘質土である。6-3層は灰黄褐色およびにぶい黄橙色粘質土で、植物遺体や炭化物が顕著にみられる。6-4層は黒褐色粘質土である。いずれの層中にも、踏み込みや落ち込みが顕著にみられることから、湿地状況であったと推測される。これらの層を掘削した面が第6面で、不定形土坑、溝状土坑、自然流路などを検出した。出土遺物は少ないが、古墳時代中期以前に相当すると考えられる。

第7層

浅黄灰色粘質シルトおよび灰白色礫混じり粘質シルトの混濁層である。土層の層境は不明瞭である。下層は明褐色砂礫土の地山層である。地山層は西側から東側に向かって低くなる。同様に東側が厚く堆積している。層厚は8～40cmを測る。地山直上面から東西方向に伸びる自然流路跡を検出した。この自然流路から遺物は出土しなかったが、地山直上面で縄文時代の石鏃・石匙などが出土している。

（その3）で確認した基本的な土層は、以上の7層で、人力掘削の対象となった。遺構精査を行った面は部分的な面も含めて計6面である。



第10図 第1・2面平面図

3. 遺構と遺物

大和川今池遺跡（その3）では、約5000㎡を対象として発掘調査を行った。調査区は平成9年度調査である（その2）の東側に接する。調査の方法で既述したが、当初、東西約70mの調査区を南北に中央部で分けて、南半を（その3-1区）、北半を（その3-2区）と呼称し、途中、東側に広げた調査区を（拡張区）とした。（その3-1区）と（その3-2区）については、ほぼ同時期に掘削を行うことができた。そのため、両区における掘削層序や検出した遺構面はほぼ整合する。（拡張区）については先行した両区の資料をもとに掘削を行ったが、やや整合性に欠く面もあるが、その都度記述する。

（その3）における基本層序は前項で詳述した。調査は表土、盛土および攪乱（第0層）を機械で掘削した後、7層を人力で掘削し、遺構面精査を行った。第1層下面（第1面）、第2層下面（第2面）、第3層下面（第3面）、第4層下面（第4面）、第5層下面（第5面）、第6層下面（第6面）の計6面について面的な調査を行った。

以下、各面毎に検出した遺構と出土遺物について記述する。

第1面（第10図、図版2）

機械掘削終了後、第1層のオリーブ灰色砂質土の粗砂～中砂層を除去すると、調査区の全域から大和川にほぼ直交する南北方向の耕作溝跡、杭列、溝などを確認した。大和川の洪水砂が土壌化した土層上に形成された耕作面である。耕作溝は調査区の南側で顕著にみられた。地形はおおむね平坦であるが、調査区の北側がやや高く、T. P. +8.50m前後を測る。南東方向への緩やかな傾斜を示す。最も低いところでは、T. P. +8.30m前後を測る。

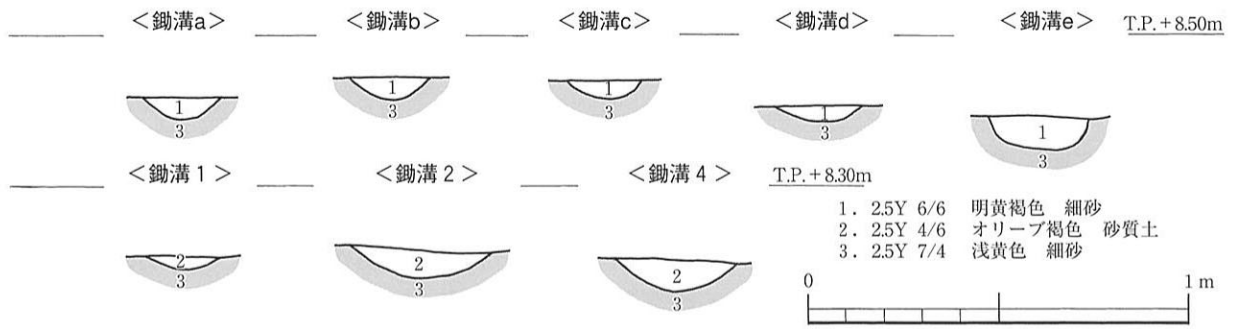
第1面では主に耕作溝跡、杭列などを検出した。耕作溝跡は大和川にほぼ直交する方向を示すことから、江戸期（1704年）の大和川付け替え以降の耕作面であると思われる。

鋤溝a～e（第11図）

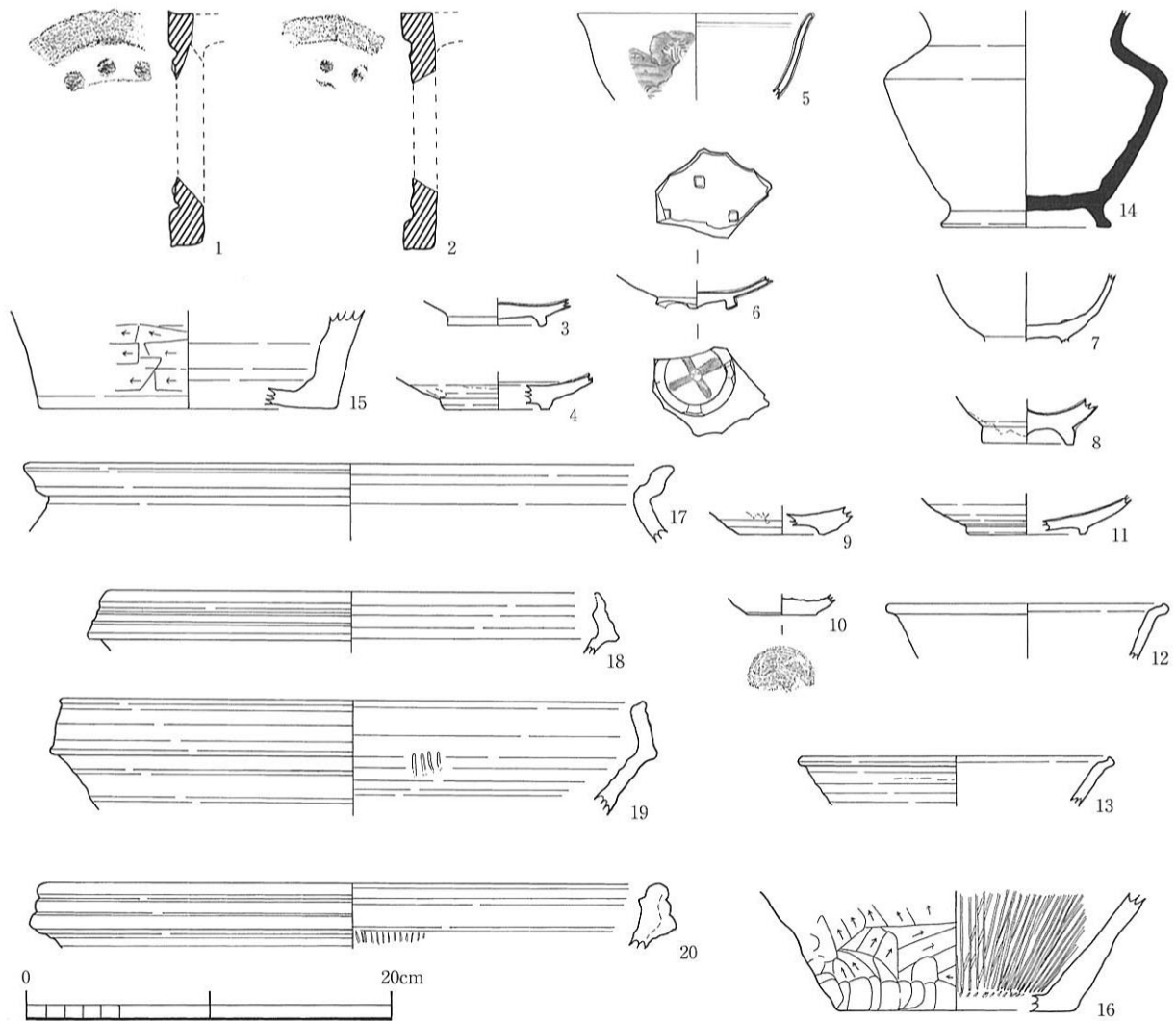
検出した耕作溝跡は鋤溝跡である。検出幅は9～20cmを測るが、中でも検出幅12～14cmのものが主を成す。深さは2～5cmである。埋土は大和川の洪水砂である明黄褐色細砂である。下層にラミナが顕著にみられる。鋤溝の長さは約10m前後である。幾重にも掘り造られた鋤溝跡がみられる。おおむね70cmの間隔をもちながら平行している。中には、杭列をとまなうやや検出幅の広い鋤溝もみられる（鋤溝a、b、c）。鋤溝a～cの検出幅は20cm前後で、深さは約6cmを測る。おおよそ11m毎にこのようなやや検出幅の広い鋤溝がみられる。長地型の土地区画で耕作していたものと思われる。鋤溝の埋土は大和川の洪水砂である明黄褐色細砂が堆積している。下層ではラミナを含むシルト層がみられ、水成堆積の様相を示す。

拡張区においても鋤溝を検出した（鋤溝d、e）。T. P. +8.30m前後を測る。やや低い層序で検出している。鋤溝の検出幅は12～30cm、深さは5～9cmを測る。70～100cmの間隔をもちながら平行している。埋土は大和川の洪水砂である明黄褐色細砂が堆積している。下層ではラミナを含むシルト層がみられ水成堆積の様相を示す。

杭列は鋤溝に沿って南北方向に並んでいる。杭の検出径は約5cmを測り、20～50cm間隔で打設されている。埋土は鋤溝内と同様に、大和川の洪水砂である明黄褐色細砂がみられる。近世から現代における大和川の洪水砂によって埋まったものと考えられる。



第11図 第1・2面鋤溝断面図



第12図 第1・2層出土遺物

第1層出土の遺物（第12図、図版8）

第1層の洪水砂層から9、17の遺物が出土した。

9は唐津系碗の底部である。17は常滑甕の口縁部である。13世紀代に相当する。下層から巻き上げられたものと思われる。この他、図示できなかったが、波佐見系碗片、唐津系碗片などの陶磁器片が多く、

さらに土師器片、瓦片なども見られた。17世紀後半頃に相当する。

第2面（第10図、図版2）

調査区の西側に堆積する第2層の灰オリーブ色砂質土の中砂～細砂の洪水砂層を掘削すると、調査区の西側から大和川の方に規制されない南北方向の正方位に整合する耕作溝跡、拡張区からは流路を検出した。第2面のベース層は第1面同様、大和川の洪水砂が土壌化したもので、ラミナが明確な水成堆積層である。層中の細砂の状況から複数回の堆積が確認できる。第2面は洪水砂が土壌化した土層上に形成された耕作面である。調査区の東側では、第2層および第2面が第1層により削平されている。このため第2面の遺構は、主に調査区の西側で検出した。拡張区で検出した流路1も上層が削平されているものと思われる。検出面はT.P. +8.10m前後を測る。検出した鋤溝跡は、大和川付け替え以前の正方位の条里に則った耕作跡と考えられる。

鋤溝1～4（第11図）

検出した耕作溝跡は鋤溝跡である。検出幅は10～20cmを測る。深さは2～8cmである。鋤溝の埋土は、大和川の洪水砂が土壌化したオリーブ褐色砂質土が堆積している。上層の削平を受けるため鋤溝の遺存状況は不明瞭であるが、南北方向の正方位を示しており、条里に則っている。第1面の大和川の流れに直交する鋤溝跡の延伸方向とは異なる。第2面で検出した鋤溝跡は、大和川の付け替え以前に営まれた耕作面で、その土地利用の形態を示しているものと思われる。これらの鋤溝にともなう遺物は出土しなかった。

流路1（第10図）

調査区東側の拡張区から、ほぼ南北方向に伸びる流路1を検出した。この流路1は（その4）の第2面で検出した溝201（第62図）にあたる。検出幅は6～8m、深さ20～45cmを測る。埋土はオリーブ灰色砂質土の細砂と灰色粘質シルトの互層である。幾度かの流水堆積の跡がみられる。大和川の洪水砂により埋没するまで機能していたものと考えられる。この流路1から陶磁器、常滑鉢、丹波すり鉢、瓦片などが出土した（第12図）。一部下層の巻き上げによる遺物も含まれるが、17世紀前半頃に相当するものと思われる。

第2面および第2層出土の遺物（第12図、図版8）

第2面の流路1から青磁（3、4）、常滑鉢（15）、丹波すり鉢（16）、須恵器壺（14）、瓦片（1、2）などが出土した。瓦片1、2はいずれも巴文軒丸瓦の瓦当面で珠文部分のみが残っている。珠文は大きく、また外区も幅が広いことから、大和川今池遺跡における瓦の分類ではC6型式の^{註)}様相を示す。おおむね13世紀代と考えられる。3は龍泉窯系青磁皿である。16世紀代のものである。4は内面に刻花文を施す龍泉窯系青磁碗底部である。15世紀後半の製品である。15は常滑鉢の底部である。16は丹波すり鉢の底部で、内面には粗い縦方向のすり目を施す。この他の出土遺物として、多くの陶磁器片、東播系須恵質練り鉢、甕、土師質羽釜、小皿、瓦質羽釜、火鉢などがみられた。下層の巻き上げによる混入と考えられるものも含まれるが、16世紀～17世紀前半頃に相当するものである。

第2層包含層からは、5～8、10～13、18～20の遺物が出土した。5、7は波佐見系碗、8は唐津系碗、13は唐津系皿である。5は外面に草花文を施す波佐見系碗である。7は内面の見込み部に蛇の目輪剥ぎがみられる。また、重焼き時に付着した溶着痕がみられる。6は割高台の白磁皿である。高台は4

箇所を欠ち割っている。内面底部には胎土目が3つ付着している。高台内には「+」の墨書がみられる。16世紀後半の製品である。10は瀬戸焼の茶入れで底部に糸切り痕がみられる。17世紀代の製品である。18～20は備前すり鉢の口縁部である。19、20は内面に粗いすり目が施されている。15世紀～17世紀代の様相を示す。

この他、図示できなかつたが、多くの陶磁器片、輸入陶磁器片などがみられた。15世紀～17世紀初頭頃に相当する。

註) 大阪府教育委員会『大和川今池遺跡』1998

第3面 (第13図、図版3)

第3層の暗灰黄色砂混じりシルトと鉄分沈着により褐色化する粘質シルトとの互層を一括して掘削した面を第3面とした。第3層は調査区の西側で厚く堆積している。調査区の中央部あたりから東側は、暗灰黄色砂混じりシルトが粘質土へと堆積状況が変化している。この層は複数回の洪水堆積層で細分することが可能である。また、調査区の東側では上層の攪拌にともなう削平により、本来の遺構面は遺存しておらず確認できなかつた。主に、第3面の遺構は調査区の西側で検出された。第3面の地形はおおむね平坦である。検出面はT. P. +7.90m前後を測る。検出された遺構は南北方向に伸びる溝とピットである。遺構の遺存状態は不明瞭ではあるが、第3面は中世代の耕作面であると考えられる。

溝1～4 (第14図)

調査区の西側で検出された溝1、溝2、溝3は南北方向の正方位で条里に則った耕作溝である。検出幅は25～50cm、深さは約10cmを測る。遺構の上層部はいくらか削平をうけているものと思われる。埋土は黒褐色粘質土で水成堆積の様相を示す。それぞれの溝の間隔は約10mである。これらの溝にともなう遺物として、土師器片や瓦器片などがみられた。

溝4は上層の削平を受けるため、遺構の遺存状況が悪くわずかな痕跡をとどめるのみであった。攪乱で寸断されているが、おそらく溝3から続くものと思われる。検出幅は約25cm、深さは約8cmを測る。埋土は黒褐色粘質土で下層にラミナがみられることから、水成堆積の様相を示す。遺物は出土しなかつた。

溝1に近接してピット8、9を検出した。検出径は20～30cm、深さは9cm前後を測る。埋土は溝1～4と同様に、黒褐色粘質土である。遺物は出土しなかつた。

建物ピット (第14図)

調査区の中央部北側でピットが幾つかみられた。

ピット12、13、14、16、15は、南北方向の正方位から東に17°振る1間×2間の掘立柱建物跡である。ピットの検出径は35～75cm、深さは10cm前後である。上層の削平を受けるため、ピットはいずれも浅くなっている。埋土は黒褐色粘質土である。柱痕などは遺構の断面等で検討を行ったが、確認できなかつた。ピット間距離は南北方向が2.5～3.0m、東西方向が約2.0mを測る。この建物ピットに伴う遺物は出土しなかつた。この他、柵列あるいは掘立柱建物を構成したと考えられるピットが幾つかみられたが、明確に復元できるものはなかつた。

その他の遺構 (第14図)

建物ピットに近接してピット10、11とピット17、また、調査区の中央部北側でピット18、19とピット20、21を検出した。

ピット10、11はおそらく掘立柱建物のピットに関係のある遺構であると思われるが、攪乱により調査区が寸断されているため、明確にできなかった遺構である。ピットはほぼ円形で、検出径は約40cm、深さは約10cmを測る。柱痕などは断面で検討を行ったが確認できなかった。埋土は建物ピットと同様に黒褐色粘質土である。遺物は出土しなかった。

ピット17はやや扁平な楕円形を呈するピットで、検出径は60cm、深さは13cmを測る。埋土は黒褐色粘質土である。遺物は出土しなかった。

ピット18～21はほぼ円形を呈するもので、検出径が30～70cm、深さは5～8cmを測る。埋土はピット18、19が暗赤褐色粘質土。ピット20、21が灰黄褐色粘質土である。いずれも下層に鉄分の沈着がみられ、水成堆積の様相を示す。遺構の性格は不明である。遺物は出土しなかった。

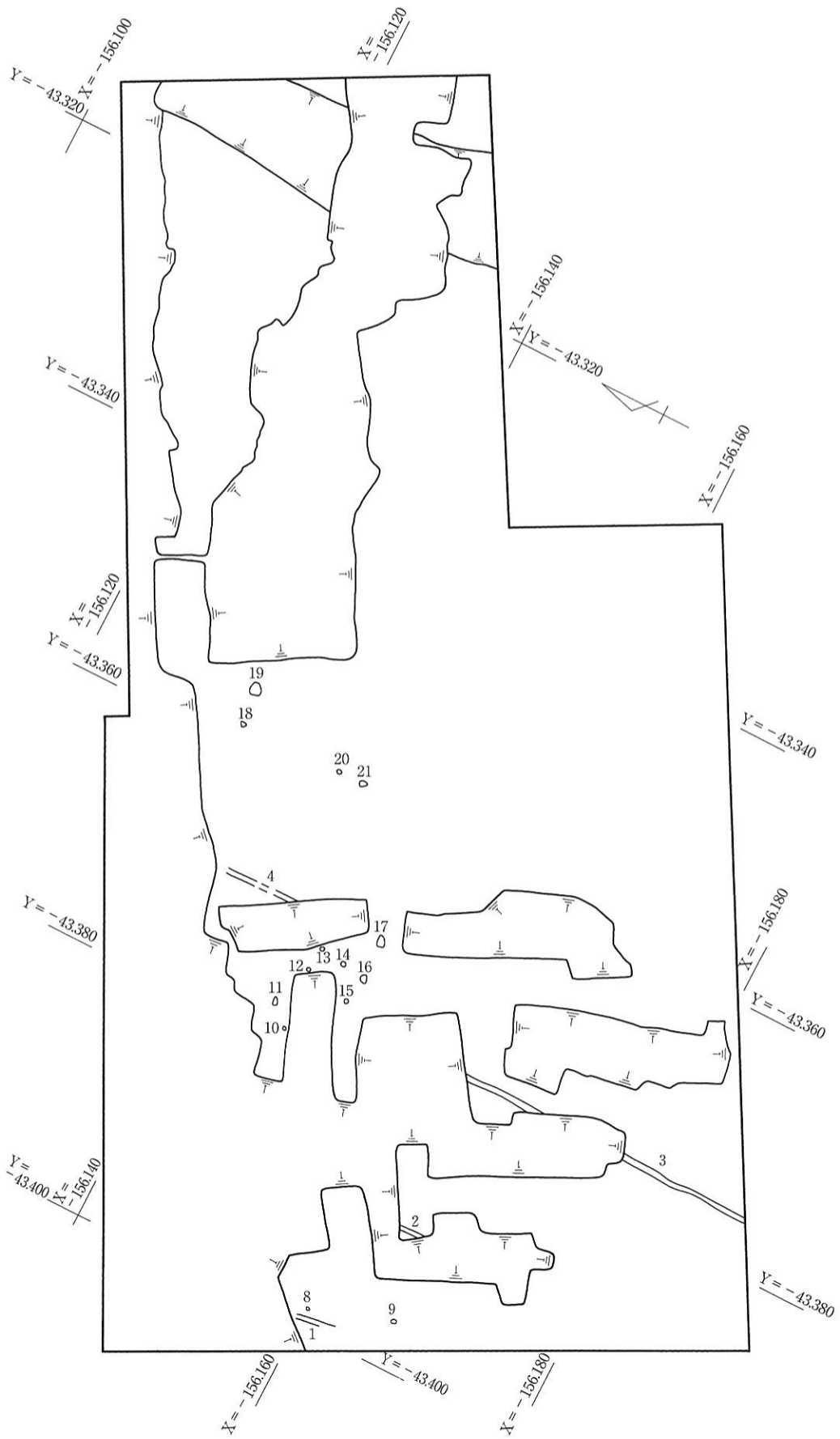
第3面および第3層出土の遺物（第15図、図版9）

第3面では遺構にともなう明確な遺物の出土はなかった。第3面精査時および第3層包含層からは瓦器、瓦質土器、須恵質土器、瓦、陶磁器、輸入陶磁器などの細片が出土しており、一部を図示した。輸入陶磁器については一括して後述する。

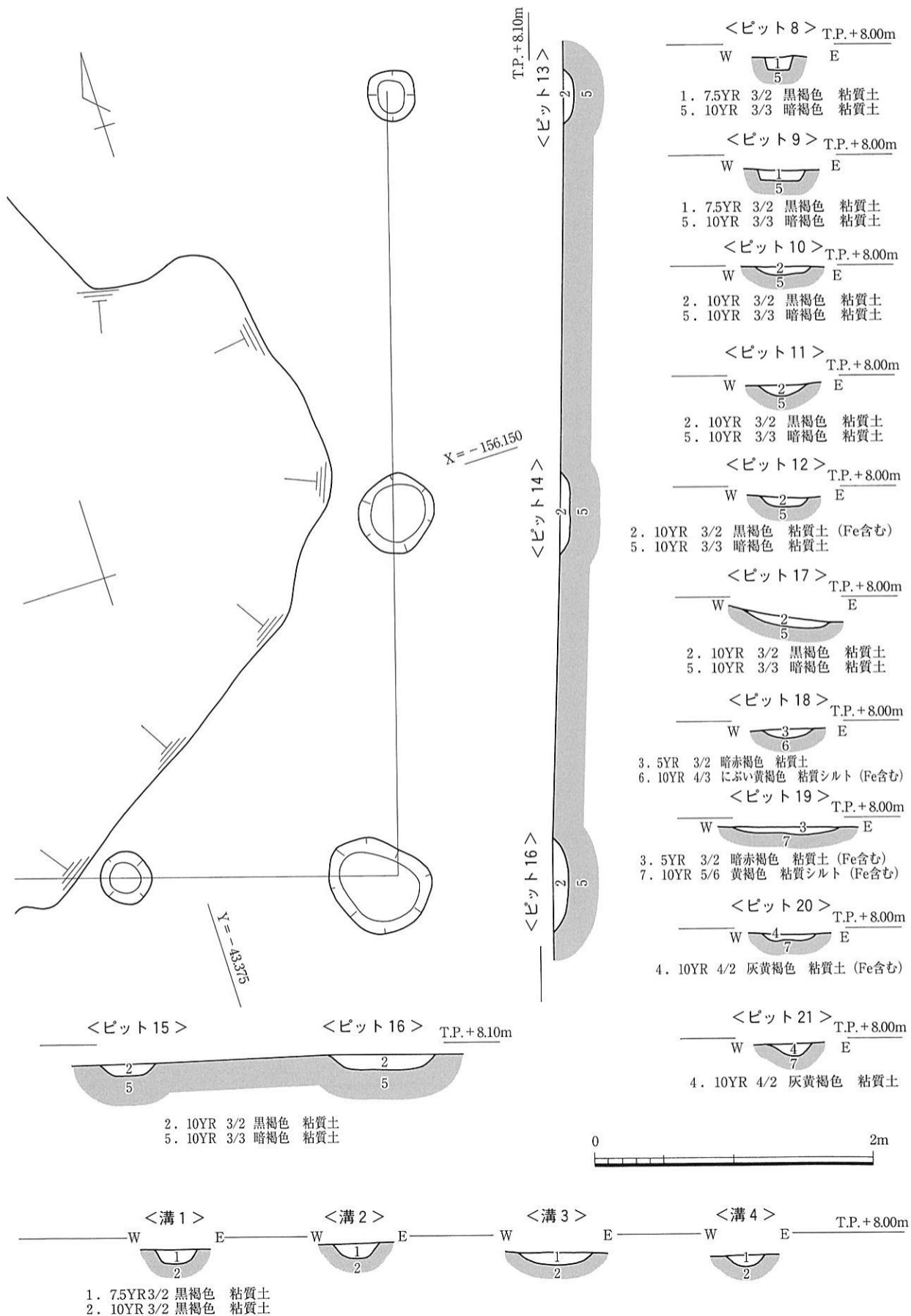
21～25は中世の土師器小皿である。26～33は瓦器小皿である。内面には密な暗文を施すものが多い。見込み部に格子状の暗文、平行線状の暗文を施すものが多くみられる。34～41は瓦器碗である。いずれも内面に暗文を施すものである。外面体部にも粗い暗文を施すものもみられる。38～41は高台の形態と内面見込み部の暗文を示した。見込み部は格子状の暗文を施すものと、平行線状の暗文を施すものがみられる。高台はやや高さのある三角形を示す。瓦器碗和泉型Ⅱ-1～3期に相当する。42は土師器碗である。全体に磨耗が著しい。43は土師器甕の口縁部である。44、45は瓦質羽釜である。口縁部および鋳部の形態から、44は河内B1e型、45は河内D1a型に相当する。46～49は東播系須恵質練り鉢である。口縁部の形態として、46はやや肥厚し断面が三角形を示す。47は肥厚して口縁端部を丸くおさめる。48は上方に肥厚して丸くおさめる。49はやや上方に肥厚しておさめるものである。50～52は瓦質すり鉢である。口縁部は明確な三角形を呈するもの（51、52）と、やや肥厚し丸くおさめるもの（50）がある。いずれも内面にはすり目が施されている。53、54は複弁蓮華文軒丸瓦A型式の瓦当面である。細片であるが蓮華文は複弁八葉であると推測される。53は蓮華文の周囲に細い圈線が1条巡っている。54は中房の蓮子が3個あり、復元すると6個になると推測される。大阪府教育委員会が平成7年度に調査した瓦溜りから同様の軒丸瓦が出土している。55は唐草文軒平瓦B5型の瓦当面である。圈線をともなわないもの。細片であるため中央飾りは不明である。56は土師器甕の底部である。孔穴が2つ確認できる。おそらく5～6個の孔穴をもつものと推測される。57は土錘である。図化できなかったが第3層中から、石鍋（図版9-58）が出土している。細片で形態が不明瞭であるが、Ⅲ-aまたはⅢ-b類に相当すると思われる。この他、瓦質三足脚付羽釜、火鉢、炮烙、土師質羽釜、甕、須恵器坏、東播系須恵質練り鉢、甕、陶磁器、土人形、瓦片などが出土している。出土遺物は12世紀～15世紀代の様相を示している。

（参考文献）

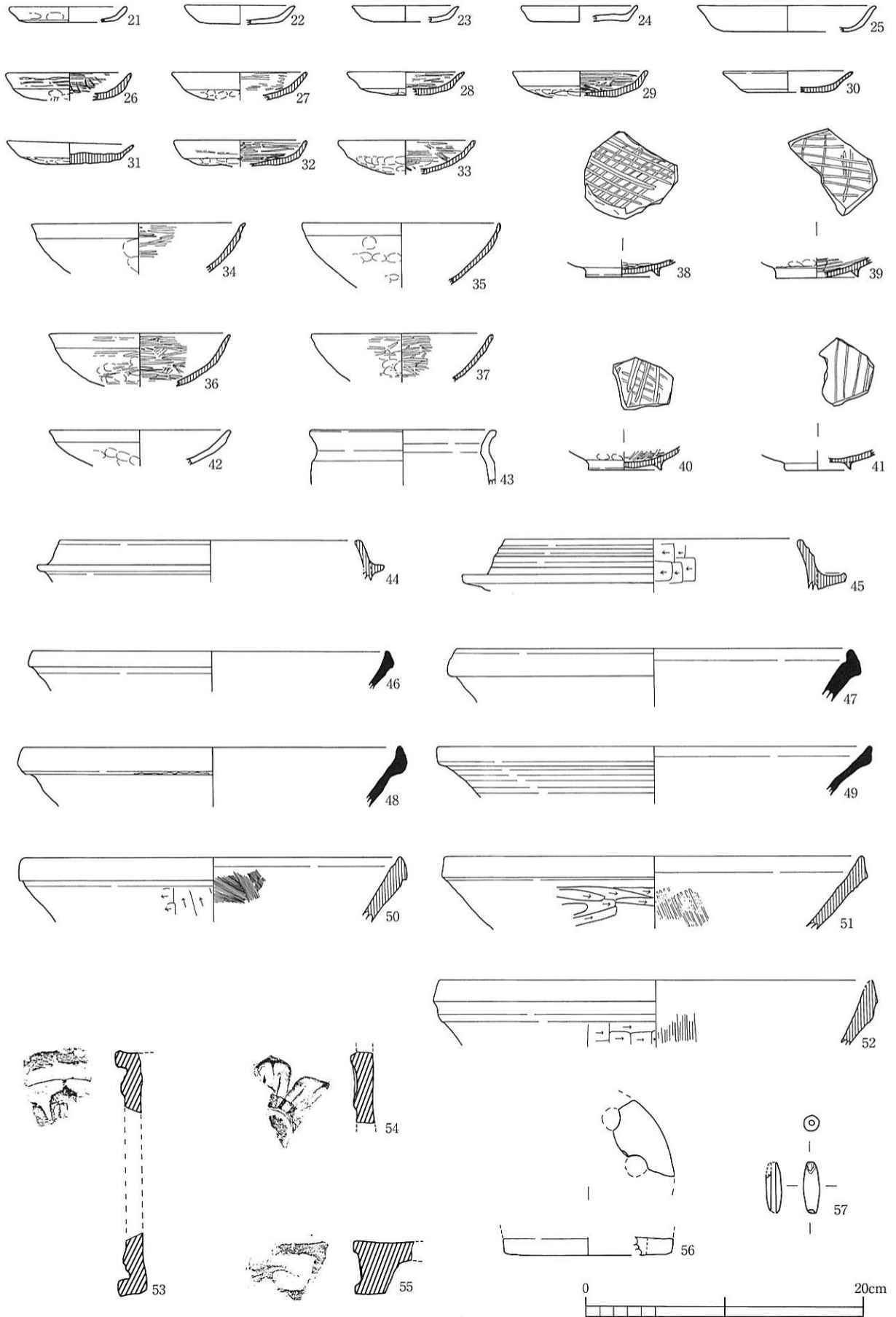
- ・『概説 中世の土器・陶磁器』1998 中世土器研究会編 真陽社



第13図 第3面平面図



第14図 第3面遺構平・断面図



第15図 第3層出土遺物

輸入陶磁器（第16図、図版10）

第2層包含層および第3面精査、第3層包含層から輸入陶磁器片が多く出土した。（その1・その2）の調査においても多くの陶磁器が出土していることから、個体同定作業を行い分析記述している。これに順じて輸入陶磁器における器種分類を行い、その概観を示すものである。個体同定作業に関しては、堺市教育委員会の森村氏の助言をいただいた。出土した資料は細片が多く完形品は皆無であったが、時期的また形式的に特徴のあるものを主眼として、その傾向を示すものとする。

出土した遺物の中で、輸入陶磁器として約70片を確認した。大半が細片であるため器種分類できないものが多かった。また、図示できるものもわずかであった。

59は龍泉窯系青磁稜花皿である。口縁部周縁を稜花様につくる。内面はこれに沿って2～3本の沈線を巡らす、連続刻線になっていない。さらに、内面にはヘラ描きの花文を施す。15世紀後半頃のもの。60は同安窯系青磁皿の底部である。見込み部に花文の片切彫と櫛描文を施す。皿Ⅰ-1-b類にあたる。13世紀後半頃のもの。61は龍泉窯系青磁皿で見込み部に細い櫛描文を施す。Ⅷ-1-b類にあたる。13世紀後半頃のもの。62は龍泉窯系青磁碗の高台部で、内面見込み部に刻花文を施す。15世紀前半頃のもの。63は龍泉窯系青磁皿である。15世紀頃のもの。64は龍泉窯系青磁碗である。口縁端部がやや端反りするもの。内外面共に無文である。15世紀後半頃のもの。65は龍泉窯系青磁碗である。口縁部外辺に雷文帯を施す。15世紀前半頃のもの。66は同安窯系青磁碗である。口縁部下に鈍い屈曲点を有するもの。外面に片切彫、内面には櫛描文を施す。Ⅲ-1-b類にあたる。13世紀後半頃のもの。67は龍泉窯系青磁碗である。口縁端部がやや端反りする。口縁部内面に沈線がみられる。15世紀前半頃のもの。68は龍泉窯系青磁碗である。内面に沈線がみられる。13世紀頃のもの。69は景德鎮の青磁碗である。16世紀中頃～17世紀頃のもの。70は龍泉窯系青磁碗である。外面には簡略化された間隔の狭い蓮弁文を施す。15世紀後半頃のもの。71は龍泉窯系青磁碗である。外面に蓮弁文を施す。Ⅰ-5-b類にあたる。13世紀頃のもの。72は龍泉窯系青磁碗である。外面に稿蓮弁文を施す。Ⅰ-5-b類にあたる。13世紀後半頃のもの。73は龍泉窯系青磁碗である。外面に蓮弁文を施す。Ⅰ-5-b類にあたる。13世紀後半頃のもの。74は景德鎮の青磁碗の高台部である。16世紀中頃～17世紀代のもの。75は端反りする白磁皿である。外面に圈線と線刻がみられる。16世紀後半頃のもの。76は白磁皿である。口縁部外面に線刻がみられる。皿Ⅸ-1-c類にあたる。12世紀代のもの。77、78はⅤ類の白磁碗である。口縁端部を外方につまみ出すもの。13世紀後半頃のもの。78はやや造りが粗なもので、内面には線刻がみられる。79はⅤ類の白磁碗の高台部である。高台は高く、方形状に切り出す。内面見込み部に段を成す。13世紀代のもの。80は白磁碗の高台部である。高台は太く、低いもので、ハの字形に切り出されたもの。Ⅳ-2類である。13世紀前半頃のもの。

この他、図示できなかったが、細片が幾つか出土している。主に龍泉窯系青磁碗片とⅤ類の白磁碗片が出土している。13世紀～15世紀頃のものである。

輸入陶磁器の傾向として、次のような事項があげられる。

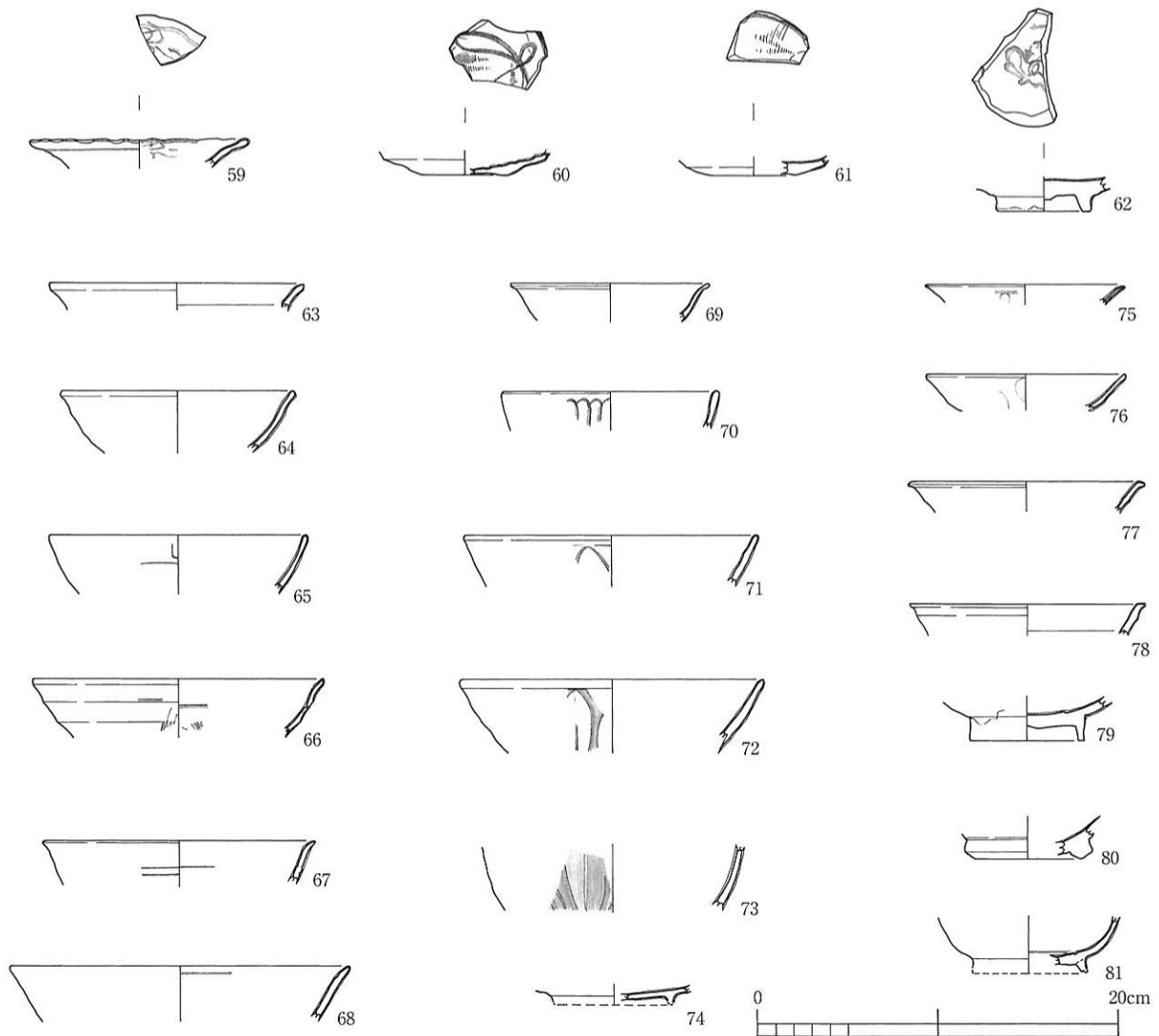
- ・主に中国産の陶磁器である。不確定だが高麗系のものもみられた。
- ・器種では青磁碗、白磁碗、青磁皿、白磁皿がみられた。
- ・青磁は龍泉窯系のものが大半をしめ、同安窯系のものも多い。

- ・ 時期的には、12世紀～17世紀の製品が含まれるが、13世紀～15世紀代のものが主流を成す。
- ・ 出土地点としてB14-f～i地区付近からの出土が多い。調査区の西側に位置し、地形的にはやや低い位置にあたる。
- ・ 出土した層序として、第2層、第3層からの出土が多くみられた。大和川の付け替え（1704年）以前の堆積土層に相当する。

このように、1つの遺跡内で細片であるとはいえ、輸入陶磁器がまとまって出土していることから、大和川今池遺跡の周辺地域で、対外的な交通・経済の動向に呼応する動きがみられる地域であると考えることができる。中世から近世におけるこの地域の歴史的景観を復元する上での資料になると思われる。

(参考文献)

- ・ 『大宰府条坊跡Ⅱ』1983 (財) 古都大宰府を守る会
- ・ 『貿易陶磁研究 No.1』1981 日本貿易陶磁研究会
- ・ 『貿易陶磁研究 No.4』1984 日本貿易陶磁研究会 他



第16図 輸入陶磁器

第4面（第17図、図版3）

第4層のにぶい黄褐色粘質シルトを主体とする土層を掘削し、検出した面を第4面とした。第4層は調査区全域にみられるが、東側でやや厚く堆積している。調査区の中央部あたりから西側では、遺構の遺存状況が悪く本来の遺構面を確認することはできなかった。地形的に調査区の東側が低くなることから、第4層は地形の低い部分を中心に堆積した土層と考えられる。低い部分では下層に粘質シルト層がみられ、止水堆積の様相を示す。一時的に湿地状況にあったことがうかがえる。拡張区では上層の削平および攪拌により第3層と第4層とが連続し、土層の細分が不明確であったため、第3層下層の鉄分沈着層の上面での遺構検出が困難であった。おそらく上層が攪拌を伴う水田作土の可能性が高く、本来の遺構面は削平を受けているものと考えられる。このように、第4面は主に調査区の中央部で検出された。検出面はT.P. +7.80~7.90m前後を測る。

第4面で検出した主な遺構は、南北方向の条里に則る畦畔、溝、ピットなどである。全体に遺構が希薄である。遺構の遺存状態は不明瞭ではあるが、第4面は平安時代末頃から中世頃の水田耕作面であると考えられる。遺物として、須恵器つまみ、坏身、小型長頸壺、瓦器片、黒色土器片、土師器片などが出土した。

畦畔5~7（第18図、図版3）

調査区の中央部で南北方向の条里に則った畦畔を3条検出した。

畦畔5は検出幅95cm、高さ12cm、検出長27mを測る。断面形は低い台形を呈する。畦畔7は検出幅98cm、高さ14cm、検出長17.2mを測る。断面形は低い台形を呈する。畦畔6は検出幅48cm、高さ6cm、検出長11.8mを測る。畦畔5、7と比較すると低く不整形であることから一時的に造られたものと思われる。いずれも断面では、暗灰黄色粘質土の第4面のベース層に暗灰黄色粘質シルトを積み上げている。畦畔の上層は鉄分沈着が顕著な灰オリーブ色粘質シルト及び細砂で、止水堆積層がみられる。洪水などの流水作用によって埋没したものと思われる。畦畔にともなう遺物は出土しなかった。

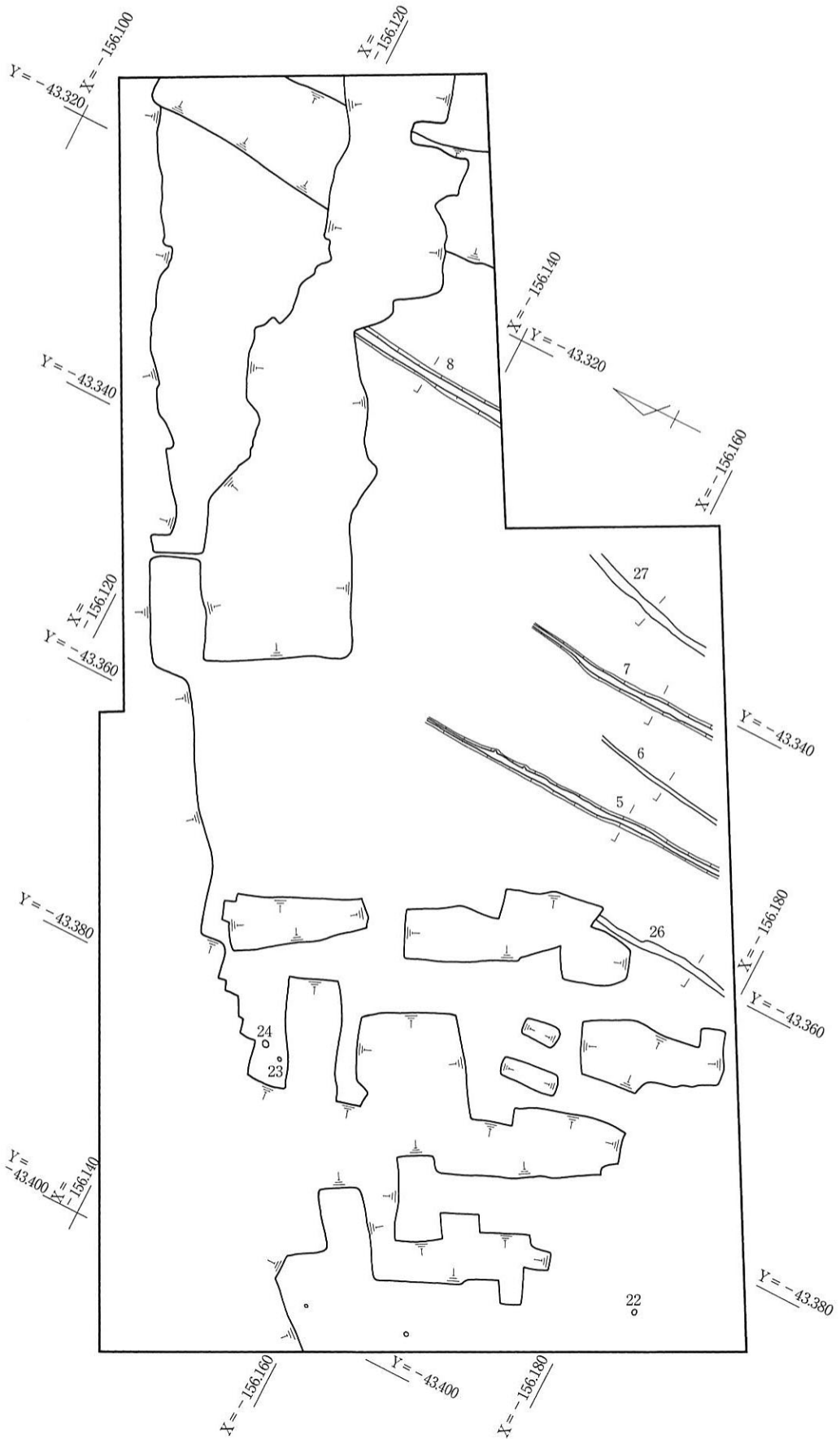
畦畔8（第18図）

拡張区で検出した南北方向の条里に則った畦畔である。（その4）の第4-1面で検出された畦畔206の延長部分にあたる。畦畔8は検出幅70cm、高さ11cm、検出長14mを測る。断面形は低いかまぼこ型を呈する。断面では暗灰黄色粘質土の第4面のベース層に暗灰黄色粘質シルト、灰オリーブ色粘質シルトを積み上げている。畦畔にともなう遺物は出土しなかった。

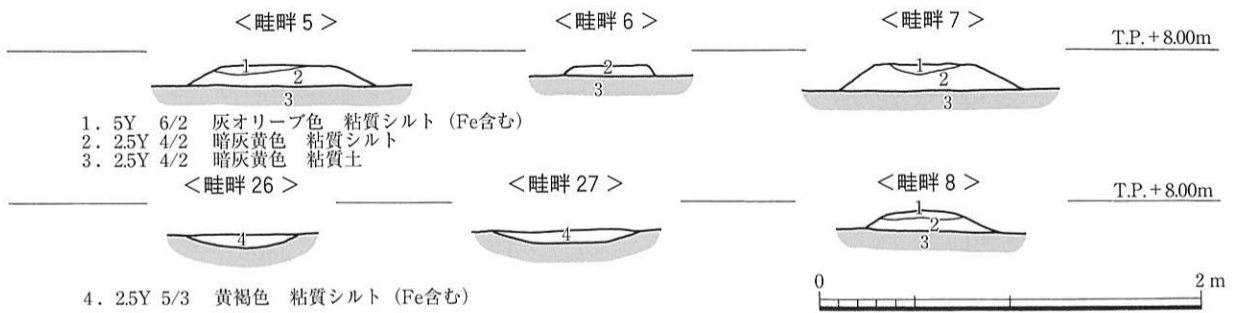
溝26、27（第18図）

南北方向に伸びる畦畔に平行して溝が2条伸びている。上層の削平を受けるため検出された溝はいずれも浅くなっている。

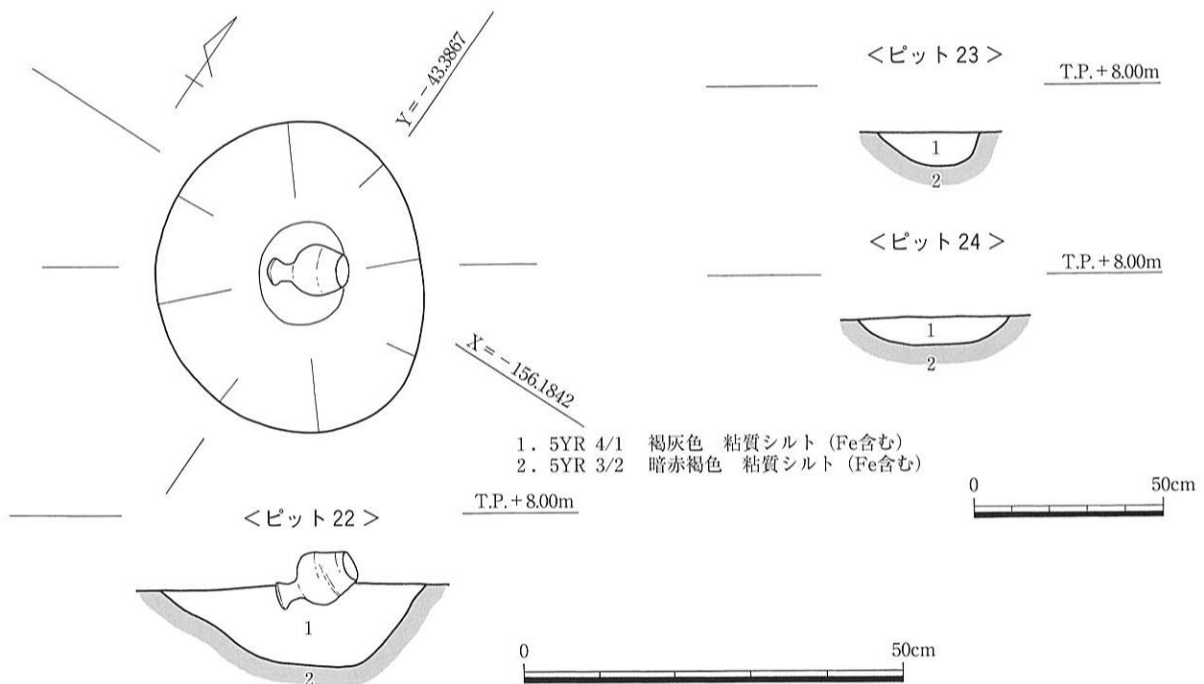
溝26は畦畔5の西側に位置する。約8mの間隔をもつ。攪乱により寸断されるが北側に伸びていたものと推測される。溝の検出幅は50cm、深さは7cmを測る。断面はレンズ状の形態を示す。埋土は黄褐色粘質シルトである。溝27は畦畔7の東側に位置する。約7mの間隔をもつ。遺構の遺存状態が不明瞭ではあるが、さらに南北方向に伸びていたものと推測される。溝の検出幅は78cm、深さは7cmを測る。断面はレンズ状の形態を示す。埋土は黄褐色粘質シルトで、鉄分沈着がみられる。溝は畦畔にともなうもので、主に水田の排水機能を有していたと考えられる。地形的には北側から南側にやや緩やかに傾斜している。南側に流れが向かっていたものと思われる。溝にともなう遺物は出土しなかった。



第17図 第4面平面図



第18図 第4面畦畔・溝断面図



第19図 第4面遺構平・断面図

ピット22 (第19図、図版3)

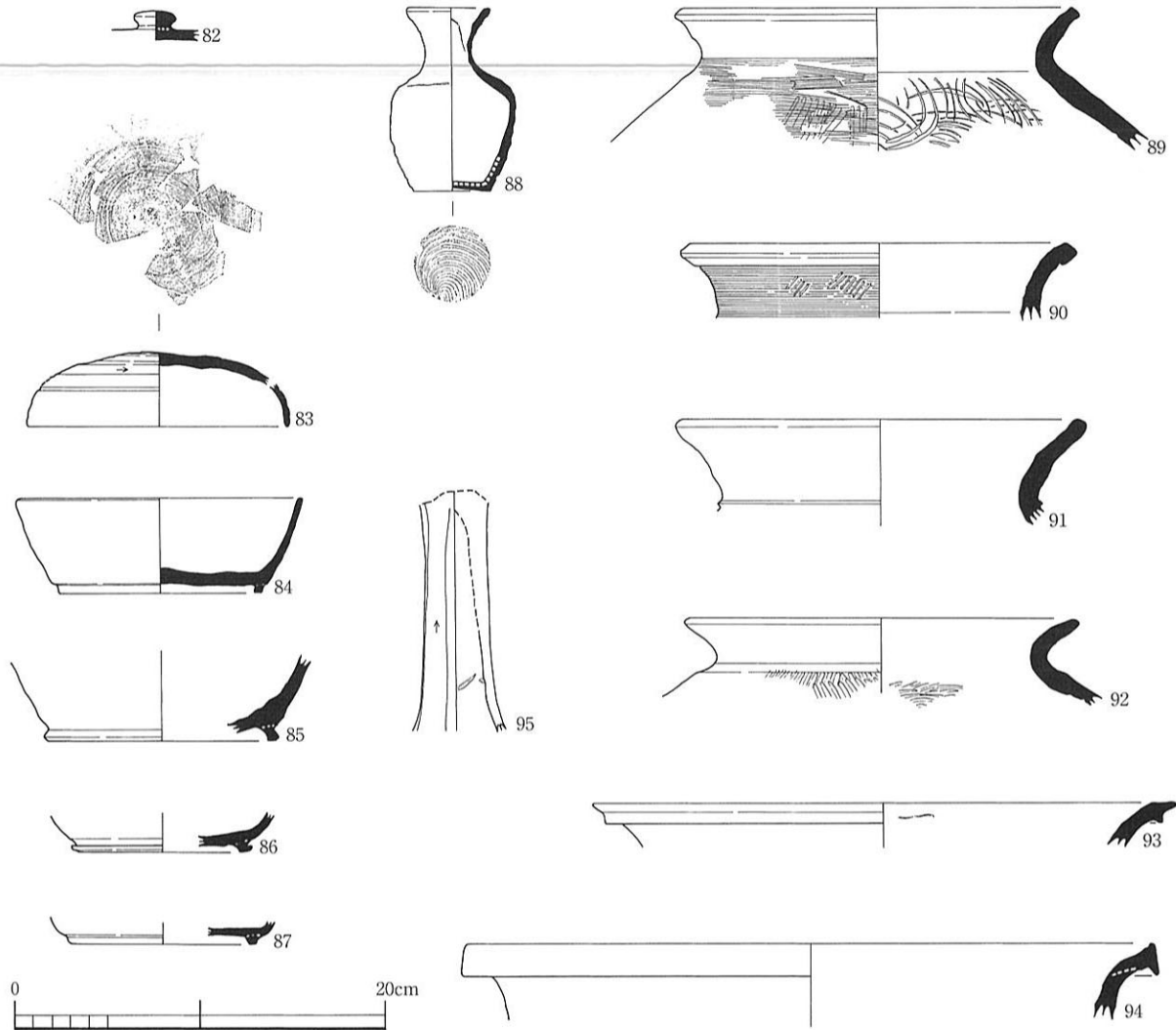
調査区の西側で須恵器小型長頸壺をとまなうピットを検出した。ほぼ円形を呈する。遺構の上面が削平されているため、ピットの掘り込み面を明確にすることはできなかった。検出時のピットの径は35cm、深さは11cmを測る。埋土は褐灰色粘質シルトである。検出高はT. P. + 7.91mを測る。土器の遺存状況からして本来は15cm以上の深さを有していたものと推測される。須恵器小型長頸壺は口縁部をやや下方に向けた状態で検出された。ピットの規模が土器の規模に合致しており、意図的に埋納されたものと考えられることから、土器埋納遺構と言することができる。ピット22周辺では他に顕著な遺構を検出することができなかったが、おそらく水田耕作に關与する遺構であると考えられる。平安時代末頃に相当するものである。

この頃には当地において条里が施行されていたことがうかがえる。

その他の遺構 (第19図)

調査区北側中央部からピット23、24を検出した。

ピット23は検出径27cm、深さ9cmを測る。埋土は褐灰色粘質シルトで鉄分沈着がみられる。ピット



第20図 第4面及び第4層出土遺物

24は検出径40cm、深さは7cmを測る。埋土は褐灰色粘質シルトで鉄分沈着がみられる。水成堆積の様相を示す。遺構の性格は不明である。いずれも遺物は出土しなかった。

第4面および第4層出土の遺物（第20図、図版11）

第4面では遺構が希薄であったため、遺構にともなう遺物はピット22から出土した須恵器小型長頸壺のみである。第4面精査時および第4層包含層からは、須恵器坏蓋、坏身、つまみ、甕、土師器高坏脚部などが出土しており、一部を図示した。

88はピット22から出土した完形品の須恵器小型長頸壺である。底部に糸切り痕がみられる。V型式に相当する。82は須恵器坏蓋のつまみである。83は須恵器坏蓋で外面にヘラ記号がみられる。II-3~4型式に相当する。84~87は須恵器坏身Aである。高台の形態からIV-2~4型式に相当する。90~92は須恵器壺の口縁部である。90は口縁端部を丸く肥厚するもの。頸部外面に斜め方向の叩きの後、横方向のカキ目調整を施す。91は口縁部が外上方に開くもの。92は口縁部が短く外反するもので、内面にはハケ目、外面には叩き調整を施す。89、93、94は甕の口縁部である。89は体部内面に青海波文叩き、外面には叩き調整の後、横方向のハケ目を施すもの。93は口縁端部に明確な段を有するもので、I~II型式にあたる。94は口縁部を外反したのち口縁端部を上下に強く肥厚し、やや内向する面を成すもので、I

- 4 ~ 5 型式にあたる。95は土師器高坏の脚部で、断面形は六角形を示す。平安時代のものと思われる。81 (第16図、図版10) は緑釉陶器碗の底部片である。焼きしまった露胎の内外面に濃い緑の釉薬が施されている。内面見込み部には沈線が巡る。

この他、黒色土器碗、土師器皿、坏、高坏、鉢、甕、碗、埴、須恵器坏、高坏、鉢、灰釉陶器碗などもみられた。7世紀~10世紀代の様相を示す。

第5面 (第21図、図版4・5)

第5層の黒褐色粘質シルトを主体とする砂礫混じり土層を掘削し、検出した面を第5面とした。第5層は調査区の全域で薄茶色の帯状に堆積する層である。堆積状況からさらに4層に細分することが可能である。第5面のベース層では層境に踏み込みが顕著に認められる。踏み込みの下層ではラミナのみられる粘質シルトが堆積している。また、粘質シルト層には炭化物や有機物が認められる部分もある。一時的に軟弱な湿地状況であったことがうかがえる。地形的には東南方向へ徐々に低くなっているため、調査区の東側ではやや厚く堆積している。西側では部分的に厚く堆積するところもある。

第5層を成す土層は地形の低い部分を補充、整地している様相を示す。特に、古墳時代の遺物を多く含む黒褐色粘質シルト層 (5-3層) は、近接していた古墳時代の遺構面を削平し、整地土として運できたものと推測される。第5層の堆積状況から、人為的な整地は部分的に幾度か行われたものと考えられる。5-3層に含まれる遺物は細かく碎かれており、遺物片が散積しているが、少し離れた場所のものが各々接合、復元のできるものがみられるなど、やや特異性をもっている。調査区西側の-i9地区周辺に5-3層が広く分布、堆積している。また、-i9地区で検出された遺構では、5-3層が埋土となっているものが多くみられた。-i9地区出土の遺物については項を改め記述する。

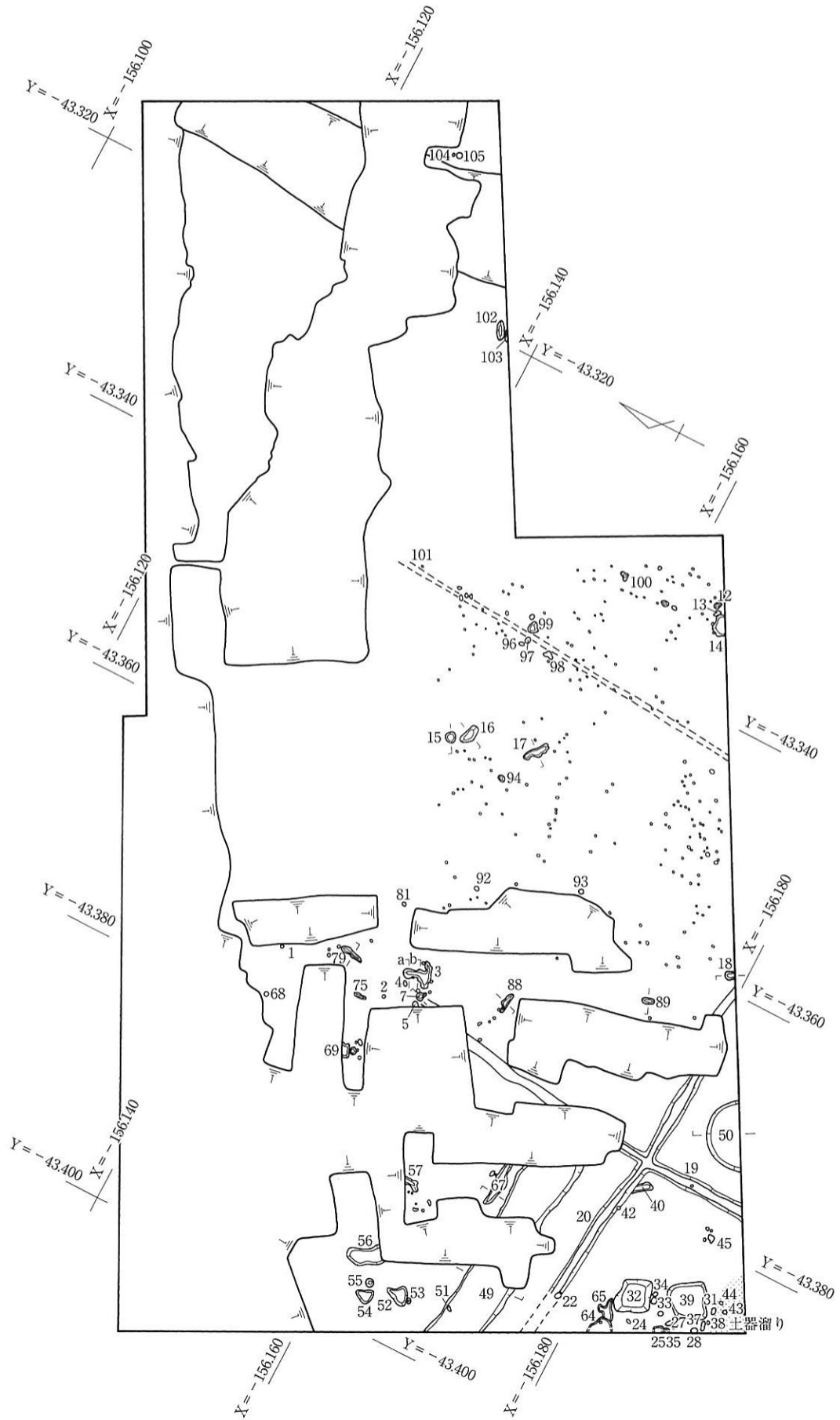
第5面はこのような整地土層の下層面にあたる。第5面で検出した遺構として、畦畔、土坑、不定形土坑、溝、ピット、自然流路などがある。調査区の西側では踏み込みが顕著に認められ、また、水田区画内で流路跡や不定形土坑などが多くみられることから、洪水などにより耕作地が湿地化し、一時期後背湿地の状況であったと考えられる。このような状況は、本書の第5章 自然科学分析において微化石分析の考察で渡辺氏によっても指摘されている。古墳時代前期頃の耕作面が後に湿地化した状況であると考えられる。検出面はT. P. +7.70~7.90mである。

畦畔19、20 (第22図、図版5)

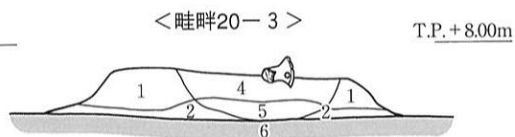
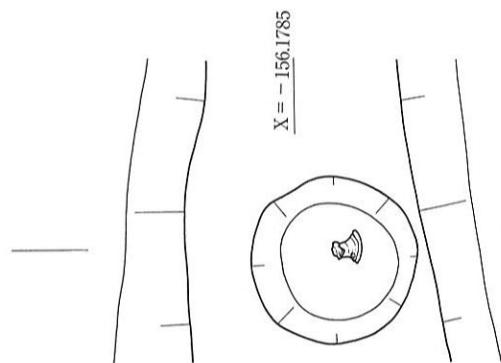
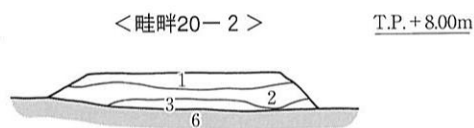
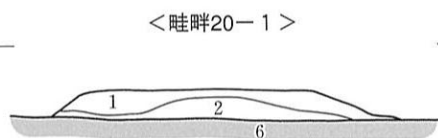
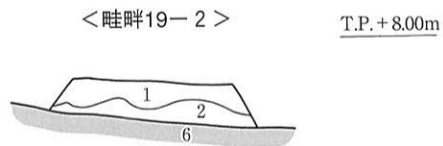
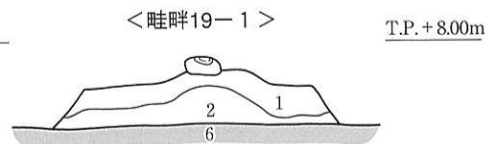
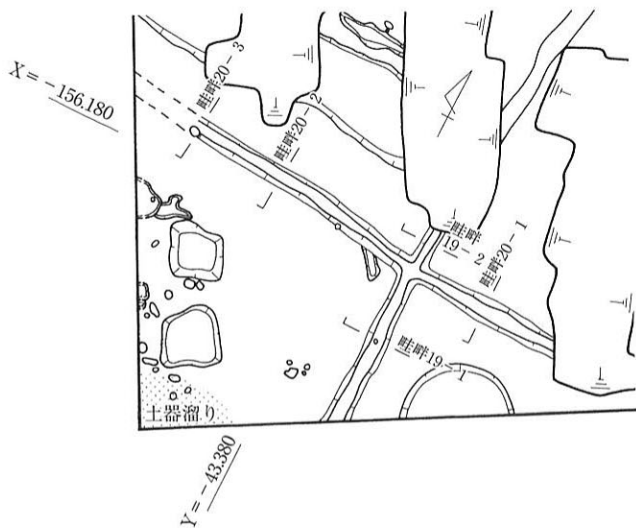
調査区の南西部で検出した畦畔である。畦畔19は南北方向の条里に則って伸びる。畦畔20は畦畔19に直交して東西方向に伸びる。上層の攪拌などにより畦畔の検出状況はきわめて不明瞭で、畦畔19の北側や畦畔20の西端部などでは痕跡だけをとどめる部分もみられる。T. P. +7.80m前後で検出した。

畦畔19の検出幅は50~60cm、遺存する畦畔の高さは11~15cmを測る。検出長は32.5mである。北側は攪乱により寸断されるが、延伸していた痕跡がみられる。南側は調査区外に伸びている。畦畔の断面形は台形を呈する。やや砂礫の混じる黒褐色粘質土のベース層に粘性をもつ黒褐色粘質土を盛り上げるもの。幾度か盛り上げ成形を行ったらしく、層間には薄いラミナが入るものや鉄分沈着が認められる。

畦畔19-1地点で盛土内から須恵器甕 (102) の体部を検出した。口縁部を欠くもの。人為的に欠いたものか。須恵器甕は畦畔盛土の中央部で、畦畔の上層に乗るような状況で検出した。遺物にともなう掘り方は確認できなかった。畦畔が機能していた時期に盛り上げ土層中に埋納したものである。この他、出土した遺物として、畦畔の盛土内から須恵器坏蓋つまみ、坏身、坏蓋、壺片などがみられた。



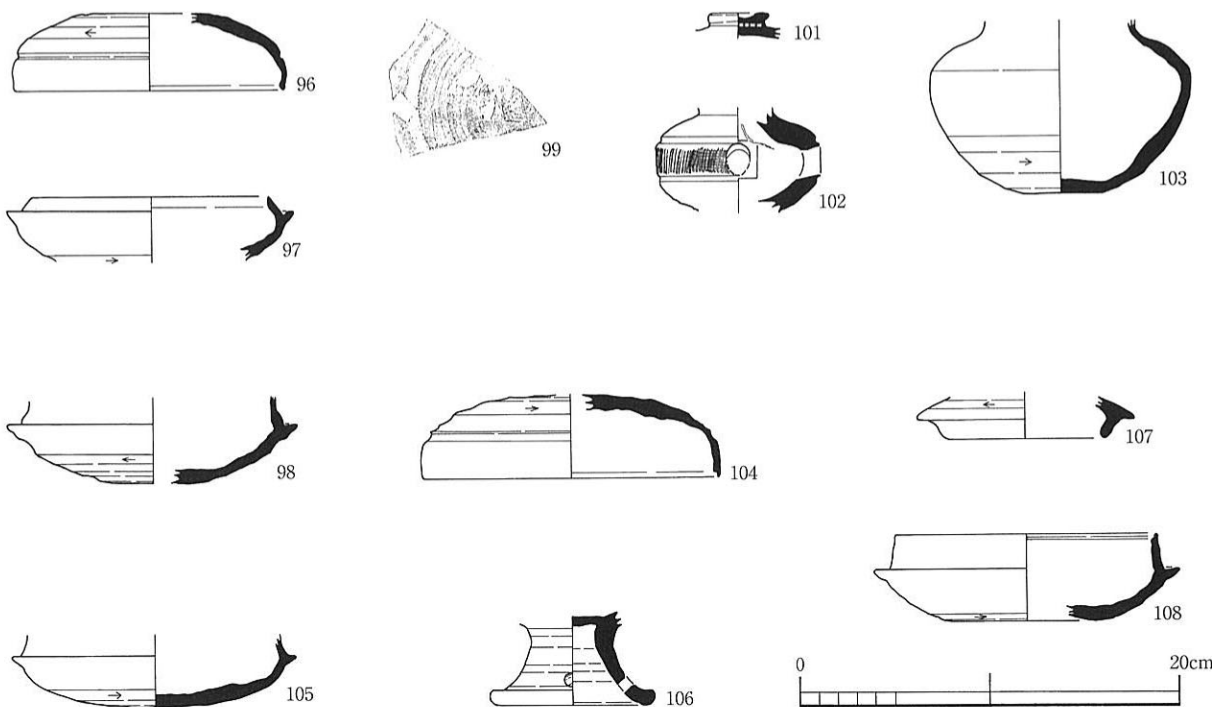
第21図 第5面平面図



- Y = -43.390
- | | |
|-------------------------------|------------------------|
| 1. 10YR 2/2 黒褐色 粘質土 | 4. 7.5YR 1.7/1 黒色 粘質土 |
| 2. 10YR 3/2 黒褐色 粘質土 (Fe含む) | 5. 7.5YR 3/3 暗褐色 粘質シルト |
| 3. 10YR 4/2 灰黄褐色 粘質シルト (Fe含む) | 6. 2.5Y 3/1 黒褐色 粘質土 |



第22図 第5面畦畔平・断面図



第23図 第5面畦畔出土遺物

畦畔20の検出幅は60～90cm、遺存する畦畔の高さは8～15cmを測る。検出長は30.5mである。西側および南側の調査区外に伸びていると推測される。畦畔の断面形は台形を呈する。畦畔19と同様に、やや砂礫の混じる黒褐色粘質土のベース層に粘性をもつ黒褐色粘質土を盛り上げている。また、幾度か盛り上げ成形を行ったらしく、層間には薄いラミナが入るものや鉄分沈着が認められる。

畦畔20-1地点で須恵器高坏底部(106)を検出した。坏部を欠く。人為的に欠いたものか。須恵器高坏は横に倒れたような状況で検出した。畦畔20の上面から掘削し埋納したものと思われる。掘り方は直径44cmの円形を呈する。深さは12cmを測る。畦畔の上面が削平を受けるため、本来の掘り込み面は確認できなかった。本来の畦畔はもう少し高かったものと思われる。この他の遺物として、畦畔の盛土内から須恵器坏身、坏蓋、壺片などが出土した。

畦畔20に付随するように土坑40がみられる。溝状に細長いもので、検出幅0.6m、検出長1.8mを測る。深さは10cmである。埋土は黒褐色粘質土で植物遺体を含む。埋土内から須恵器坏身、壺蓋などが出土した。

調査区の東側では湿地状況が著しく、面上に足跡が顕著にみられた。また、南北方向を示す畦畔の痕跡が確認できた。畦畔の高まりは検出できなかった。畦畔の痕跡は検出幅が70～90cmを測る。検出長は32.3mである。これらの畦畔は南北方向の条里に則ったものである。一時期は水田耕作を営んでいたものと推測できる。

畦畔19、20からは、96～108、559、589(第23図、図版12)が出土した。

畦畔19から出土した遺物は、96～103、559である。96は須恵器坏蓋である。97、98は須恵器坏身である。99は須恵器坏の外面にヘラ記号(G類)がみられる。100(図版12)は図化できなかったが、焼付けの溶着痕がみられるものである。101は須恵器坏蓋のつまみ部である。102は畦畔の盛土内に埋納された須恵器甕である。外面に刺突文を施す。559(第55図、図版28)は須恵器坏蓋で、口縁端部にa-4類(多方向のハケ目状調整)の刻み目を施すものである。この他図化できなかったが、須恵器甕、土師器高坏、坏、埴の把手などが出土した。

畦畔20から出土した遺物は、104～106である。104は須恵器坏蓋である。105は口縁端部を欠くが須恵器坏身である。106は畦畔の盛土内に埋納された須恵器高坏脚部である。脚部は外方にハの字状に開くもので、底部端をやや肥厚して丸くおさめるもの。脚部の低い位置に透かし穴をもつ。この他、須恵器甕片で溶着痕のみられるものや、高坏、甕片、土師器甕片、高坏片などが出土した。

土坑40から出土した遺物は、107、108である。107は須恵器壺蓋である。108は須恵器坏身である。この他、土師器片などがみられた。

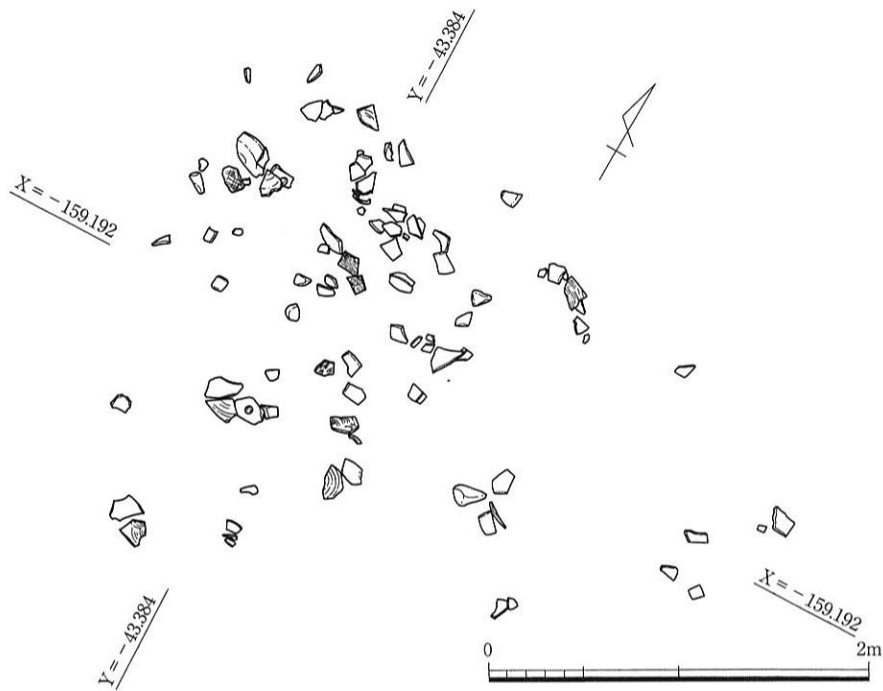
土器溜り(第24図、図版5)

調査区の南西側で須恵器片、土師器片が集中して出土した。一辺約5m四方の範囲に及ぶ。掘り方は不明瞭で確定できなかった。検出時には土器溜りとしてとらえたが、おそらく浅い窪地に上層の整地土層(5-3層)が入ったものと思われる。埋土は黒褐色粘質シルトで多くの土器細片および砂礫を含む。この土器溜りは国土座標に基づいた地区割で、B14-i9地区(以下、-i9地区と略記する)に位置する。5-3層の特徴を明確に示す地区である。

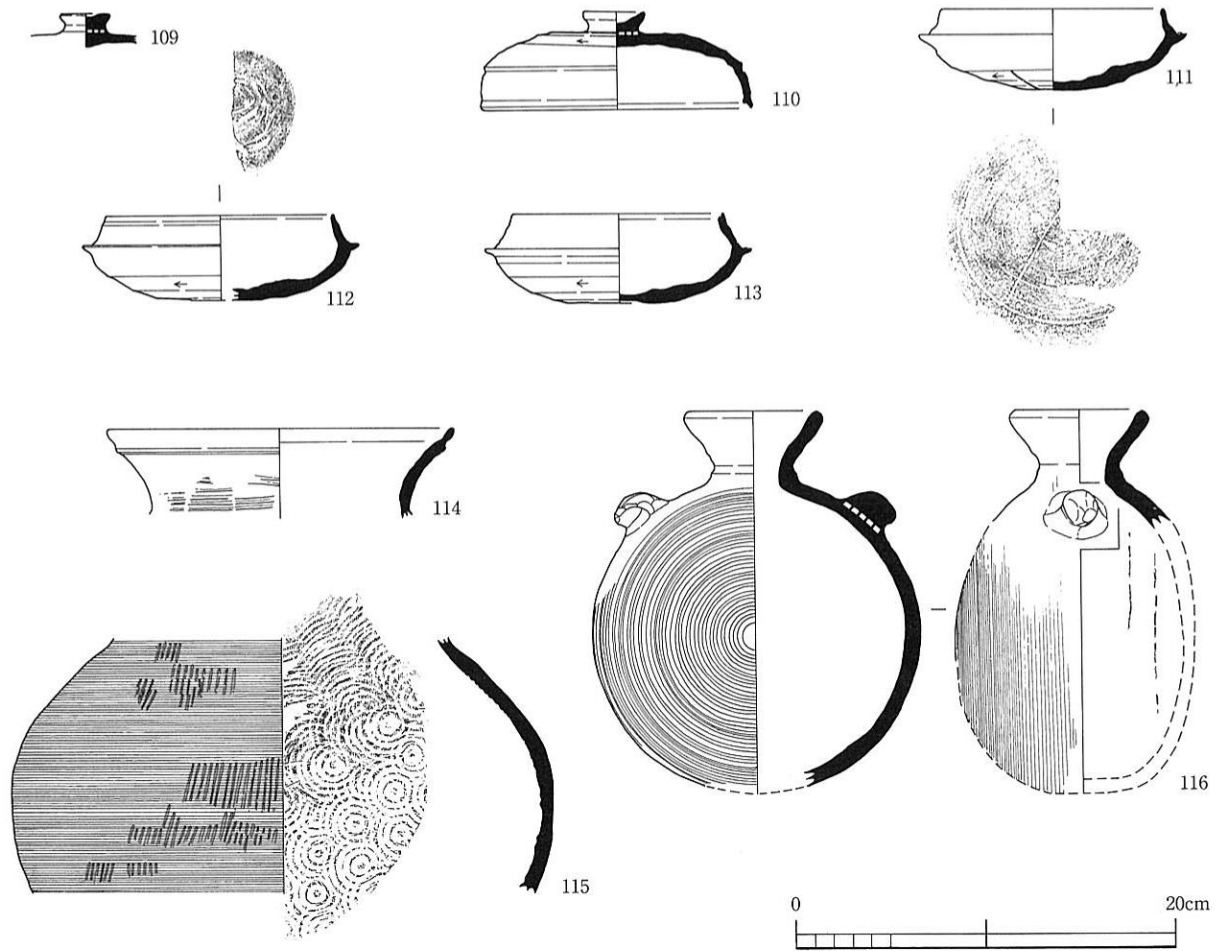
第5層で検出した遺物の大半は、この土器溜りを中心とする-i9地区周辺から出土している。

土器溜りの遺物として取り上げたものは、109～116(第25図、図版13)である。

109は須恵器坏蓋つまみである。110は須恵器のつまみをもつ坏蓋である。口縁端部は明確な段を有し



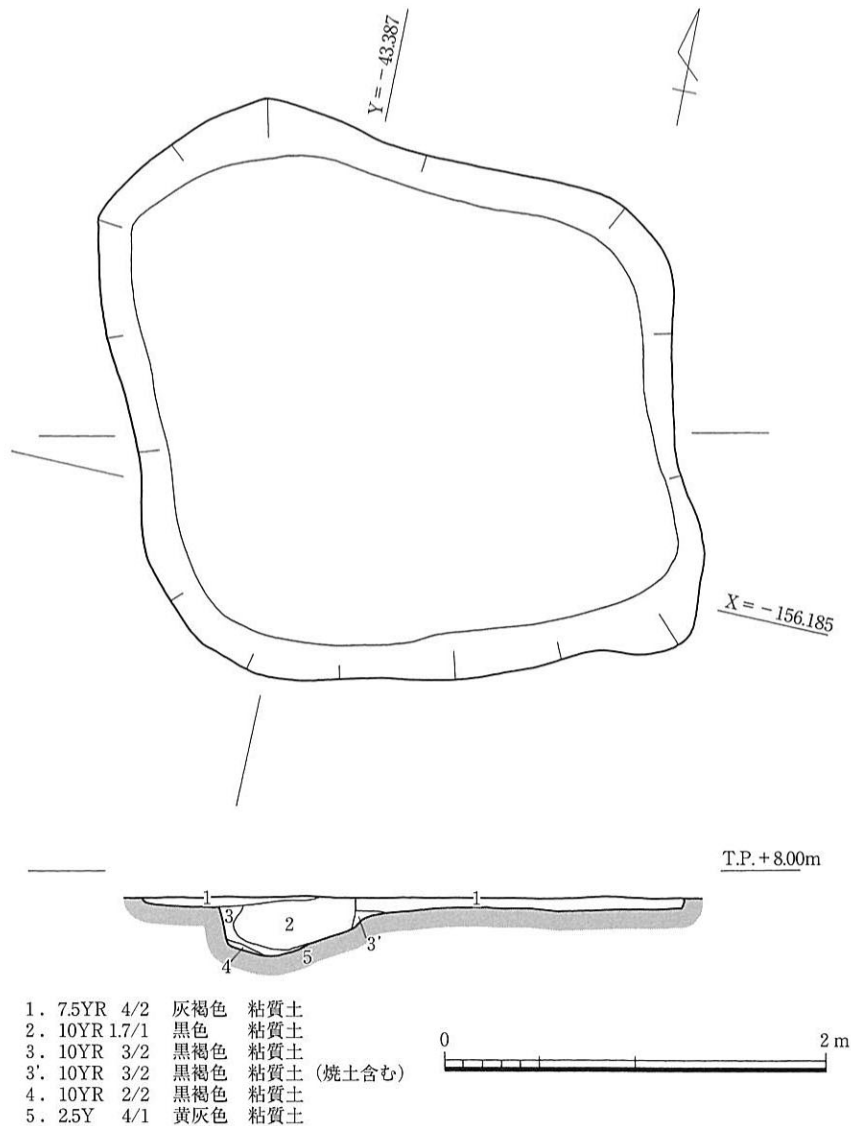
第24図 第5面土器溜り遺物出土状況



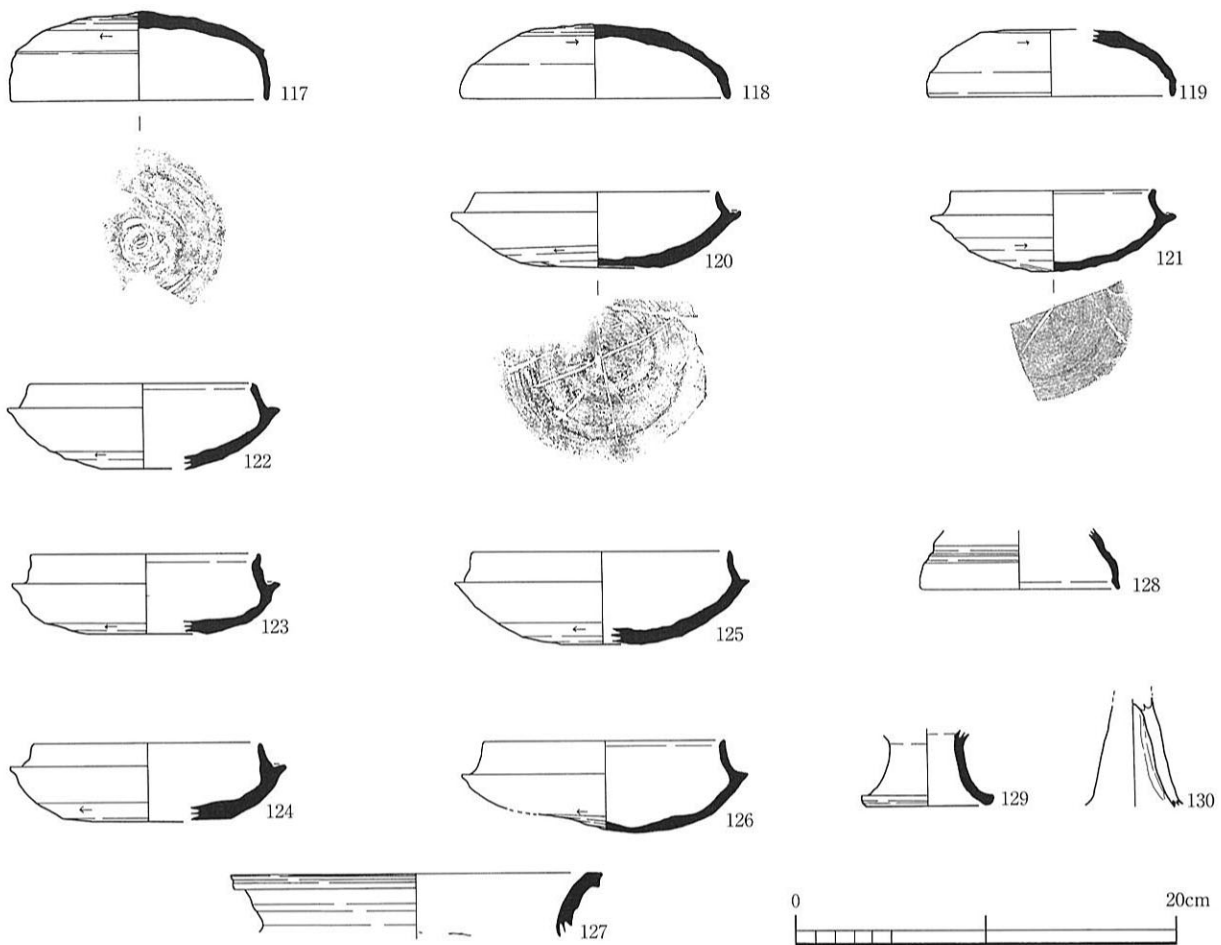
第25図 第5面土器溜り出土遺物

内傾する凹面を成すもの。111は須恵器坏身で外面にヘラ記号（B類）を施すもの。112は須恵器坏身で内面に同心円紋スタンプ（B類）の痕跡がみられるもの。113は須恵器坏身である。114は須恵器壺の口縁部で、頸部外面に回転カキ目調整を施すもの。115は須恵器甕の体部である。丸みのある体部の外面は叩き調整の後に回転カキ目調整を施す。内面には青海波文の叩き調整痕が顕著にみられる。116は須恵器提瓶である。肩部に短く退化した把手をもつ。体部はほぼ円形を呈する。外面には回転カキ目調整を施す。中央部にはヘラ記号？がみられる。内面には粘土紐のつなぎ目が顕著にみられ、やや粗雑な感がある。

この他、須恵器高坏、土師器高坏、甕、埴把手などが出土した。この地域で出土した遺物は、-i9地区出土の遺物として後述する。



第26図 第5面不定形土坑32平・断面図



第27図 第5面不定形土坑32出土遺物

不定形土坑32（第26図、図版5）

水田区画の南側で幾つかみられる不定形土坑のひとつである。やや方形を呈する不定形土坑で、一辺約3mを測る。T. P. +7.86mで検出した。深さは10cmほどであるが、中央部で深い落ち込み部がみられる。落ち込み部は幅が70cm、深さは約30cmを測る。埋土は浅い部分が灰褐色粘質土である。落ち込み部では埋土は黒色粘質土を基本とし、層中には焼土や炭化物、植物遺体などが含まれている。下層は粒子のそろった黒褐色粘質土である。遺構の下面はなだらかな凹面を成す。埋土中から土器片が多く出土した。主に上層の灰褐色粘質土と黒色粘質土からのものである。出土遺物として、須恵器坏身、坏蓋、高坏、甕、土師器高坏などがみられた。

調査時に遺構の堆積状況を把握するため、微化石分析を行った（第5章 自然科学分析）。この結果、渡辺氏は「遺構32埋土と遺構近辺に分布する同時期の堆積物が同様の環境下で堆積したことは明らかである。」とし、黒色粘土層が腐植質粘土層であるとした上で、「黒色粘土層は湿地環境下で、自然に堆積したものであると考えられる。」としている。また、堆積の時期として「古墳時代前期以降に下部から上部にかけて連続して自然に堆積したものであると考えられる。」としている。不定形土坑32のみならず同様の堆積を示す遺構も数多くみられる。近辺では不定形土坑39、50、64、65などがこれにあたる。

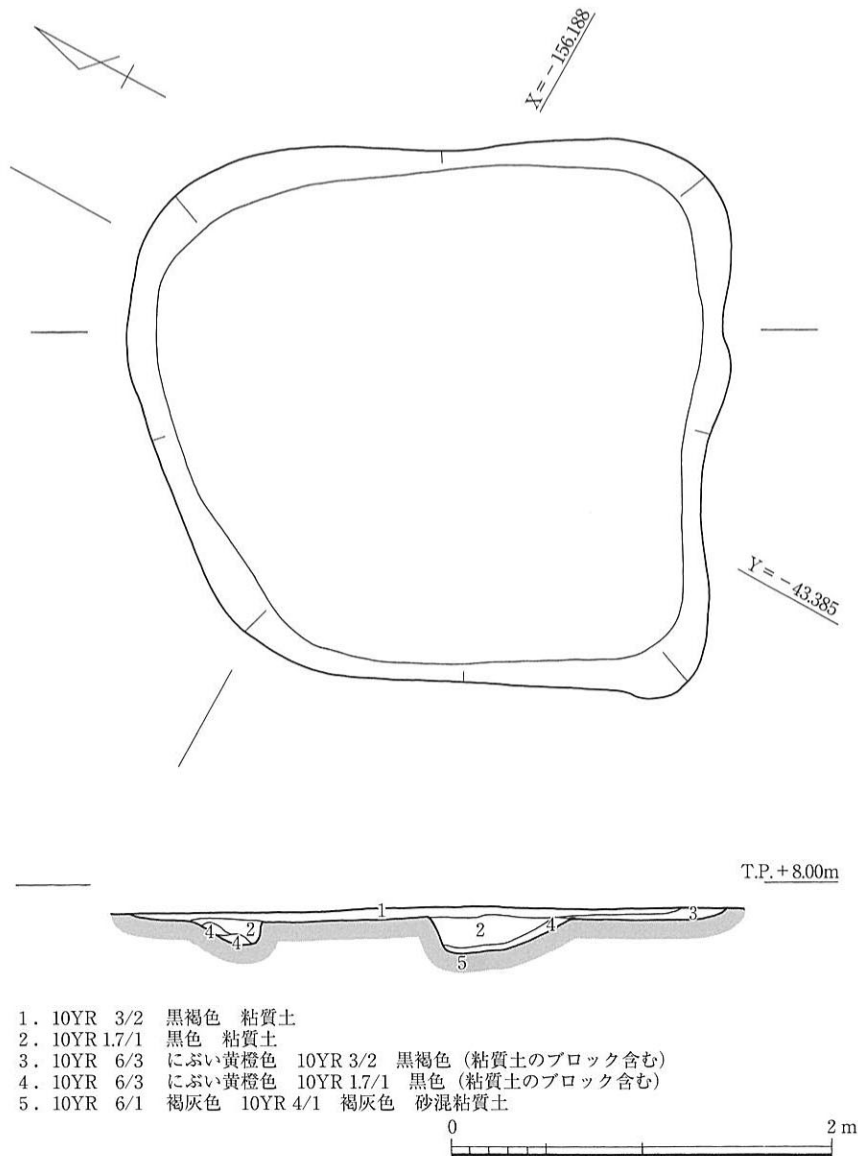
不定形土坑32から出土した遺物は、117～130である（第27図、図版14）。

117～119は須恵器坏蓋である。117は外面に小さな稜がみられるもの。内面には同心円紋スタンプ（B類）の痕が顕著にみられる。118、119は外面に稜の痕跡をわずかに示すもの。120～126は須恵器坏身で

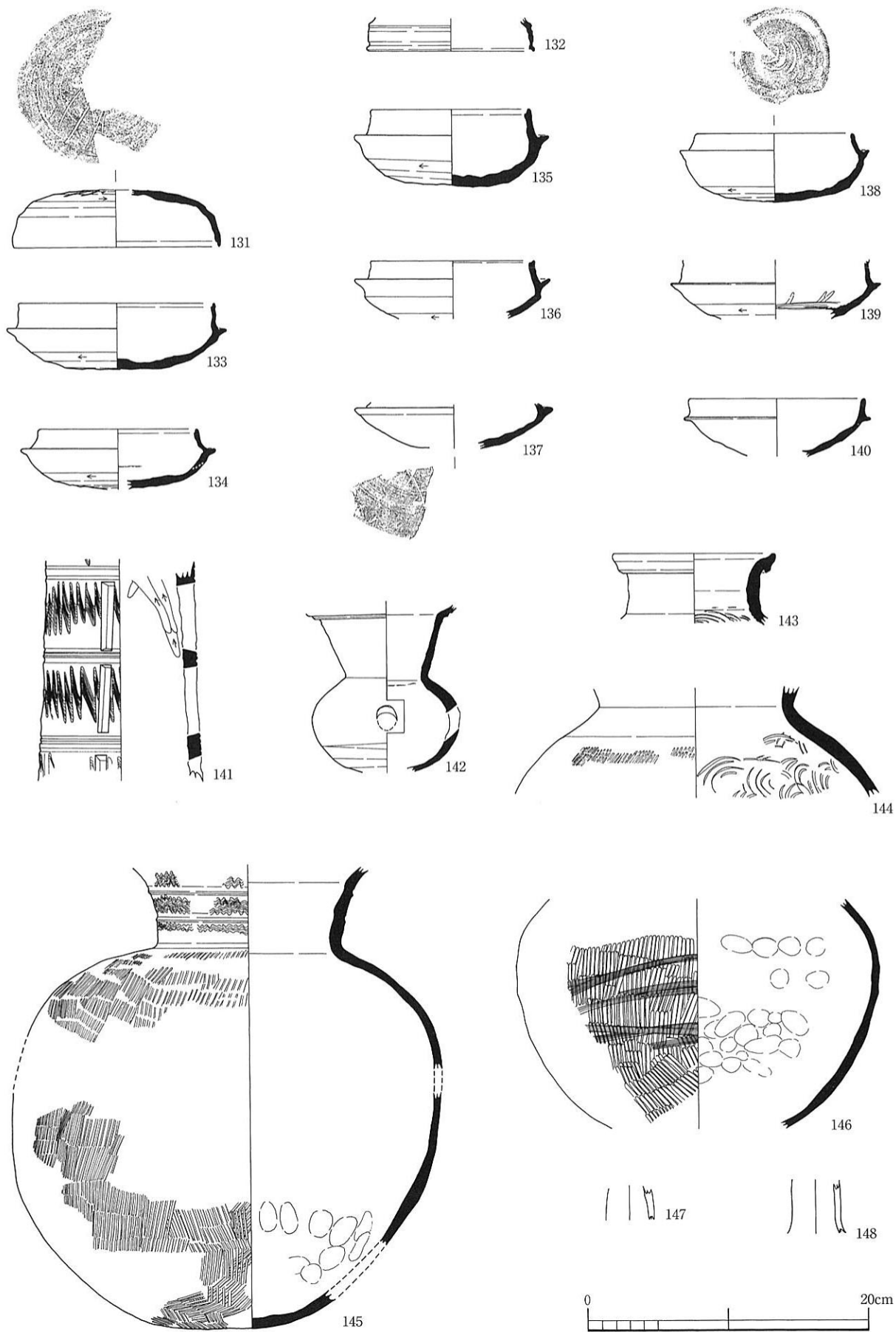
ある。120は外面にB類のヘラ記号を施す。121は外面にA類のヘラ記号を施す。坏身の底部は丸みを持つものからやや平らな様相を示す。口縁端部の形態として、丸くおさめるもの(120、124、125)、外反して丸くおさめるもの(121)、内面に段を有し凹面を成すもの(122、123)、内傾する面を成すもの(126)などがみられる。127は須恵器甕の口縁部である。128、129は高坏脚部である。128は外面に段を成し、底部端は下方に伸びた後、内傾する面を成すもの。129はやや内弯するハの字状を示すもので、底部端は肥厚し丸くおさめる。透かし穴は確認できなかった。130は土師器高坏の脚部である。坏部、脚底部が欠損する。脚はハの字状にひらき、底部でさらに広がりを増すもの。内部に絞り目がみられる。この他図示できなかったが、須恵器甕、甕、土師器甕、坏などがみられた。

不定形土坑39 (第28図)

不定形土坑32の南側に位置する遺構で、不定形土坑32と同様の堆積状況を示すものである。遺構検出時には北側を遺構41、南側を遺構39としていたが、精査を行った結果、連続する一つの遺構であると判断した。検出した形状はやや方形を呈するもので、2.9×3.2mを測る。T.P. +7.86mで検出した。深



第28図 第5面不定形土坑39平・断面図



第29图 第5面不定形土坑39·41出土遺物

さは6cmほどであるが、やや北端部と中央部に深い落ち込み部分がみられた。北端部の落ち込み部の検出幅は38cm、深さは18cmを測る。中央部の落ち込み部の検出幅は75cmで、深さは21cmを測る。埋土は浅い部分が黒褐色粘質土およびにぶい黄橙色粘質土である。深い落ち込み部では黒色粘質土を基本とするが、焼土や炭化物、植物遺体などを含んでいる。下層は、にぶい黄橙色粘質土のブロック土を含む黒褐色粘質土でやや砂礫が含まれる。遺構の下面はなだらかな凹面を成す。上層部の埋土中から土器片が多く出土した。

不定形土坑39から出土した遺物は、131～148、199、468などである（第29図、図版15・17）。

131、132は須恵器坏蓋である。131の外面にはD類のヘラ記号を施す。133～140は須恵器坏身である。138は内面見込み部に同心円紋スタンプ（A類）を施すもの。137は外面にヘラ記号（B類）を施すもの。139の内面には整形時に付いたヘラ状工具のものと思われる当て具痕がみられる。140はやや変形しているが断面が赤色系を示すものである。468（図版15）は須恵器坏の内面に同心円紋スタンプ（B類）を施すもの。また、外面にはヘラ記号（B類）を施すものである。141は須恵器筒形器台である。3段ないし4段の区画を成し、それぞれに透かし窓をもち、波状文を施すもの。142は須恵器甕である。143は須恵器壺の口縁部。144～146は須恵器甕である。145は口縁部に3段の文様帯をもつもので、細かい波状文を施す。

この他、製塩土器（147、148）、溶着痕のみられる須恵器坏、土師器塼の把手、甕、高坏などがみられた。また、焼土塊（図版17）や炭化物、炭なども出土している。

不定形土坑50（第30図）

調査区の南側で検出した大きな半円形を呈する遺構で、南半部分は調査区外に広がる。不定形土坑32と同様の堆積状況を示すものである。検出長は長径6.2m、短径3.0mが残存している。T. P. +7.85mで検出した。遺構は南側側溝にかかる部分で落ち込み部がみられる。深さは浅い部分で3cm、落ち込み部で11cm前後を測る。南側側溝の壁断面では、遺構の南半部分とみられる土層を確認した。深い落ち込み部に相当する層厚は約30cmを測る。埋土は浅い部分が黒褐色粘質土で褐灰色粘質土のブロック土および砂礫を含むもの。落ち込み部では黒褐色粘質土を基本とするが、焼土や炭化物、植物遺体などを含んでいる。下層は粒子のそろった黒褐色粘質土で鉄分沈着がみられる。遺構の下面はなだらかな凹面を成す。埋土内から土器片が出土した。

不定形土坑50から出土した遺物は、152などである（第32図、図版24）。

152は須恵器無蓋高坏の坏部である。口縁外面に稜を有するもので、口縁部は直線状に外傾して伸び、口縁端部を尖り気味におさめるもの。外面には波状文を施す。

この他図示できなかったが、須恵器坏、甕、土師器甕などがみられた。

不定形土坑64、65（第31図）

不定形土坑32の北側に位置する遺構である。西側は調査区外に広がる。不定形土坑32と同様の堆積状況を示す。遺構検出時に遺構64と遺構65として検出した。わずかながら切り合い関係がみられたためであるが、状況から判断して不定形土坑39同様、連続する一つの遺構であると思われる。ここでは一つの遺構として考察する。不定形土坑64、65は半円形の土坑から溝状の土坑が伸びるような形態を示すもので、長幅約2m、短幅約1m、検出長約3.5mを測る。T. P. +7.86mで検出した。遺構64に相当する部分は埋土が浅く、遺構65に相当する部分で深い落ち込みとなる。落ち込み部の幅は約80cmで深さは約30cmである。浅い部分の深さは約10cmである。埋土は浅い部分および落ち込み部の上層が黒色粘質土

である。落ち込み部は下層が黒色粘質土で中層が褐灰色粘質土である。焼土や炭化物、植物遺体などを含む。層境にはラミナ層や鉄分沈着がみられる。湿地状の堆積環境であるが、常に水が溜まった状況ではなく乾燥する時期があった様相を示す。この他、図示できなかつたが、須恵器坏、壺、土師器小片などがみられた。

不定形土坑32付近のピット状土坑（第31図）

不定形土坑32付近の遺構で堆積状況が同様または類似するものとして、ピット状土坑24、25、27、28、31、33、34、35、38、43、44がある。検出面はT.P.+7.84~7.90mである。地形的にはほぼ平坦であるが、やや南側から北側に向かって低くなる様相を示す。遺構の落ち込み部に相当するものはピット状土坑25、35、28で、深さは5~15cmを測る。その他のピット状土坑は遺構の浅い部分に相当し、深さは1~7cmを測る。落ち込み部に相当するものの埋土は、黒色粘質土および黒褐色粘質土を基本とし、炭化物、植物遺体などを含む。浅い部分に相当するものの埋土は、黒褐色粘質土および灰褐色粘質土である。

出土した遺物として、ピット状土坑35から須恵器坏、土師器甕などの小片、ピット状土坑37から土師器小片、ピット状土坑24から土師器甕片、ピット状土坑27から土師器細片、ピット状土坑43から土師器小片、ピット状土坑44から149の須恵器坏蓋、土師器小片などがみられた。149は須恵器坏蓋の内面に同心円紋スタンプ（B類）を施すものである（第32図、図版12）。

調査区西部の遺構（第30・31図）

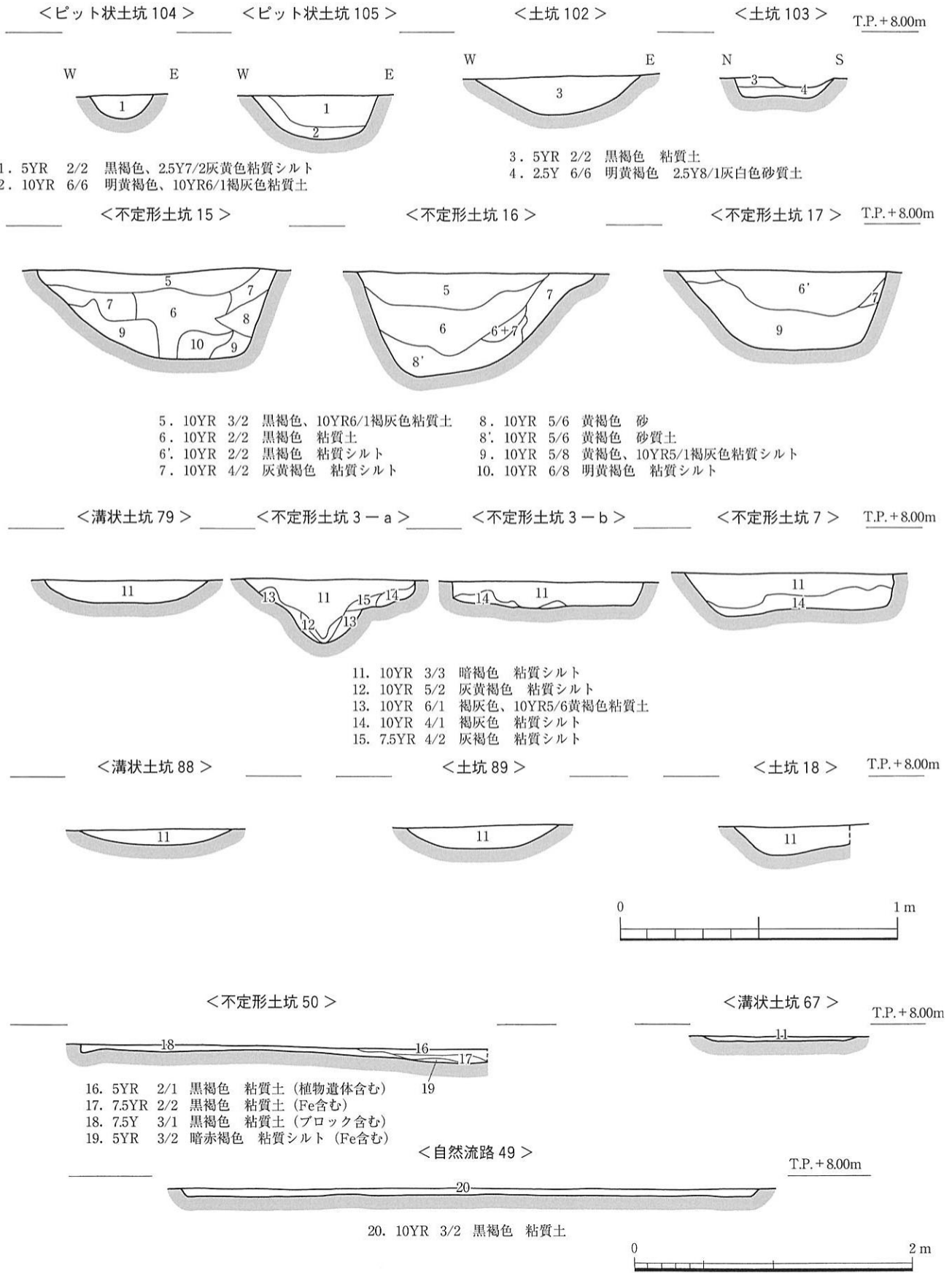
調査区北西部は攪乱に寸断され、遺構の繋がりや形状が不明瞭な区域である。この区域で検出した遺構として、不定形土坑52、54、56とピット状土坑53、55がある（第31図）。地形的には平坦であるが、南側の不定形土坑32の位置する区域よりやや高くなる様相を示す。T.P.+7.90mで検出した。また、攪乱に寸断された北側中央部の区域から不定形土坑57とピット状土坑を検出した（第31図）。T.P.+7.81mのやや低い土層である。さらに、調査区の西側中央部で、東西方向に伸びる畦畔20に平行して流れる自然流路49と溝状土坑67を検出した（第30図）。いずれの遺構も湿地状の止水堆積状況を示す。

不定形土坑56は溝状に伸びる遺構で、攪乱によって寸断される。検出長は2.8m、検出幅は1.1~1.5mを測る。深さは6cmと浅い。埋土は黒褐色粘質土でわずかに炭化物を含む。下層には灰黄褐色粘質シルト層が堆積している。鉄分沈着が顕著にみられる。遺構の下面はわずかに凹凸を成す。湿地状の堆積状況であるが、常に水が溜まった状況ではなく乾燥する時期があったことを示すものである。出土した遺物として、150（第32図）の須恵器坏身Aの底部、390（図版23）の須恵器甕の口縁部、須恵器坏身などがみられる。

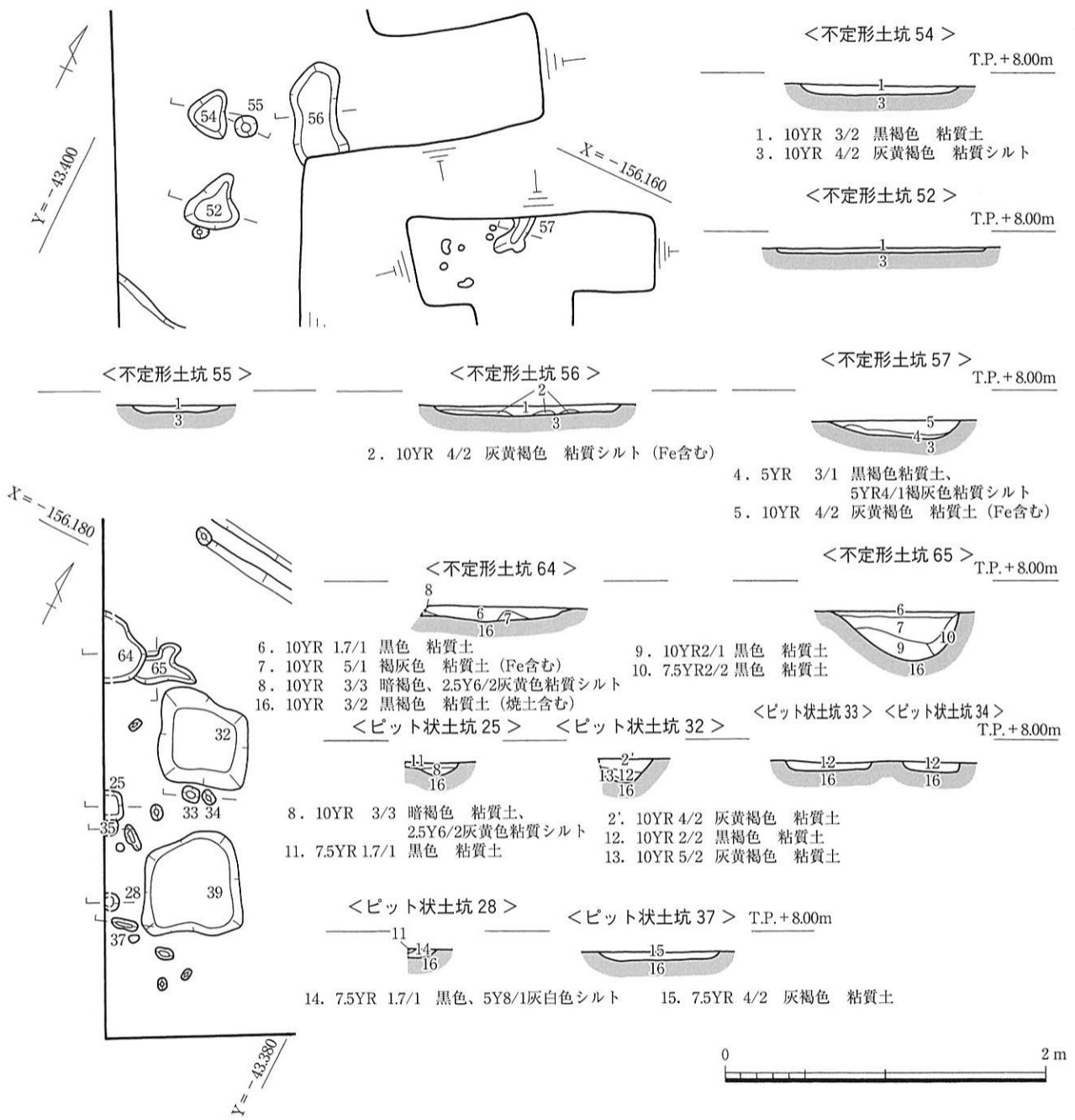
不定形土坑52は隅丸の三角形を呈し、一辺が1.7mを測る。遺構断面の長さは1.3m、深さは3cmときわめて浅いものである。埋土は黒褐色粘質土である。下層に鉄分沈着がみられる。ベース層は灰黄褐色粘質シルトで砂礫を含む。遺物は出土しなかつた。

不定形土坑54は丸みのある三角形を呈し、一辺が1.3mを測る。遺構断面の長さは1.0m、深さは7cmである。埋土は黒褐色粘質土で下層に鉄分沈着がみられる。ベース層は灰黄褐色粘質シルトで砂礫を含む。遺物は出土しなかつた。

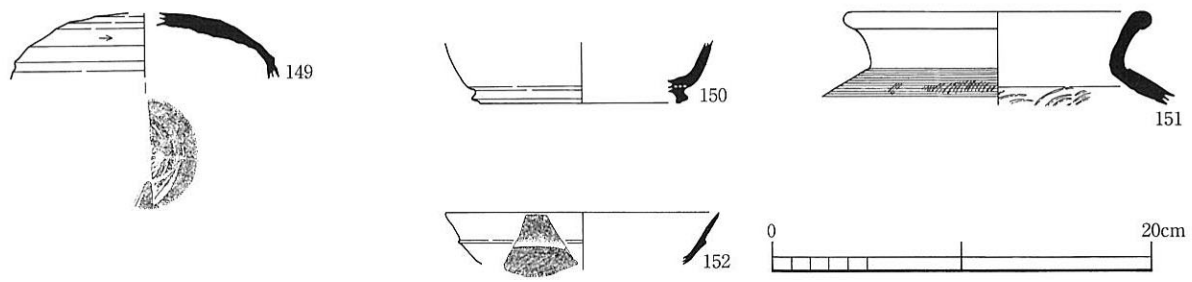
ピット状土坑53、55は不定形土坑52、54に近接するもので、ほぼ円形を呈する。直径約50cmを測る。深さは4~5cmである。埋土は黒褐色粘質土で下層に鉄分沈着がみられる。ベース層は灰黄褐色粘質シルトで砂礫を含む。遺物は出土しなかつた。



第30図 第5面遺構断面図



第31図 第5面遺構平・断面図



第32図 第5面不定形土坑50・56、ピット状土坑44・55出土遺物

不定形土坑57は地山層まで達する大きな攪乱に囲まれた区域に位置する。検出面はやや低い土層で検出しており、T. P. +7.81mである。北側は攪乱に寸断されるが、溝状に細長い形態を示す。検出幅は40～70cm、検出長は1.1mを測る。深さは約10cmである。埋土は黒褐色粘質土の下層に褐灰色粘質シルトが入る。ベース層は灰黄褐色粘質土で鉄分沈着がみられる。遺構の下面はやや凹凸面を成す。遺物は出土しなかった。

不定形土坑57の周辺に浅いピット状土坑が幾つかみられる。いずれも円形または楕円形を呈する。検出径は20～50cm、深さは2～8cmである。埋土は黒褐色粘質土の下層に褐灰色粘質シルトが入る。踏み込みによる凹凸痕であると思われる。いずれの遺構からも遺物は出土しなかった。

自然流路49は畦畔20に平行して東西方向に伸びるものである。攪乱に寸断されるため東側の延伸部分については確認できなかった。T. P. +7.90mで検出した。自然流路49の検出幅は4.25m、検出長は約20mが確認できた。深さは5cm前後を測る。埋土は黒褐色粘質土である。下層にはラミナと鉄分沈着がみられることから、常に水が溜まった湿地状況ではなく乾燥する時期があったことを示している。ある一時的な流れによって形成されたものと考えられる。出土した遺物として図示できなかったが、須恵器坏片、甕片、土師器細片などがみられた。

溝状土坑67は自然流路49に平行して東西方向に伸びるものであるが、東側は攪乱により寸断されている。T. P. +7.90mで検出した。溝状土坑の検出幅は0.6～1.2m、検出長は4.3mである。深さは5cm前後を測る。埋土は暗褐色粘質シルトである。一時的な流れがあったものと考えられる。遺物は出土しなかった。

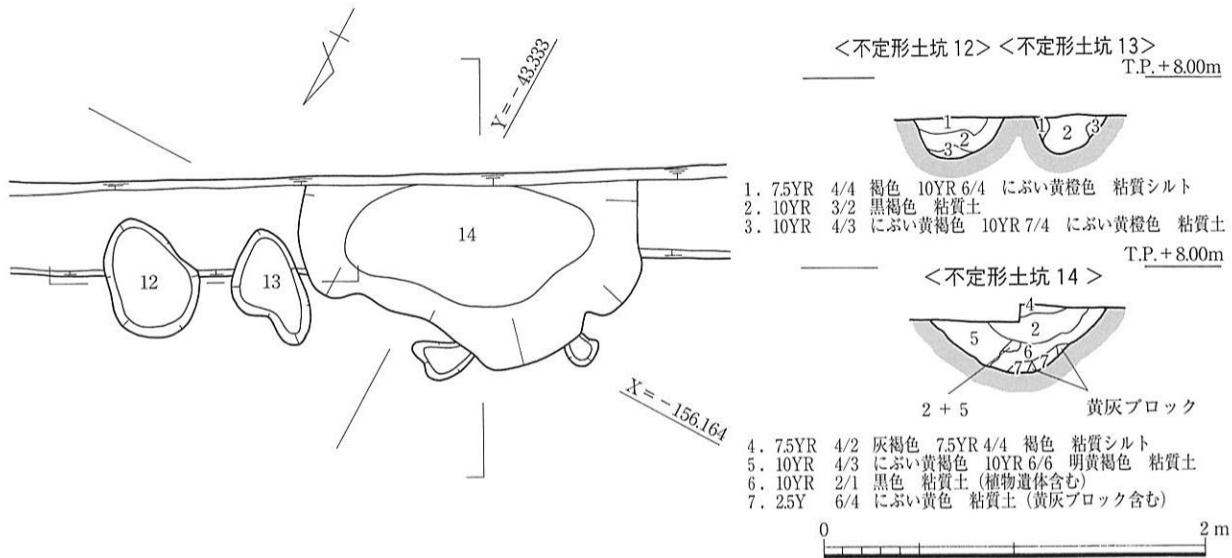
調査区東側の遺構 (第30・33図)

調査区の東側では全域に足跡が広がるなど湿地状況が顕著にみられた。地形は西側から東側へ徐々に低くなる。また南側に向けて低くなる様相を示す。明確な遺構はきわめて少なく、南北方向に伸びる畦畔の痕跡とその西側に不定形土坑15、16、17 (第30図)、南東側に不定形土坑12、13、14 (第33図)などがみられる。比較的深い止水堆積の状況を示す。遺構にともなう遺物は出土しなかった。

調査区南東側の足跡が著しく広がる区域で、畦畔の痕跡がみられた。T. P. +7.82mで検出した。検出面においてやや土質の異なる箇所をとらえ検証した結果、南北方向に伸びる畦畔の痕跡であることが判った。上面の畦畔の高まりは認められなかった。畦畔の検出幅は70～90cmを測る。検出長は約30mである。調査区の西側に位置する畦畔19にはほぼ平行する。畦畔19との間隔は約32mである。水田が機能していた時期には畦畔は造られていたが、洪水などで畦畔の上層が削平されるなどして高まり部分が消失し、その後、湿地化にともない埋没したものと考えられる。この畦畔の痕跡上にも足跡がみられる。畦畔が機能していた時期以降に湿地化したという时期的な状況が確認できる。畦畔の痕跡にともなう遺物は出土しなかった。

中央部で不定形土坑15、16、17 (第30図) を検出した。検出面はT. P. +7.83mである。

不定形土坑15はやや歪んだ円形を呈するもので、検出径は85cm、深さは35～40cmを測る。土坑の断面はすり鉢状を成す。埋土は上層が黒褐色粘質土に褐灰色粘質土をわずかに含むもの。埋土の中央部は黒褐色粘質土である。遺構の端辺には灰黄褐色粘質シルト、黄褐色および褐灰色粘質シルトの互層がみられ、遺構の下層には黄褐色砂質土や粒子の揃った明黄褐色粘質シルトが堆積している。一時的な流水により下層に細砂や粘質シルトが堆積するが、削平を受けて埋土が削られた後、その中に二次的な止水堆積によって徐々に埋まったものと思われる。一度ではなく数度にわたる堆積の状況がみうけられる。



第33図 第5面不定形土坑12・13・14平・断面図

遺構にともなう遺物の出土はなかった。

不定形土坑16はやや偏った膨らみをもつ楕円形を呈する。検出幅は0.85m、検出長は約1.9mである。深さは35～40cmを測る。土坑の断面はすり鉢状を成す。遺構の下層には黄褐色砂質土やシルトが堆積し、その上層は灰黄褐色粘質シルトである。これらの堆積層を切り込むように黒褐色粘質土および褐灰色粘質土が堆積している。止水堆積により徐々に埋まったものと考えられる。遺構にともなう遺物は出土しなかった。

不定形土坑17は扁平な楕円形を呈する。検出幅は75cm、検出長は約2.5mである。深さは26～30cmを測る。土坑の断面はすり鉢状を成す。埋土は一次的に埋没した土層として最下層の黄褐色砂質土、灰黄褐色粘質シルトが堆積している。埋土の上層が下層をやや切り込むように二次的な堆積状況を示す。二次的な堆積層として、黒褐色および褐灰色粘質土と黒褐色粘質土がみられ、止水堆積の様相を示す。遺構にともなう遺物は出土しなかった。

調査区の南東部で不定形土坑12、13、14を検出した（第33図）。地形的には南側に向かって低くなる。検出面はT. P. +7.78m前後である。

不定形土坑14は遺構の南側が側溝により切断されるため、本来の形態は不明であるが、やや凹凸のある楕円形を呈する。検出幅は0.9m、検出長は1.6mを測る。深さは30～36cmである。土坑の断面形は深みのあるすり鉢状を成す。埋土は最下層に黄灰色およびにぶい黄色粘質土のブロック土を含む黒色粘質土が堆積している。炭化物、植物遺体が顕著にみられる。この層を埋めるように、にぶい黄褐色粘質土および明黄褐色粘質土が遺構の肩口から流れ込むような堆積状況を示す。また、下層の堆積層をやや切り込むように、上層の薄い灰褐色および褐色粘質シルトと黒褐色粘質土が堆積している。止水堆積により徐々に埋まったものと思われる。遺構にともなう遺物は出土しなかった。

不定形土坑12、13は不定形土坑14に近接するもので、いずれも扁平な楕円形を呈する。不定形土坑12の長径は65cm、短径は48cmである。深さは20cm前後を測る。不定形土坑13の長径は65cm、短径は38cmである。深さは19cmを測る。埋土は炭化物や植物遺体を含む黒褐色粘質土を基本とし、下層および層中ににぶい黄褐色粘質土のブロック土を含むにぶい黄橙色粘質土が堆積する。上層にはにぶい黄橙色粘質シルトが堆積している。遺構にともなう遺物は出土しなかった。

調査区中央部の遺構 (第30図)

調査区の中央部は攪乱により著しく寸断されるため、周辺の遺構との繋がりや関係が捉えにくい区域である。地形的には西側から東側にかけて徐々に低くなるが、丁度低くなる肩口にあたる。南北方向については、北側から南側にやや低くなる様相を示す。明確な遺構はきわめて少なく、調査区中央部の北側部分で溝状土坑79、不定形土坑3、7、75、69、調査区中央部から南側にかけての区域では攪乱の合間をぬって溝状土坑88、土坑89・18などがみられた。この他、散逸的にピット状土坑1、68、81、92、93などがみられた。検出面はT. P. +7.80~7.84mである。

溝状土坑79は調査区南側に伸びる畦畔19の延伸上に位置する。溝状土坑としているが、畦畔の痕跡と考えられるものである。検出幅は60cm、検出長は2.2mを測る。下層の堆積層は暗褐色粘質シルトでラミナが顕著にみられる。遺構にともなう遺物は出土しなかった。

溝状土坑88も溝状土坑79と同様に、畦畔の痕跡と考えられるものである。遺構は東西方向に伸びるもので、調査区の南側で検出された畦畔20に平行方向を示す。また、畦畔19が北側へ伸びる延伸部の痕跡に対して垂直方向を示している。調査区東側で検出された畦畔の痕跡と同様に、洪水などで畦畔が削平されるなどして高まり部分が消失し、その後湿地化にともない埋没したものと考えられる。遺物は出土しなかった。

不定形土坑3は扁平な形態を呈する遺構である。遺構の長幅は3.8m、短幅は0.7m、断面の検出長は0.85mを測る。遺構の北側に深い落ち込み部がみられる。落ち込み部の深さは約25cmである。浅い部分の深さは約10cmである。埋土は暗褐色粘質シルトが主体を成すが、遺構の下層に褐灰色粘質土および黄褐色粘質土のブロック土を含む灰黄褐色粘質シルトや灰褐色粘質シルトが互層を成し、ラミナが顕著にみられる不整合な土層である。止水堆積の様相を示す。図示できなかったが、須恵器坏身、土師器片などがみられる。

近接して検出した不定形土坑7、75、69や土坑89、18、調査区内で散逸的に検出されたピット状土坑1、68、81、92、93なども堆積状況が類似するものである。いずれも止水堆積の様相を示す。調査区の南西側で検出した不定形土坑32、39などと同様に、黒色粘質土層は湿地環境下で下部から上部にかけて連続して自然に堆積したものと考えることができる。遺物は出土しなかった。堆積の時期は古墳時代前期以降のものと推測される。

拡張区の遺構 (第30図)

拡張区で検出した遺構として、ピット状土坑104、105と土坑102、103がみられた。地形的に西側から東側にかけて徐々に低くなる様相を示している。明確な遺構はきわめて少ない。検出面はT. P. +7.70~7.83mである。湿地状の止水堆積の様相を示す。遺構にともなう遺物は出土しなかった。

ピット状土坑104、105はT. P. +7.70mで検出した遺構である。遺構の深さは10cm前後を測る。埋土は黒褐色粘質シルトに地山のブロック土である灰黄色粘質シルトを含むもの。下層には明黄褐色粘質土の地山層上に薄いラミナがみられる。遺物は出土しなかった。

土坑102、103はT. P. +7.83mで検出した遺構である。土坑102の遺構の深さは14cmを測る。土坑103は南側が(その4)に広がるものであるが、検出時の深さは7cmを測る。埋土は黒褐色粘質土が主体を成す。下層には明黄褐色粘質土の地山層上に薄いラミナがみられる。遺物は出土しなかった。

第5面では調査区西部の南側で遺構が顕著にみられた。本来は水田耕作土層であったが、後に湿地化した状況がうかがえる。検出した遺構の多くは、湿地環境下で下部から上部にかけて連続して自然に堆

積したものであると考えられる。このような状況を改善するため、上層に整地層として幾重にも土砂が運ばれて来たものと思われる。整地土層中には多量の遺物が含まれる層（5-3層）がみられた。特に調査区西部の南側の区域（B14-i9地区）を中心に分布している。これらの遺物により、第5面で検出された水田耕作遺構の時期として、6世紀後半頃より以前であるということが確認され、さらに土地利用の変遷をうかがうことができた。

第5層および第6層出土の遺物（第34図、図版16）

第5面上層に堆積する第5層は古墳時代後半頃から平安時代頃の整地層で、細分すると4つに分けることができる。中でも5-3層は須恵器、土師器などの細片を多く含む土層である。特に、調査区南西部のB14-i9地区付近に厚く堆積する土層である。別項で-i9地区の出土遺物として扱うが、おおむね5-3層出土の遺物であると言える。この他、第5層（5-1～3層）包含層、第5層下層（5-4層）包含層、第6層包含層から多くの遺物が出土した。第5層下層、第6層、地山直上層から縄文時代の石製品、石片などがいくつか出土している。出土した遺物の多くは細片で復元できるものはわずかであった。実測することができたものの内、一部を示す。

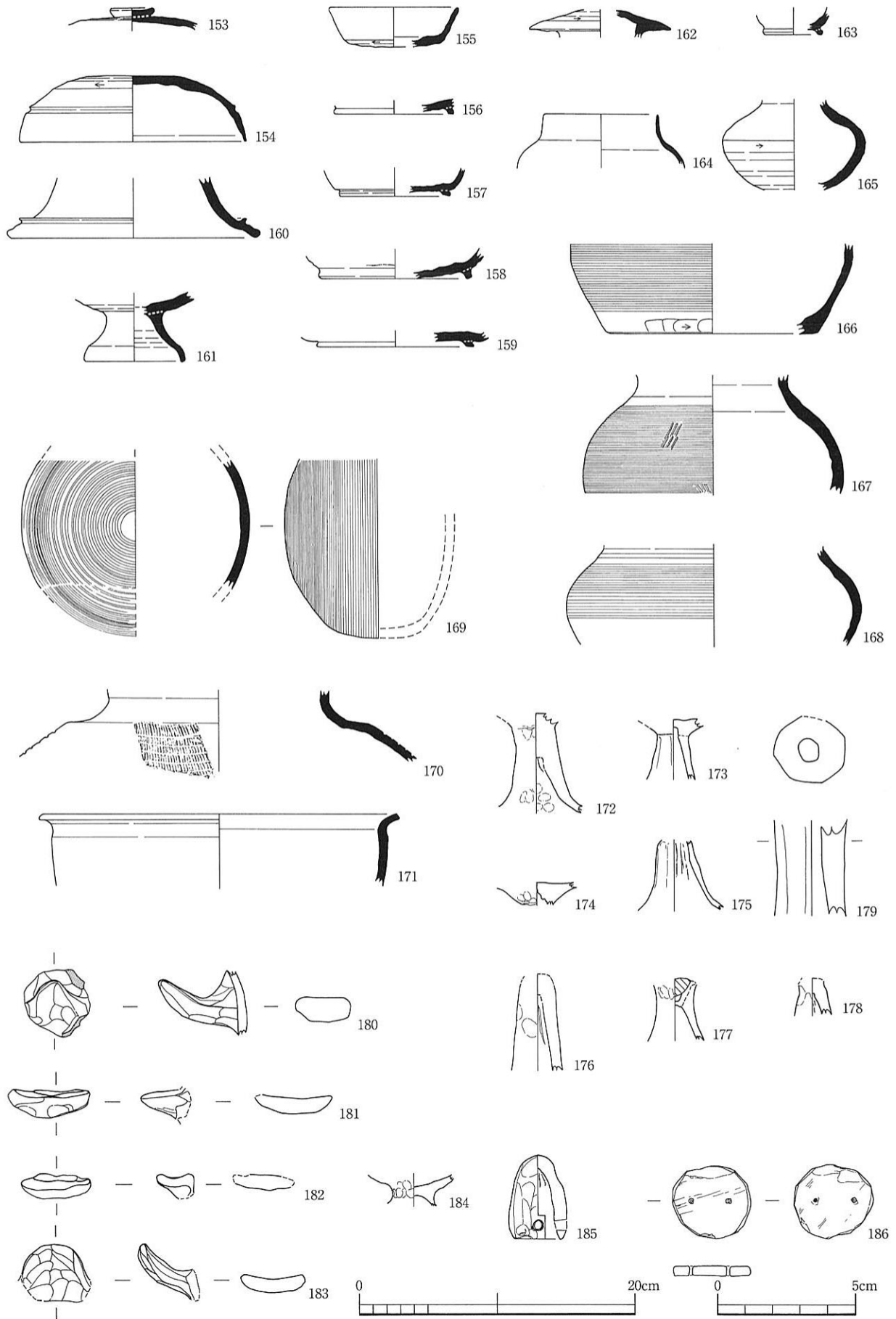
第5層（5-1～3層）包含層出土の遺物は、須恵器坏身（155～159）、坏蓋、高坏、小型長頸壺（163）、鉢（171）、甕、土師器高坏（179）などである。その他に、スサ入りの焼土塊（図版17-199）、骨片（図版17-195～197）、植物の種（図版17-198）、炭などがみられた。

155は須恵器坏Aである。底部がほぼ平らで、口縁部がやや外反気味に直立するもの。156～159は須恵器坏身Aの高台部である。IV-1型式に相当する。須恵器坏蓋として擬宝珠様つまみをもつもの、天井部がほぼ水平を成すものなどがみられた。163は須恵器小型長頸壺で高台を付すもの。179は土師器の高坏脚部である。外形は八角形を呈する。土器の他に、第5面精査時および包含層中から堅く焼き締まった炉壁片かと思われる焼土塊（199）がいくつかみられた。焼土塊の中にはスサ入りのものもみられた。

（その2）においても焼土塊が多く出土している。また、（その4）では焼土坑33、50（第79・80図）などの遺構を検出している。焼成土坑などが近接していたのではないかと推測される。195～197は馬の歯と思われる骨片である。198は植物の種でモモの種と思われる。

第5層下層（5-4層）包含層出土の遺物は、須恵器坏身、坏蓋つまみ（153）、坏蓋（154）、高坏（160、161）、壺蓋（162）、壺（164）、甕（165）、鉢（166）、甕（167、168）提瓶（169）、土師器高坏（177、178）、土師器の把手（180～183）、製塩土器（184）、竈片（187）、蛸壺（185）、軟質土器（170）、ふいご羽口、石製双孔円盤（186）、軽石（192～194）、石製品などである。

153は須恵器坏蓋のつまみである。154は外面にきわめて形骸化した稜の付く須恵器坏蓋である。II-2型式に相当する。須恵器坏身として、立ち上がり部が比較的短く内傾し、口縁端部を丸くおさめるものがみられる。160、161は須恵器高坏の脚底部である。160は一条の凸線が底部端の近くに巡るもので、I-2段階に相当するもの。162は頂部やかえり部端部を欠くが壺蓋であると思われる。165は口縁部を欠くが須恵器甕の体部片である。体部は球形を呈する。外面に文様を施さないもの。166は平底を呈すもので、須恵器鉢の底部と思われる。167、168はいずれも口縁部を欠く須恵器甕の体部である。外面は平行叩きの後、回転カキ目調整を施す。169は口縁部、把手などを欠くが須恵器提瓶である。扁平な円形を呈する水筒型のものである。外面に回転カキ目調整を施す。I-2～II-4型式に相当する。177、178は土師器高坏の脚部である。坏部や脚底部を欠損するため詳細は不明である。177は坏部と脚部の接



第34図 第5・6層出土遺物

である。落ち込み部は下層が黒色粘質土で中層が褐灰色粘質土である。焼土や炭化物、植物遺体などを含む。層境にはラミナ層や鉄分沈着がみられる。湿地状の堆積環境であるが、常に水が溜まった状況ではなく乾燥する時期があった様相を示す。この他、図示できなかつたが、須恵器坏、壺、土師器小片などがみられた。

不定形土坑32付近のピット状土坑（第31図）

不定形土坑32付近の遺構で堆積状況が同様または類似するものとして、ピット状土坑24、25、27、28、31、33、34、35、38、43、44がある。検出面はT. P. +7.84~7.90mである。地形的にはほぼ平坦であるが、やや南側から北側に向かって低くなる様相を示す。遺構の落ち込み部に相当するものはピット状土坑25、35、28で、深さは5~15cmを測る。その他のピット状土坑は遺構の浅い部分に相当し、深さは1~7cmを測る。落ち込み部に相当するものの埋土は、黒色粘質土および黒褐色粘質土を基本とし、炭化物、植物遺体などを含む。浅い部分に相当するものの埋土は、黒褐色粘質土および灰褐色粘質土である。

出土した遺物として、ピット状土坑35から須恵器坏、土師器甕などの小片、ピット状土坑37から土師器小片、ピット状土坑24から土師器甕片、ピット状土坑27から土師器細片、ピット状土坑43から土師器小片、ピット状土坑44から149の須恵器坏蓋、土師器小片などがみられた。149は須恵器坏蓋の内面に同心円紋スタンプ（B類）を施すものである（第32図、図版12）。

調査区西部の遺構（第30・31図）

調査区北西部は攪乱に寸断され、遺構の繋がりや形状が不明瞭な区域である。この区域で検出した遺構として、不定形土坑52、54、56とピット状土坑53、55がある（第31図）。地形的には平坦であるが、南側の不定形土坑32の位置する区域よりやや高くなる様相を示す。T. P. +7.90mで検出した。また、攪乱に寸断された北側中央部の区域から不定形土坑57とピット状土坑を検出した（第31図）。T. P. +7.81mのやや低い土層である。さらに、調査区の西側中央部で、東西方向に伸びる畦畔20に平行して流れる自然流路49と溝状土坑67を検出した（第30図）。いずれの遺構も湿地状の止水堆積状況を示す。

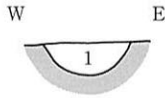
不定形土坑56は溝状に伸びる遺構で、攪乱によって寸断される。検出長は2.8m、検出幅は1.1~1.5mを測る。深さは6cmと浅い。埋土は黒褐色粘質土でわずかに炭化物を含む。下層には灰黄褐色粘質シルト層が堆積している。鉄分沈着が顕著にみられる。遺構の下面はわずかに凹凸を成す。湿地状の堆積状況であるが、常に水が溜まった状況ではなく乾燥する時期があったことを示すものである。出土した遺物として、150（第32図）の須恵器坏身Aの底部、390（図版23）の須恵器甕の口縁部、須恵器坏身などがみられる。

不定形土坑52は隅丸の三角形を呈し、一辺が1.7mを測る。遺構断面の長さは1.3m、深さは3cmときわめて浅いものである。埋土は黒褐色粘質土である。下層に鉄分沈着がみられる。ベース層は灰黄褐色粘質シルトで砂礫を含む。遺物は出土しなかつた。

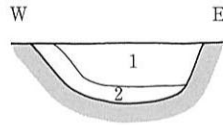
不定形土坑54は丸みのある三角形を呈し、一辺が1.3mを測る。遺構断面の長さは1.0m、深さは7cmである。埋土は黒褐色粘質土で下層に鉄分沈着がみられる。ベース層は灰黄褐色粘質シルトで砂礫を含む。遺物は出土しなかつた。

ピット状土坑53、55は不定形土坑52、54に近接するもので、ほぼ円形を呈する。直径約50cmを測る。深さは4~5cmである。埋土は黒褐色粘質土で下層に鉄分沈着がみられる。ベース層は灰黄褐色粘質シルトで砂礫を含む。遺物は出土しなかつた。

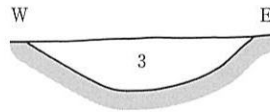
<ピット状土坑 104 >



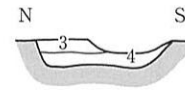
<ピット状土坑 105 >



<土坑 102 >



<土坑 103 >

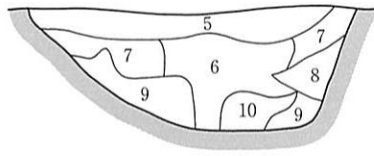


T.P.+8.00m

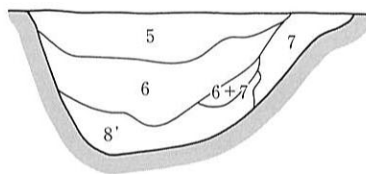
- 1. 5YR 2/2 黒褐色、2.5Y7/2灰黄色粘質シルト
- 2. 10YR 6/6 明黄褐色、10YR6/1褐灰色粘質土

- 3. 5YR 2/2 黒褐色 粘質土
- 4. 2.5Y 6/6 明黄褐色 2.5Y8/1灰白色砂質土

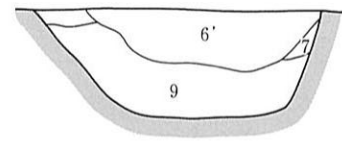
<不定形土坑 15 >



<不定形土坑 16 >



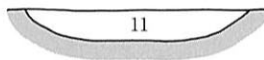
<不定形土坑 17 >



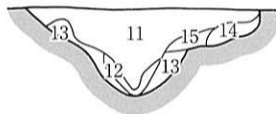
T.P.+8.00m

- 5. 10YR 3/2 黒褐色、10YR6/1褐灰色粘質土
- 6. 10YR 2/2 黒褐色 粘質土
- 6'. 10YR 2/2 黒褐色 粘質シルト
- 7. 10YR 4/2 灰黄褐色 粘質シルト
- 8. 10YR 5/6 黄褐色 砂
- 8'. 10YR 5/6 黄褐色 砂質土
- 9. 10YR 5/8 黄褐色、10YR5/1褐灰色粘質シルト
- 10. 10YR 6/8 明黄褐色 粘質シルト

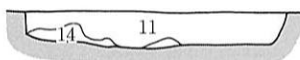
<溝状土坑 79 >



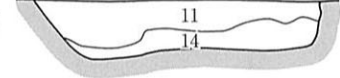
<不定形土坑 3-a >



<不定形土坑 3-b >



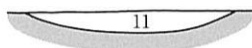
<不定形土坑 7 >



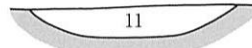
T.P.+8.00m

- 11. 10YR 3/3 暗褐色 粘質シルト
- 12. 10YR 5/2 灰黄褐色 粘質シルト
- 13. 10YR 6/1 褐灰色、10YR5/6黄褐色粘質土
- 14. 10YR 4/1 褐灰色 粘質シルト
- 15. 7.5YR 4/2 灰褐色 粘質シルト

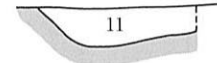
<溝状土坑 88 >



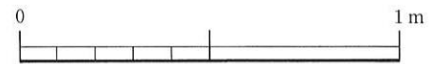
<土坑 89 >



<土坑 18 >



T.P.+8.00m

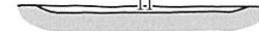


<不定形土坑 50 >



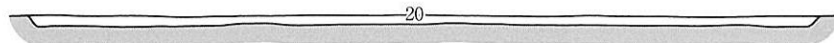
- 16. 5YR 2/1 黒褐色 粘質土 (植物遺体含む)
- 17. 7.5YR 2/2 黒褐色 粘質土 (Fe含む)
- 18. 7.5Y 3/1 黒褐色 粘質土 (ブロック含む)
- 19. 5YR 3/2 暗赤褐色 粘質シルト (Fe含む)

<溝状土坑 67 >



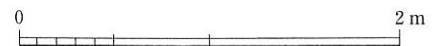
T.P.+8.00m

<自然流路 49 >

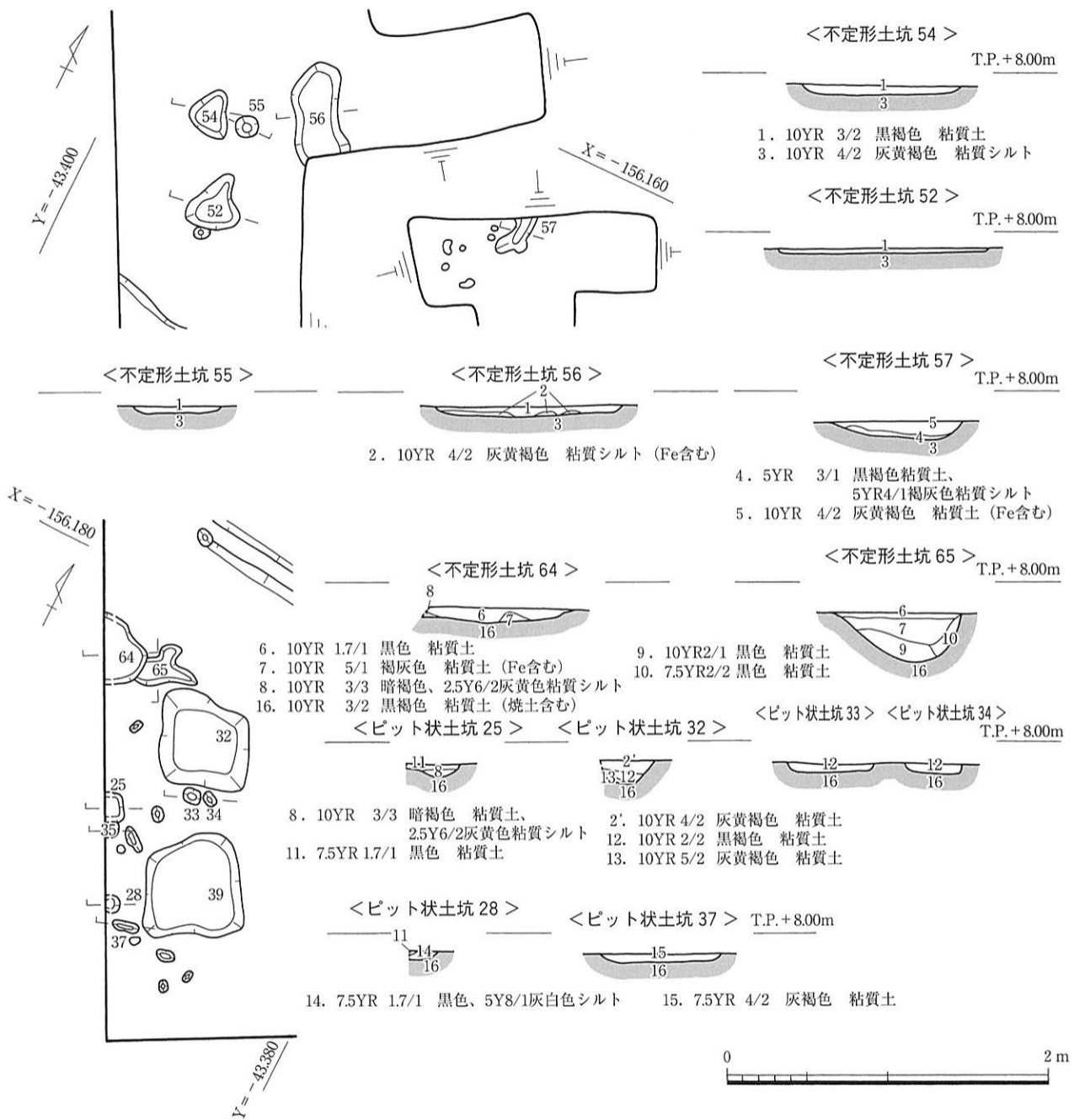


- 20. 10YR 3/2 黒褐色 粘質土

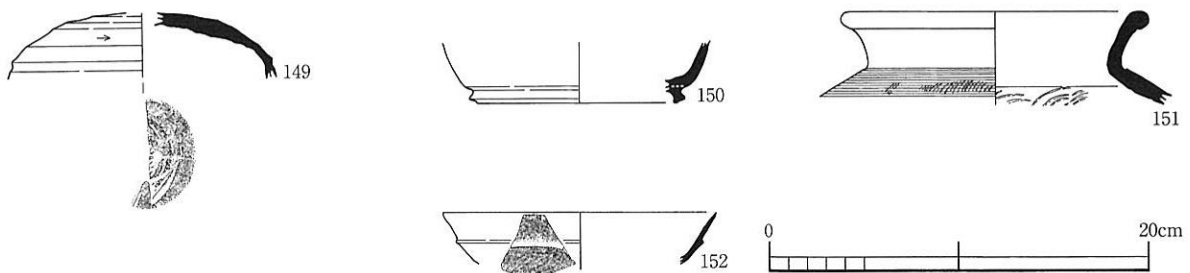
T.P.+8.00m



第30図 第5面遺構断面図



第31図 第5面遺構平・断面図



第32図 第5面不定形土坑50・56、ピット状土坑44・55出土遺物

不定形土坑57は地山層まで達する大きな攪乱に囲まれた区域に位置する。検出面はやや低い土層で検出しており、T. P. +7.81mである。北側は攪乱に寸断されるが、溝状に細長い形態を示す。検出幅は40～70cm、検出長は1.1mを測る。深さは約10cmである。埋土は黒褐色粘質土の下層に褐灰色粘質シルトが入る。ベース層は灰黄褐色粘質土で鉄分沈着がみられる。遺構の下面はやや凹凸面を成す。遺物は出土しなかった。

不定形土坑57の周辺に浅いピット状土坑が幾つかみられる。いずれも円形または楕円形を呈する。検出径は20～50cm、深さは2～8cmである。埋土は黒褐色粘質土の下層に褐灰色粘質シルトが入る。踏み込みによる凹凸痕であると思われる。いずれの遺構からも遺物は出土しなかった。

自然流路49は畦畔20に平行して東西方向に伸びるものである。攪乱に寸断されるため東側の延伸部分については確認できなかった。T. P. +7.90mで検出した。自然流路49の検出幅は4.25m、検出長は約20mが確認できた。深さは5cm前後を測る。埋土は黒褐色粘質土である。下層にはラミナと鉄分沈着がみられることから、常に水が溜まった湿地状況ではなく乾燥する時期があったことを示している。ある一時的な流れによって形成されたものと考えられる。出土した遺物として図示できなかったが、須恵器坏片、甕片、土師器細片などがみられた。

溝状土坑67は自然流路49に平行して東西方向に伸びるものであるが、東側は攪乱により寸断されている。T. P. +7.90mで検出した。溝状土坑の検出幅は0.6～1.2m、検出長は4.3mである。深さは5cm前後を測る。埋土は暗褐色粘質シルトである。一時的な流れがあったものと考えられる。遺物は出土しなかった。

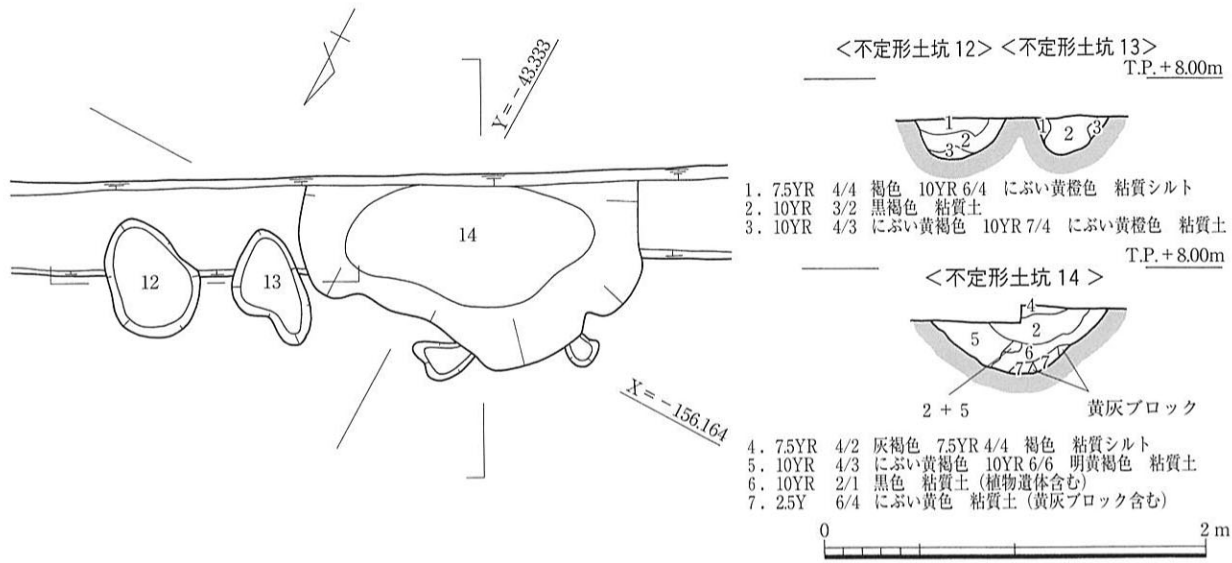
調査区東側の遺構 (第30・33図)

調査区の東側では全域に足跡が広がるなど湿地状況が顕著にみられた。地形は西側から東側へ徐々に低くなる。また南側に向けて低くなる様相を示す。明確な遺構はきわめて少なく、南北方向に伸びる畦畔の痕跡とその西側に不定形土坑15、16、17 (第30図)、南東側に不定形土坑12、13、14 (第33図)などがみられる。比較的深い止水堆積の状況を示す。遺構にともなう遺物は出土しなかった。

調査区南東側の足跡が著しく広がる区域で、畦畔の痕跡がみられた。T. P. +7.82mで検出した。検出面においてやや土質の異なる箇所をとらえ検証した結果、南北方向に伸びる畦畔の痕跡であることが判った。上面の畦畔の高まりは認められなかった。畦畔の検出幅は70～90cmを測る。検出長は約30mである。調査区の西側に位置する畦畔19にはほぼ平行する。畦畔19との間隔は約32mである。水田が機能していた時期には畦畔は造られていたが、洪水などで畦畔の上層が削平されるなどして高まり部分が消失し、その後、湿地化にともない埋没したものと考えられる。この畦畔の痕跡上にも足跡がみられる。畦畔が機能していた時期以降に湿地化したという时期的な状況が確認できる。畦畔の痕跡にともなう遺物は出土しなかった。

中央部で不定形土坑15、16、17 (第30図) を検出した。検出面はT. P. +7.83mである。

不定形土坑15はやや歪んだ円形を呈するもので、検出径は85cm、深さは35～40cmを測る。土坑の断面はすり鉢状を成す。埋土は上層が黒褐色粘質土に褐灰色粘質土をわずかに含むもの。埋土の中央部は黒褐色粘質土である。遺構の端辺には灰黄褐色粘質シルト、黄褐色および褐灰色粘質シルトの互層がみられ、遺構の下層には黄褐色砂質土や粒子の揃った明黄褐色粘質シルトが堆積している。一時的な流水により下層に細砂や粘質シルトが堆積するが、削平を受けて埋土が削られた後、その中に二次的な止水堆積によって徐々に埋まったものと思われる。一度ではなく数度にわたる堆積の状況がみうけられる。



第33図 第5面不定形土坑12・13・14平・断面図

遺構にともなう遺物の出土はなかった。

不定形土坑16はやや偏った膨らみをもつ楕円形を呈する。検出幅は0.85m、検出長は約1.9mである。深さは35～40cmを測る。土坑の断面はすり鉢状を成す。遺構の下層には黄褐色砂質土やシルトが堆積し、その上層は灰黄褐色粘質シルトである。これらの堆積層を切り込むように黒褐色粘質土および褐灰色粘質土が堆積している。止水堆積により徐々に埋まったものと考えられる。遺構にともなう遺物は出土しなかった。

不定形土坑17は扁平な楕円形を呈する。検出幅は75cm、検出長は約2.5mである。深さは26～30cmを測る。土坑の断面はすり鉢状を成す。埋土は一次的に埋没した土層として最下層の黄褐色砂質土、灰黄褐色粘質シルトが堆積している。埋土の上層が下層をやや切り込むように二次的な堆積状況を示す。二次的な堆積層として、黒褐色および褐灰色粘質土と黒褐色粘質土がみられ、止水堆積の様相を示す。遺構にともなう遺物は出土しなかった。

調査区の南東部で不定形土坑12、13、14を検出した（第33図）。地形的には南側に向かって低くなる。検出面はT. P. + 7.78m前後である。

不定形土坑14は遺構の南側が側溝により切断されるため、本来の形態は不明であるが、やや凹凸のある楕円形を呈する。検出幅は0.9m、検出長は1.6mを測る。深さは30～36cmである。土坑の断面形は深みのあるすり鉢状を成す。埋土は最下層に黄灰色およびにぶい黄色粘質土のブロック土を含む黒色粘質土が堆積している。炭化物、植物遺体が顕著にみられる。この層を埋めるように、にぶい黄褐色粘質土および明黄褐色粘質土が遺構の肩口から流れ込むような堆積状況を示す。また、下層の堆積層をやや切り込むように、上層の薄い灰褐色および褐色粘質シルトと黒褐色粘質土が堆積している。止水堆積により徐々に埋まったものと思われる。遺構にともなう遺物は出土しなかった。

不定形土坑12、13は不定形土坑14に近接するもので、いずれも扁平な楕円形を呈する。不定形土坑12の長径は65cm、短径は48cmである。深さは20cm前後を測る。不定形土坑13の長径は65cm、短径は38cmである。深さは19cmを測る。埋土は炭化物や植物遺体を含む黒褐色粘質土を基本とし、下層および層中ににぶい黄褐色粘質土のブロック土を含むにぶい黄橙色粘質土が堆積する。上層にはにぶい黄橙色粘質シルトが堆積している。遺構にともなう遺物は出土しなかった。

調査区中央部の遺構 (第30図)

調査区の中央部は攪乱により著しく寸断されるため、周辺の遺構との繋がりや関係が捉えにくい区域である。地形的には西側から東側にかけて徐々に低くなるが、丁度低くなる肩口にあたる。南北方向については、北側から南側にやや低くなる様相を示す。明確な遺構はきわめて少なく、調査区中央部の北側部分で溝状土坑79、不定形土坑3、7、75、69、調査区中央部から南側にかけての区域では攪乱の合間をぬって溝状土坑88、土坑89・18などがみられた。この他、散逸的にピット状土坑1、68、81、92、93などがみられた。検出面はT. P. +7.80~7.84mである。

溝状土坑79は調査区南側に伸びる畦畔19の延伸上に位置する。溝状土坑としているが、畦畔の痕跡と考えられるものである。検出幅は60cm、検出長は2.2mを測る。下層の堆積層は暗褐色粘質シルトでラミナが顕著にみられる。遺構にともなう遺物は出土しなかった。

溝状土坑88も溝状土坑79と同様に、畦畔の痕跡と考えられるものである。遺構は東西方向に伸びるもので、調査区の南側で検出された畦畔20に平行方向を示す。また、畦畔19が北側へ伸びる延伸部の痕跡に対して垂直方向を示している。調査区東側で検出された畦畔の痕跡と同様に、洪水などで畦畔が削平されるなどして高まり部分が消失し、その後湿地化にともない埋没したものと考えられる。遺物は出土しなかった。

不定形土坑3は扁平な形態を呈する遺構である。遺構の長幅は3.8m、短幅は0.7m、断面の検出長は0.85mを測る。遺構の北側に深い落ち込み部がみられる。落ち込み部の深さは約25cmである。浅い部分の深さは約10cmである。埋土は暗褐色粘質シルトが主体を成すが、遺構の下層に褐灰色粘質土および黄褐色粘質土のブロック土を含む灰黄褐色粘質シルトや灰褐色粘質シルトが互層を成し、ラミナが顕著にみられる不整合な土層である。止水堆積の様相を示す。図示できなかったが、須恵器坏身、土師器片などがみられる。

近接して検出した不定形土坑7、75、69や土坑89、18、調査区内で散逸的に検出されたピット状土坑1、68、81、92、93なども堆積状況が類似するものである。いずれも止水堆積の様相を示す。調査区の南西側で検出した不定形土坑32、39などと同様に、黒色粘質土層は湿地環境下で下部から上部にかけて連続して自然に堆積したものと考えることができる。遺物は出土しなかった。堆積の時期は古墳時代前期以降のものと推測される。

拡張区の遺構 (第30図)

拡張区で検出した遺構として、ピット状土坑104、105と土坑102、103がみられた。地形的に西側から東側にかけて徐々に低くなる様相を示している。明確な遺構はきわめて少ない。検出面はT. P. +7.70~7.83mである。湿地状の止水堆積の様相を示す。遺構にともなう遺物は出土しなかった。

ピット状土坑104、105はT. P. +7.70mで検出した遺構である。遺構の深さは10cm前後を測る。埋土は黒褐色粘質シルトに地山のブロック土である灰黄色粘質シルトを含むもの。下層には明黄褐色粘質土の地山層上に薄いラミナがみられる。遺物は出土しなかった。

土坑102、103はT. P. +7.83mで検出した遺構である。土坑102の遺構の深さは14cmを測る。土坑103は南側が(その4)に広がるものであるが、検出時の深さは7cmを測る。埋土は黒褐色粘質土が主体を成す。下層には明黄褐色粘質土の地山層上に薄いラミナがみられる。遺物は出土しなかった。

第5面では調査区西部の南側で遺構が顕著にみられた。本来は水田耕作土層であったが、後に湿地化した状況がうかがえる。検出した遺構の多くは、湿地環境下で下部から上部にかけて連続して自然に堆

積したものであると考えられる。このような状況を改善するため、上層に整地層として幾重にも土砂が運ばれて来たものと思われる。整地土層中には多量の遺物が含まれる層（5-3層）がみられた。特に調査区西部の南側の区域（B14-i9地区）を中心に分布している。これらの遺物により、第5面で検出された水田耕作遺構の時期として、6世紀後半頃より以前であるということが確認され、さらに土地利用の変遷をうかがうことができた。

第5層および第6層出土の遺物（第34図、図版16）

第5面上層に堆積する第5層は古墳時代後半頃から平安時代頃の整地層で、細分すると4つに分けることができる。中でも5-3層は須恵器、土師器などの細片を多く含む土層である。特に、調査区南西部のB14-i9地区付近に厚く堆積する土層である。別項で-i9地区の出土遺物として扱うが、おおむね5-3層出土の遺物であると言える。この他、第5層（5-1～3層）包含層、第5層下層（5-4層）包含層、第6層包含層から多くの遺物が出土した。第5層下層、第6層、地山直上層から縄文時代の石製品、石片などがいくつか出土している。出土した遺物の多くは細片で復元できるものはわずかであった。実測することができたものの内、一部を示す。

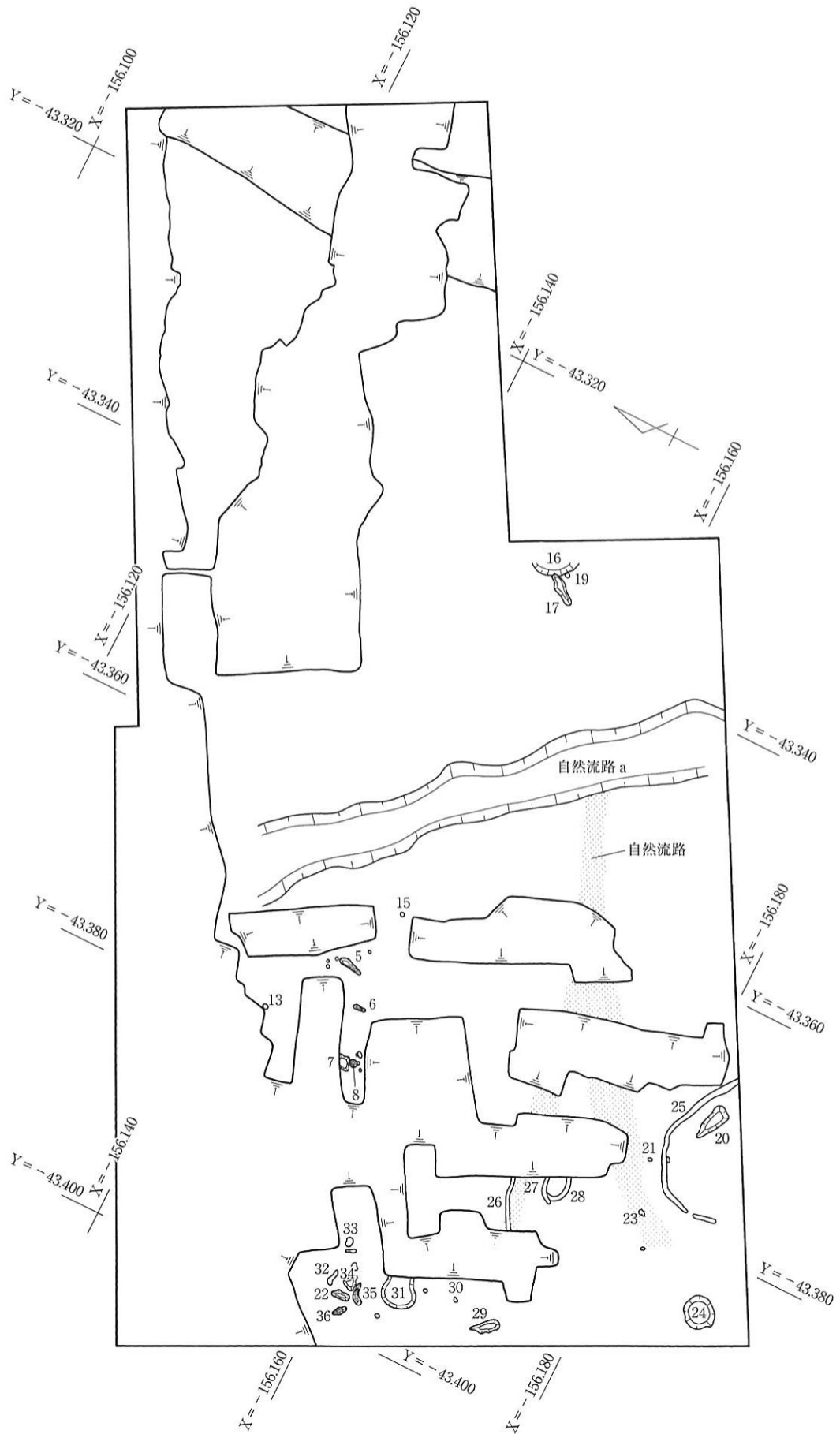
第5層（5-1～3層）包含層出土の遺物は、須恵器坏身（155～159）、坏蓋、高坏、小型長頸壺（163）、鉢（171）、甕、土師器高坏（179）などである。その他に、スサ入りの焼土塊（図版17-199）、骨片（図版17-195～197）、植物の種（図版17-198）、炭などがみられた。

155は須恵器坏Aである。底部がほぼ平らで、口縁部がやや外反気味に直立するもの。156～159は須恵器坏身Aの高台部である。IV-1型式に相当する。須恵器坏蓋として擬宝珠様つまみをもつもの、天井部がほぼ水平を成すものなどがみられた。163は須恵器小型長頸壺で高台を付すもの。179は土師器の高坏脚部である。外形は八角形を呈する。土器の他に、第5面精査時および包含層中から堅く焼き締まった炉壁片かと思われる焼土塊（199）がいくつかみられた。焼土塊の中にはスサ入りのものもみられた。

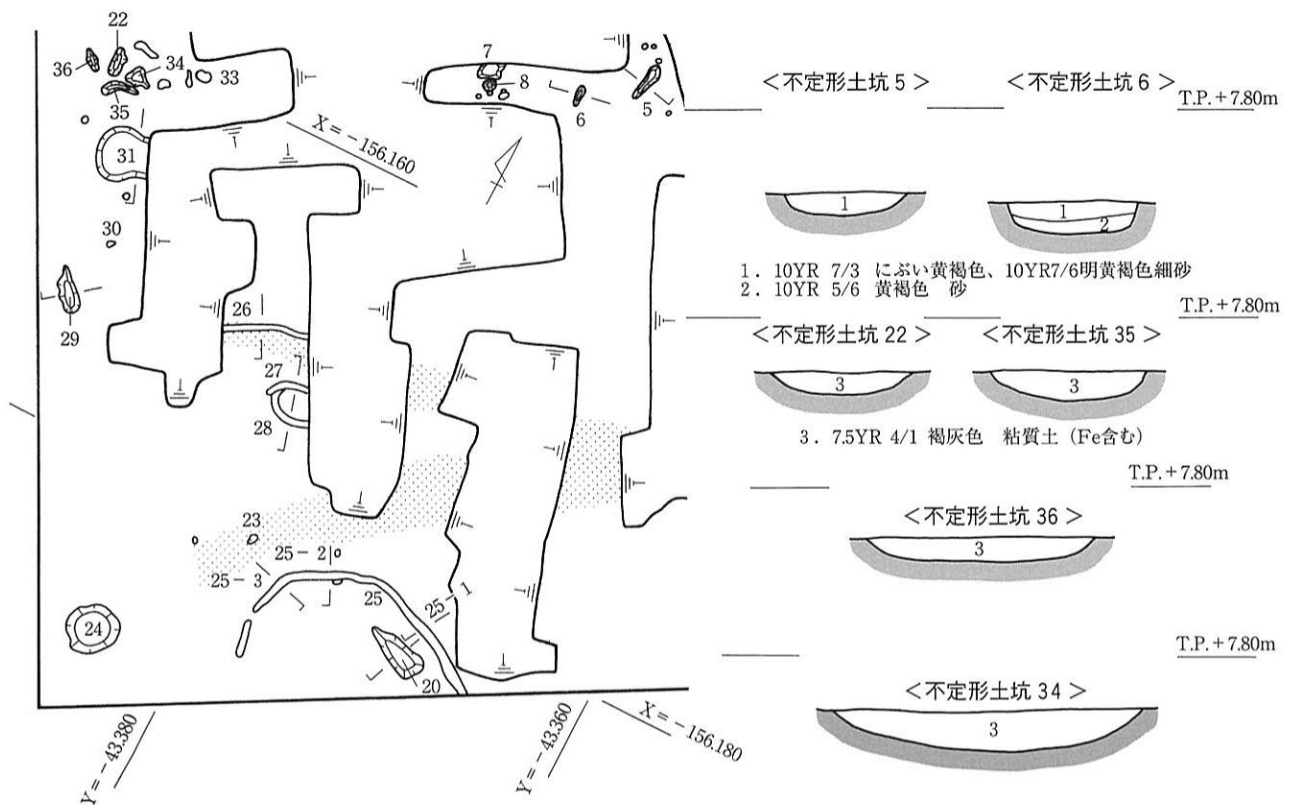
（その2）においても焼土塊が多く出土している。また、（その4）では焼土坑33、50（第79・80図）などの遺構を検出している。焼成土坑などが近接していたのではないかと推測される。195～197は馬の歯と思われる骨片である。198は植物の種でモモの種と思われる。

第5層下層（5-4層）包含層出土の遺物は、須恵器坏身、坏蓋つまみ（153）、坏蓋（154）、高坏（160、161）、壺蓋（162）、壺（164）、甕（165）、鉢（166）、甕（167、168）提瓶（169）、土師器高坏（177、178）、土師器の把手（180～183）、製塩土器（184）、竈片（187）、蛸壺（185）、軟質土器（170）、ふいご羽口、石製双孔円盤（186）、軽石（192～194）、石製品などである。

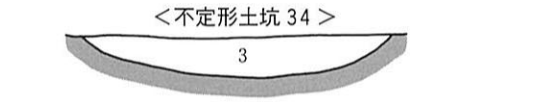
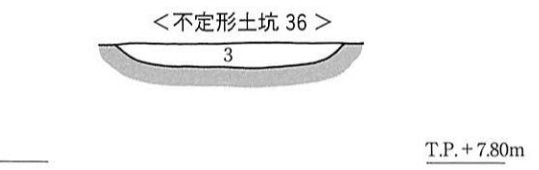
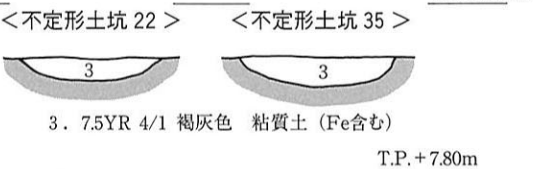
153は須恵器坏蓋のつまみである。154は外面にきわめて形骸化した稜の付く須恵器坏蓋である。II-2型式に相当する。須恵器坏身として、立ち上がり部が比較的短く内傾し、口縁端部を丸くおさめるものがみられる。160、161は須恵器高坏の脚底部である。160は一条の凸線が底部端の近くに巡るもので、I-2段階に相当するもの。162は頂部やかえり部端部を欠くが壺蓋であると思われる。165は口縁部を欠くが須恵器甕の体部片である。体部は球形を呈する。外面に文様を施さないもの。166は平底を呈すもので、須恵器鉢の底部と思われる。167、168はいずれも口縁部を欠く須恵器甕の体部である。外面は平行叩きの後、回転カキ目調整を施す。169は口縁部、把手などを欠くが須恵器提瓶である。扁平な円形を呈する水筒型のものである。外面に回転カキ目調整を施す。I-2～II-4型式に相当する。177、178は土師器高坏の脚部である。坏部や脚底部を欠損するため詳細は不明である。177は坏部と脚部の接



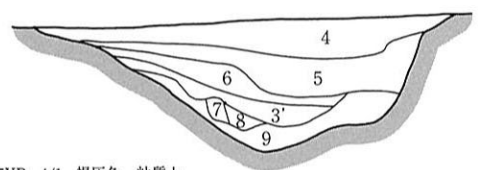
第35図 第6面平面図



<不定形土坑 5> <不定形土坑 6> T.P. + 7.80m



<不定形土坑 29>



- 3. 7.5YR 4/1 褐灰色 粘質土
- 4. 10YR 3/2 黒褐色 粘質土 (Fe含む)
- 5. 7.5YR 3/2 黒褐色 粘質土
- 6. 5YR 2/1 黒褐色 粘質土
- 7. 10YR 1.7/1 黒色 粘質土
- 8. 7.5YR 5/1 褐灰色 粘質シルト
- 9. 10YR 6/1 褐灰色 粘質土

<溝状土坑 25 - 1> <溝状土坑 25 - 2> T.P. + 7.80m



<溝状土坑 25 - 3> <溝状土坑 26> T.P. + 7.80m

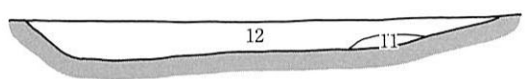


<溝状土坑 27> <溝状土坑 28> T.P. + 7.80m



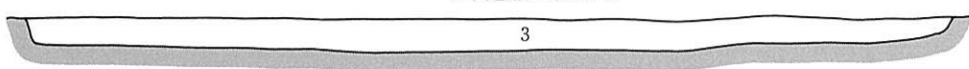
- 10. 2.5Y 4/1 黄灰色 粘質土 (Fe含む)

<不定形土坑 20>



- 11. 2.5Y 8/1 灰白色、2.5Y 4/1 黄灰色粘質土 (Fe含む)
- 12. 5YR 3/1 黒褐色 粘質土 (Fe含む)

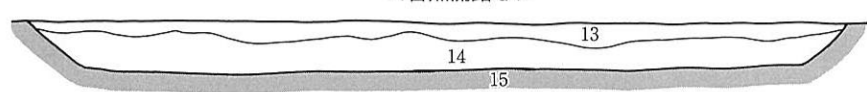
<不定形土坑 31>



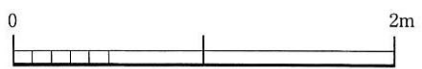
- 3. 7.5YR 4/1 褐灰色 粘質土 (Fe含む)



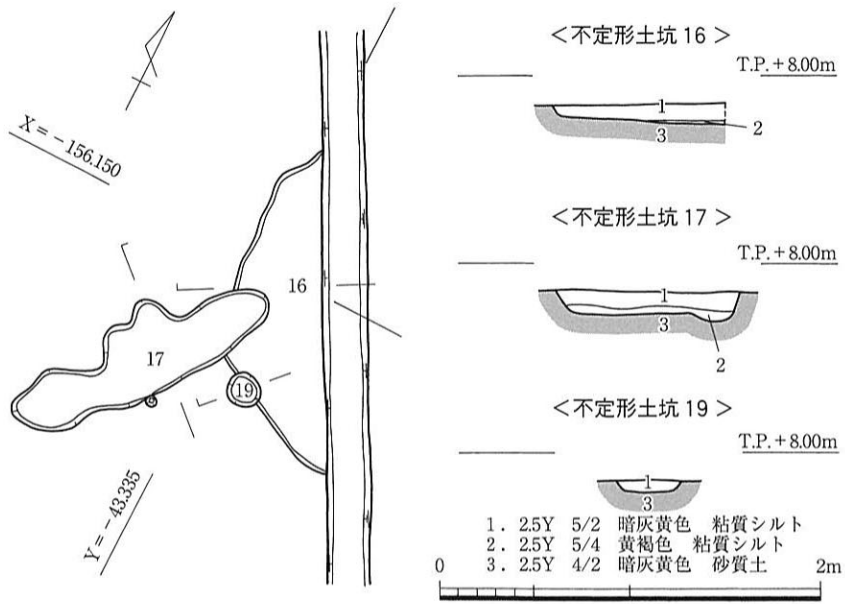
<自然流路 a>



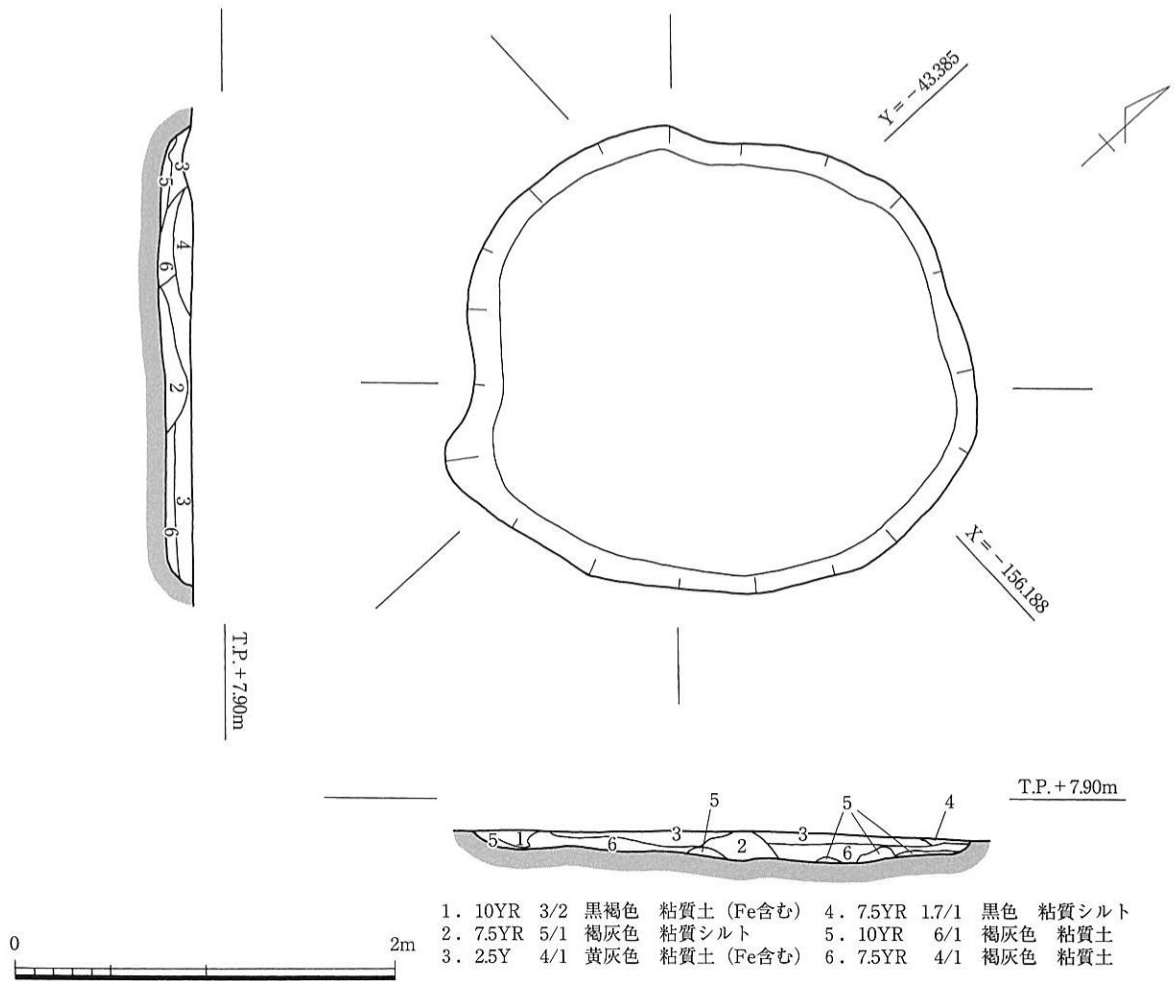
- 13. 7.5YR 4/2 灰褐色、10YR6/6明黄褐色粘質土 (ブロック土含む)
- 14. 10YR 6/6 明黄褐色 砂混粘質土
- 15. 10YR 5/6 黄褐色 砂質土



第36図 第6面遺構平・断面図 (1)



第37図 第6面遺構平・断面図(2)



第38図 第6面不定形土坑24平・断面図

溝状土坑25、26、27、28（第36図）

調査区の西側において弧を描くように不定方向に伸びる溝状土坑がいくつかみられた。検出面はT.P. +7.65~7.69mである。攪乱に寸断されているため不明瞭であるが、人為的な溝とは言い難いものである。溝状土坑25の検出長は約16mで半円形を描く。溝状土坑26は攪乱に挟まれた区域に位置するため不明瞭であるが、検出長は約5mで直線的に東西方向に伸びる。溝状土坑27と溝状土坑28は扁平な半円形を呈するもので、検出長は2.5~3.0mである。溝状土坑の検出幅は40~65cm、深さは4~5cmである。溝の断面形は薄いレンズ状を呈する。埋土は黄灰色粘質土で下層にシルトや鉄分沈着がみられる。遺物は出土しなかった。

不定形土坑20、24、29、31（第36・38図、図版6）

不定形土坑20は調査区西側の南端で溝状土坑25に近接する遺構である。検出面はT.P. +7.68mである。やや尖り気味の楕円形を呈する。検出幅は1.5m、検出長は3.4m、深さは12cmを測る。埋土は黒褐色粘質土で下層に鉄分沈着がみられる。この層の下層は地山層の灰白および黄灰色粘質土のブロック土を含む。湿地環境下で連続して自然に堆積した様相を示す。遺物は出土しなかった。

不定形土坑29は調査区西側中央部で攪乱に近接する遺構である。検出面はT.P. +7.70mである。やや尖り気味の楕円形を呈する。検出幅は1.0m、検出長は2.5m、深さは36cmを測る。埋土は下層が粘性のある褐灰色粘質土に黒色粘質土および褐灰色粘質シルトのブロック土を含むもので、止水堆積の様相を示す。中層は黒褐色粘質土と褐灰色粘質土である。上層は黒褐色粘質土を基本とするもので、層間に鉄分沈着がみられる。常に湿地化した状況にあるのではなく、一時期に乾燥した時期があったことを示すものである。遺物は出土しなかった。

不定形土坑31は調査区の北西側に位置するが、攪乱によって寸断される。検出面はT.P. +7.68mである。やや扁平の円形を呈す。検出径は3.0m、検出幅は2.42m、深さは9cmを測る。埋土は褐灰色粘質土で下層に鉄分沈着がみられる。遺構にともなう遺物は出土しなかった。

不定形土坑24は調査区の南西端に位置する遺構である。検出面はT.P. +7.72m前後である。やや扁平の円形を呈する。直径は2.5m、検出幅は2.6mである。深さは深い部分で15cmを測る。遺構底部の形態として遺構の中央部にわずかな高まりがあり、その周辺は低く、ドーナツ状を示す。埋土は下層が褐灰色粘質土に褐灰色粘質シルトのブロック土を含むものである。遺構の中央部の高まり部は、褐灰色粘質シルトである。上層は黄灰色粘質土で層間に鉄分沈着がみられる。さらに、黒色粘質シルトと黒色粘質シルトのブロック土が含まれている。遺物は出土しなかった。

その他の不定形土坑（第36図）

調査区の北西側で不定形土坑31に接して不定形土坑22、33、34、35、36がみられる。検出面はT.P. +7.67mである。検出径は35~80cm、深さは10~20cmを測る。遺構の断面形は薄いレンズ状を呈す。埋土は褐灰色粘質土で下層に鉄分沈着がみられる。遺物は出土しなかった。

調査区中央部で周辺を攪乱で寸断された区域に不定形土坑5、6と7、8がみられる。検出面はT.P. +7.55mである。検出径は35~50cm、深さは5~13cmを測る。遺構の断面形は薄いレンズ状を呈する。埋土はにぶい黄褐色および明黄褐色砂質土の細砂で下層にラミナがみられる。遺物は出土しなかった。

ピット状土坑13、15、23、30（第35図）

調査区の西側で散逸的に遺存するピット状土坑13、15、23、30がみられる。検出面はT.P. +7.60~7.73mである。検出径は20~25cm、深さは3~19cmを測る。遺構の断面形は薄いレンズ状を呈する。

埋土は灰黄褐色粘質土で下層にラミナがみられる。遺物は出土しなかった。

調査区東側で検出した遺構（第37図）

調査区の東側で検出された遺構として、不定形土坑16と溝状土坑17、ピット19がある。検出面はT.P. +7.65mである。

不定形土坑16は東側側溝によって切断される遺構で、検出長は3.7m、残存断面幅は約90cm、深さは10cmを測る。遺構の断面形は薄いレンズ状を呈する。埋土は暗灰黄色粘質シルトである。遺物は出土しなかった。

不定形土坑17は溝状遺構で、検出幅は約90cm、深さは10～16cmを測る。検出長は3.7mである。遺構の断面形は薄いレンズ状を呈する。埋土は暗灰黄色粘質シルトおよび黄褐色粘質シルトである。遺物は出土しなかった。

ピット19は不定形土坑16に符合するピットである。検出径は36cm、深さは6cmを測る。埋土は暗灰黄色粘質シルトである。遺構の断面形は薄いレンズ状を呈する。遺物は出土しなかった。

自然流路a（第36図、図版7）

調査区の中央部を縦断するように、正方位から西に約20°振る南北方向の自然流路aがみられた。調査時には単に「自然流路」としたが、下層の遺構との混乱を避けるため、自然流路aと呼称する。検出幅は4.3～6.5m、検出長は約42mである。深さは30cm前後を測る。埋土は下層が明黄褐色砂混じり粘質土、上層が明黄褐色粘質土に褐灰色シルトのブロック土を含むものである。遺物は出土しなかった。検出面では自然流路aの北側がT.P. +7.78m、南側がT.P. +7.70mであることから、この自然流路aは北側から南側に流れていたものと推測される。地形的には、南側がやや谷状地形の様相を示すことに合致するものである。

下層の遺構（第36図、図版7）

第6面の下層を第7層とした。第6層の下層確認のため一部で第7層の掘削を行った結果、調査区の中央部から西側の区域で、東西方向に流れる自然流路跡を確認した。西側で2本であった流れが合流し、1本になって流れている。自然流路の検出幅は1.0～4.0mである。合流部でやや広くなる。検出高はT.P. +7.40～7.45mである。西側がやや高いため、自然流路は西側から東側に向かって流れていたものと推測される。現在の和川の流れと逆の方向にあたる。地形的には、和川今池遺跡は上町台地に繋がる丘陵の東端に位置し、おおむね西側の段丘面と東側を流れる旧西除川の氾濫原との境界部にあたる。このことから、西側の丘陵部分が高く、東側の旧西除川の方向に向かって流水することに矛盾はないものと思われる。自然流路の深さは7～13cmを測る。埋土は褐灰色粘質土および黒褐色粘質土が基本を成し、下層では地山層の灰白色粘質シルトおよび粘質土からなる砂礫混じりブロック土を含む。層境には鉄分沈着がみられた。一時的な流水堆積の様相を示すものである。自然流路にともなう遺物の出土はなかった。

自然流路を検出した土層では、この他に明確な遺構を確認することはできなかった。しかしながら、第7層および地山直上層において石鏃などの石製品がいくつか出土しており、遺物を含む層であることから、今後の調査では注意する必要があると思われる。和川今池遺跡の過去の調査においても旧石器がいくつか出土していることから、この地域における旧石器時代や縄文時代の様相について解明されることに期待したい。

4. 調査区出土の石製品（第39・40図、図版18）

大和川今池遺跡のこれまでの調査において石製品の検出は認められたが、その数は他の遺物に比較すると極端に少ないものである。今回の調査でも、これまでの調査時における石製品の出土量とさほど大差はないが、ややまとまって出土した感がある。そこで、大和川今池遺跡における石製品についての傾向をとらえるべく、調査区内で出土した石製品について考察するものとする。

（その3）では、石製品として石鏃17点、石匙1点、不定形刃器3点などが出土した。主に、サヌカイト、チャート、砂岩などを石材とする打製石器である。これらの石製品の他に、サヌカイトの石核、剥片なども出土している。総数にして38点である。

200～214、216は石鏃である。石材はすべてサヌカイトである。

なかでも200～209は縄文時代の凹基無茎式である。200は特徴的に先端が細く尖り鋭いもので、基部があまり大きく凹まず、脚はやや外側に開くもの。小型で精緻な造りである。第5層から出土した。縄文時代後期のもの。201は側縁がなだらかに弧を描き先端は尖るもので、基部はあまり大きく凹まず、脚はやや外側に開く。202も同様で、剥離が著しいもの。第5層から出土した。晩期のものか。203は基部の抉りが深く、特徴的な鋏形鏃である。第5層から出土した。早期のもの。204は小型で基部の抉りが深い。造りは精緻であるが、風化が著しい。前期のもの。205は基部の抉りは小さいが鋭い。側縁は直線的に伸びるが、片脚を欠損する。第5層から出土した。前期のもの。206は基部の抉りが深く、側縁はやや肩が張り先端に向かうもの。第5層から出土した。前期～中期のものか。207は基部があまり凹まないもので、造りはやや粗雑である。側縁は中央部でやや凹み気味である。第6層から出土した。晩期のもの。208は基部が小さく凹む程度で、全体に縦長の三角形を呈する。第5層から出土した。後期のもの。209の基部は小さく凹み、脚は先端が欠損するが、若干外側へ開く。側縁は肩が張ってから丸く先端に向かうもの。造りは粗雑である。第5層から出土した。晩期のもの。

210は先端と片脚を欠損するが、平基無茎式のもの。基部が直線的でやや縦長の三角形を成すと思われる。造りは精緻であるが、風化が著しい。

211は凸基有茎式である。均整のとれた三角形の身に茎がつくもの。造りがやや粗雑で風化が著しい。第5層から出土した。後期のものか。

212～214、216は円基式のもの。212～214は基部の造り出しが不明瞭な菱形鏃である。216は幅広の菱形を呈するもの。いずれも、造りが粗雑で風化が著しい。第6層から出土した。弥生時代のもの。

215は先端部と末端部を欠損し、風化も著しいため形状が不明瞭であるが、サヌカイトの尖頭器と思われる。第6層及び地山直上層から出土した。

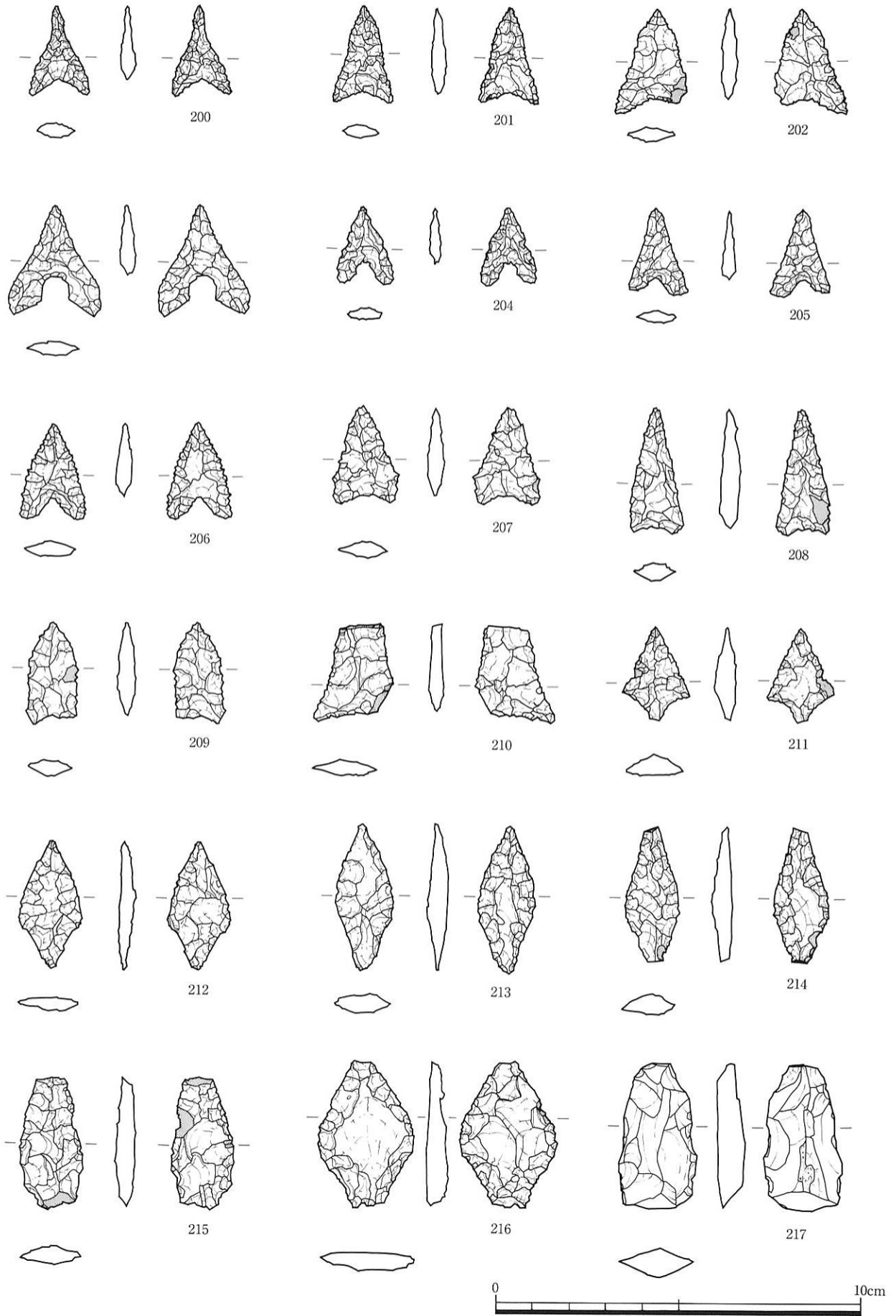
217、218は先端部などの端部を欠き、全体に造りが粗雑で形態が不明瞭であることから、未製品であると思われる。石材はサヌカイトである。いずれも、第5層から出土した。

219は地山直上層から出土した横型の石匙である。造りは精緻で正三角形の平面形を呈する精美な調整である。石材はチャートである。前期に相当する。

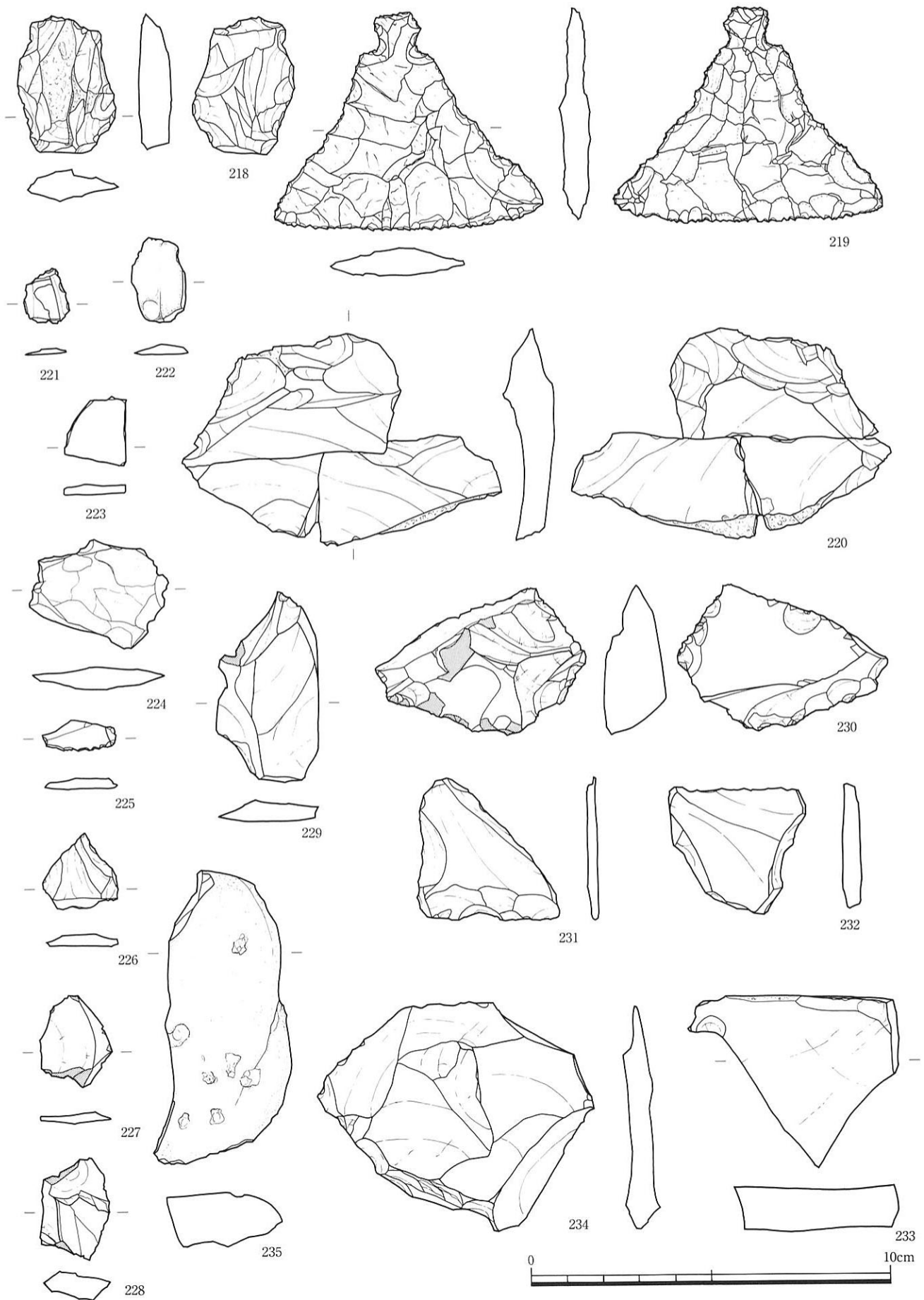
220は調査区内の第6層および地山直上層から出土したサヌカイトの剥片である。検出時は3つの別個体としていたが、遺物整理の段階で接合することができたものである。

221～228は小剥片である。なかでも、222、224は石材が砂岩質のもの、223が紅簾石片岩のものである。その他はサヌカイトである。222～225、228が第5層から、227は地山直上層から出土した。

229は先端が剥離し、表面が風化した剥片である。石材はサヌカイトである。地山直上から出土した。



第39図 出土石製品(1)



第40図 出土石製品（2）

230、231、234は不定形刃器と思われるもの。風化が著しく不鮮明ではあるが、わずかに刃部を形成している。231は第5層から出土した。いずれも石材はサヌカイトである。

232、233はサヌカイトの剥片である。第6層から出土した。235は片面が自然面を成す。

この他に掲載することができなかったが、原石、石材として持ち込まれたと推定されるものもみられた。緑泥片岩、紅簾石片岩などである。緑泥片岩はこの近辺では紀ノ川沿いで産出される石材であり、大和川流域で産出されるものではない。おそらく大阪湾から河内湖を経るなどして搬入されたものと思われる。

これらの石製品、剥片、石核、石材などは、おおむね第5・6層包含層および地山直上層からの出土であり、また遺構や他の遺物をともなうものでもなく、単独で出土したものが多い。古墳時代以前に遡るものであると言うことはできるが、当調査区ではその検出面と石製品に相当する時期の確証をとらえることはできなかった。

これまでの大和川今池遺跡の調査では、旧石器時代の国府型ナイフ形石器、有舌尖頭器などが大和川・今池調査会による昭和54年度調査の第6調査区で出土している。同調査会による昭和53年度調査の第4調査区では、縄文時代晩期の鋸歯状側縁をもつ凹基無茎式石鏃が出土している。また、昭和55年度調査の第7調査区の「難波大道」では、縄文時代前期の石匙が出土している。当センターによる平成8年度調査の(その2)では、縄文時代草創期に位置づけられる有舌尖頭器が地山直上層から出土している。大阪府教育委員会による平成7年度調査では、翼状剥片石核や縄文時代草創期から早期にかけてのサヌカイト剥片、刃器、チップなどが地山直上から出土し、「小規模な石器製作址」の存在が指摘された。この他、縄文時代の凹基式石器がいくつかみられるなど、わずかながら旧石器時代・縄文時代にいたる石製品が出土している。しかしながら、いずれも遺構や共伴する遺物をともなうものではなく、単独で出土したものが多く、出土した石製品に相当する遺構面の確認はできていない。

大和川今池遺跡の周辺で石製品をともなう遺跡として、ナイフ形石器や有舌尖頭器を検出した長原遺跡が北東方向約5kmに位置している。長原遺跡は沖積台地上にも旧石器時代の人が生活していた証を示すことで知られているが、大和川今池遺跡もほぼ同様の高さの沖積台地に立地することでは類似している。また、距離にして約2.5km南西方向には南花田遺跡がある。さらに、これらの石製品の石材であるサヌカイトの産出地である二上山までは約16kmである。

大和川今池遺跡の南西方向に近接する南花田遺跡は、後期旧石器時代の石製品、剥片などの分布が確認され、これまで層位的な資料に乏しかった近畿地方の旧石器時代の編年研究に貴重な資料を提示している遺跡のひとつである。この南花田遺跡は、大和川今池遺跡と同様に泉北丘陵から上町台地に続く広大な中位沖積段丘上に位置している。また、いずれも北上する旧西除川などの埋没河川にともなう埋没谷に近接している。

南花田遺跡の調査では、後期旧石器時代の石製品、剥片などの分布が確認され、その遺物分布範囲は約1万㎡に達する大規模なものと推定されている。遺跡の最下層からは、縦型剥片素材の小型ナイフ形石器、国府型ナイフ形石器などが多く出土しており、その包含層下層面から竪穴状遺構、土坑などの遺構も確認された。さらに、ナイフ形石器から有舌尖頭器・石鏃までの時期の遺物包含層が層位的に堆積していることが確認されている。旧石器包含層の発見について、『南花田遺跡発掘調査概要・I』では「一見大阪層群かと見誤る厚い黄色粘土層を断ち割って初めて確認できたものであり、また、最下層の旧石器包含層である灰色砂礫層も発掘途中まで地山と信じていたものである。」としている。大和川今

池遺跡においても、地山直上層ないし遺構をとまなわない第7層から出土しているものもみられる。これは、遺構面の下層を確認するために掘削した土層であり、これまでの調査では掘削対象とされていなかった土層にあたる。「泉北丘陵から上町台地一帯の丘陵上では、大阪層群や丘陵層に類似した地層下に旧石器時代の遺構が隠されている可能性が高いと思われる。」としていることから、これからの発掘調査時には注意する必要があると思われる。

しかしながら、この様に検出された石製品が必ずしもプライマリーな状態であったとは言い切れず、石製品が動いているのではないかという問題が提起される。両遺跡は旧西除川沿いの沖積地ではあるが、北上する埋没河川にともなう埋没谷に近接しているということからも、考えのひとつに入れておかなければいけないことは確かである。

大和川今池遺跡から出土した石製品をもとに、その傾向をとらえるべく考察を試みたが、大和川今池遺跡だけでなく、やや広い範囲で旧西除川流域の沖積台地から氾濫源にかけての地域における石製品をとらえると、旧石器時代から縄文時代にはこの地域に石製品をとまなう人々の営みがあったということの確証を得ることができたと思われる。広域的な環境復元も含め、大和川今池遺跡周辺における旧石器・縄文時代の状況について、今後の調査により解明されることを期待したい。

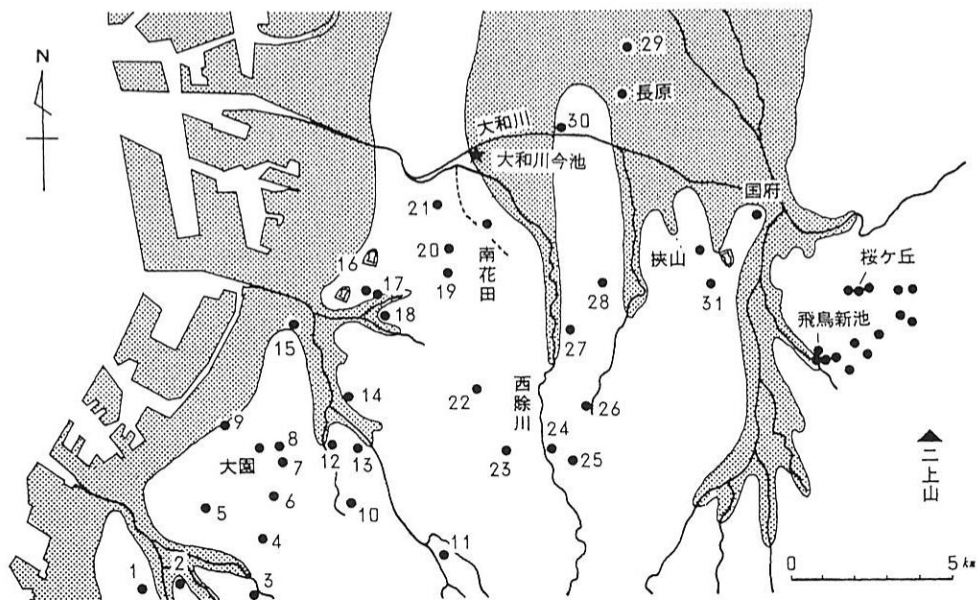
(参考文献) ・『南花田遺跡発掘調査概要・Ⅰ』 1986 大阪府教育委員会

・『南花田遺跡発掘調査概要・Ⅱ』 1987 大阪府教育委員会

(「参考資料」は 上記概要の 第2図 を一部改正・作図した。)

・『南花田遺跡発掘調査概要・Ⅲ』 1988 大阪府教育委員会

・他 大和川今池遺跡の既往の調査報告書・調査概要



- | | | | | | |
|----------|----------|----------|------------|-----------|---------|
| 1：下池田遺跡 | 6：大野池遺跡 | 11：上池東遺跡 | 16：百舌鳥本町遺跡 | 21：今池遺跡 | 26：東野遺跡 |
| 2：和気遺跡 | 7：信太寺跡 | 12：西浦橋遺跡 | 17：東上野芝遺跡 | 22：深井清水遺跡 | 27：太井遺跡 |
| 3：観音寺山遺跡 | 8：上代遺跡 | 13：万崎池遺跡 | 18：陵南遺跡 | 23：陶器湯山遺跡 | 28：丹上遺跡 |
| 4：信太山遺跡 | 9：水源池遺跡 | 14：鈴の宮遺跡 | 19：長曾根遺跡 | 24：西池尻遺跡 | 29：亀井遺跡 |
| 5：伯太北遺跡 | 10：野々井遺跡 | 15：四ツ池遺跡 | 20：更池遺跡 | 25：池尻東遺跡 | 30：瓜破遺跡 |
| | | | | | 31：青山遺跡 |

参考資料 大和川今池遺跡周辺の旧石器出土遺跡と主要旧石器時代遺跡

(『南花田遺跡発掘調査概要・Ⅱ』1987 を一部改正・作図)

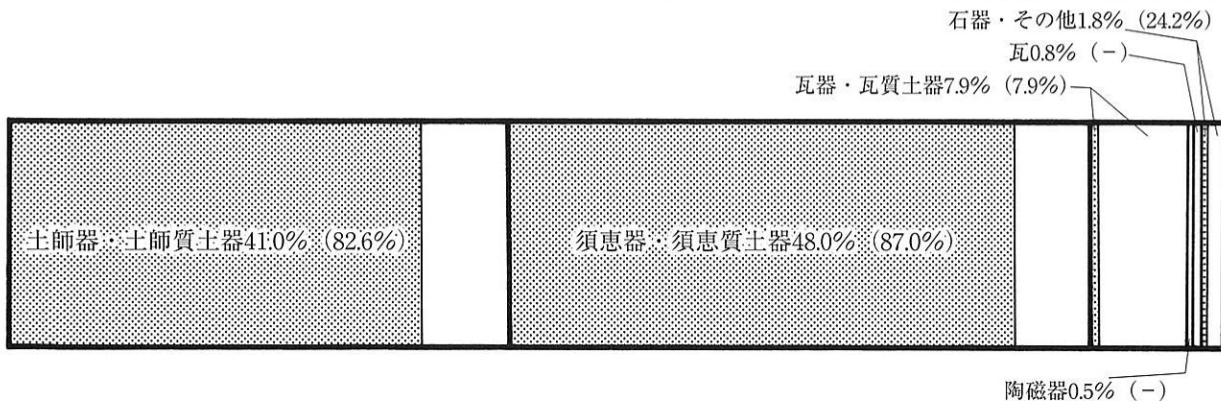
5. -i9 地区出土の須恵器 (表2)

第5層は基本層序でも記したが、黒褐色粘質シルトを主体とする砂混じり土層で、その堆積状況から4層に細分できる。第5層を成す土層の堆積状況は、地形の低い部分を補充、整地している様相を示している。特に、第5層中の5-3層の黒褐色粘質シルト層は、おそらく近接した古墳時代の遺構面を含む区域の土層を削平し、谷状に低くなっている本調査区の南西部に整地土として運んで来たものと推測される。この5-3層は国土座標で示すところのB14-i9地区周辺に分布し、厚く堆積している。また、B14-i9地区周辺で検出された遺構においても、5-3層が埋土となっているものが多くみられた。このことから、B14-i9地区周辺で検出された遺物は、主に5-3層に含まれる遺物であると考えられる。本来であれば、整地土である5-3層の分布範囲のみを対象とするところであるが、調査区内では地山層まで及ぶ攪乱が多く、また、B14-i9地区周辺区域が特に攪乱が著しい区域であったため、平面的に整地土の範囲をとらえることはできなかった。そこで、B14-i9地区周辺から出土した遺物を基に、整地土として削平された遺構面の時期やその傾向をとらえるべく、個体識別の分類を行った。個体識別分類に際し、本調査区から出土した全ての遺物を対象に、各個体の破片数、重量を計測し、-i9地区出土の遺物について集計した。

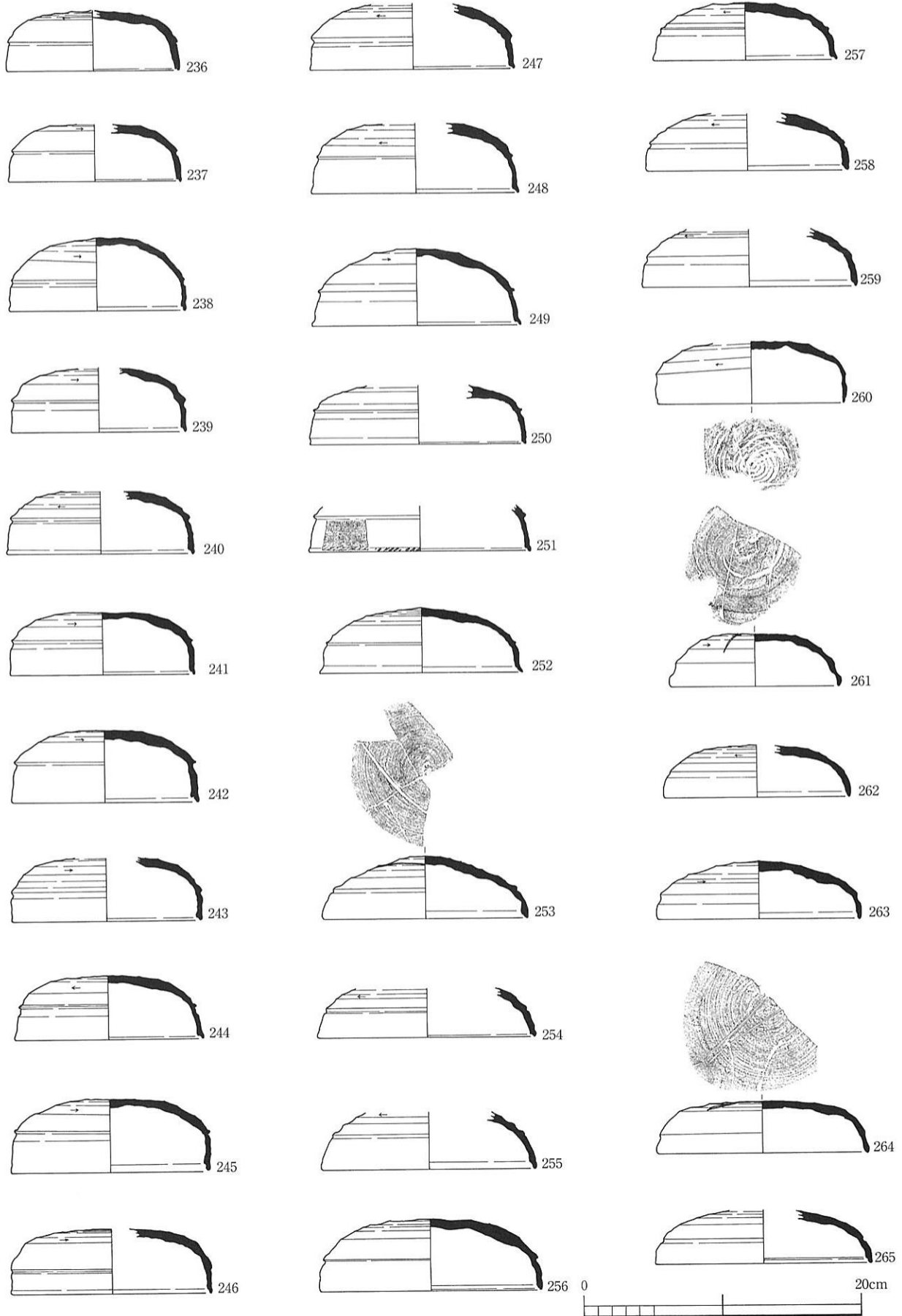
B14-i9地区周辺区域とは、B14-i9地区を中心とするB14-h~j、7~10の区域にあたる。ここでは総称して-i9地区とする。この-i9地区で出土した遺物として、須恵器片と土師器片が大量に出土しており、調査区全体の遺物量の76.7%を占める。特に須恵器は、-i9地区出土の遺物量の54.4%である。分類すると、坏蓋、坏身、高坏、壺、甕、甗、器台、碗などがある。土師器についても数多く出土したが細片であり、遺物の状態が悪いため個体識別分類することができたものはわずかであった。このため、-i9地区の出土遺物として、須恵器を基に分析することとした。ちなみに、土師器は-i9地区出土の遺物量の44.2%である。土師器の中でも分類できるものとして、坏、高坏脚部、甕、埴や甑の把手などがみられた。

表2 調査区出土遺物の器種構成

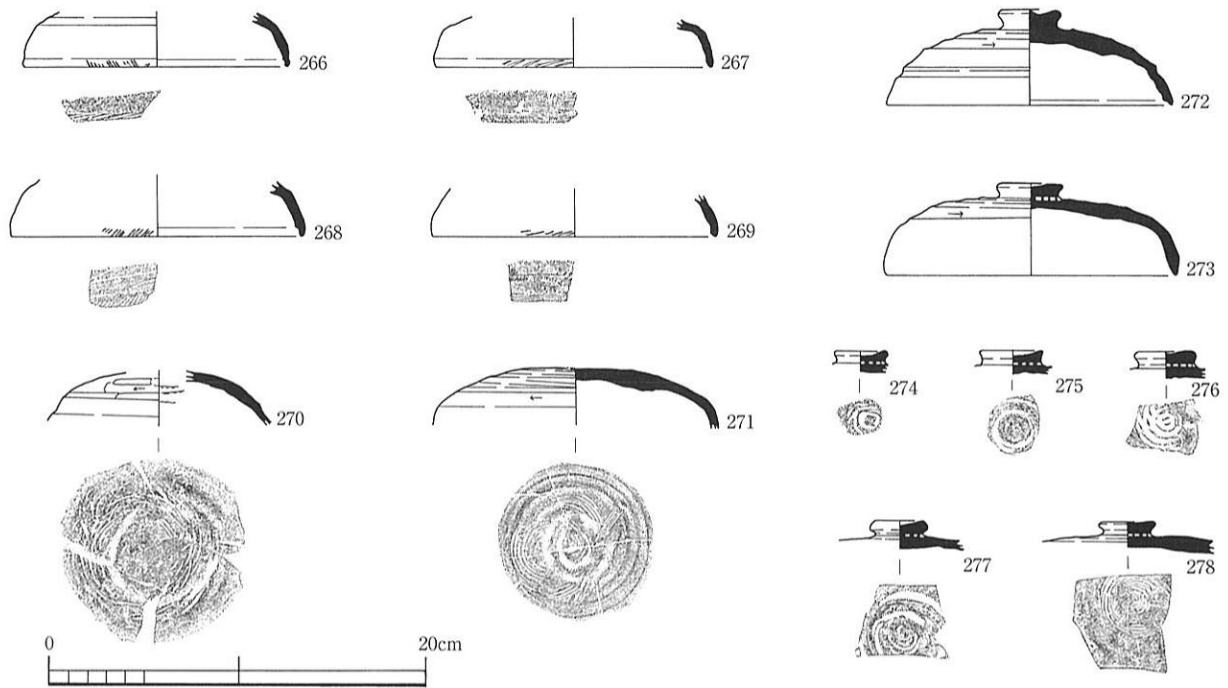
	土師器・ 土師質土器	須恵器・ 須恵質土器	瓦器	陶磁器	瓦	その他	合計(個数)
調査区全体	12636	14789	2432	157	252	533	30799
-i9地区	10442	12863	191	-	-	129	23625



※-i9地区の割合は(-i9地区/調査区全体)で示す



第41图 第5層B14-i9地区出土遺物(須恵器坏蓋)(1)



第42図 第5層B14-i9地区出土遺物(須恵器坏蓋)(2)

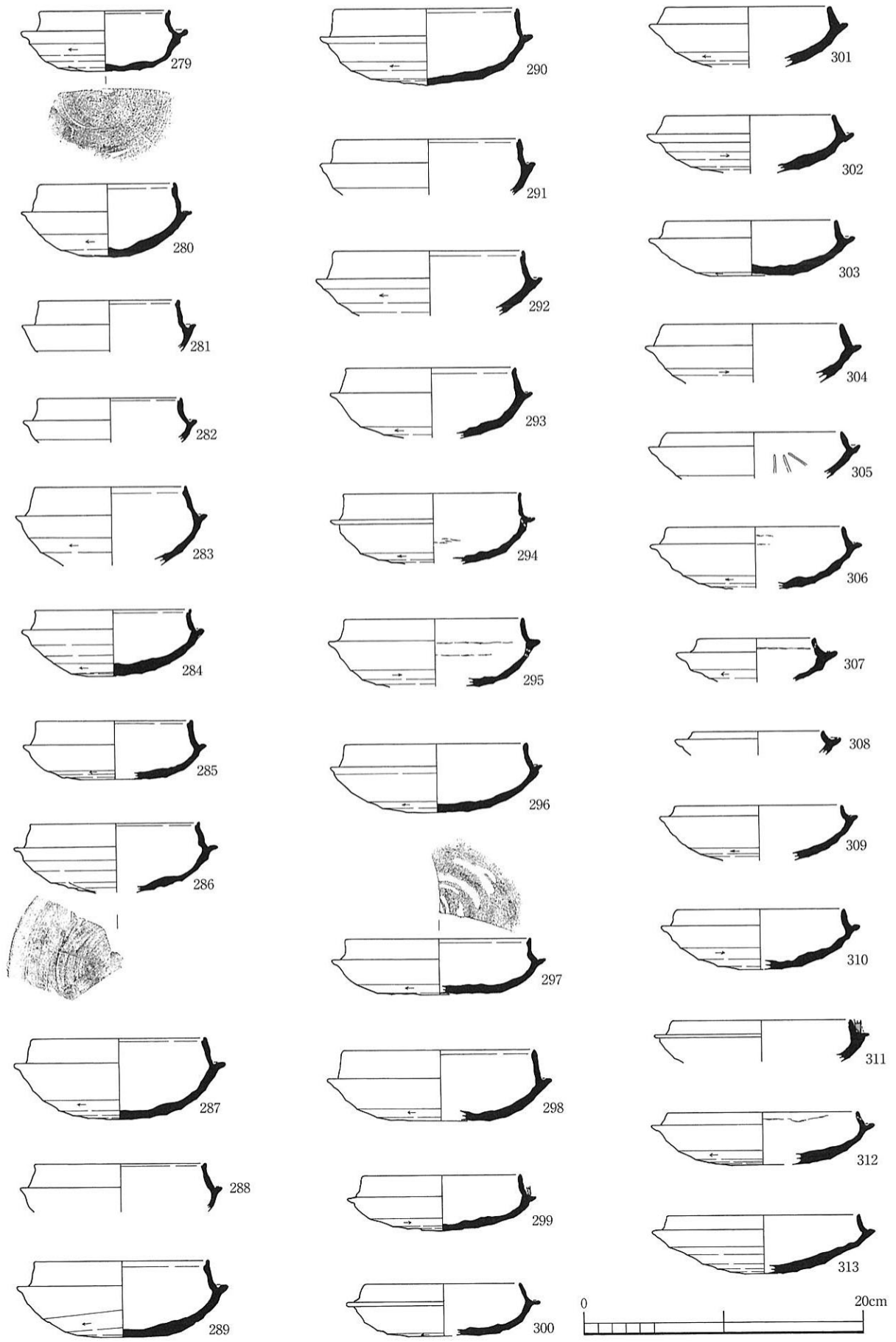
須恵器坏蓋 (第41・42図、図版19)

須恵器坏蓋は5,027点で、-i9地区で検出した須恵器の39.1%をしめる。細片が多く、完形に復元できたものはわずかであった。坏蓋の主な形態として、天上部が扁平に近いものから丸味を帯び、稜は短く鋭さを失いつつあるものが主を成す。口縁端部の形態は、内傾する明確な段を成すものや内傾する凹面を成すもの、内傾する面を成すものなどがみられた。この他、外面の稜が形骸化して沈線状を成すもの、天上部が丸味を持ち、きわめて雑な感のあるものなどがみられた。また、わずかに丸味のある天上部に、やや扁平のつまみを有するものもある。つまみ部のみのもので16個体が認められた。高坏蓋であると思われる。

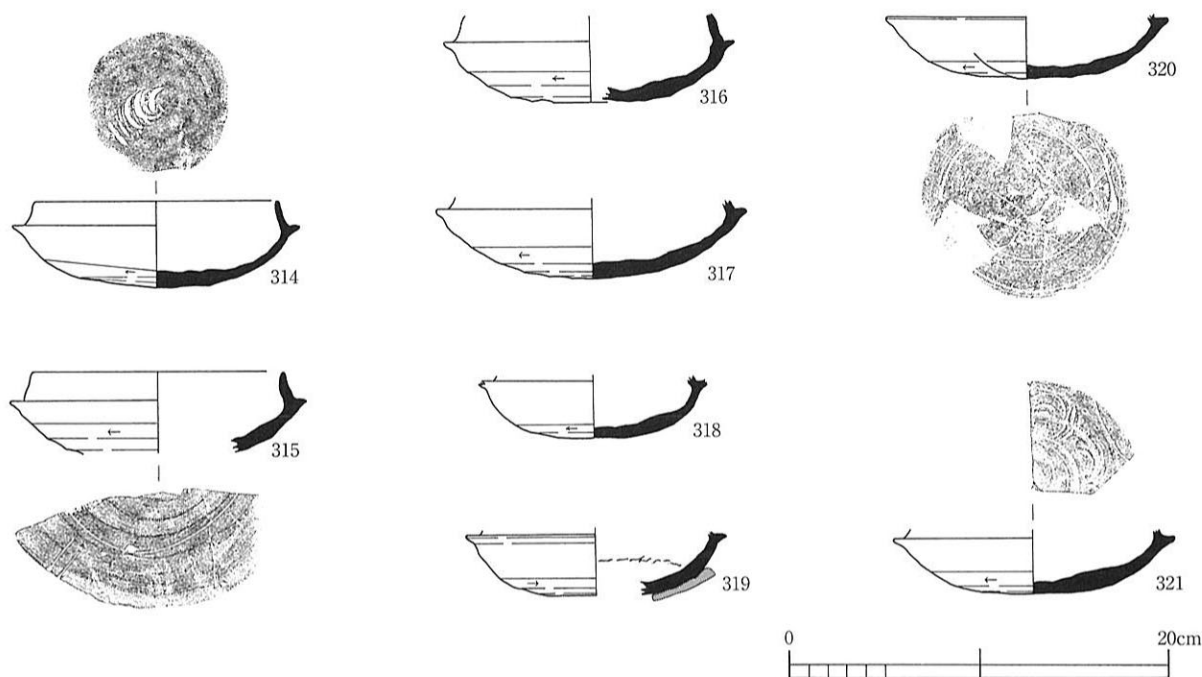
特徴のあるものとして、外面にヘラ記号を施すもの(253、261、264)、内面に同心円紋スタンプが確認できるもの(260、270、271、274~278)、口縁端部の外面にハケ目あるいは叩き目調整による刻み目状の痕跡を残すもの(251、266~269)などがある。また、焼成時の焼き歪みや重ね焼きの溶着痕がみられるもの(図版17-188)もある。外面にヘラ記号、内面に同心円紋スタンプを施すもの、口縁端部の刻み目状の痕跡を残すものについては、6. 製作技法による須恵器蓋坏の分類と考察の項に詳細を記載する。出土した須恵器坏蓋は、須恵器編年のI-4~II-3型式のものが主を成す。

須恵器坏身 (第43・44図、図版20)

須恵器坏身は4,927点で、-i9地区で検出した須恵器の38.3%をしめる。細片が多く、完形に復元できたものはわずかであった。坏身はたちあがり部がわずかながら内傾し、口縁端部には内傾する明瞭な段を有し、受部は上外方へ伸びるものが主を成す。また、たちあがり部が短く内傾気味にたちあがり、受部はやや長く、受部内面に沈線が認められるものもある。さらに、底体部は浅く、扁平な感を受けるものもみられる。わずかではあるが、器形は低く底部が丸いもので安定性に欠け、扁平な感を受けるものもみられた。



第43図 第5層B14-i9地区出土遺物(須恵器坏身)(1)



第44図 第5層B14-i9地区出土遺物(須恵器坏身)(2)

特徴のあるものとして、坏身の内1点のみであるが、底部内面にヘラ状工具または棒状の工具を用いて粗く削り取るような調整による擦痕がみられた(305)。この他、坏身の多くに、重ね焼きの溶着痕が顕著にみられた。坏身と坏蓋をセットにして焼成したらしく、坏身の受け部に坏蓋の欠損した口縁端部が付着しているもの(280、288、299、307、311)、また、体部片の付着するもの(319)などがある。外面にヘラ記号(279、286、315、320)、内面に同心円紋スタンプを施すもの(297、314、321)については後述する。出土した須恵器坏身は、須恵器編年のI-5~II-4型式のものが主を成す。

須恵器高坏(第45・49図、図版21)

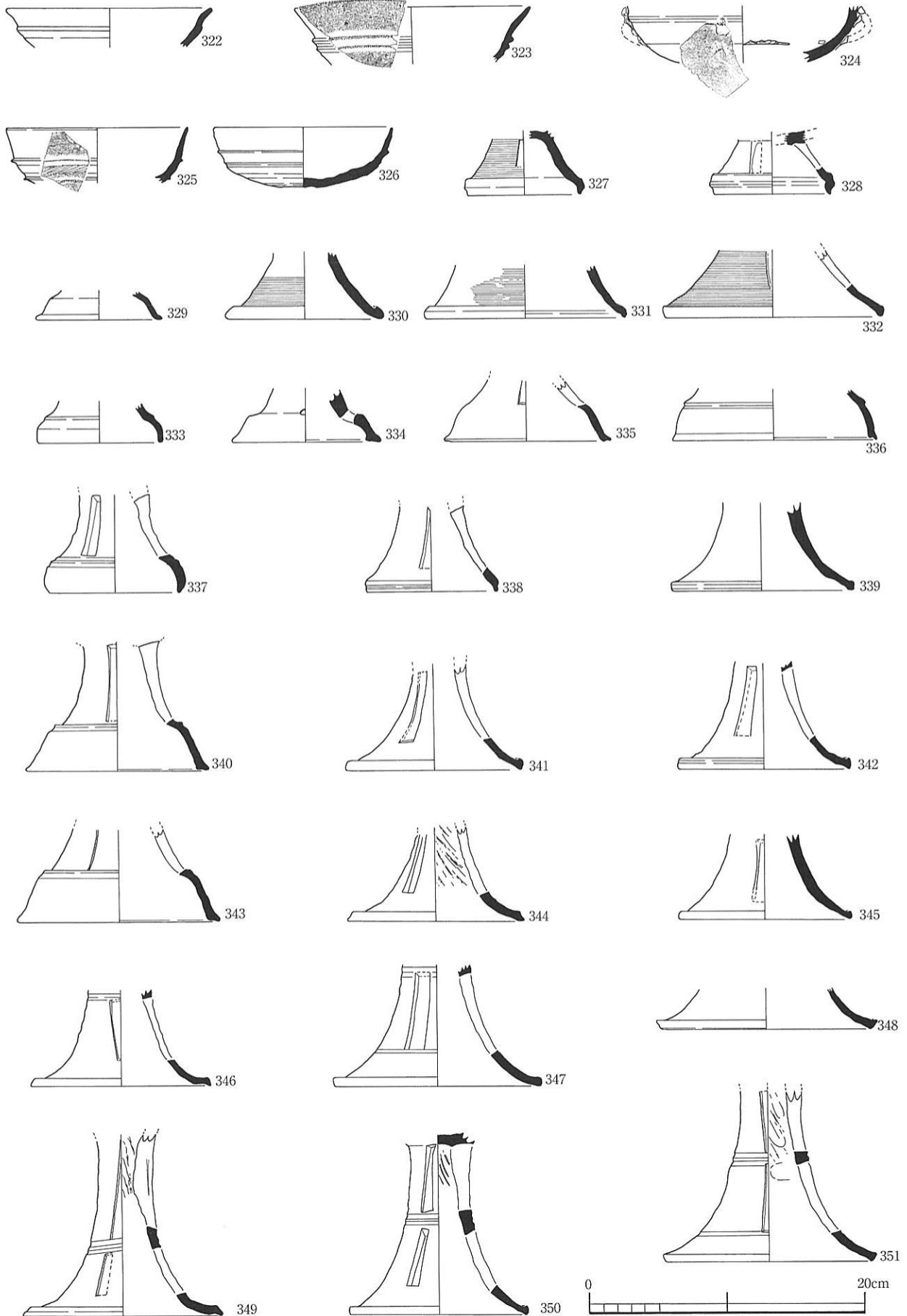
須恵器高坏は555点で、-i9地区で検出した須恵器の4.3%をしめる。細片が多く、完形に復元できたものはなかった。高坏として識別できたものは、脚底部ないし無蓋高坏坏部である。有蓋高坏の坏部は、個体識別時に須恵器坏身としてカウントしたものもあると考えられるが、やむを得なかった。

322~326、414~425は無蓋高坏の坏部である。323は体部外面に稜を2段有し、波状文を施文する。324は口縁部を欠損するが輪を成す把手の痕跡が確認できる。把手は両側に付くもので、把手の上部に球形の装飾がともなう。外面には凸線間に波状文を施文し、内面には溶着痕が認められる。また、粘土つなぎ目の接合痕も顕著にみられた。この他、無蓋高坏の坏部外面に竹管文を施すもの(423)、波状文、斜行文などを施文するものもいくつかみられた(図版24)。

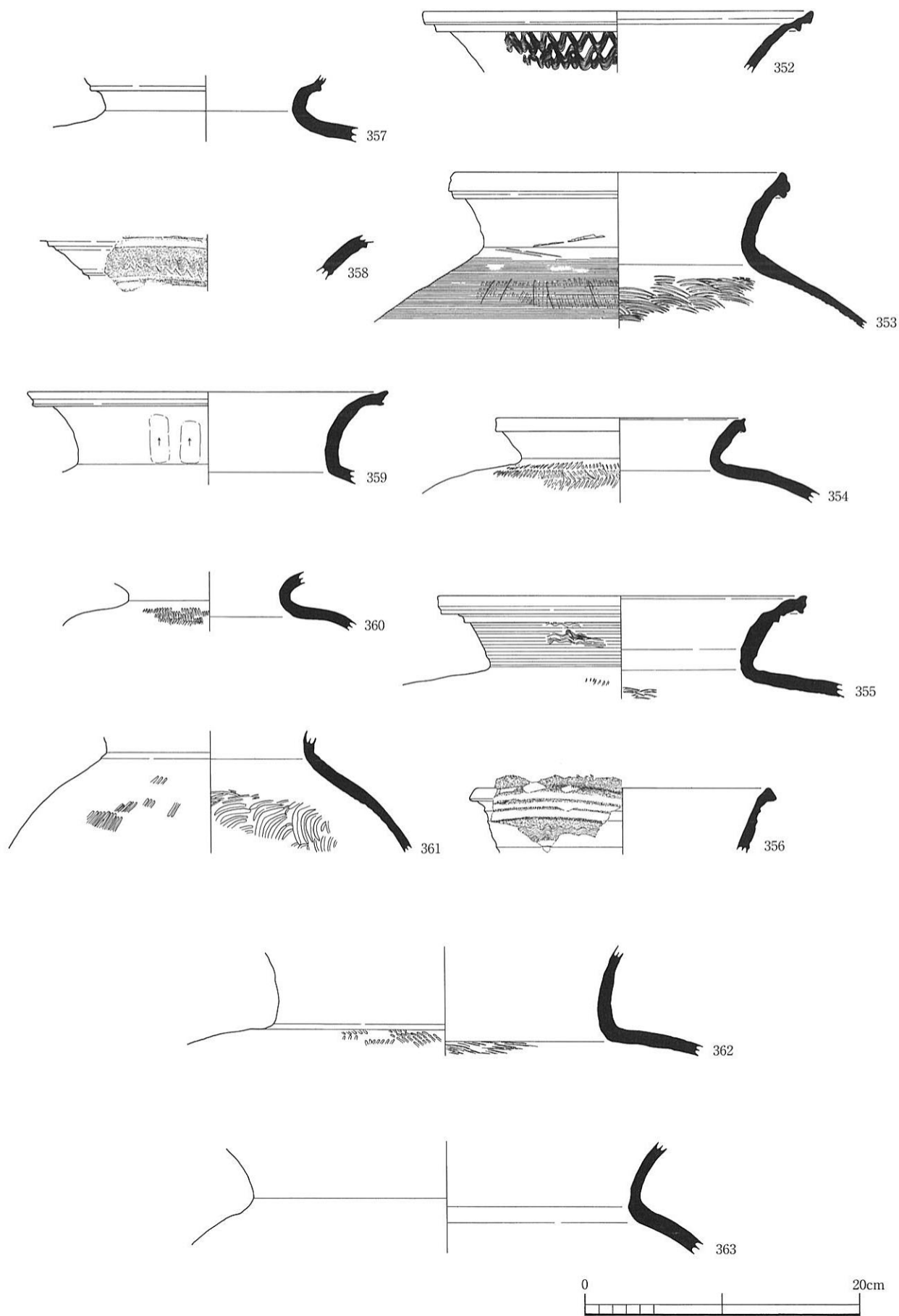
327~351は高坏脚底部である。いずれも脚部のみが残存で、坏部の形態は不明である。短脚のもの(327~330、333~335)、長脚のうち長脚1段のもの(336~340、343)、長脚2段のもの(341、342、344~351)である。方形の透かし窓を刻むものが多い。脚底端部の形態は多種みられた。全体に造りがやや粗い感をうける。須恵器編年のI-4~II-5型式に相当するものが主を成す。

須恵器壺・甕(第46・47図、図版22)

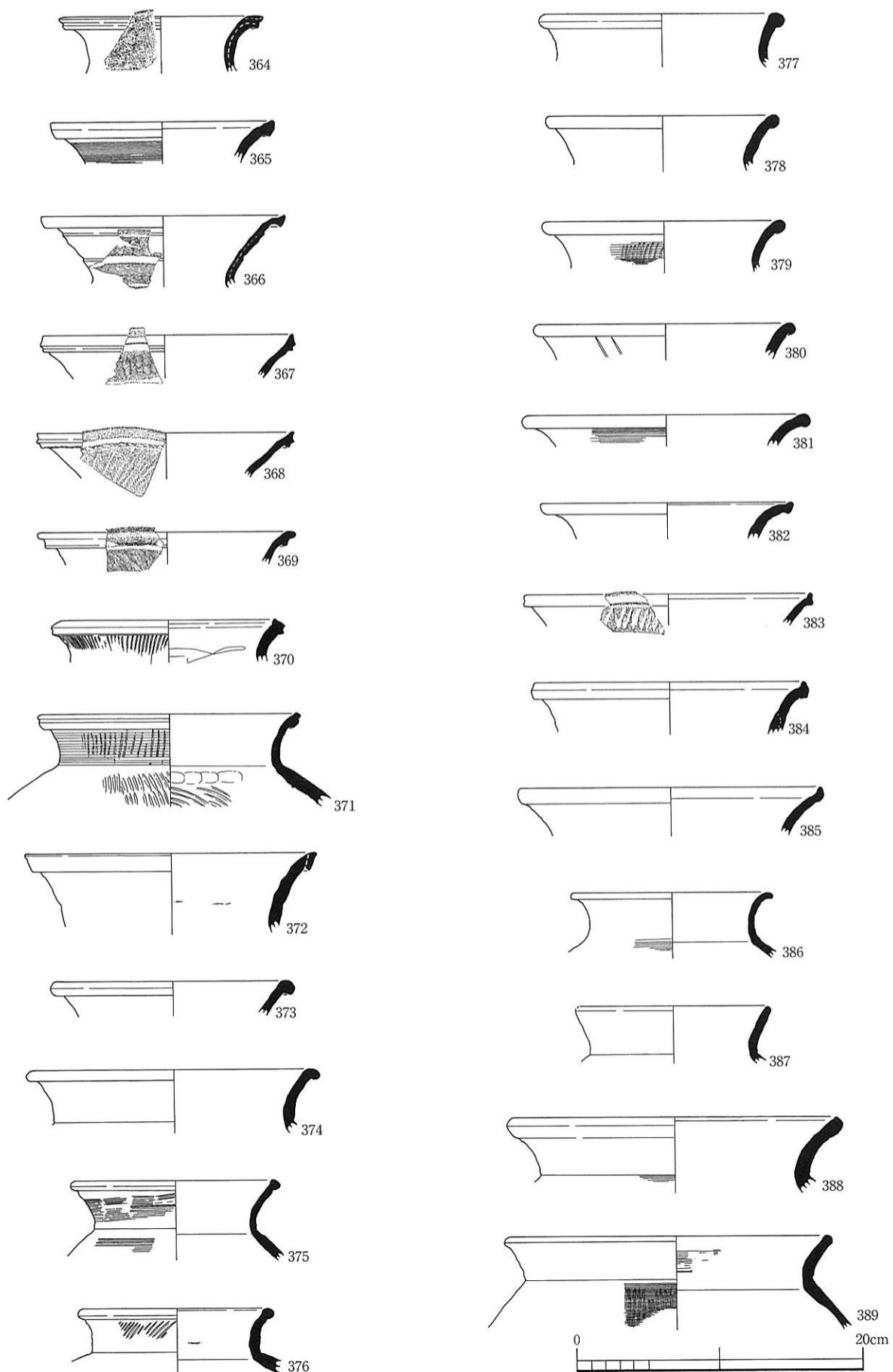
須恵器甕および壺は2,093点で、-i9地区で検出した須恵器の16.3%をしめる。いずれも細片で体部



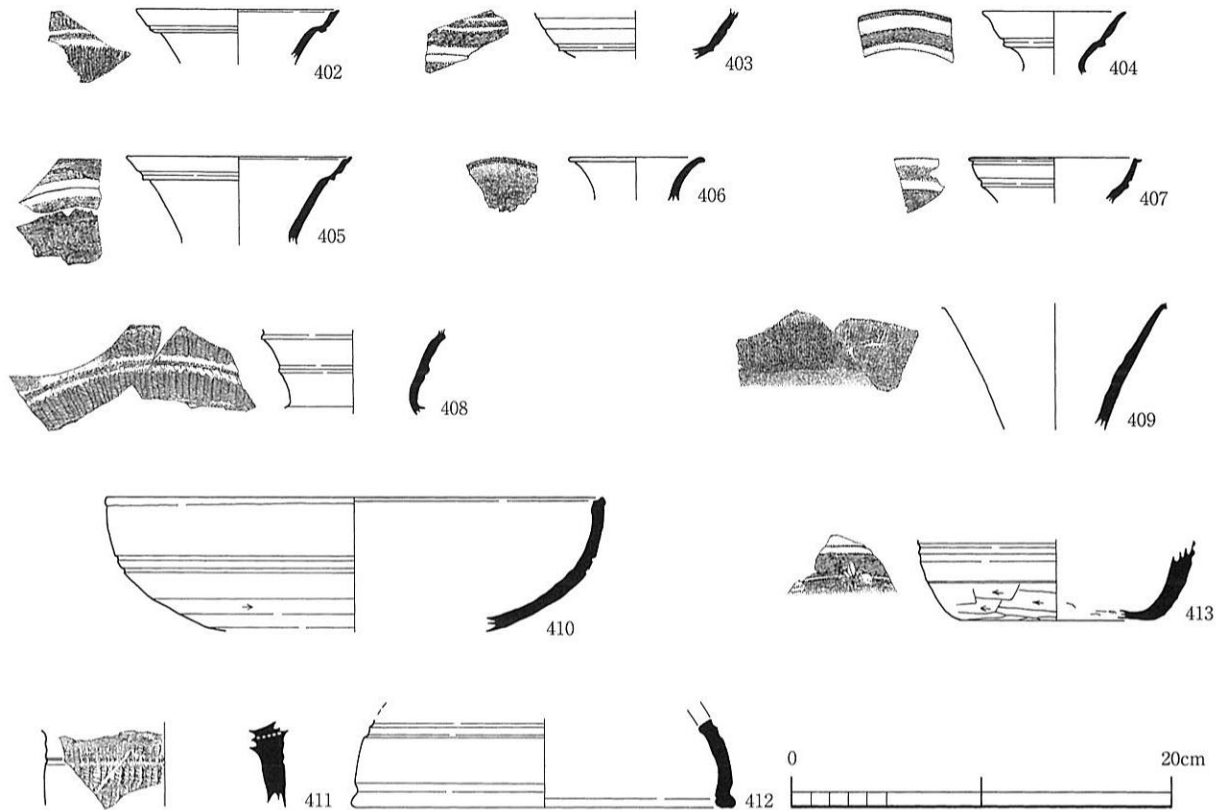
第45图 第5層 B14-i9 地区出土遺物 (須惠器高坏)



第46図 第5層B14-i9地区出土遺物(須恵器壺・甕)(1)



第47図 第5層B14-i9地区出土遺物（須恵器壺・甕）（2）



第48図 第5層B14-i9地区出土遺物（甗・器台・その他）

片が多く、個体識別分類が困難で形態を把握できるものはきわめてわずかであった。完形に復元できたものもなかった。

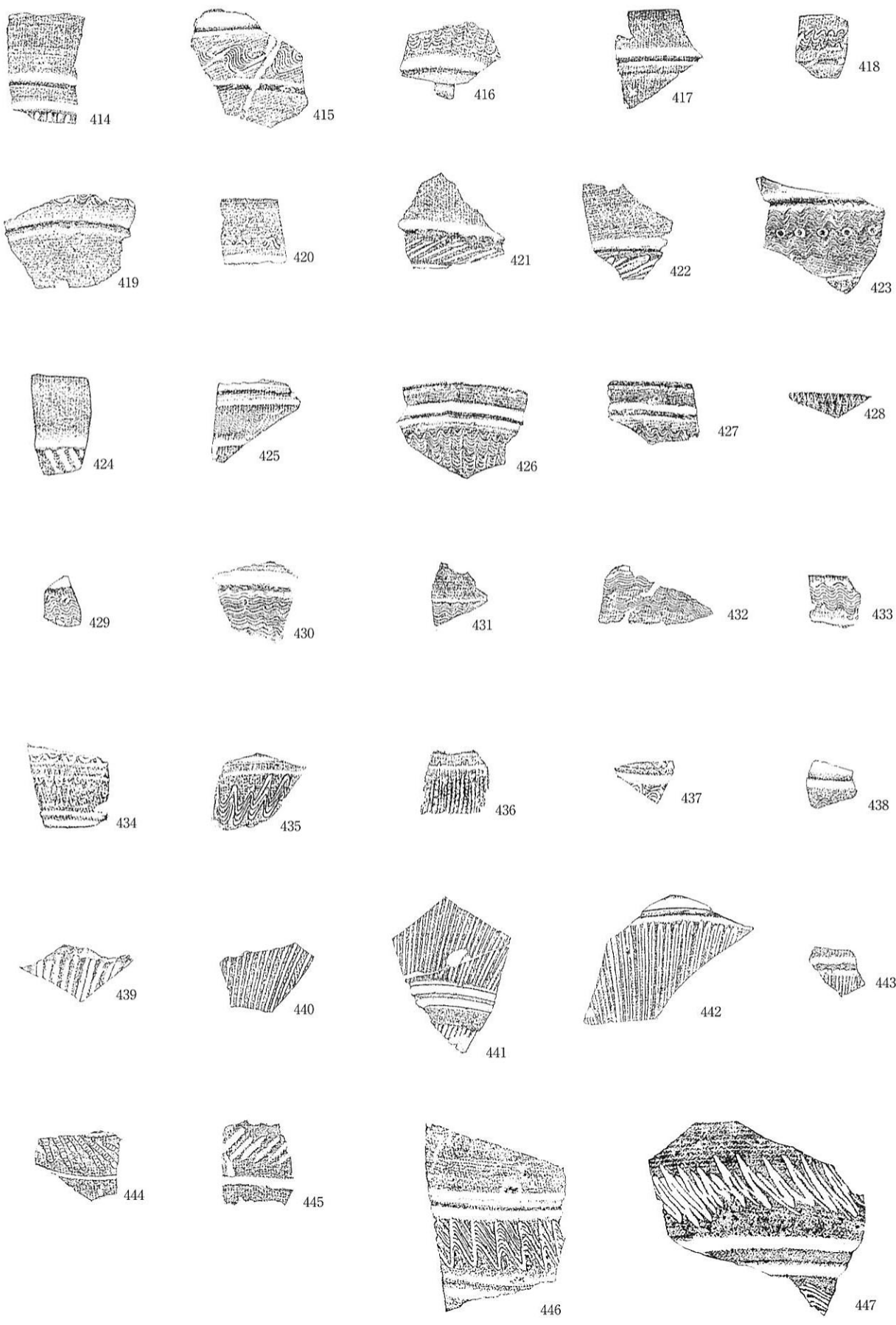
352、355、357、358は口縁部に凸線をもつ大型甗で、口頸部には波状文や回転カキ目調整を施す。367～369、383は端部を上方に肥厚し外面に面を成すもの。口頸部には粗い波状文を施文する。この他、口縁端部を上下に肥厚して外面に凹凸面、凹面あるいは凸面を成すものがあり、口頸部には縦方向の叩き調整の後、回転カキ目調整を施すものもある。さらに、口縁端部を肥厚して玉縁状に丸くおさめるものが多くみられた。体部外面の調整として、平行叩きあるいは回転カキ目調整、内面には同心円状の叩きを施すものが多い。356、366は端部を肥厚して面を成すもの。口頸部には段を複数巡らし、波状文を施文する。また、口頸部に凸線を巡らし、上下段に波状紋を施文する破片もある（図版24）。

特徴のあるものとして、口頸部にヘラ記号を施すもの（364）、溶着痕の認められるもの（図版17-189）や変形するものも多くみられた。須恵器編年のⅠ-4～Ⅱ-5型式に相当するものが主を成す。

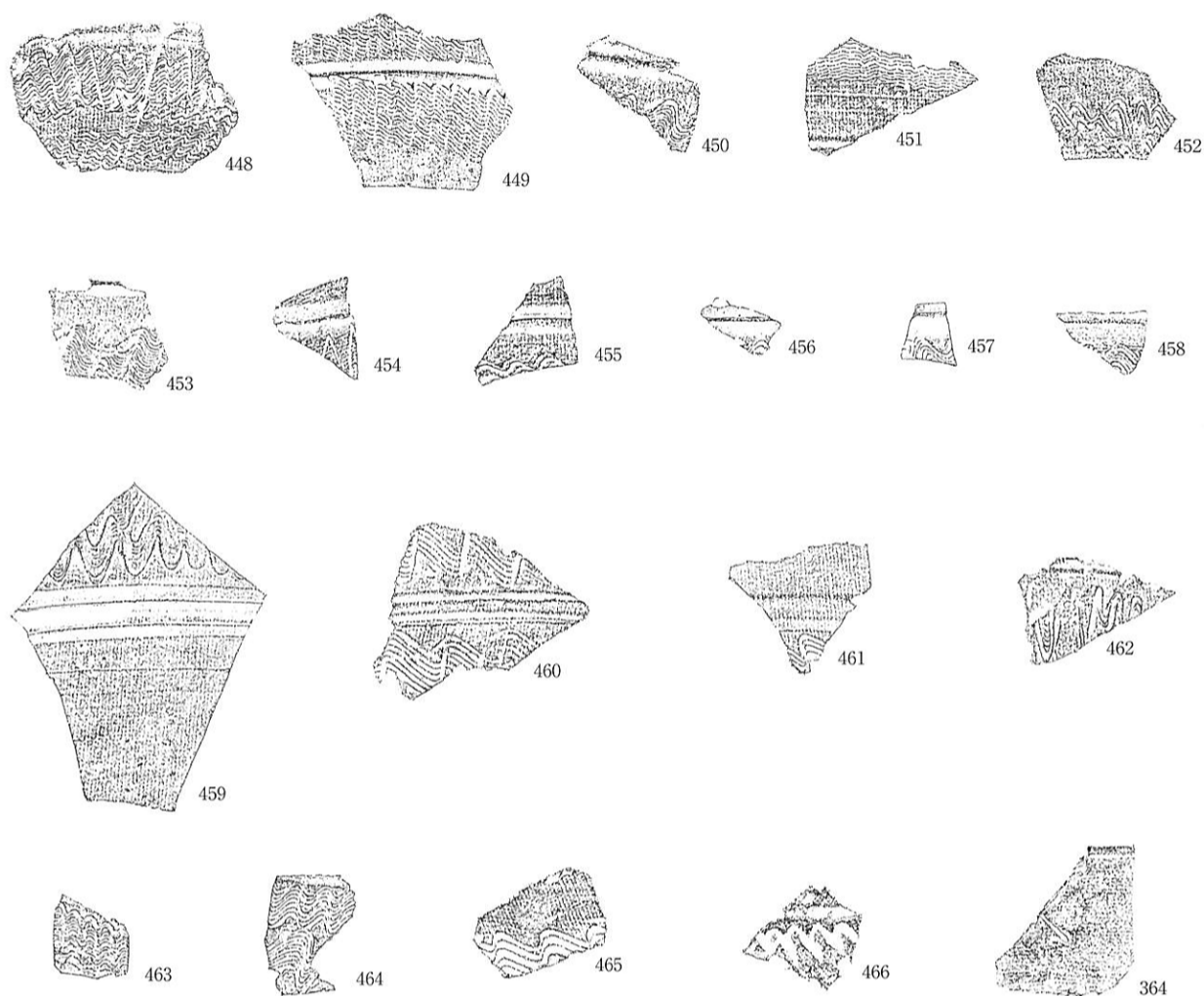
須恵器甗（第48・49・50図、図版23・24）

須恵器甗は163点で、-i9地区で検出した須恵器の1%である。いずれも細片で、形態を把握できたものはきわめて少なかった。甗の特徴のみられる部位に関しては図版23に掲載した。

甗は小型ないし中型のものがみられた。口縁部の形態として、口頸基部が細く、口縁部は逆ハの字形に伸びて外面に凸線を巡らせるもの（404）、口頸部がやや内弯し、外面に段を有するもの（403、407）、口頸部がハの字状に開き、口縁部で段を成すもの（426、427、430、454）、口頸部がラップ状に長く開き、口縁端部付近で段を成して伸びるもの（402、405、409）などが認められた。また、口頸部に複数の段を成して文様帯を分かつもの（408、441）などもみられた。



第49図 出土須恵器拓本一波状文他文様(1)(1:2)



第50図 出土須恵器拓本一波状文他文様(2)(1:2)

口頸部や口縁部、口縁端部には文様を施すものが多く、その内容も多様である。この他、円孔部のみ検出したもの(図版23)、円孔周辺の文様帯をもつもの(445)もみられた。須恵器編年のⅠ-4~Ⅱ-5型式に相当するものが主を成す。

須恵器器台(第48・49図、図版24)

須恵器器台として分類することのできたものは、13点である。いずれも破片であり、全容は不明である。410は浅い台部で口縁端部は内傾する凹面を成すもの。411は細い円筒形の胴部と台部の接合部分で、胴部外面には平行叩きを施し、台部内面には同心円叩きが明瞭に認められるもの。412は内弯して伸びる脚底部で、透かし窓の痕跡がみられるもの。446、447は脚部片で、外面に凸線で区切られた文様帯に波状文などを施文するものである。須恵器編年のⅠ-5~Ⅱ-4型式に相当すると思われる。

その他の須恵器(第48図、図版24)

その他、確認することのできた須恵器の器種は、提瓶、碗などがある。いずれも細片のため詳細は不明である。413はコップ状の碗の底部である。外面底部には静止ヘラ削り痕がみられ、体部に波状文を施文するもの。390、391は提瓶の口縁部と思われる。

文様を施した須恵器（第49・50図、図版24）

出土した須恵器片の中には、文様を施すものの破片が多くみられた。細片で器種が特定できないものも多かった。分類確認できたものは、無蓋高坏坏部（414～425）、甕口縁部、口頸部（368、369、402～409、426～444、454）、甕体部（445、392～401）、提瓶口縁部（390、391）、壺、甕の口縁部・口頸部（356、366、448～466）、器台の体部（411、446、447）、その他（413）である。

文様の形態は、波状文、斜行文、列点文、山形文、ヘラ描文などで、細かく緻密なものや粗く間延びするものなど多用な形式が認められた。ほとんどが図示できなかつたため、拓本（第49・50図）や図版24で示した。

土師器把手（図版29・30）

-i9 地区で出土した遺物の中で、須恵器に次いで土師器が多く、44.2%をしめる。しかしながら、破片が多く、また、遺物の状態が悪いため分類することがきわめて困難で、不確実なものが多かった。

分類することができたものとして土師器把手があげられる。土師器把手は把手部ばかり59点を検出した。体部については不明である。埴、甑などに貼付していたものと思われる。

形態として①平舌状（180、183、568～573、580～586）、②円柱状（574～576、587）、③角柱状（577～579）に区分することができる。①平舌状の中でも、a長舌状、b短舌状に細分できるが、b短舌状のものがほとんどである。この他、把手部の裏面に突出部を有するもの（584、585）と、空洞のもの（586、587）がみられる。体部と接合する際の接合方法の違いによるものと考えられる。さらに、把手部に1条の透かし（578、579）、2条の透かし（581～583）または円孔（580）を施すものもみられた。おそらく縄などを通して使用していたものと思われる。

-i9 地区の出土遺物の傾向

-i9 地区の5-3層から出土した遺物は、おおむね須恵器編年のI-5～II-4型式のものであることが判った。出土した須恵器の中でも、坏蓋、坏身の量が突出しており、器種にやや偏りが認められる。さらに、次項で述べるが、須恵器の蓋坏における製作技法の中で、ヘラ記号を施すもの、内面に同心円紋スタンプを有するもの、口縁端部に刻み目状の調整を施すものなどの特色を示すものも認められた。土師器で確認できた器種は、土師器把手と高坏脚部などである。出土状況にもよるが、器種に偏りが認められる。この他の特徴として、須恵器片において溶着痕をもつものが多いこと、変形するもの、焼成の悪いものなどがあり、さらに、焼土壁かと思われる焼土塊がいくつか出土していることなどがあげられる。整地土として、ある地域の土砂を一括して-i9地区へ運んできたものと推測されるが、古墳時代の一般的な集落域における土器の器種構成とはやや異なるのではないかとと思われる。器種構成にみられる偏りには、意味があるものと思われる。

6. 製作技法による須恵器蓋坏の分類と考察 (第57図)

-i9 地区から出土した須恵器では、坏蓋、坏身の量が突出していることが認められた。このような須恵器蓋坏の中で製作技法的な特徴として、外面にヘラ記号を施すもの、内面に同心円紋スタンプを有するもの、口縁端部に刻み目状の調整を施すものが少量ながら確認された。須恵器蓋坏の製作技法的な特徴については、江浦洋氏が『日置荘遺跡』、^{1,2)}『鴨谷池遺跡』³⁾の中で、それぞれの分類と緻密な観察検討を行っている。その資料は須恵器窯出土の遺物を対象に比較検討したもので、質的、量的にも有益な分析結果を明示している。-i9 地区で出土した須恵器は、整地土と考えられる堆積土中の遺物であり、不確定要素を多く含むものである。まったく検出状況が異なるものではあるが、その基本的な分類方法に準拠して、-i9 地区で出土した須恵器についての検討を試みたい。なお、その分類と細分については第56図に示したとおりである。

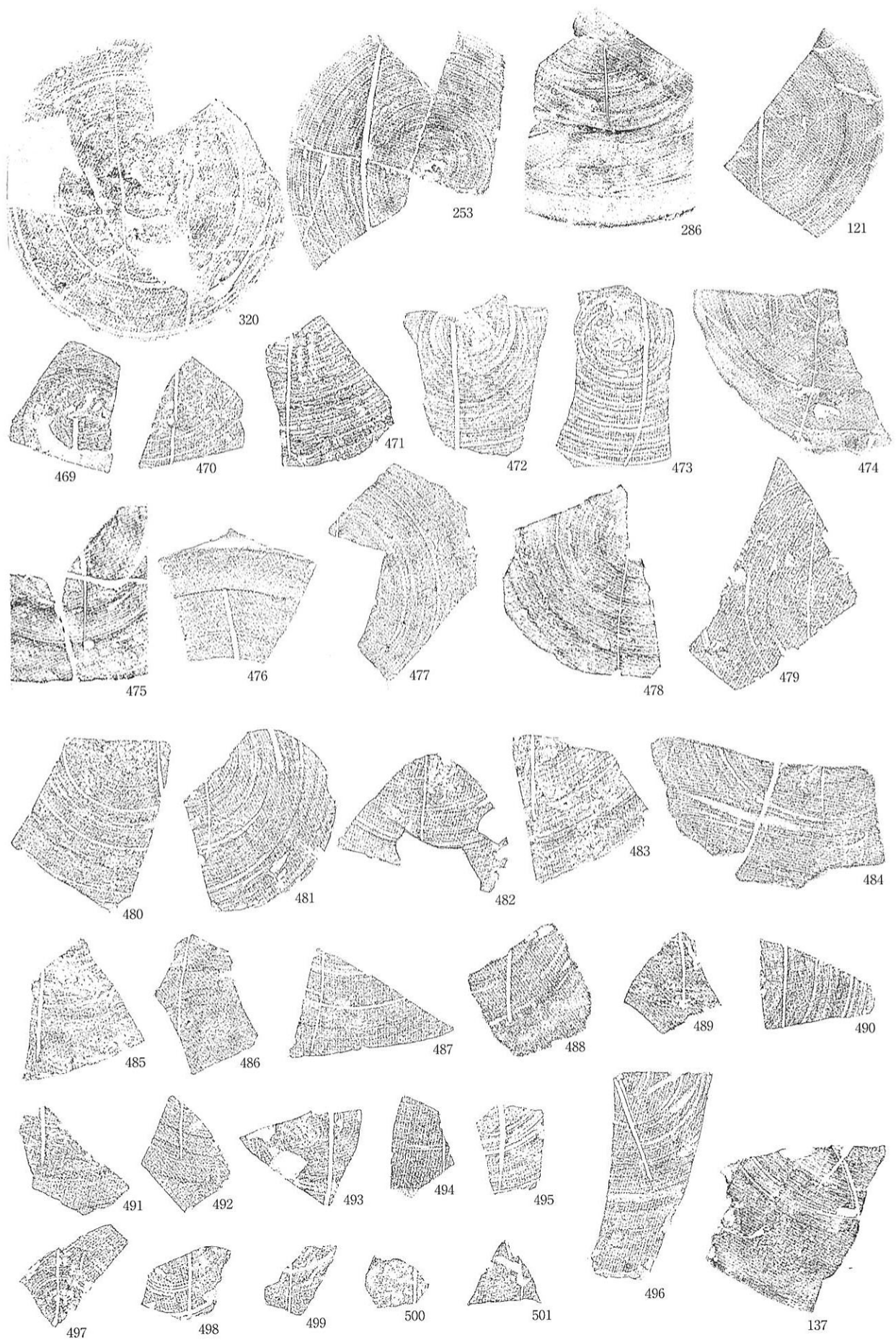
a. ヘラ記号を有する蓋坏 (第51～53図、図版25・26)

-i9 地区から出土した須恵器で、ヘラ記号を有するものは約160点確認されている。その内、坏蓋75点、坏身29点、坏身か坏蓋か不明のものが54点である。ヘラ記号は、第56図に示すようにA類～H類の8種類が確認されている。B類、D類、H類については、さらに細分することができた(表3)。

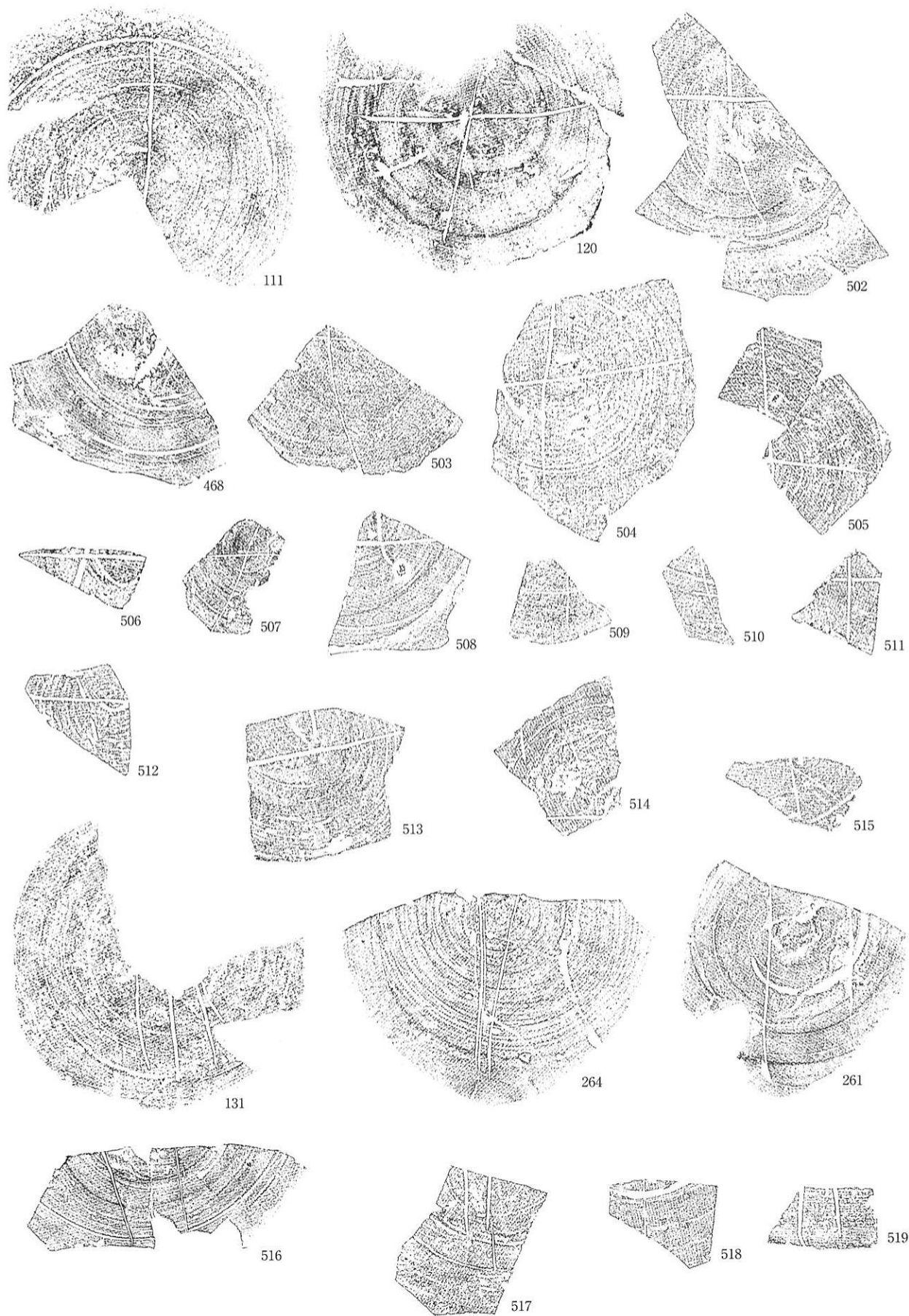
分類の詳細は以下のようになる。A類は、天井部の中央に一文字形の線刻を施すものである。A'類は、天井部からやや外れた所に一文字形の線刻を施すもの。B類は、天井部の中央に×字形の線刻を施すもの。B'類は、×字形に類するが、一方の線が途中で途切れる線刻を施すもの。C類は、天井部の中央からやや偏った部分にV字形の線刻を施すもの。D類は、天井部の中央に多条の平行線の線刻を施すもの。D'類は、多条の刻線に類するが、中央部に多条の平行線でないものの線刻を施すもの。E類は、中央部を中心に同心円状の弧線による線刻を施すもの。F類は、中央部にランダムな弧線による線刻を施すもの。G類は、中央部にランダムな直線による線刻を施すもの。H類は、縁辺部に多条の縦方向の平行線による線刻を施すもの。H'類は、縁辺部に多条の横方向の平行線による線刻を施すもの。この他に、『日置荘遺跡』では「鳥足形」のものもあるとしているが、-i9 地区から出土した須恵器には含まれていなかった。

表3 ヘラ記号分類表

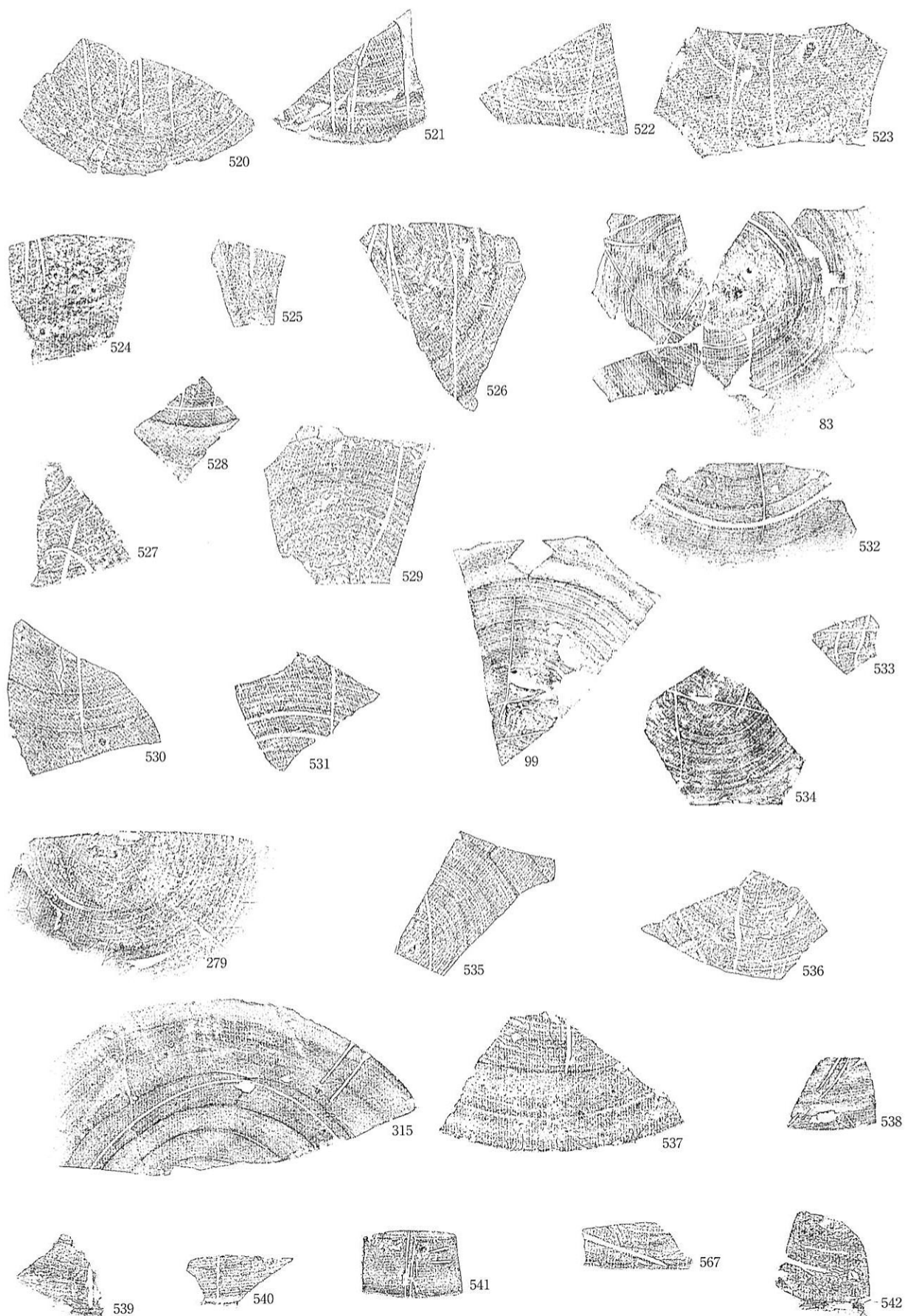
	A類	B類	B'類	C類	D類	D'類	E類	F類	G類	H類	H'類	合計
坏蓋	44	5	0	1	10	0	0	9	5	0	1	75
坏身	9	3	0	0	4	0	0	0	3	9	1	29
不明	13	14	5	1	10	2	1	2	3	2	1	54
合計	66	22	5	2	24	2	1	11	11	11	3	158



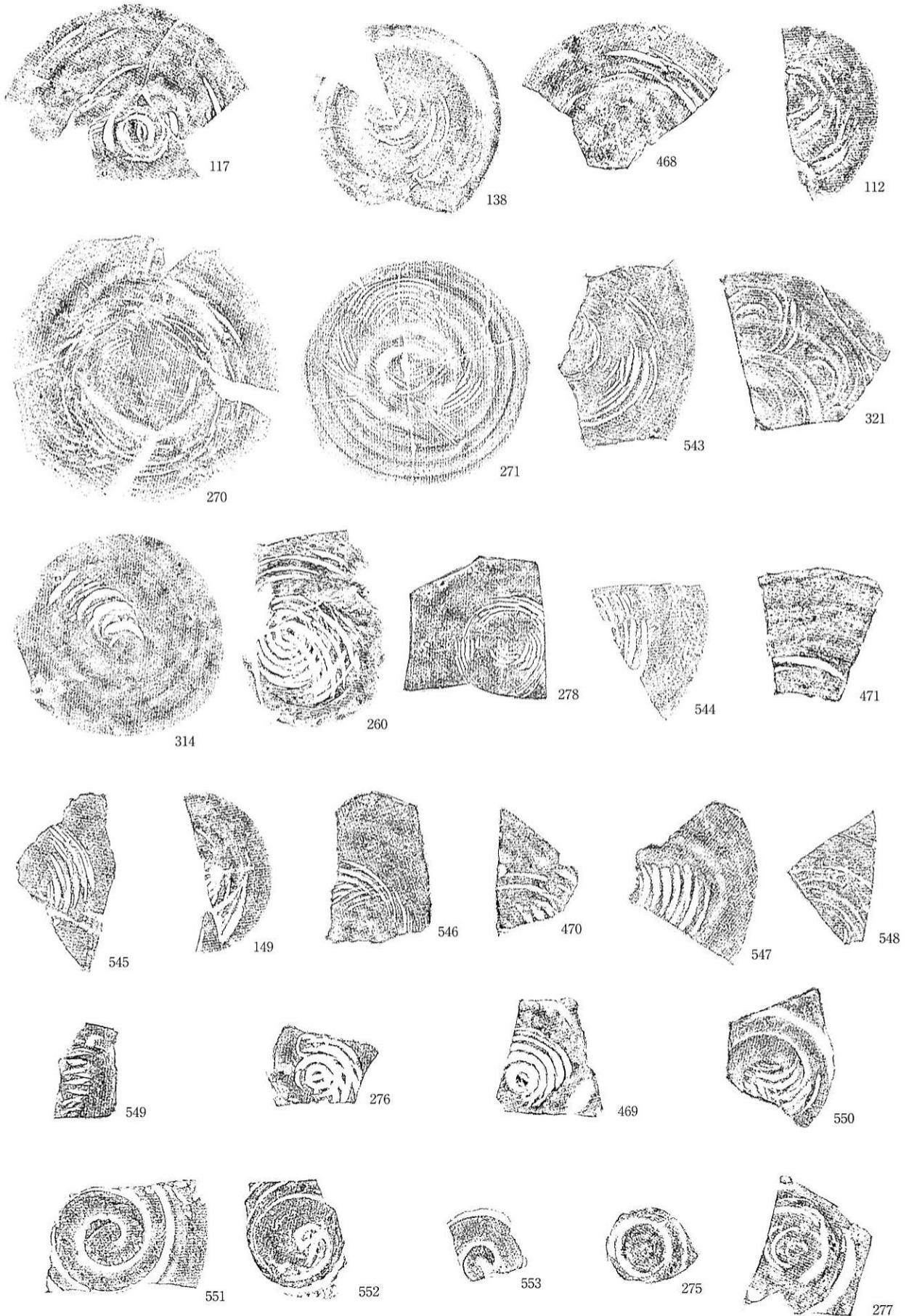
第51図 出土須恵器坏蓋・坏身拓本一ヘラ記号(1)(1:2)



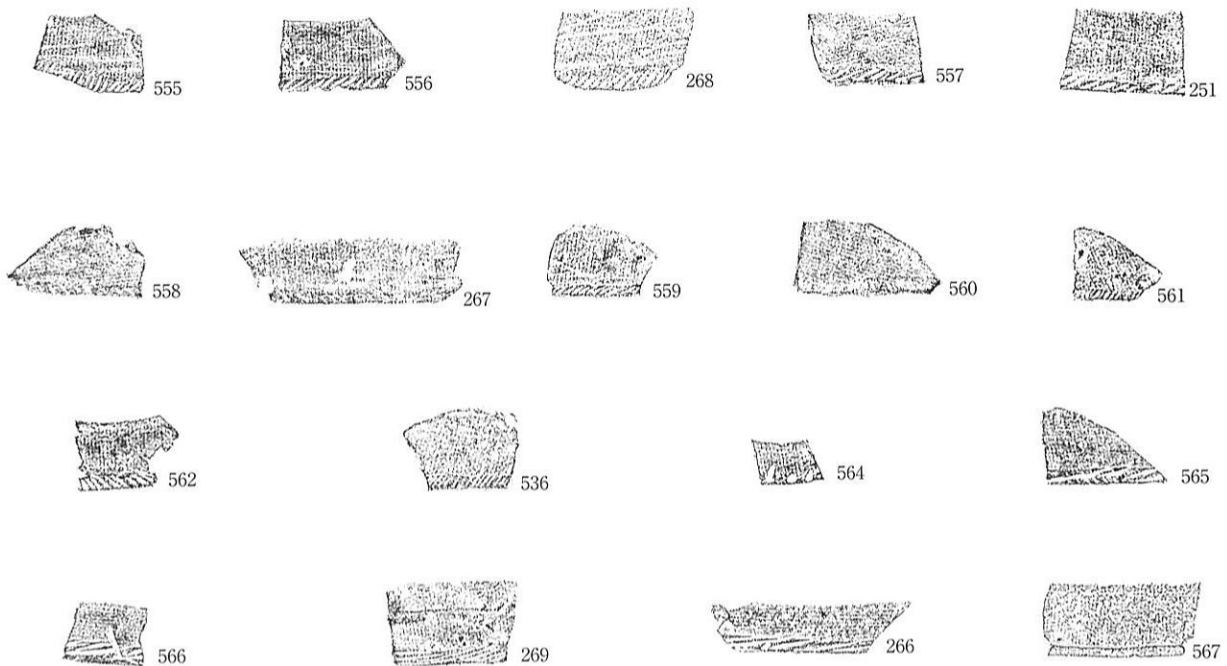
第52図 出土須恵器坏蓋・坏身拓本一ヘラ記号(2)(1:2)



第53図 出土須恵器坏蓋・坏身拓本一ヘラ記号(3)(1:2)



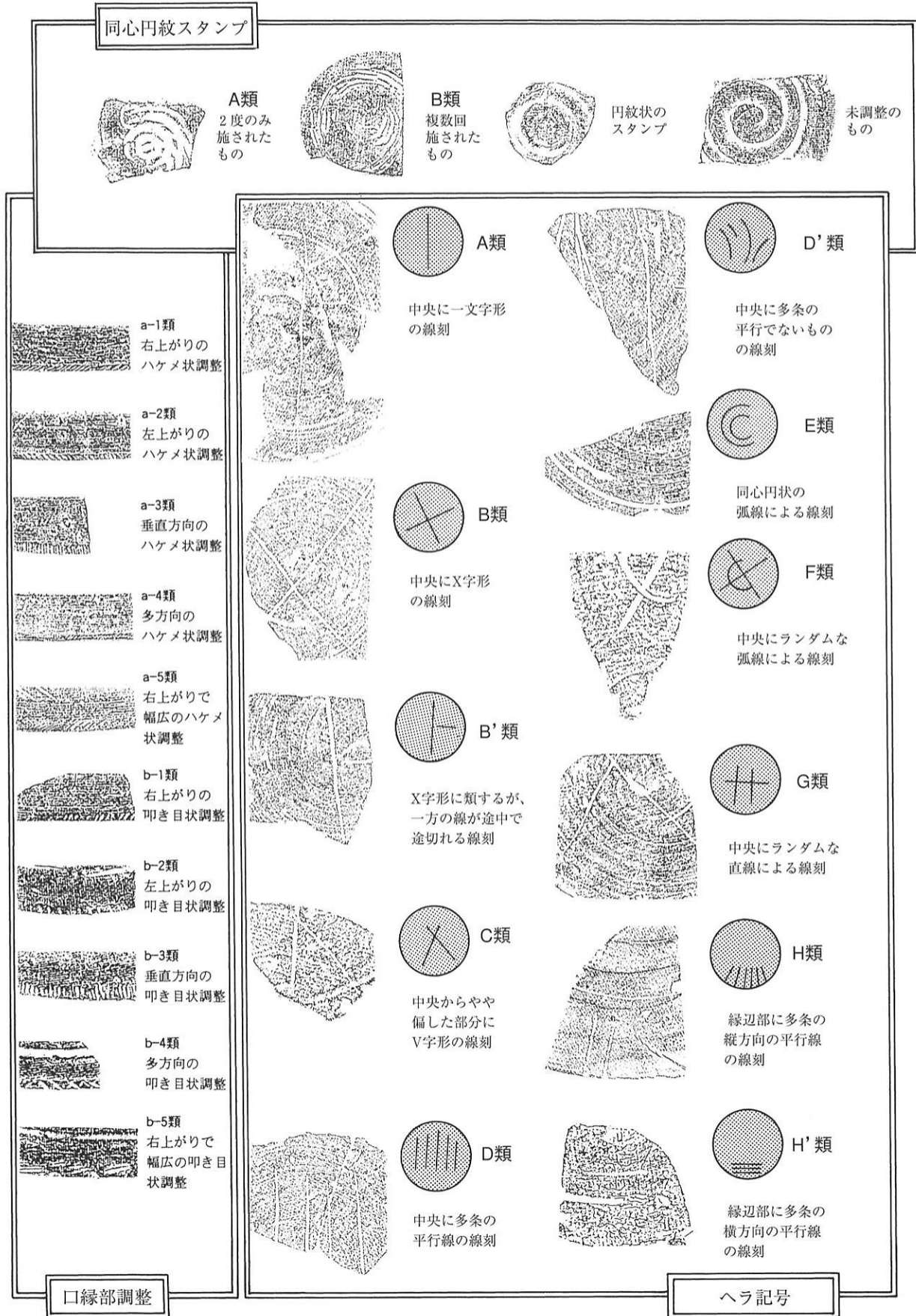
第54図 出土須恵器坏蓋拓本—同心円紋スタンプ他(1:2)



第55図 出土須恵器坏蓋拓本一口縁部調整（1：2）

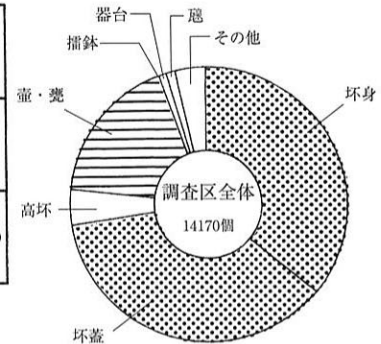
ヘラ記号を有するものの内訳は以下の通りである。A類は66点で、坏蓋44点（253、475～478、480～488、490～501）、坏身9点（121、286、320、479）、坏身か坏蓋か不明のものが13点（469～474、489）である。中でも、469～471は内面に同心円紋スタンプを有する。B類は22点で、坏蓋5点（508、510、511）、坏身3点（111、120、137）、坏身か坏蓋か不明のものが14点（468、502～507、509）である。B'類は坏身か坏蓋か不明のもの5点（512～514）である。512は内面に同心円紋スタンプを有する。C類は2点で、坏蓋1点（515）、坏身か坏蓋か不明のものが1点である。D類は24点で、坏蓋10点（131、261、264、524、525、528）、坏身4点（516、519）、坏身か坏蓋か不明のものが10点（517、518、520～523）である。D'類は坏身か坏蓋か不明のものが2点（526）である。E類は坏身か坏蓋か不明のものが1点である。F類は11点で、坏蓋9点（83、529～532）、坏身か坏蓋か不明のものが2点（527）である。G類は11点で、坏蓋5点（99、535、536）、坏身3点（279）、坏身か坏蓋か不明のものが3点（533、534）である。H類は11点で、坏身9点（315、537～539、541）、坏身か坏蓋か不明のものが2点（540）である。H'類は3点で、坏蓋1点（567）、坏身1点（542）、坏身か坏蓋か不明のものが1点である。567は口縁端部に刻み目状の調整を施すものである。

ヘラ記号を有する須恵器蓋坏の傾向として、A類・B類・D類が多い状況を示している。さらに、F類については坏蓋の比重が多く、H類については坏身の比重が多い傾向がみられる。いずれのヘラ記号も全く同一のものはみられず、類似するものとして分類に当てはめたものもみうけられる。何分、細片が多いため部分的な残存のものが多く、ヘラ記号を分類するのに困難を生じた。機械的に残存部分の刻線の形態を分類したため、A類の検出例が多くなっている。正確な実態把握とはいえないが、細片でもってヘラ記号の全容を把握できないので、やむを得ない処置であると考えている。ヘラ記号を有する須恵器蓋坏は、時期的には須恵器編年のII型式におさまるものである。



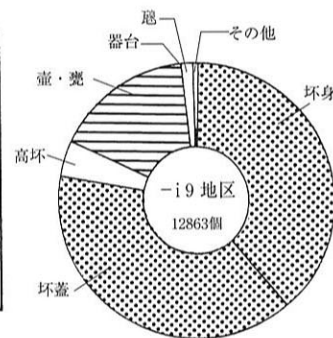
第56図 出土須恵器蓋坏属性分類

A	坏身	坏蓋	高坏	壺・壺	すり鉢	器台	ハソウ	その他	合計
個数	5095	5187	573	2522	110	13	163	507	14170 個
重量	39135.97	36109.73	7865.3	41895.58	1419.9	583.20	1169.40	3749.96	131929.04 (g)



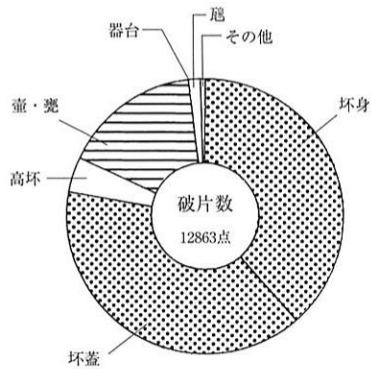
a 調査区全体の須恵器器種構成

B	坏身	坏蓋	高坏	壺・壺	すり鉢	器台	ハソウ	その他	合計
個数	4927	5027	555	2093	—	13	163	85	12863 個
重量	37877.60	34895.65	7671.90	35543.70	—	583.20	1169.40	1162.30	118903.75 (g)

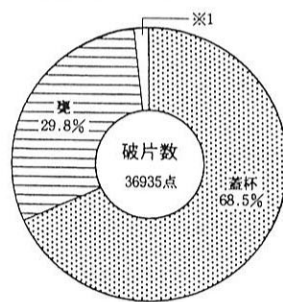


b -i9 地区の須恵器器種構成

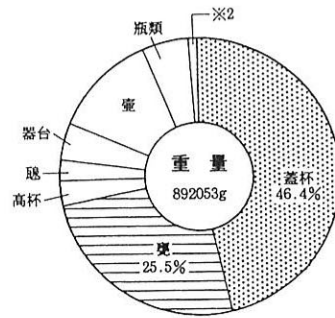
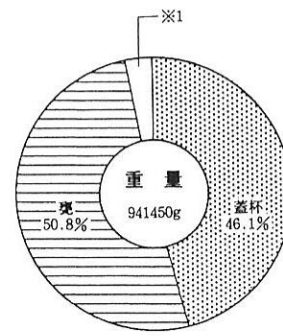
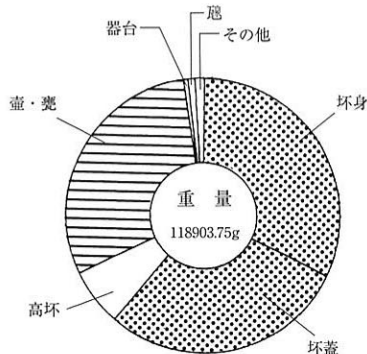
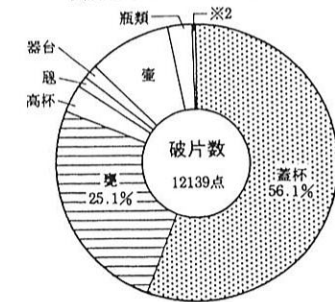
大和川今池遺跡須恵器-i9 地区



日置荘遺跡須恵器案L-1



小阪遺跡H地区須恵器案灰原



※1 高坏・壺・器台・壺・瓶類・鉢・高坏蓋・壺蓋
 ※2 鉢・瓶

第57図 -i9 地区と他遺跡出土須恵器の器種構成比較

b. 同心円紋スタンプを有する蓋坏 (第54図、図版27)

-i9 地区から出土した須恵器蓋坏の中で、内面に同心円紋スタンプを有するものが33点確認された。その内、坏蓋17点、坏身5点、坏身か坏蓋か不明のものが6点である。さらに、扁平なつまみ部を付す高坏蓋が5点確認されている。

同心円紋スタンプを有する蓋坏は、第56図に示すように2種類に分類することができる。

A類は、蓋坏の内面に残る同心円紋スタンプが内面中心部付近で1回ないし2回の押印を行うものである。B類は押印範囲が広範で、しかもその押印回数がA類よりも多いものである。

それぞれの内訳は次の通りである。A類は15点で、坏蓋6点(469、471、549、550、552、554)、坏身3点(138、297、314)、坏身か坏蓋か不明のものが3点(544、545、547)、高坏蓋が3点(274、276、277)である。B類は14点で、坏蓋9点(117、149、260、270、271、468、470、512、543)、坏身2点(112、321)、坏身か坏蓋か不明のものが2点(546、548)、高坏蓋が1点(278)である。

この他に、円紋状のもので、高坏蓋1点(275)、未調整で渦巻き状の粘土紐のつなが目がみられるものは、坏蓋2点(551、553)確認できた。渦巻き状の粘土紐のつなが目がみられるが、その上に同心円紋スタンプを施すものとして坏蓋2点(550、552)、高坏蓋2点(275、277)がある。また、器台坏部の内面に同心円紋スタンプと捉えられる圧痕が残るもの(411)もみられた。

同心円紋スタンプを有する蓋坏の傾向として、A類、B類がほぼ同率で出土している状況がみられる。日置荘遺跡須恵器窯L-1ではA類が多く、鴨谷池遺跡出土坏蓋ではB類が圧倒的に多い傾向がみられるが、-i9地区出土の須恵器蓋坏はその中間の傾向を示すものである。『鴨谷池遺跡』で同心円紋スタンプの時期的推移について、「その出現期であるTK47型式にはA類として現れ、それが次段階のMT15型式の段階にはA類はそのまま存続し、それに加えてB類が出現する。さらに、次段階に同心円紋スタンプの痕跡を有する蓋坏は増加し、そのうちB類が占める割合が増加する。そして、TK43型式からTK209型式の段階にかけては、その主流がA類からB類へと移行してゆく傾向が把握される。」としている。陶邑古窯址群から発生し、群集墳の盛期とともに急激に各地へその分布が広まる状況を読み取ることができる。まさしく、陶邑周辺部に位置する日置荘遺跡須恵器窯L-1から明石市の鴨谷池遺跡と大和川今池遺跡の位置関係がそれを明示しているようである。

同心円紋スタンプは基本的に蓋坏製作技法の一工程の痕跡を示すものとして捉えられている。いかなる過程でその痕跡が残されたのかという点には諸説があるが、ここでは詳述しない。-i9地区出土の須恵器蓋坏では、渦巻き状の粘土紐のつなが目が顕著にみられるものに、同心円紋スタンプを施すものがあることから、必ずしも回転ナデ調整後に押印されるものではないことが認められる。日置荘遺跡須恵器窯L-1では、全ての資料において例外なく回転ナデ調整の後に同心円紋スタンプが押印されている事例とは異なる傾向を示すものである。なお、同心円紋スタンプを有する蓋坏の外面に叩き調整を施したものがみられる点を江浦氏が指摘しているが、-i9地区出土須恵器は細片が多いため外面の調整については照合していない。

c. 口縁部に刻み目状の調整を施す坏蓋 (第55・58図、図版28)

-i9地区から出土した須恵器坏蓋の中で、口縁部に刻み目状の調整を施すものが18点確認された。いずれも坏蓋の口縁端部外面にのみ見られるものである。口縁部に刻み目状の調整を施す坏蓋は、第56図に示すように2種類に大別することができる。a類は、ハケ調整に類似する技法によって残されたも

の。b類は、叩き調整に類似する技法によって残されたものである。さらに、各区分内で細分することができる。

a類のものは12点確認できた。a-1（右上がりのハケ目状調整）は5点（268、555～557、563）、a-2（左上がりのハケ目状調整）は1点（562）である。a-3（垂直方向のハケ目状調整）は確認されなかった。a-4（多方向のハケ目状調整）は5点（267、558～561）、a-5（右上がりでも幅広のハケ目状調整）は1点（269）である。b類のものは5点確認できた。b-1（右上がりの叩き目状調整）は1点（251）、b-2（左上がりの叩き目状調整）は確認されなかった。b-3（垂直方向の叩き目状調整）は1点（564）、b-4（多方向の叩き目状調整）は1点（565）、b-5（右上がりでも幅広の叩き目状調整）は2点（266、566）である。これら以外に、ハケ状工具によってナデ付け状の調整を加えるもの（567）も認められた。

口縁部に刻み目状の調整を施す坏蓋の傾向として、a類が多くみられた。刻み目状の調整を施す坏蓋はいずれも細片のため不明瞭であるが、時期的には須恵器編年のⅡ-3～5型式に相当する。

口縁端部に刻み目調整を有する坏蓋については、『日置荘遺跡』の中で江浦氏が指摘するように、「口縁端部を対象として臨機に行われる特徴的な成形技法の一種」と位置付けている。また、「このような特徴をもつ蓋坏等を生産していた須恵器窯は陶邑窯跡群においても確認できるが、むしろその北側と東側に展開する周辺地域に分布が集中している点が看取される」。また、「当該期の須恵器生産における需要と供給の関係を検討する手がかりとしてはかなり有効な特徴である」とし、大阪府下における口縁端部に刻み目調整を有する須恵器一覧表を掲載している。この表（『日置荘遺跡』V-1-表6）では、大和川今池遺跡の既往の調査で出土した須恵器蓋坏も組み込まれており、遺跡の性格として「消費地」としている。大和川今池遺跡（その2）では460井戸から出土した須恵器坏蓋の口縁部外面に刻み目を持つもの（a-1）がみられる。また、近郊に位置する松原市樋野ヶ池窯跡からも刻み目を持つものが出土している。

大和川今池遺跡は泉北丘陵から上町台地に伸びる沖積台地状に立地し、まさに陶邑窯跡群から北側に展開する周辺地域である。「群集墳盛行期に陶邑周辺部に新造された須恵器窯からかなりの割合で確認される点」、さらに、「陶邑窯跡群から北側の比較的平坦な地形を有する地域へと須恵器窯の分布が広がっていくのは、人員確保のために意図的に既存の集落付近へ造営したためである」としていることから、大和川今池遺跡周辺における須恵器窯の存在の可能性がうかがえるものと考えられる。憶測の域を出るものではないが、須恵器蓋坏に著しく偏重する器種構成や日置荘遺跡須恵器窯L-1とはやや異なる同心円紋スタンプの押印事例などは、大和川今池遺跡周辺の独自性を示しているものではないのだろうか。

d. 集計および分類の方法（第56・57図、表3）

大和川今池遺跡（その3）では、-i9地区で出土した遺物が破片数にして23,625点出土しており、調査区全体の出土遺物の77%をしめる。中でも、須恵器と土師器が突出しており、須恵器・須恵質土器の87%、土師器・土師質土器の83%を-i9地区で出土した遺物がしめている（表2）。これまでも述べている通り、（その3）では第5面の-i9地区が特異的な状況を示している。整地土として搬入されたものと推定されるが、実態としていかなる状況のものであるのかを究明するため、出土遺物を観察して基礎的なデータを提示することにした。基礎作業としての分類を行うにあたり、先学の分類に準拠する

ものとし、さらに、(その3)で出土した須恵器の検討について、日置荘遺跡におけるⅢ調査区須恵器窯L-1出土遺物の基礎分析資料が有効な資料であるという観点から、同遺跡の分類をおおむね基準にすることとした。

日置荘遺跡における基礎的分類作業では、「形態による細分作業および技法的特徴の属性分類作業を基点として行い、それを基準として破片数、重量、口縁残存度を計測した。」としている。-i9地区出土遺物は大半が細片であり、口縁部が欠損するものの比率も高かった。このため、個体数推定に最も有効とされる口縁残存度の計測を行わなかった。資料的に不明瞭になるが数量比較する資料として破片数と重量を採用することにした。

また、日置荘遺跡における基礎的分類作業では、「最も出土数の多い蓋坯のうち、特徴的な技法を有するものをピックアップして個別に検討」を加えている。須恵器蓋坯の分類については、全面的に準拠するものとした(第56図は『日置荘遺跡』分析・考察編のV-1-図6に追加、改定したものである)。日置荘遺跡におけるⅢ調査区須恵器窯L-1出土遺物の基礎分析は、6世紀代の陶邑周辺の須恵器窯の生産様相を的確に提示しており、検討された事例は数量的にも具体的な須恵器窯の緻密な解析資料である。-i9地区から出土した須恵器は、これらの資料に類似する点が幾つかみられる。中心となる須恵器窯のデータと比較検討することにより、大和川今池遺跡で出土した須恵器の特質とその傾向を図りうるものと考えられる。

このように集計し、分類した基本的なデータを基に、日置荘遺跡須恵器窯L-1出土の須恵器、小阪遺跡H地区須恵器窯灰原⁴⁾出土の須恵器と比較すると、以下のような事項があげられる。

- ・出土須恵器の器種構成については、日置荘遺跡須恵器窯L-1と小阪遺跡H地区須恵器窯灰原に比べ、破片数、重量においては圧倒的に蓋坯の占める割合が多いことがわかった。
- ・出土須恵器の器種構成は蓋坯類と甕・壺類を合わせると約9割に相当し、日置荘遺跡須恵器窯L-1に近似した状況が看取される。
- ・対照比較はできなかったが、破片ではあるが溶着資料がいくつみられ、その溶着資料から日置荘遺跡須恵器窯L-1出土の須恵器と同様に坯蓋を坯身にかぶせた状態で焼成しているものもみうけられた。
- ・同心円紋スタンプを有する蓋坯の傾向として、日置荘遺跡須恵器窯L-1ではA類が多く、鴨谷池遺跡出土坯蓋ではB類が圧倒的に多い傾向がみうけられるが、-i9地区出土の須恵器蓋坯はその中間の傾向を示し、わずかな時期差がみられる。
- ・同心円紋スタンプを有する須恵器坯蓋の製作技法として、渦巻き状の粘土紐のつなぎ目が顕著にみられるものに、同心円紋スタンプを施すものがあることから、必ずしも回転ナデ調整後に押印されるものではなく、日置荘遺跡須恵器窯L-1と異なる見解が生じた。

おおまかではあるが、以上が大和川今池遺跡で出土した須恵器の特質とその傾向である。

e. 大和川今池遺跡と須恵器窯(第58図)

-i9地区から出土した須恵器から、わずかな事例であるが相違点と類似点をみつけることができた。絶対的に資料数が少ないため、実情にそぐわないものも含まれていると思われるが、今後の研究課題としておく。前項でも確認したが、大和川今池遺跡の立地条件、時期的差異、蓋坯の同心円紋スタンプにみられる製作技法の違いなどもふくめ、陶邑周辺部における須恵器窯の様相とは若干異なる要因がみうけられる。大和川今池遺跡周辺の独自性を示しているものとして、陶邑窯跡群から北側の比較的平坦な

地形を有する地域へと広がる須恵器窯の分布域のひとつに、大和川今池遺跡も含まれる可能性を示唆しておきたい。陶邑の位置する泉北丘陵の北側で、上町台地に続く沖積台地に位置する大和川今池遺跡は、その周囲を百舌古墳群、古市古墳群、さらに北側に位置する長原古墳群、そして、大和川今池遺跡周辺に点在する古墳跡は、その可能性のひとつであることを想起させるものである。今後の調査成果に期待したい。

以上、日置荘遺跡須恵器窯L-1出土の須恵器の基礎分析資料を基に、大和川今池遺跡の-i9地区出土の須恵器についての検討を試みた。-i9地区で出土した須恵器は、整地土と考えられる堆積土中の遺物であり、不確定要素を多く含み、日置荘遺跡須恵器窯L-1出土の須恵器とは、まったく検出状況が異なるものであったが、その相違点と類似点をあげることはできた。しかしながら、時間的制約から十分に検討できなかったことで、問題点は多いと思うが、今後の課題として自らに責を負うものとした。

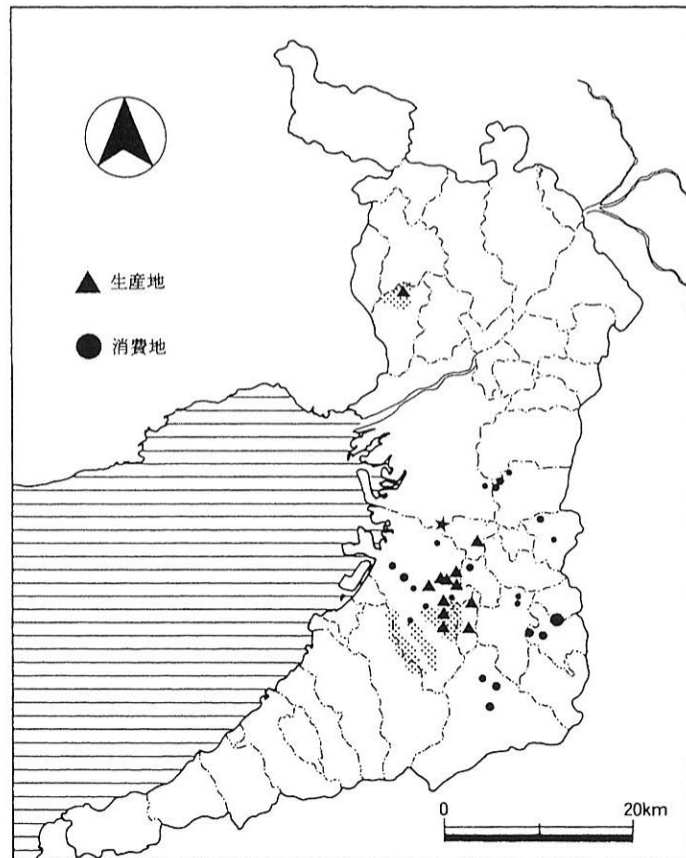
なお、本稿をまとめる過程で当センターの江浦 洋氏に多くのご教示を賜った。心からお礼申し上げます。

註)

- 1) 江浦 洋「陶邑周辺部における須恵器生産点描」『日置荘遺跡 分析・考察編』 1995 大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター
- 2) 江浦 洋「古墳時代窯跡出土須恵器の技術的特徴」『日置荘遺跡(その3)』 1988 大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター
- 3) 江浦 洋「同心円文スタンプを有する須恵器蓋坏の製作技法」『鳴谷池遺跡』 1986 明石市教育委員会・同志社大学考古学研究室
- 4) 大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 『小阪遺跡』 1992

(参考文献)

- ・ 大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 『陶邑V』 1979



第58図 口縁部端部に刻み目を有する須恵器の分布

(『日置荘遺跡』より一部修正)

7. -i9地区の出土遺物からの検討 —まとめにかえて—

-i9地区から出土した遺物は、須恵器編年のⅠ-5～Ⅱ-4型式のものが主を成すことがわかった。-i9地区という比較的狭い範囲において、その検出密度は著しく、足の踏み場もないくらいであった。この他、多くの遺物を検出した第5面の土器溜りも、地面の窪みに5-3層が入り込んだものと考えられる(図版5)。同様に遺構として検出したが、地面の窪みであったり、遺構の埋土として5-3層が入り込んだと解されるものもみられた。このような遺構から検出した遺物も考慮して検討すると、出土した須恵器の中でも、坏蓋、坏身の量が突出しており、また、土師器では把手と高坏脚部が多くみられるなど、やや検出器種に偏りが認められる。この他、溶着痕をもつものが多く、窯壁と思われる焼土塊などもみられるなどの特色もあげられる。須恵器の蓋坏については製作技法における分類を試み、時期的、地域的に限定される技法の特徴であることの事例を得た。

平成9年度調査の(その2)では、第6面で古墳時代の遺物を多く含む井戸を調査区の東半および拡張区で検出している。特に、第6面427井戸から須恵器の甕体部に窯変した資料が出土している。その他、(その1・その2)においても溶着資料や炉壁片と考えられる資料が多くみられた。(その2)の須恵器資料の胎土分析では陶邑産であるという結果が出ており、陶邑の生産集落から各地の消費地の間に介在する須恵器供給の中継基地ではないかとしているが、今回の調査で出土した須恵器の検出内容などから、大和川今池遺跡周辺における須恵器窯の存在を示唆できるものと思われる。

-i9地区の土地利用の変化として、次の様に考えることができる。-i9地区に西接する(その2)の第6面の東端部では、傾斜変換線を検出している。この傾斜変換線より東側は(その3)では、さらに緩やかな傾斜を成している。-i9地区はこの緩やかな傾斜を成す肩口にあたる区域である。緩やかな傾斜地は、大河川などの氾濫原の様相を示すもので、乾・湿地の時期もあるが、湿地化することが多い地形であったということが出来る。これは、(その3)の第5面で検出された遺構として、生活にともなう遺構はあまりみられず、不定形土坑、ピット状土坑などのように性格の不明瞭なものが多いことから理解できる。このような土壌であった第5面に対して、土地開発すべく整地土として、5-3層相当の土砂などが搬入されたものと考えられる。第4面の耕作面が形成されるまでの間に、幾度かの整地行為や土地開発が繰り返されたことがうかがえる。(その2)における第6面の緩傾斜の土層層順では、土層の堆積が限定されることを根拠として、調査区の東半などで整地行為があり、また、この整地行為が広範囲にわたるものであることを指摘している。この結果をふまえると、(その3)の調査で、-i9地区上層の第4面は平安時代頃の耕作面であることから、古墳時代後期から平安時代にかけての時期に、大規模なこの地域の土地開発や整地行為が行われたものと推測できる。(その3)内において整地土の分布範囲を見極めたかったが、何分にも現代の攪乱が著しく、確認することはできなかったことが悔やまれる。

では、どこからこの整地土(5-3層)は運ばれてきたのだろうか。調査地周辺の既往の調査では、古墳時代の遺構、遺物を含む遺構面が確認されている。(その2)では、5世紀～6世紀の井戸、土坑、ピットなどを検出している。中でも、井戸、土坑などからは人為的な埋納行為にともなう遺物が多く出土している。しかしながら、掘立柱建物や竪穴住居などの集落域を決定付ける遺構は確認されていない。本調査区の南側に位置する今池処理場内の既往の調査では、古墳時代中期頃の掘立柱建物跡と竪穴住居を検出しているが、主に井戸と溝がその特色を示す傾向にあり、集落域を決定付ける遺構の構成が不明瞭で集落としてのまとまりに欠けるようである。おそらく、古墳時代の生活面を含む土層が削平された

り消失して、その集落の全容が把握できないのではないかと思われる。近接する既往の調査区を含む地域で土地の削平が行われ、整地土として-i9地区に運び込まれたと考えることが出来るのではないだろうか。

古代においては、難波宮から南延伸する「難波大道」が当遺跡内を貫き、また、日本書紀や古事記に記載されている古代の溜池である「依網池」が近接し、地形的にも旧西除川の段丘状に位置するなど、立地的にも（その2）からその南側の区域に古墳時代の集落域の中心があったと予想される。そのような集落域の様相がうかがえないほど、中世の耕作面が成立する以前に行われたこの地域における土地開発や整地行為が大規模であったと推測することができる。古代から中世へと移行する中での、この地域での土地利用の変化を示すものである。

-i9地区の出土遺物からの考察として、大和川今池遺跡周辺において須恵器窯の存在を想起させる傾向がみられた。また、古代から中世にかけての時期に、大規模な土地利用の変化が認められ、それとともに削平、消失した古代の遺構があるだろうことがうかがえた。この消失した遺構の中にいかなるものが在ったのかは、今では復原するすべもない。ただ、今回の調査で出土した-i9地区の遺物が、このような問題点を解く手がかりとなり得るものであると確信したい。

第2節 (その4) 調査区の成果

1. 調査の方法

(その3)と共通する調査方法は第3章 調査の方法 に述べるところである。ここでは(その4)内での地区分けと層、面の対応について簡便に記すこととする。

最初に、大区画としてほぼ中央部で西と東に分け「西地区」、「東地区」と呼称した。また後に、新たに調査区として追加された西端の地域を、「拡張地区」と呼称している(第60図)。

遺物の取り上げは、当研究センター既往の大和川今池遺跡の発掘調査と同様、調査規定に則った10m区画の割付をもとに行っている(第6図)。小区画である10m区画の名称・位置は(第7・60図)に表している。尚、調査した層や遺構面の数は各調査区によって異なっている。よって、本報告では遺構面を整理して報告する。現地調査において各調査区で検出して名付けた層及び面と、本報告での層順との関係は表4にて対応させている。

2. 基本層序(第60図、図版31)

第1層

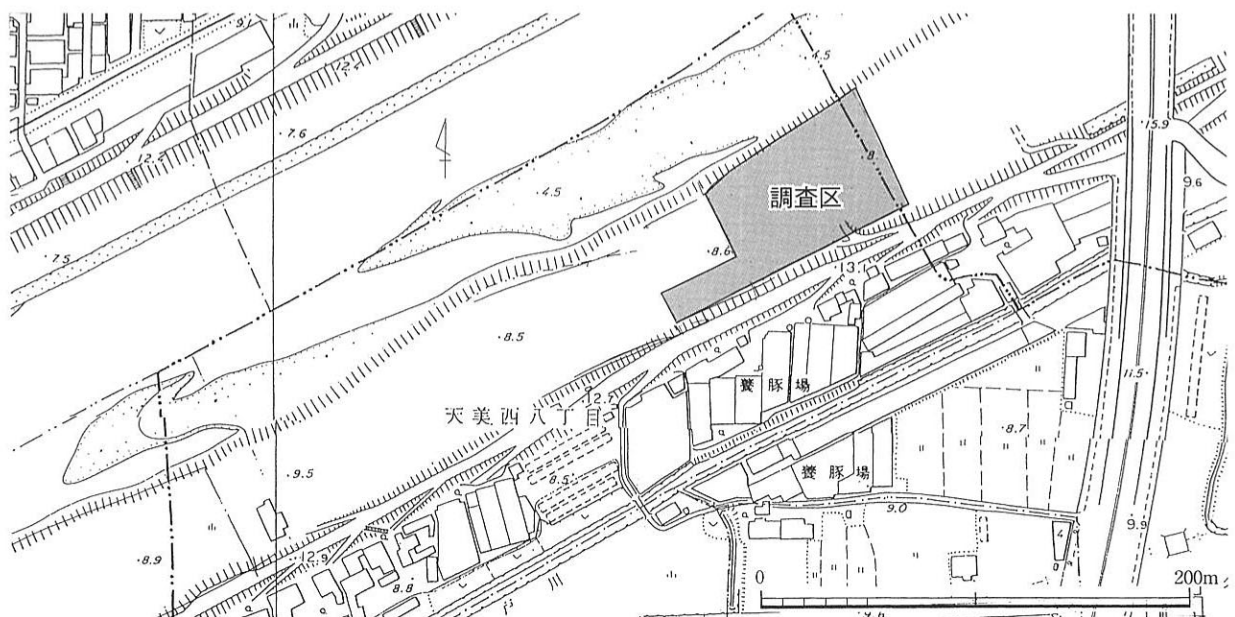
近・現代の耕作土と、その上に現在の河川敷を形成する整地土が堆積する。整地土には、第2層「洪水砂」が土壌化した砂礫が主に使用されている。この層の上面、つまり現地表面が第1面となり、大和川の河川敷を形成している。層の厚みは10cm~95cmを測る。調査区全域に分布する。

第2層

2.5Y 5/2 暗灰黄色細砂に代表されるラミナが顕著に観察される砂層で形成される。近・現代の遺物を含み、西地区と東地区の北側半分に分布する。第6層までもえぐる部分がある。

大和川が増水した際に上流の土砂が下の層を削り堆積したものである。(これを当調査では便宜上「洪水砂」と呼称している。)

西地区では、洪水砂の間にも耕作面をはさむ個所もあることから、単一の時期に堆積した層ではなく、



第59図 (その4) 調査区位置図

幾度かの川の増水に際し、砂が上流より運ばれることを繰り返した結果、形成されたと考えられる。層の厚みは10cm～80cmを測る。

なお、大和川は1704年（宝永元年）に付け替えられ、当地を流れることとなった。第2層直上となる第2面より上の耕作面は大和川と平行もしくは垂直な鋤溝で構成され、第2層以下の耕作面は、正方位にのった鋤溝で形成されている。

第3層

中世後期頃から近世前期頃にかけての耕作土と考えられる。2.5Y 7/8 黄色 + 2.5Y 7/2 灰黄色粗砂混シルト（黄色はFe）に代表される。この層は拡張地区にはほとんど遺存しない。鉄分沈着層が観察でき、砂混シルトと粘性シルト層の互層で形成される。層の厚みは20cm～60cmを測る。東地区では下の層と不整合な部分もあり、耕作時の踏み込みによって土壌が攪拌され形成されたと考えられる。

第4層

中世、主に前期の耕作土と考えられる。7.5Y R 4/1 褐灰色細砂混粘性シルトに代表されるやや粘性のシルト層である。部分的に2層に分割できる。層の厚みは5cm～20cmである。

第5層

古墳時代から中世前期の遺物を含む包含層である。7.5Y R 3/1 黒褐色粘性シルト層に代表される。各調査区に通有に見られる層である。砂礫の含み具合で部分的に2層に分層される。層の厚みは10cm～15cmを測る。

第6層

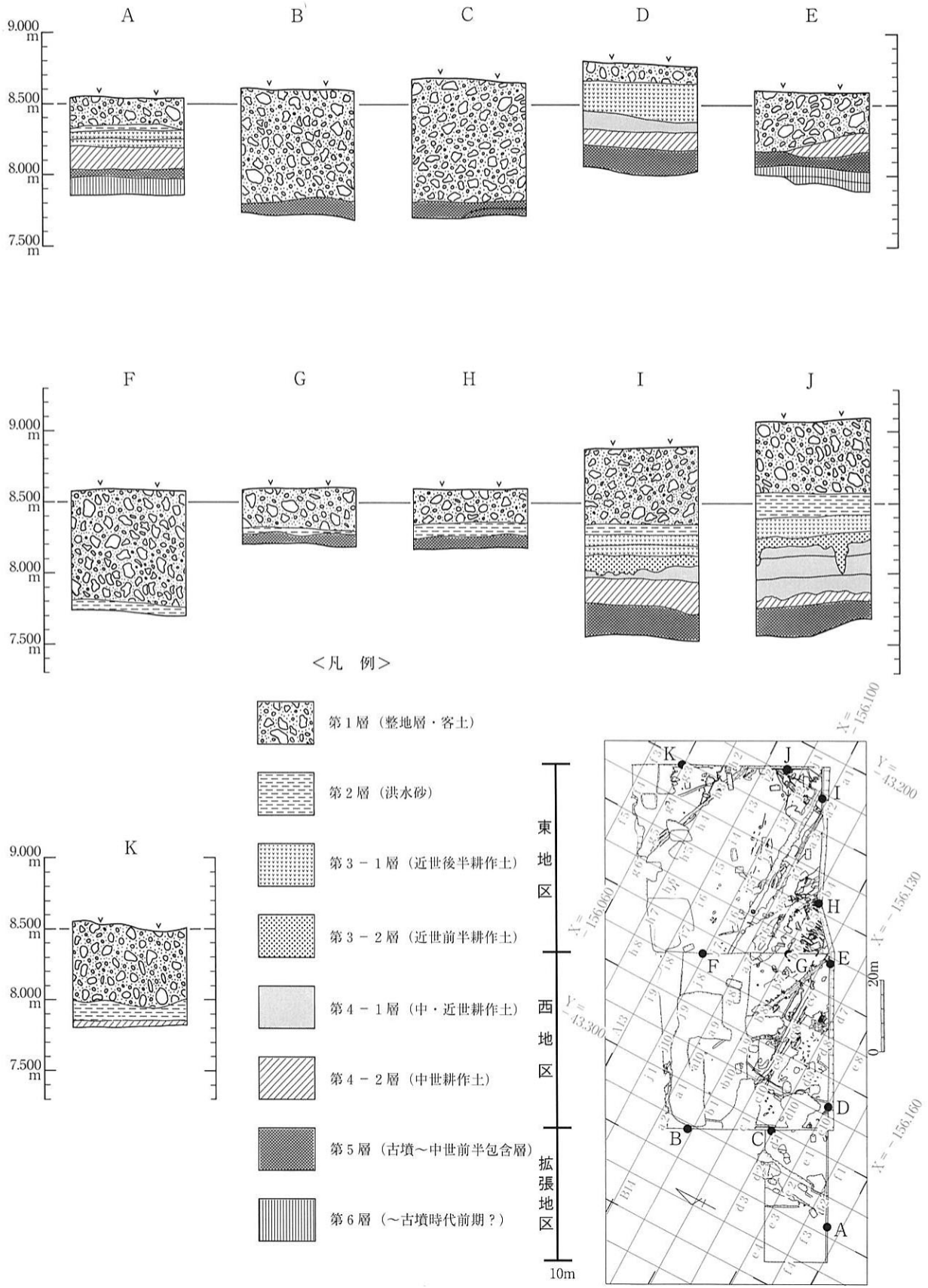
5Y R 5/2 灰褐色粗砂混極細砂～シルトに代表される層である。遺物の数は非常に少なく、混入の可能性も否定できず、断定はできないが、古墳時代前期遺物包含層と考えられる。層の厚みは10cm前後を測る。

第7層

黒褐色シルトと2.5Y 5/3 黄褐色砂礫との混濁層である。地山と考えている。層の厚みは10cmを測り、以下の黄色砂礫層へと続く。

表4 （その4）各地区調査面・層対照表

本報告面・層	西地区調査時名称	東地区調査時名称	拡張地区調査時名称	主要遺構	時代
第1面	第1面	第1面	第1面	現地表面	現代
第1層	—	—	—	整地層(機械掘削)	現代
—	第2面	—	—	鋤溝群1	現代
第2層	第1層(洪水砂)	第1層(洪水砂)	砂層	—	近世末以降
第2面	第3面	第2面	第2面	鋤溝群2	近世後(1704年以降)
第3-1層	第2層	—	—	—	近世
第3-1面	第4面	第2面にて検出	第2面にて検出	鋤溝群3	近世前半(1704年以前)
第3-2層	第3層	第2層	—	—	中世・近世
第3-2面	第5面	第3面	第2面にて検出	鋤溝群4	中世・近世
第4-1層	第4層	第3層	第2層	—	中世・近世
第4-1面	第6面	第4面	第3面	溝10、13、111上層	中世
第4-2層	第5層	第4層	—	—	中世
第4-2面	第6面	第4面にて検出	第3面にて検出	溝22、24、111	中世前半
第5層	第6層	第5層(黒色シルト)	第3層	—	古代?中世前半
第5面	第7面	第5面	第4面	大半の遺構	古墳?古代・中世
第6層	第7層	第6層	第4層	—	古墳前期?
第6面	第8面	第6面	地山直上	倒木痕、土坑192	古墳前期以前?



第60図 (その4) 基本層序柱状図

3. 遺構と遺物

第1面

第1面は基本層序でも述べた通り、現地表面であり、大和川の河川敷となっている。この面は各地区とも一様に存在している。T. P. +8.60m前後を測る。

第2面（第61図、図版32）

第2面は第1層洪水砂上に形成された耕作面である。大和川と直交もしくは平行する鋤溝（鋤溝群2）が検出されている。T. P. +8.50m前後を測る。

鋤溝の埋土には土壌化がそれほど進んでいない砂が堆積していた。

この面は、大和川の増水時の河川活動により、西地区と東地区の北半分を削り取られている。西地区では部分的に2面に分かれた。（平面図は下面のみ掲載）

遺物は鋤溝から土師器片や近世以降の陶磁器片が若干出土している。

溝201、202（第62図、図版33）

溝201は拡張地区中央を南から北方向に正方位をとり流れる溝である。長さ20.0mを検出した。南側は大和川堤防下の調査区外へ延び、北側は（その3）調査区へ続くが、攪乱坑にて削平されて消失している。幅7.5m、深さ0.48m～0.55mを測る。

溝202は溝201の最下層の礫部分にあたる。遺物は古墳時代から中世にかけての遺物も多く含むが、18世紀前後の染付、京焼風陶器碗等が出土している。

調査当初、溝201形成以前の別の遺構と考えたが、染付等、同時期の遺物を含むため、溝201の堆積の一部と思われる。

第2層、第2面出土の遺物（第63図、図版44）

第2層（洪水砂）から1～5、7、8の遺物が出土している。

1は京焼風陶器碗である。見込みに楼閣山水文を描く。17世紀後半の製品である。外面底に刻印をおす。2は17世紀前半代の唐津焼段皿である。3は朝鮮王朝李朝粉青沙器である。外面の削りが鋭く、見こみに方形の目跡が見られる。16世紀後半～17世紀初頭頃の製品である。4は波佐見焼染付碗である。18世紀前半の製品である。5は龍泉窯系碗である。高台内までほぼ全面に施釉している。15世紀後半の製品である。6は東地区南北セクション出土の景德鎮白釉皿である。16世紀後半～17世紀初頭の製品である。7は雷文帯を有する龍泉窯系の青磁碗。15世紀前半代の製品である。

8は日本陸軍の鉄砲玉である。葉莢がかぶさっている。

9、10は溝202出土で、9は京焼風陶器碗である。外面に楼閣山水文を描く。17世紀後半の製品である。10は漳州窯系青花碗である。見こみに折花文を描く。高台部には離れ砂が付着する。16世紀末～17世紀初頭の製品。11は溝201出土の緑釉碗である。胎土は粗く、釉は緑味が濃い。

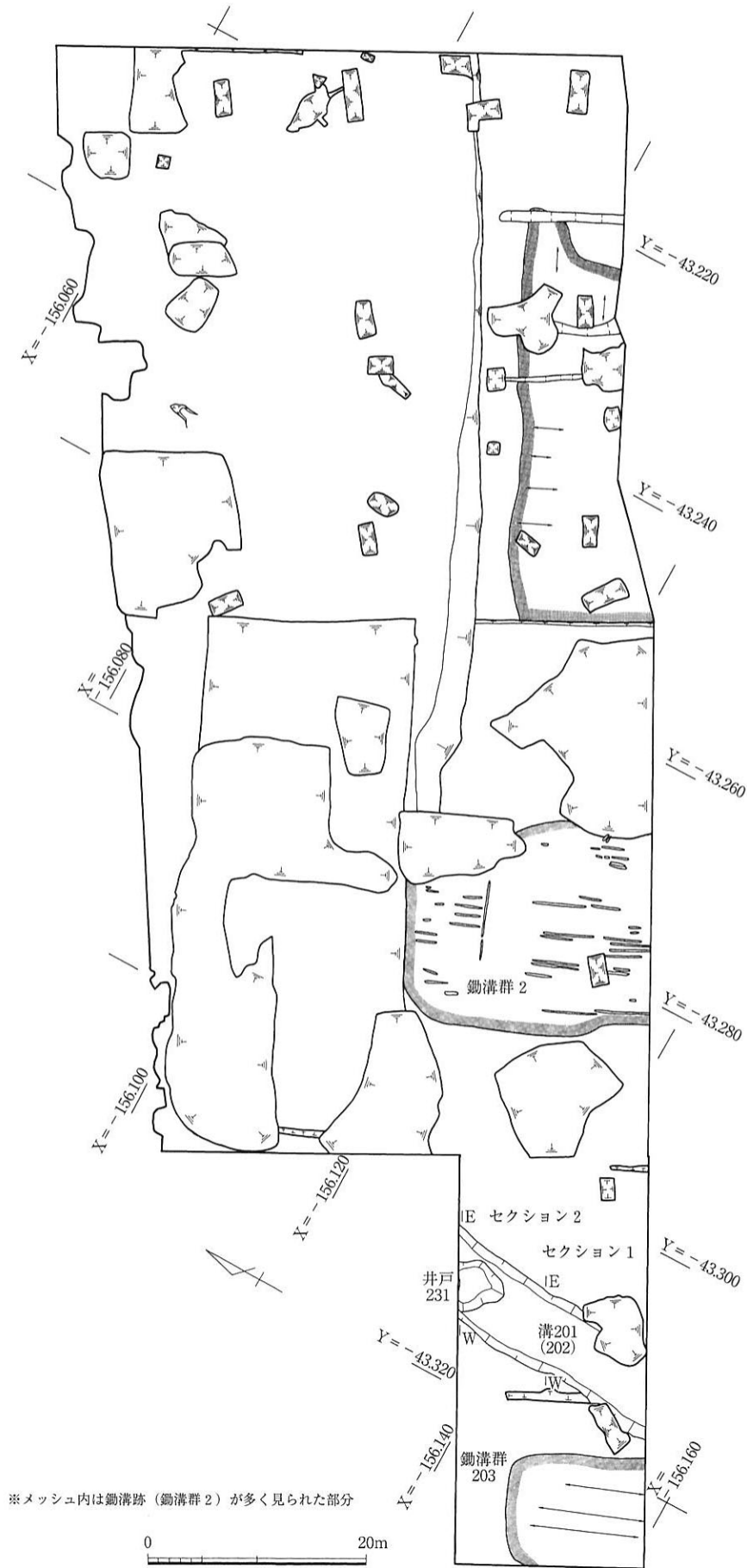
第3面

第3面は、中世・近世の耕作面である。堆積の違いによって、さらに2面に分けることができた。この面も北側半分を大きく第2層によって削平されている。T. P. +8.20～+8.35m前後を測る。

第3-1面（第65図、図版33）

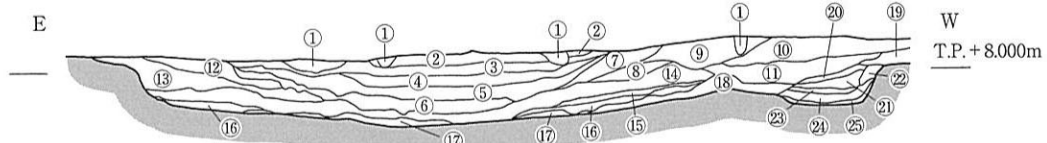
第3-1面の耕作面は西地区に顕著にみられるが、東地区においては東隅に見られるだけで、拡張地区に至っては存在しない。

東西南北の正方位に整合する方向で畝溝や鋤溝（鋤溝群3）を検出している。



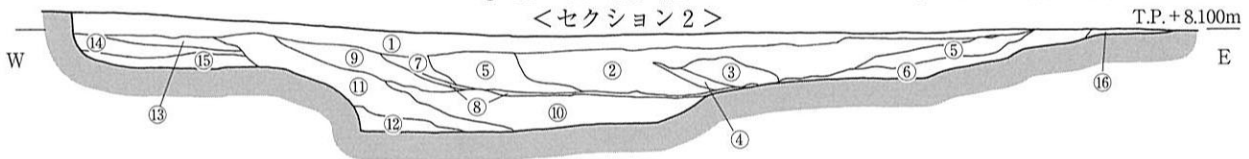
第61図 第2面全体図

<セクション1>

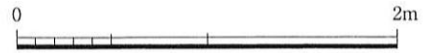


- | | | |
|--|--|------------------------|
| ① 攪乱 | ⑦ 7.5GY 6/1 緑灰色 粘土 | ⑮ 5GY 2/1 オリーブ黒色 粘性シルト |
| ② 5G 4/1 暗緑灰色 シルト | ⑧ 5Y 6/1 灰色 粘土 | ⑯ 7.5Y 6/1 灰色 粘土 |
| ③ 10Y 6/2 オリーブ灰色 細砂 | ⑨ 2.5Y 6/3 にぶい黄色 シルト | ⑰ 5Y 7/1 灰白色 粗砂礫 |
| ④ 7.5Y 7/1 灰白色 粘性シルト
(10YR5/6黄褐色斑点多く入る) | ⑩ 2.5Y 5/3 黄褐色 砂 | ⑱ 2.5Y 5/1 黄灰色 粘土 |
| ⑤ 7.5Y 7/1 灰白色 砂
(2.5Y6.4にぶい黄色斑点少し入る)
(4層と比較して少し砂が少なく認められ、2.5Y6/4も少なく薄くなる) | ⑪ 10YR 7/4 にぶい黄褐色と10YR4/2灰黄褐色
粘土がブロック状に入り混じる | ⑲ 2.5Y 7/1 灰白色 粘性シルト |
| ⑥ 2.5Y 3/2 黒褐色粘土と2.5Y5/4黄褐色粘土
(5Y2/1黒色礫層 5Y2/1粘土がブロック状に混じる どこかを掘削した土を埋めたようだ) | ⑫ 7.5Y 6/1 灰色 粘性シルト
(2.5Y6/4にぶい黄色の斑点が多く認められる) | ⑳ 10YR 6/1 褐灰色 粘性シルト |
| | ⑬ 7.5Y 6/1 灰色 粘性シルト
(10YR5/6黄褐色の斑点が少しある) | ㉑ 2.5Y 6/1 黄灰色 シルト |
| | ⑭ 10Y 6/1 灰色 粘土 | ㉒ 10YR 6/1 褐灰色 粘土 |
| | | ㉓ 10YR 5/1 褐灰色 シルト |
| | | ㉔ 10YR 4/1 褐灰色 粘土 |
| | | ㉕ 10YR 6/1 褐灰色 細砂 |

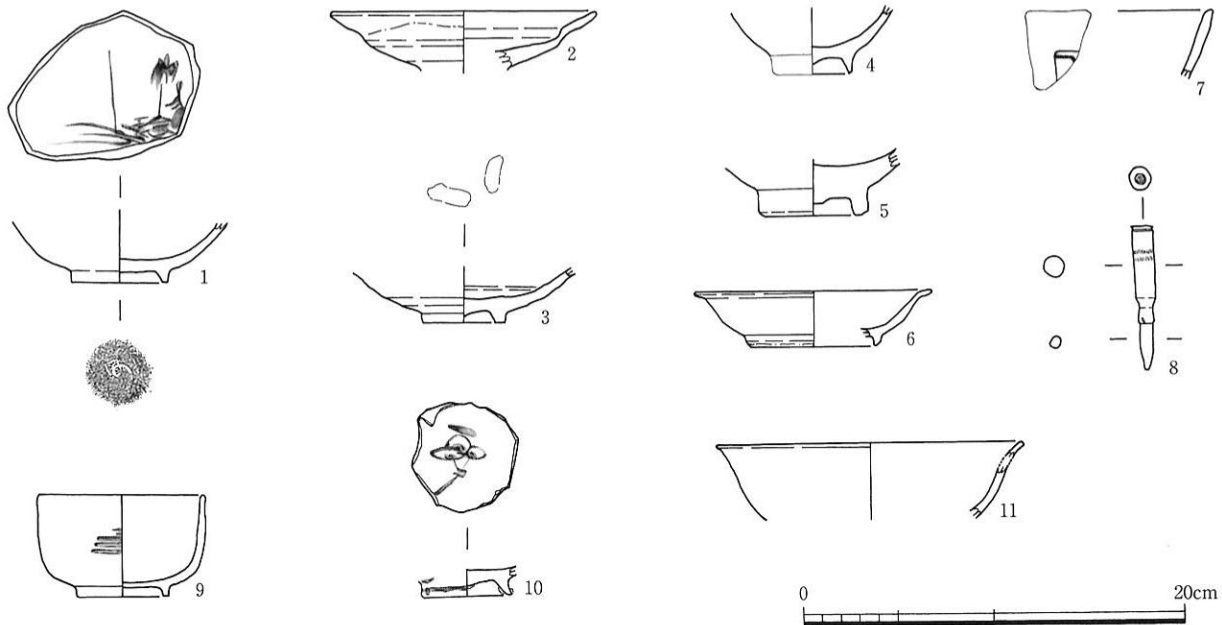
<セクション2>



- | | |
|--|--------------------------|
| ① 10Y 5/2 オリーブ灰色 細砂 | ⑨ 5Y 5/1 灰色 粘土 |
| ② 2.5Y 2/1 黒色粘土と2.5Y5/1黄灰色粘土の混合
(5Y6/1灰色粘土ブロックと10YR6/3にぶい黄橙色砂礫が混じる) | ⑩ 10BG 4/1 暗青灰色 粘土 |
| ③ 2.5Y 5/3 黄褐色 中細砂 | ⑪ 7.5Y 5/1 灰色 粘性シルト |
| ④ 2.5Y 5/2 暗灰黄色砂礫に少し5Y6/1灰色粘土ブロックを含む | ⑫ 7.5Y 5/1 灰色 粘土 |
| ⑤ 2.5Y 5/3 黄褐色 中細砂 | ⑬ 2.5Y 5/1 黄灰色 粘性シルト |
| ⑥ 5GY 5/1 オリーブ灰色 シルト | ⑭ 2.5Y 4/1 黄灰色 粘土 |
| ⑦ 7.5Y 5/1 灰色 粘土 (2.5Y4/1黄灰色の変色有り) | ⑮ 5Y 3/1 オリーブ黒色 細砂 |
| ⑧ 5Y 5/2 灰オリーブ色 細砂 | ⑯ 2.5GY 6/1 オリーブ灰色 粘性シルト |



第62図 溝201断面図



1～5・7・8：第2層（洪水砂） 6：東地区南北セクション 9・10：溝202 11：溝201

第63図 第2層、第2面検出遺構出土遺物

遺物は鋤溝から瓦器碗、土師器皿等が若干出土しているが、当耕作面段階より古い遺物と思われる。

第3-2面 (第66図、図版34)

第3-2面は全面に存在する。第3-1面と同じく正方位をとる鋤溝 (鋤溝群4) が検出されている。東地区東半部では耕作の痕跡がほとんど観察できなかったが、東西方向に走る溝103が検出されていることや、周辺の土がグライ化を強く受けていることから、水田であった可能性が高いと思われる。

この面でもまだ上層からの攪拌が影響している部分が多く、大和川に直交もしくは平行する鋤溝も検出される地域がある。

遺物には鋤溝内から瓦質羽釜、瓦器碗、土師器羽釜、土師器皿が出土している。

溝103

東地区の南側中央をほぼ正方位で東西方向に走る細く小さな溝である。幅0.3m、残長17.2mを測る。埋土には7.5Y 7/1 灰白色シルト (5mm大の礫・Fe10%・Mn30%含む) が入る。遺物は出土していない。

井戸109

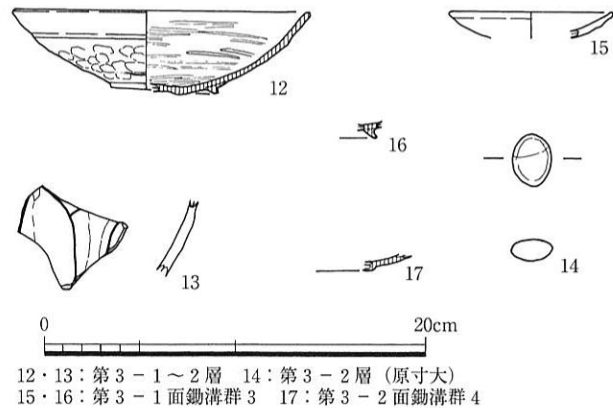
東地区の中央部に位置する。農業用に使用されたと思われる素掘りの井戸である。直径0.85mを測る。深さ0.8mまで掘り下げたが更に直下に続く。埋土には7.5Y R 5/3 にぶい褐色シルトに地山の粘土がブロック状に入る。遺物は出土していない。

第3-1・2層、第3-1・2面出土の遺物 (第64図、図版44)

12~14は第3層より出土している。12はほぼ完形の瓦器碗である。内面に篋ミガキを荒く施す。外面は指頭圧痕が残る。高台は低いが、断面は四角い。和泉型Ⅲ-1期頃の製品である。

13は龍泉窯系青磁碗である。体部外面に蓮弁文を大きく描く。14は黒色の石である。基石の可能性を考えた。

15・16は鋤溝群3、17は鋤溝群4から出土している。15は土師器皿である。口縁部を横ナデし、他の部分もナデを施す。16、17は瓦器碗の細片である。いずれも高台は貼りつける。16は高台がやや高く反る。17の高台は退化が著しい。和泉型Ⅳ-1期頃か。



第4層出土の遺物 (第67図、図版45・46)

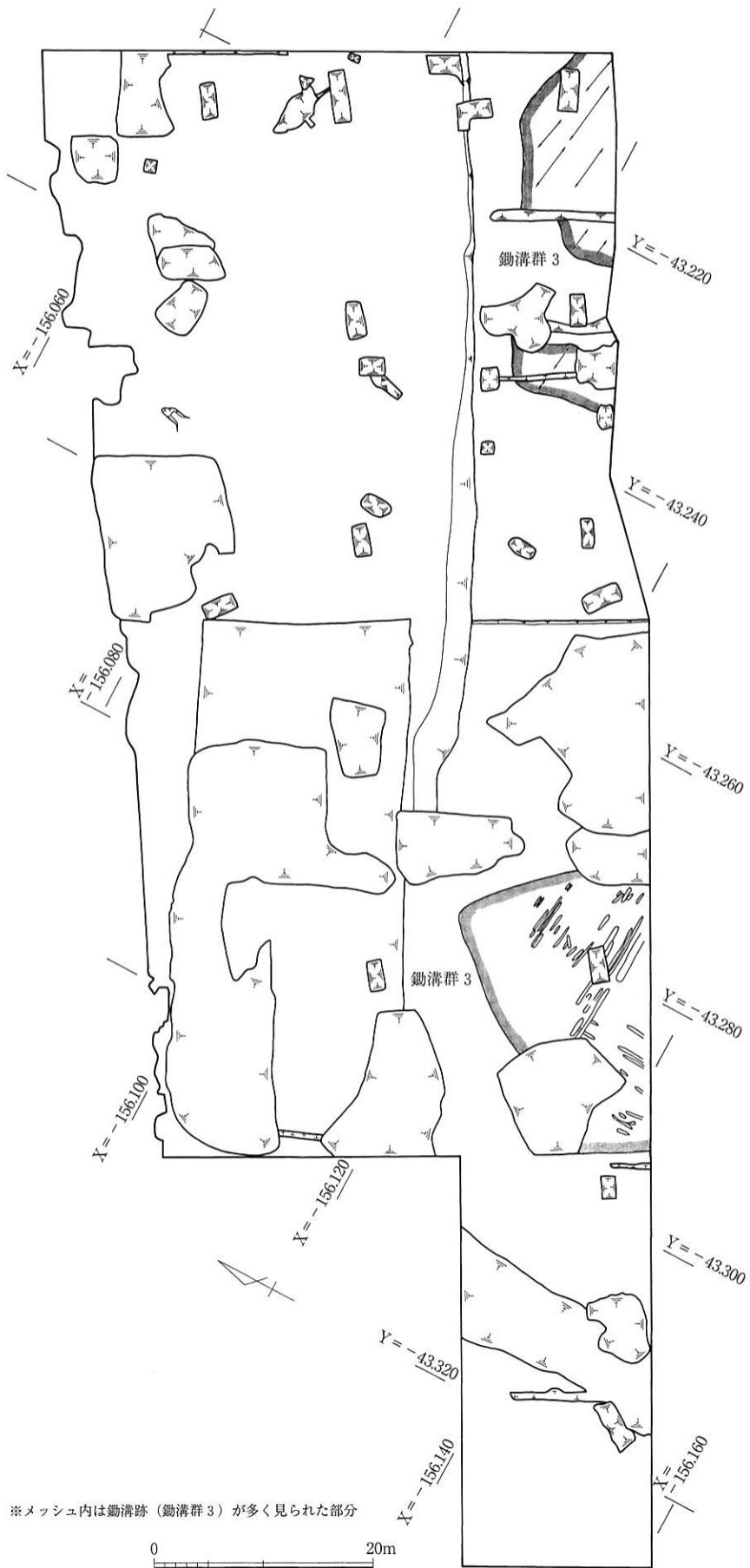
18~55まで第4-1層出土遺物である。18~30は主に13~14世紀代の土師器皿である。

手づくねで体部を成形し、口縁部を横ナデし内面をなでる。28は「て」の字状に仕上げる。

11世紀後半頃の製品である。横ナデを施す。29、30は12世紀頃の遺物と思われる。31は古代の土師器坏である。

33~44は和泉型の瓦器碗である。内面を篋ミガキし、外面は指圧調整を施す。後にミガキを施すものもある。高台は貼りつける。33は外面を指オサエし、後に篋ミガキを施し、見込みには平行暗文を施す。高台畳付には、条線が入り、すのこ状の敷物を瓦器の下に敷いた痕かと思われる。33、35、36は疎な平行の暗文を見込みに施す。Ⅲ-2・3~Ⅳ-1期にあたる。

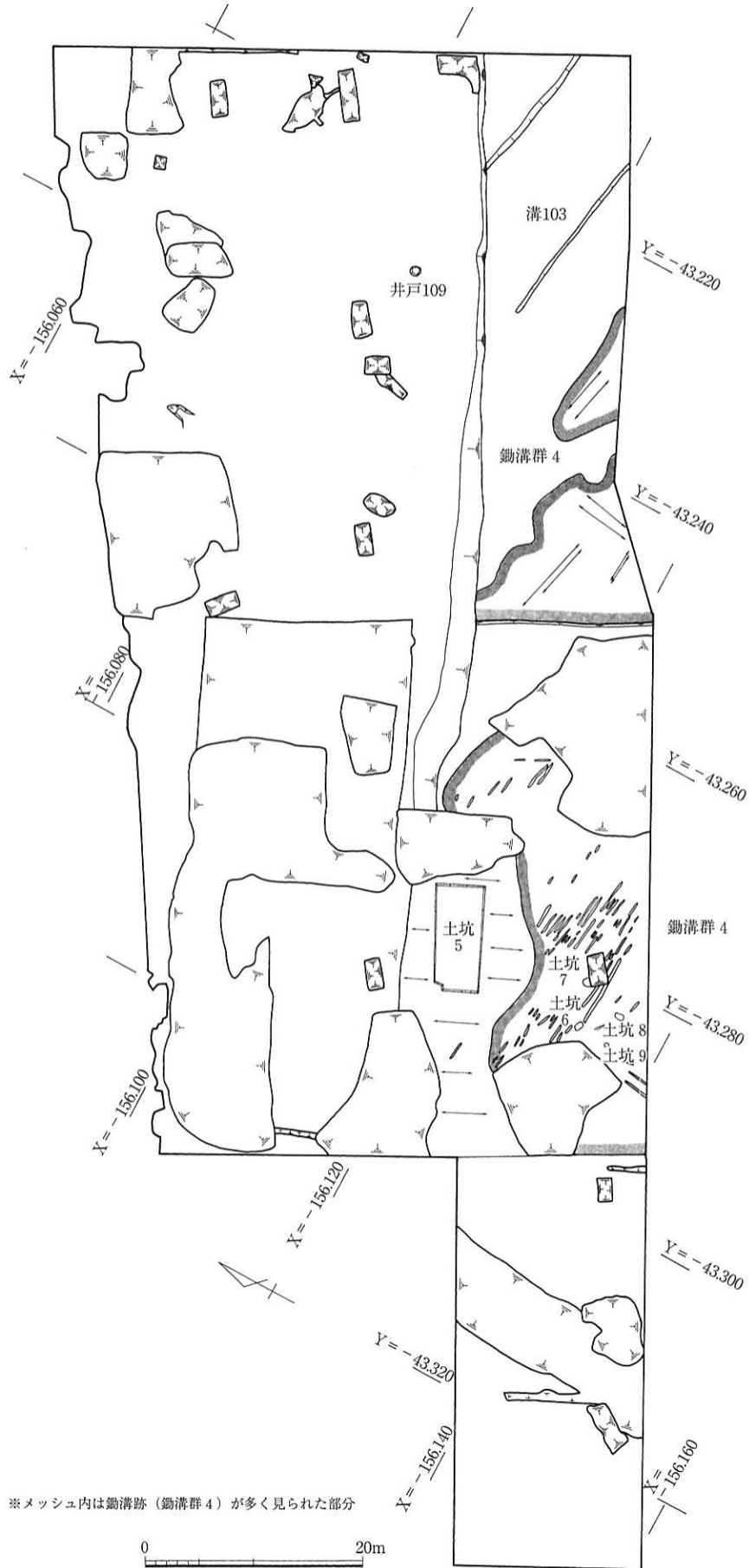
第64図 第3-1・2層、第3-1・2面検出遺物出土遺物



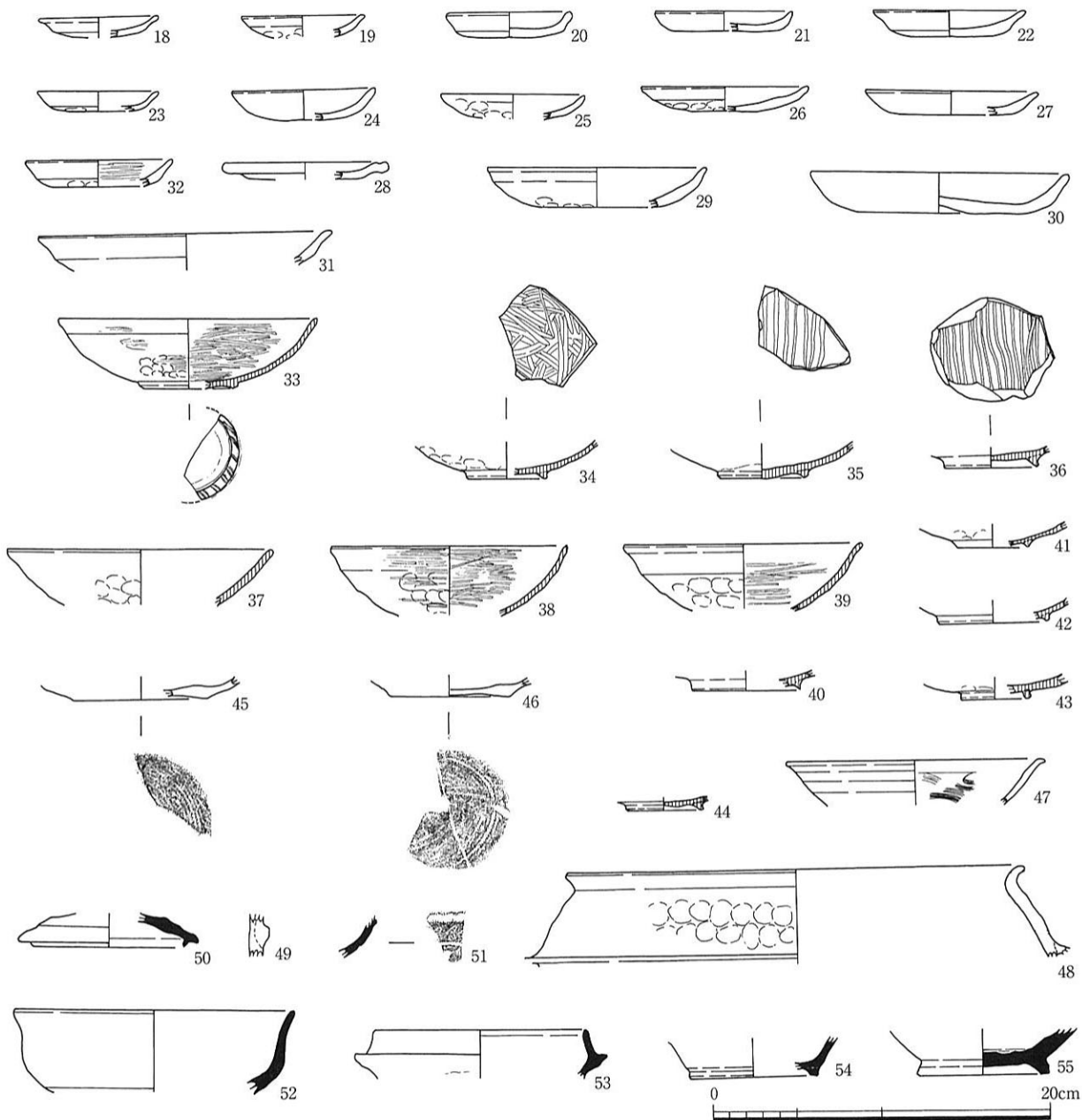
※メッシュ内は鋤溝跡（鋤溝群 3）が多く見られた部分

0 20m

第65図 第3-1面全体図



第66図 第3-2面全体図



第67図 第4-1層出土遺物

45、46は底部糸切りの土師器皿である。47は白磁皿である。内面を櫛で施紋する。山本信夫編年のIV-4-b類、12世紀頃の製品である。48は13世紀中頃の土師器羽釜である。49は円筒埴輪細片である。内面、タガ部分の裏側にナデを施す。

51～55は須恵器である。51は外面に波状文をめぐらす。器壁は薄い。高坏の類か。52は鉢、53は坏身、54は坏B、55は壺底部である。

第4面

第4面は、中・近世耕作土（第4層）を除去した面である。出土遺物は瓦器小片・土師器小片等である。T. P. +8.20m前後を測る。

この面でも西地区、東地区においては、部分的に土層が上層・下層に細分されることによって第4-1面、第4-2面が認識できる。

これらの面も第2層の洪水砂によって北側半分が削平されている。

第4-1面 (第68図、図版35・36)

第4-1面では、調査区の中央を東西方向に走り、西側で南北方向に分岐する溝10を検出した。西側で分布範囲が面的に広がることから水田につながっていくものと考えられる。東側でも面的な広がりを見せるが、調査区外へ伸びるため、性格は不明である。この溝10の埋土を除去した面で南北方向の幅0.25mの溝15を検出した。

溝10の南部、西側では削り出した畦畔(畦畔19、畦畔20)を検出した。畦畔は攪乱を挟むが、遺構として連続していると思われる。先述の溝が耕作地を区画する大区画にとらえたと、これらの畦畔は小区画として把握できる。それ以外にも小区画の溝11、15、16を検出した。拡張地区の畦畔206、207も当時期になると考えられる。

その他、この面では土坑、溝を検出した。

これらの水田や溝は平成9年度の調査大和川今池遺跡(その2)で検出した中世の方形区画溝の時期より新しい15世紀以降を遺構の時期と考えている。

溝10 (第70図、図版37)

東地区の中央部を西から東方向へ正方位をとりながら真っ直ぐに走る幅5m前後、深さ0.15mほどの比較的大きな溝である。T.P.+8m前後を測り、平坦ではあるが、若干東に傾いている。10Y R 5/1 褐灰色シルトを埋土とし、堆積の厚みは場所によって違うが5cm~20cmである。遺物は瓦器碗細片等が出土した。西側は面的に広がり、水田となると考えられる。

この部分から畦畔(畦畔19、畦畔20)(図版37)が検出されており、水田であったと考えられる。西端は攪乱を受けているが、調査区南壁の土層を見ると、遺構の続きが観察され、大和川の堤防の下をさらに西側に延びることがわかる。

土坑12 (第70図、図版37)

西地区中央部、溝10のやや南に位置する。幅1.75m×1.4m、深さ0.2mを測る平面が楕円形の土坑である。遺物は瓦器碗、土師器皿の細片が出土した。耕作に伴う土坑であろう。

溝13 (第70図、図版37)

幅0.47m、残長5m、深さ0.25mを測る小さな溝である。埋土は2.5Y 4/1~2.5Y 5/1 黄灰色粘性シルトが入る。

水田部の縁辺を南北にややアールを描くように走るが、南端北端とも同一の攪乱坑により削平されている。水田の用水に使用された溝と思われる。遺物は出土していない。

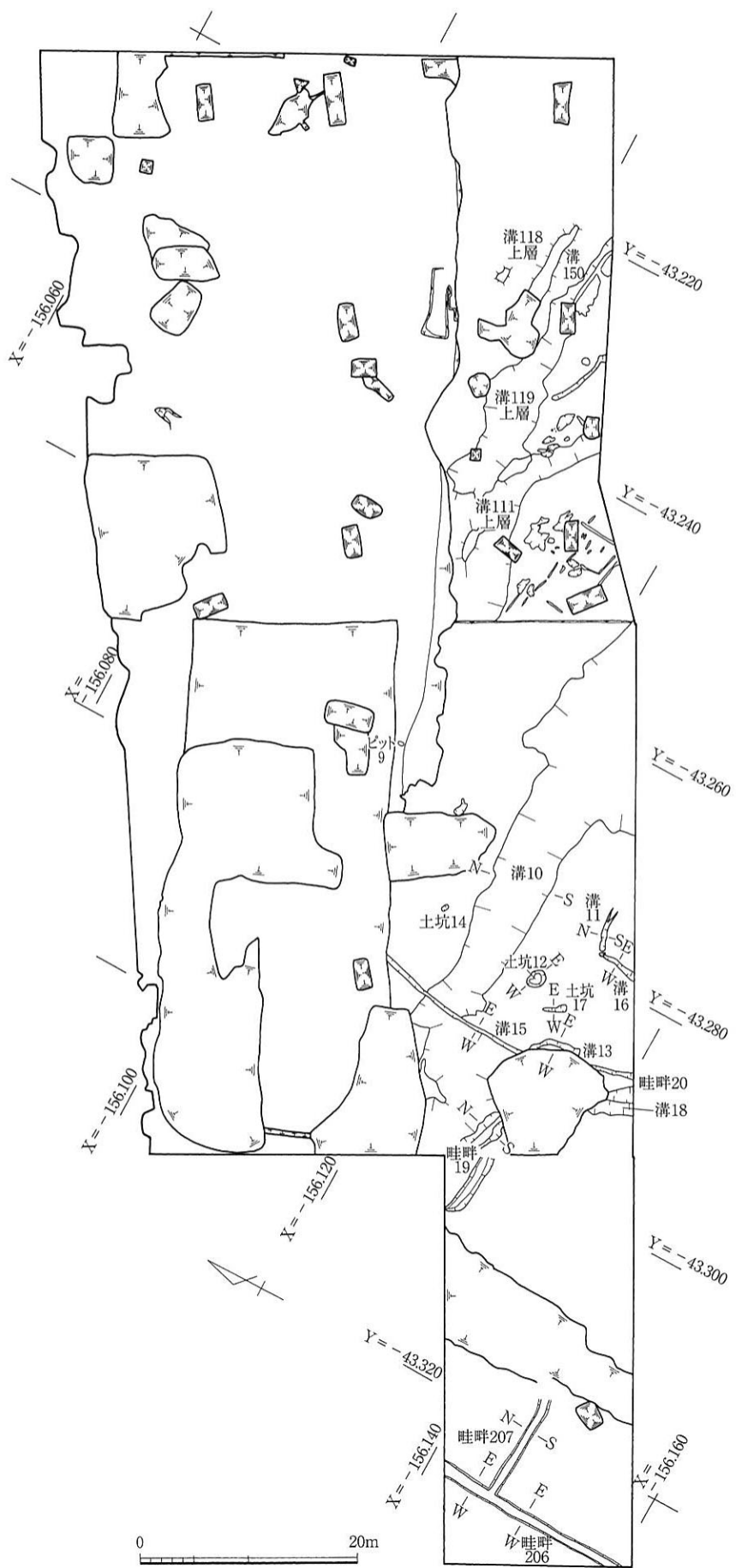
溝15、18 (第70図、図版37)

溝15は溝10の西端を切りながらほぼ南北に走る溝である。北側で15°東に振る。攪乱坑に切られてはいるが、溝18に続くものと思われる。幅0.35m、残長11m、深さ0.07mを測る小さな溝である。いずれの遺構からも遺物は出土していない。

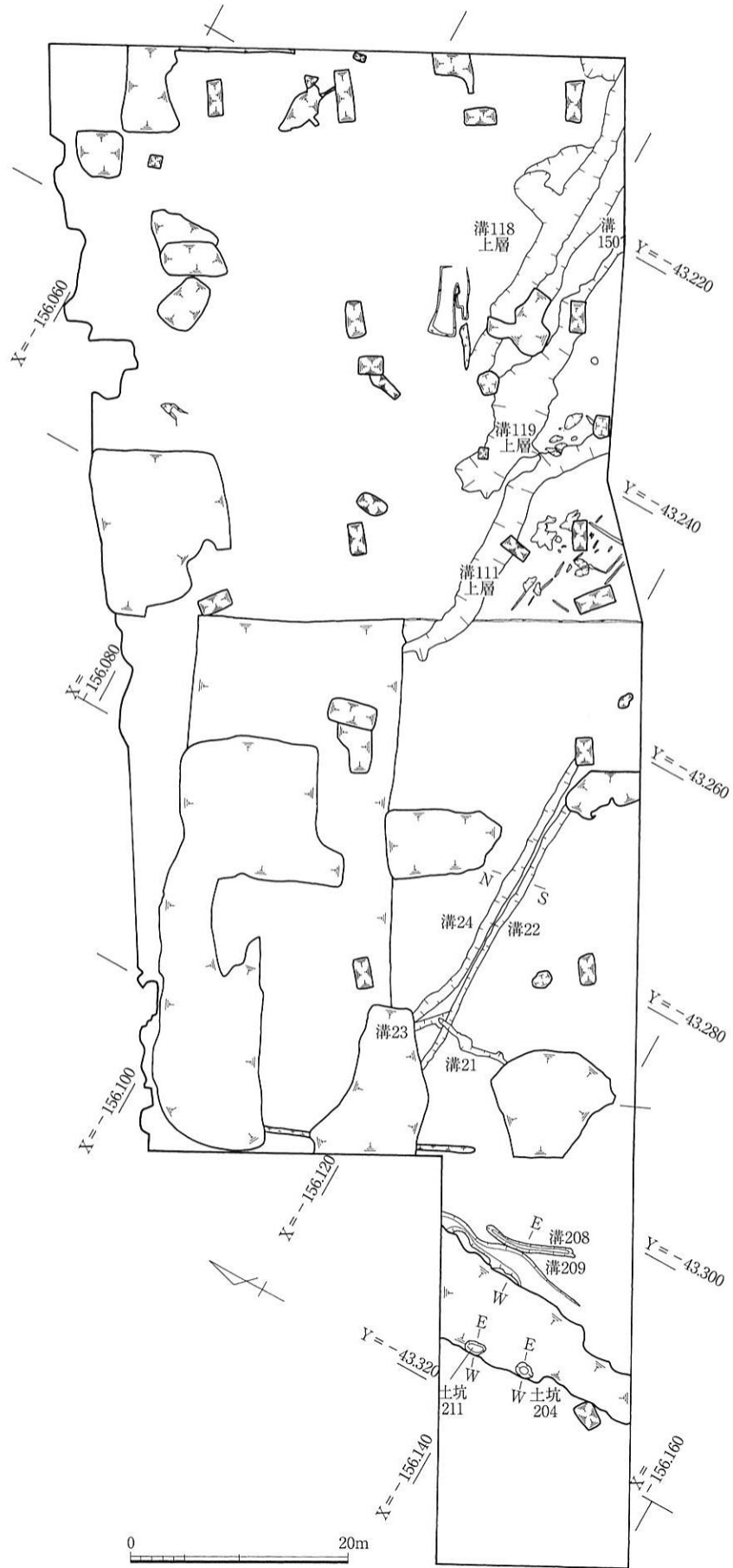
溝16、11 (第70図)

溝16は西地区中央南端に位置する。南北にほぼ正方位をとる。南は調査区外へ延びる。幅0.4m、残長3.6m、深さ0.1mを測る小さな溝である。埋土には2.5Y 6/3にぶい黄色粘性シルトが入る。

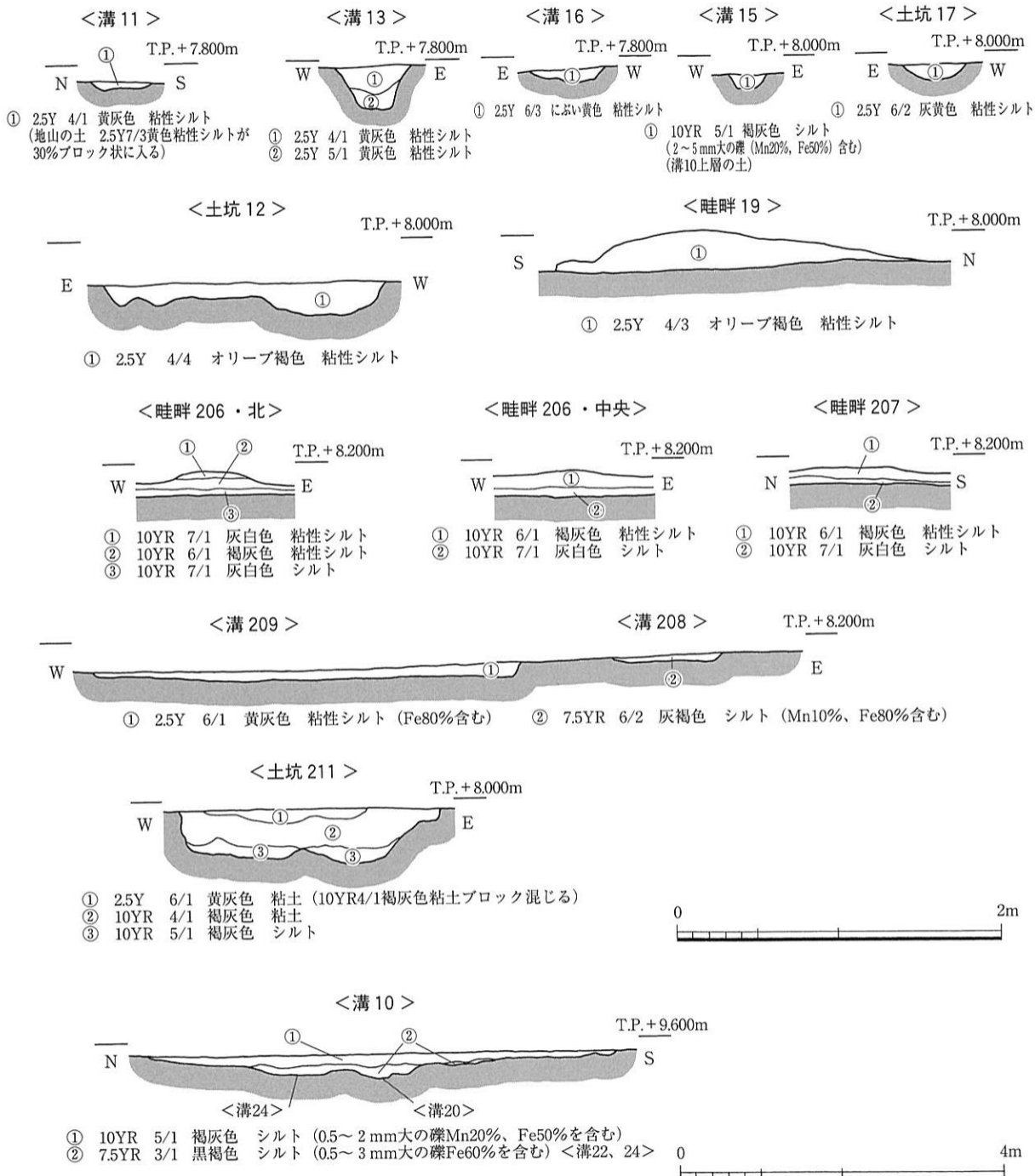
溝11は溝16の北端に直角に接して東西方向に延びる。規模は溝16とほぼ同じである。この2条の溝でL字状を呈する。水田を区画する意味を持つと考えられる。溝11から土師器片が出土している。



第68图 第4-1面全体图



第69図 第4-2面全体図



第70図 第4-1・2面検出遺構断面図

畦畔19 (第70図、図版37)

西地区西端で検出された。東西に走る。攪乱坑で切られてはいるが畦畔20につながるものと思われる。幅2.1m、残長4.7m、高さ0.3mを測る。拡張地区では畦畔は削平されていたが、これに付随したであろう溝が残長6.3m検出された。

畦畔20 (図版37)

溝18の縁辺で検出された南北に走る畦畔である。溝10から広がる水田跡を区切るとと思われる。幅2.7m、残長3.0m、高さ0.28mを測る。

畦畔206、207 (第70図、図版37)

拡張地区西側で検出された畦畔である。畦畔206は正方位で南北方向に走る。幅0.6m、長さ18m、高さ0.06mを測る。

畦畔207は畦畔206の真中あたりで東側に取り付く。正方位で東西方向に走る。畦畔206と併せてT字型を呈する。長さ10mを測る。

第4-2面 (第69図、図版35・36)

第4-2面は、暗灰色シルトを除去した面である。東西方向の2条の溝(溝22、溝24)とそれに直交する南北方向の溝(溝21)を1条検出した。溝の幅は0.35~0.40mである。この面は地山の直上にあたる。暗灰色シルトは上層の灰色砂混シルトの範囲とほぼ同じであるが、砂粒は相対的に細かく粘性である。

その他、この面では土坑、溝を検出した。

溝22、24 (第70図、図版37)

これらの溝は溝10の埋土を除去した段階で検出した。溝10と完全に重複しながら正方位で西から東へ走る。互いに並行する。北側が溝24、南側が溝22である。埋土はいずれも7.5YR 3/1黒褐色シルト(0.5mm~3mm大の礫・Feを60%含む)である。

溝22は0.9m、残長27.5m、深さ0.2mを測る。T.P.+7.95m前後で平坦である。西端で溝23と分岐する。

溝24は幅1.0m、残長30m、深さ0.1mを測る。T.P.+7.95m前後を測りほぼ平坦である。

溝21

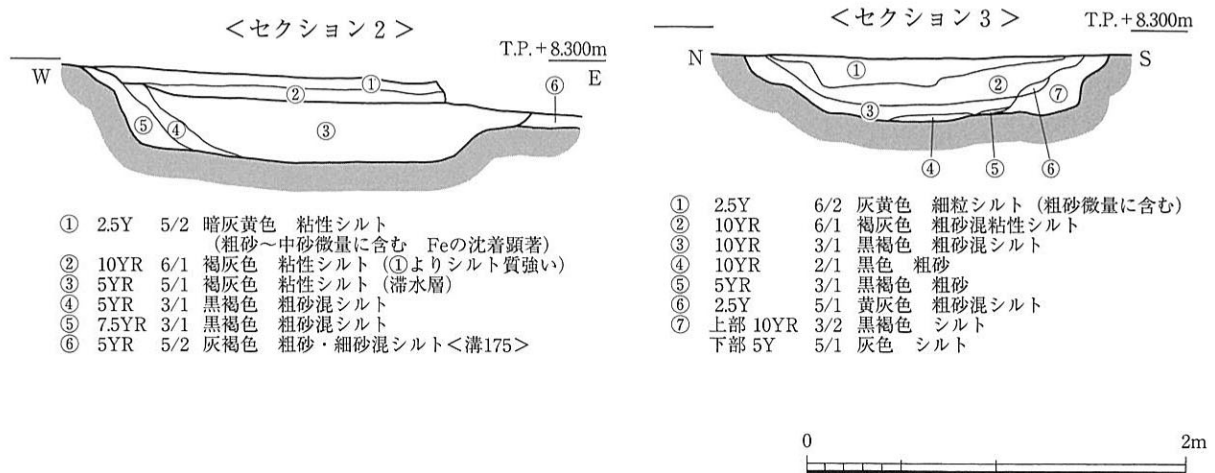
溝22を切り、若干蛇行するがほぼ正方位で南北に走る溝である。幅0.5m、残長3.7m、深さ0.05mを測る。

以上、西地区のこれら小さな溝はいずれも水田等の用水に使用されたものと思われる。

溝111 (第71図)

東地区西端に位置する。N-85°-EからN-60°-Wをとる。やや蛇行する。幅2m前後、残長約30m、深さ0.05~0.35mを測る。溝の底はT.P.+7.9~+7.75mを測る。溝の埋土は7.5YR 8/3暗褐色粗砂礫混シルトが入るが、下層部分は黒く、第5面を形成する黒褐色シルトの二次堆積である。

溝の埋土は粗砂~シルトを中心に形成され、弱くグライ化しており、頻繁に流水作用があったものと



第71図 溝111断面図

考えられる。

最下層は第5面で検出された溝175の埋土と思われるが、当初、1つの溝と考えて掘削しているため、きっちりとした掘り分けは行えていない。よって遺物も混在する可能性がある。

遺物には5世紀～7世紀頃の須恵器、土師器が出土しているが数は少なく、細片が多い。古代の遺物を含んでいるが、遺構が第4面から検出され、上層の埋土も第3層の堆積に類似することから古代末か中世の遺構と思われる。

溝118（上層）

東地区中央部やや東寄りの第4-1面で検出された。調査区を斜めに走る。東西方向を正方位にとり、ほぼまっすぐに走る。第4面での残長は約15m、幅は約2mを測る。溝118は本来第5面の遺構であるが、埋没するにあたり上面が窪んで後世に残ったものと思われる。古墳時代、古代の須恵器や土師器が出土している。

溝119（上層）

東地区第4-1面で検出された。幅1.0～5.5m、残長26.5mで東側が細くなり調査区外へ延びる。N-85°-Wをとる。溝118とほぼ平行する。溝118と同じく、恐らくは第5面上で形成された溝119が埋没し、上部がへこみ、窪んだ状態として残ったものと思われる。古墳時代、古代の須恵器や土師器を出土している。

溝150

溝118と溝119の中間に位置する。2つの溝が流水作用によりオーバーフローした部分と考えられる。第5面直上にあたるため、第4面相当の遺構と考え、ここに列記した。須恵器、土師器が出土している。溝208、溝209（第70図）

拡張地区東側で検出された。溝209はほぼ南北に正方位をとる。幅2.5m、残長16m、深さ0.07mを測る浅い溝である。埋土は2.5Y 6/1黄灰色粘性シルトである。

溝208は南北方向に走るが正方位にはのらない。一部は溝209に接する。幅0.8m、残長9m、深さ0.02～0.07mを測る。埋土には5Y 5/1灰色粘性シルト、7.5Y R 6/2灰褐色シルト（Mn10%・Fe60%を含む）が入る。いずれも遺物は出土していない。

土坑204

拡張地区ほぼ中央で検出された。直径0.75m、深さ0.3mを測る。埋土には10Y R 6/4にぶい黄橙色粘土と10Y R 6/1灰褐色及び5Y 6/1灰色粘土の混合が入る。瓦器碗が出土している。

土坑211（第70図）

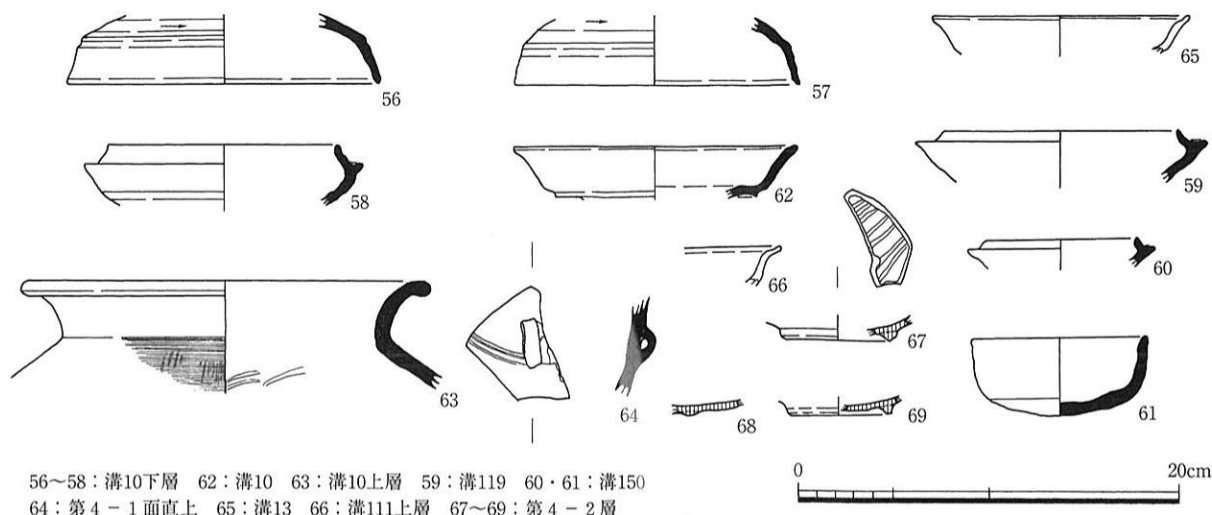
拡張地区中央よりやや北側に位置する。平面プランは1.0×1.7mの楕円形を呈する。深さ0.35mを測る。遺物は出土していない。

第4-1・2面出土の遺物（第72図、図版46）

第4-1・2面は中世の面であるが、その出土遺物の多くは古墳時代から古代にかけての須恵器が多い。瓦器はⅢ期～Ⅳ期の製品が出土している。

56、57は須恵器坏蓋、58、61は須恵器坏身、62は須恵器壺か甗の口縁部である。63は須恵器甕で外面にタタキ目が入る。内面は同心円のタタキが若干残る。64は須恵器把手である。貼りつけ把手の廻りに同心円の弱い沈線が入る。65、66は古代の土師器坏である。

67～69は和泉型瓦器碗である。67、69はⅢ期、68はⅣ-1期の製品である。



56~58: 溝10下層 62: 溝10 63: 溝10上層 59: 溝119 60・61: 溝150
64: 第4-1面直上 65: 溝13 66: 溝111上層 67~69: 第4-2層

第72図 第4-2層、第4-1・2面検出遺構出土遺物

第5層出土の遺物 (第73図、図版46・47)

70は須恵器瓶子である。底部は糸切り調整を施す。9世紀中頃の製品である。71はII-4・5期頃の須恵器坏身である。72は須恵器壺、73は須恵器坏Bである。74、75は土師器土錘である。

第5面 (第74図、図版38・41)

黒色シルト (第5層) を掘削した面が第5面である。この面では杭・ピット・土坑・焼土坑・溝を検出した。T. P. +8.00m前後を測る。

調査区の東側では東西方向に走る溝を数条 (溝118、128、132等) 検出している。出土した遺物は少なく時期の判別は難しいが、古墳時代の須恵器等とともに坏等の奈良・平安時代の須恵器が出土するため、当時代に該当するものと思われる。

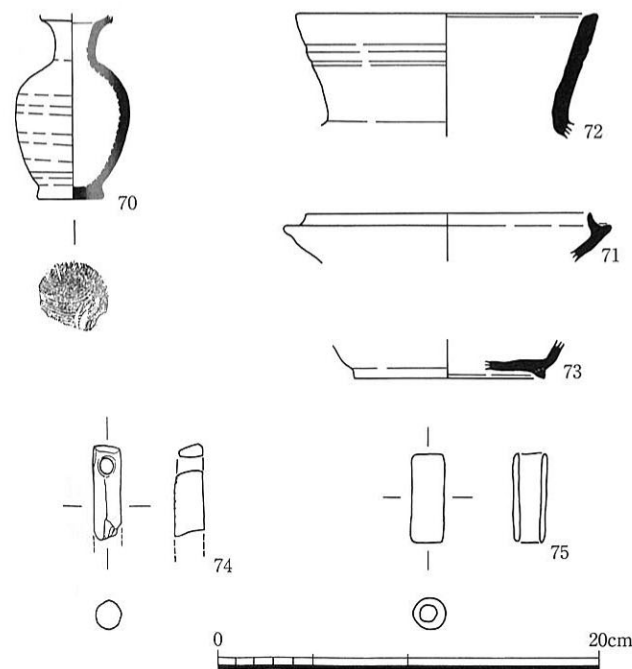
溝55は中世の土師器皿が出土し、溝111は埋土が第3層の下部の土質と類似するため、検出面は当面であるが中世の遺構になる可能性が高い。

溝54 (第75図)

西地区中央より南側を東西方向にほぼ正方位に走る溝である。幅0.6m、深さ0.08m、残長約10mを測る。T. P. +8.12m前後で平坦である。溝55に切られる。羽釜と思われる土師器片が出土している。

溝55 (第75図、図版39)

西地区中央部~南東部にかけて東西方向に走る溝である。N-65°-Wをとる。幅1.5m、深さ0.3m、途中途切れるが、延長すると、溝8と併せて残長約42mとなる。溝の底はT. P. +7.86~+7.78mをとり、ほぼ平坦だがわずかに東へ傾斜する。粗砂~粘性シルトで埋まり、少しグライ化している。流水作用があった溝と考えられる。土師器片、須恵器甕・坏片が出土している。



第73図 第5層出土遺物

土坑120、121、123、124、125、126、127（第75図）

溝55に切られる土坑群である。いずれも平面プランは長細く、123は溝状を呈する。深さ0.05～0.2mで浅い。土坑124、126は底がオーバーハングし袋状を呈している。埋土には粗砂によるラミナが観察された。溝55の流水が洪水等によって激しく流れた際に同溝の肩の崩れに伴い形成された土坑であろう。土坑120と122から土師器片が出土している。

土坑174

溝118に直交し、張り出すように形成される。平面プランは4×2.5mの不定な方形を呈する。深さ0.1mほどの浅い窪みである。埋土にはラミナが顕著に見られ、灰白地のブロックを交える粘性のシルトがレンズ状に堆積する。埋土は溝118にかぶさるように堆積する。

溝175

溝111に切られるものと思われる。溝の大部分が溝111と重なるものと思われるが実態は良くわからない。遺物は土師器甕片、須恵器甕片が出土しており、古代以前の遺構と思われる。

溝156（第75図）

東地区中央西端から南方向へほぼ真っ直ぐに延びる溝である。N-60°-Wをとる。幅1～3m前後、深さ0.12～0.14m、残長13mを測る。埋土には粗砂～粘性シルトが入りラミナを形成している。よく流水していたものと思われる。南東側は溝111に切られる。溝の方向、幅、埋土の類似から考えると溝175につながるのかもしれない。

焼土坑33（第79図、図版41）

平面プランは長方形を呈する。長辺2.0m、短辺1.2mを測る。若干、被熱による赤味をおびた黄白色のきめの細かい不純物の少ない粘性シルトで形成される。竈状の馬蹄形を呈する本体であろう部分が平面形の中央に南向きに正方位で存在する。黒色の、これも不純物の少ない粘性シルトが、この本体部分を取り囲む形となる。その周りをさらに灰色の粘土、地山起源の砂礫混粘土がとり巻くように位置する。

断面を観察すると、深さ0.4mを測り、直方体を呈する土坑の壁に、直立し、迫り上げる形で地山起源の土を貼りつけ、同様の方法で質の違う粘土を順に裏込状に貼りつけた後、黄色シルトを用いて本体であろう部位を構築していることがわかる。

この黄白色シルトを本体部として捉えると、シルトがレンズ状に堆積する部分とブロック状に堆積する部分と混在し、断面は不定形である。周縁部は黒色シルトと混じる部分も存在する。

底部は黒色のシルトと灰色のシルトが薄く互層を成し、その上に本体部分が位置する。

焼土坑は上部が攪乱により上層ごと削平を受けており、第5面より上面に構築された遺構の可能性も否定できない。

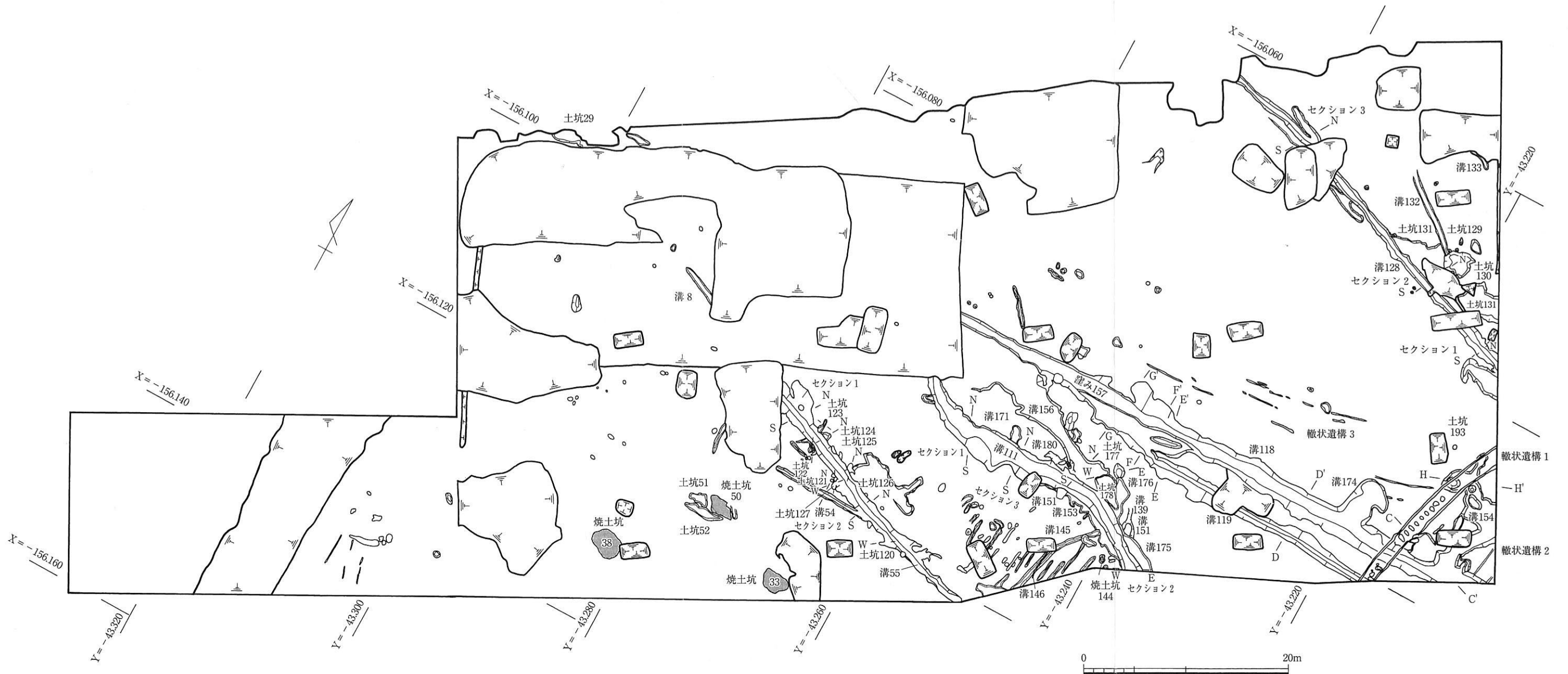
本遺構は検出当初、野外炉や製鉄炉の可能性を考え、付属施設の存在も念頭に置き、周辺の土壌の変化も押さえるべく、検討を加えた。

周辺には若干の炭を含む土壌の分布と、杭跡とも考えられる深さ数cmの浅いピット状の遺構を数基検出したが、覆い屋等の施設と認めるには確証を得られなかった。

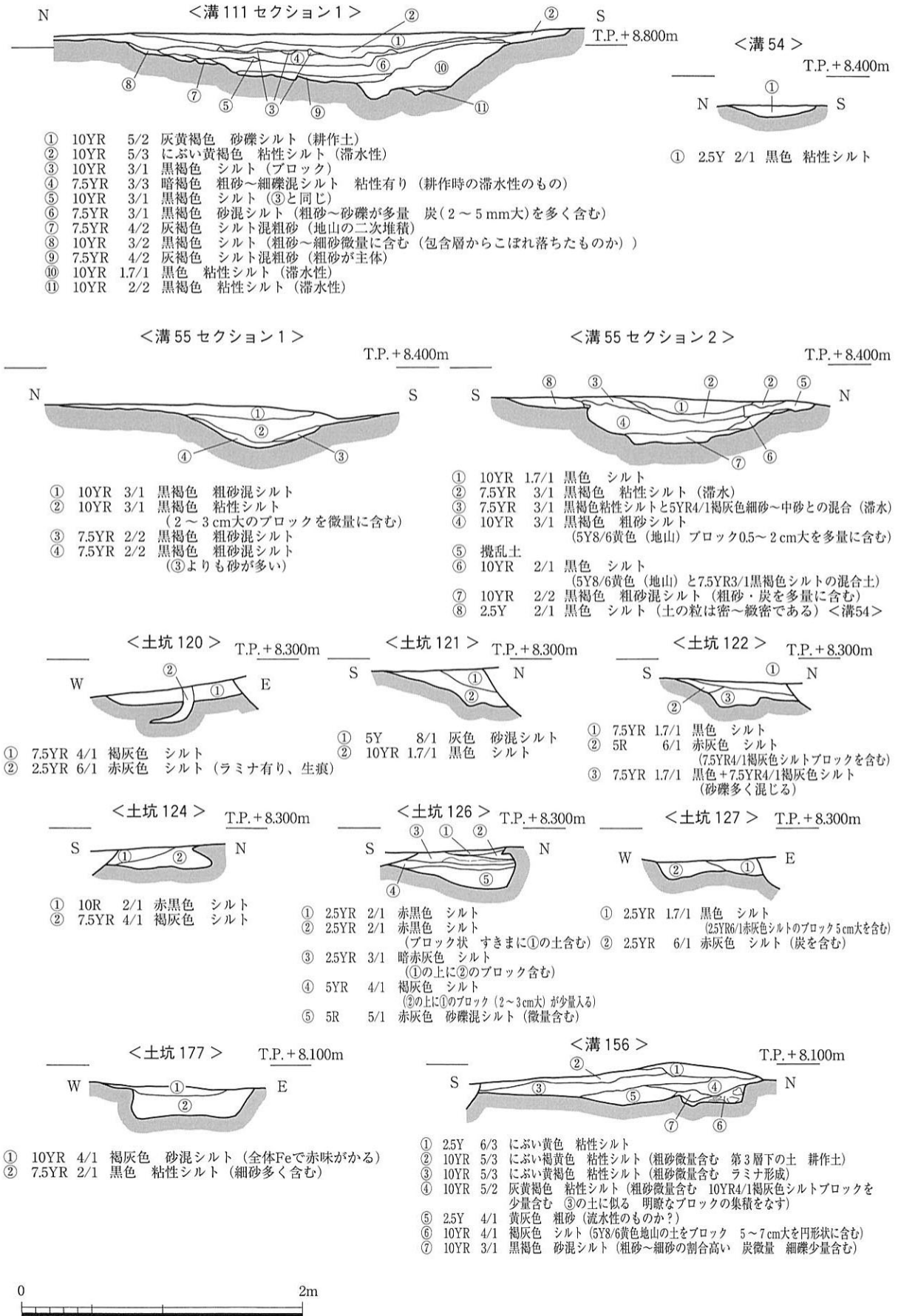
なお、黒色シルトは炭が主成分ではなく、土壌化によって生成されたことが自然科学的考察によって明らかにされている。

焼土坑50（第80図、図版40）

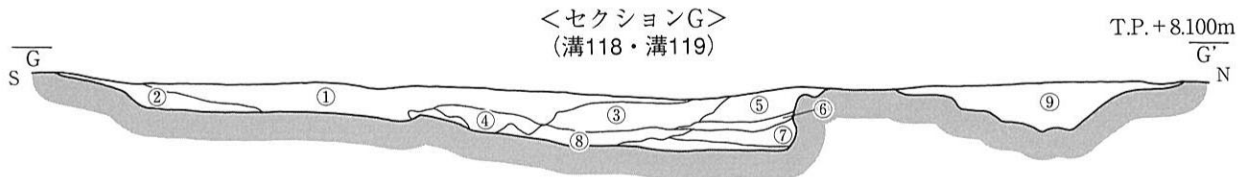
溝10の南側の肩でこれに削平されている状況が確認できた。長辺2.1m、短辺1.5m、深さ0.2mを測る。



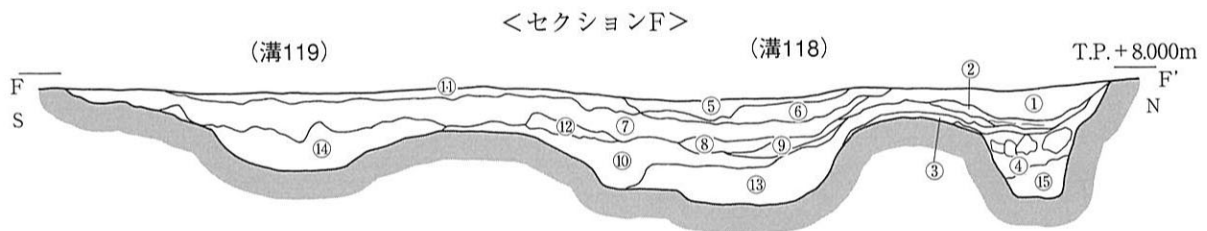
第74図 第5面全体図



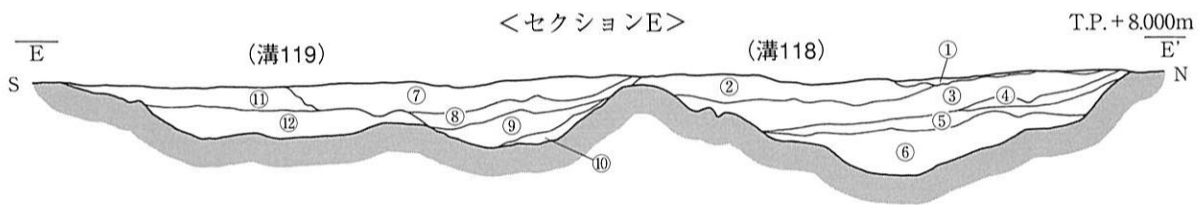
第75図 第5面検出遺構断面図1



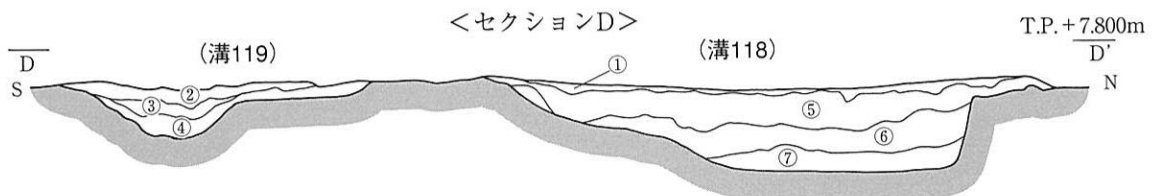
- | | |
|---------------------------------------|-------------------------------------|
| ① 10YR 2/1 黒色 砂礫混シルト | ⑤ 2.5YR 3/1 暗赤灰色 砂混シルト (粗砂を多く含む) |
| ② 7.5YR 4/1 暗褐色 シルト (有機物の炭化層がラミナ状に入る) | ⑥ 10R 4/1 暗赤灰色 粘性シルト |
| ③ 5P 6/1 紫灰色 粘性シルト (砂礫2~3mm大を多く含む) | ⑦ 10YR 2/1 黒色 砂混シルト (粗砂~細礫を少量含む) |
| ④ 上部 7.5YR 4/1 褐色 シルト (砂礫2~3mm大を多く含む) | ⑧ 5Y 6/1 灰色 砂礫 (粘性シルトブロック10cm大を含む) |
| 下部 10YR 6/1 褐色 シルト (基本的には滞水のもの) | ⑨ 5Y 6/1 灰色 粘性シルト (ラミナ有り 下層には砂礫を含む) |



- | | |
|---|--|
| ① 2.5Y 6/1 黄灰色 粘性シルト (粗砂少量含む) | ⑨ 10YR 3/1 黒褐色 粘性シルト (粗砂~細砂のラミナ互層) |
| ② 10YR 3/1 黒褐色 砂礫 (ラミナ状に入る 粗性シルトを含む) | ⑩ 2.5Y 6/1 黄灰色 粗砂~細礫 |
| ③ 5Y 6/1 灰色 粘性シルト | ⑪ 5Y 4/1 灰色 ⑤の土が20%混じる |
| ④ 10YR 4/1 褐色 地山ブロックと粘性シルトの混合 | ⑫ 2.5Y 5/1 黄灰色 粘性シルト (粗砂を多量に含む) |
| ⑤ 5Y 6/1 灰色 10cm大のシルトブロックを多く含む粘性シルト | ⑬ 2.5Y 6/1 黄灰色 粘性シルトと7.5Y8/1灰白色粘性シルトの地山ブロックを混濁 |
| ⑥ 2.5Y 6/2 灰黄色 粘性シルト (粗砂を多く含む) | ⑭ 7.5Y 8/1 灰白色 粘性シルト (粗砂ラミナ 流水、滞水のくり返し) |
| ⑦ 10YR 4/1 褐色 粘性シルト (地山ブロック3~5cm大を少量含む) | |
| ⑧ 10YR 3/1 黒褐色 灰白粘性シルト混粗砂 (ある程度の流水か) | |



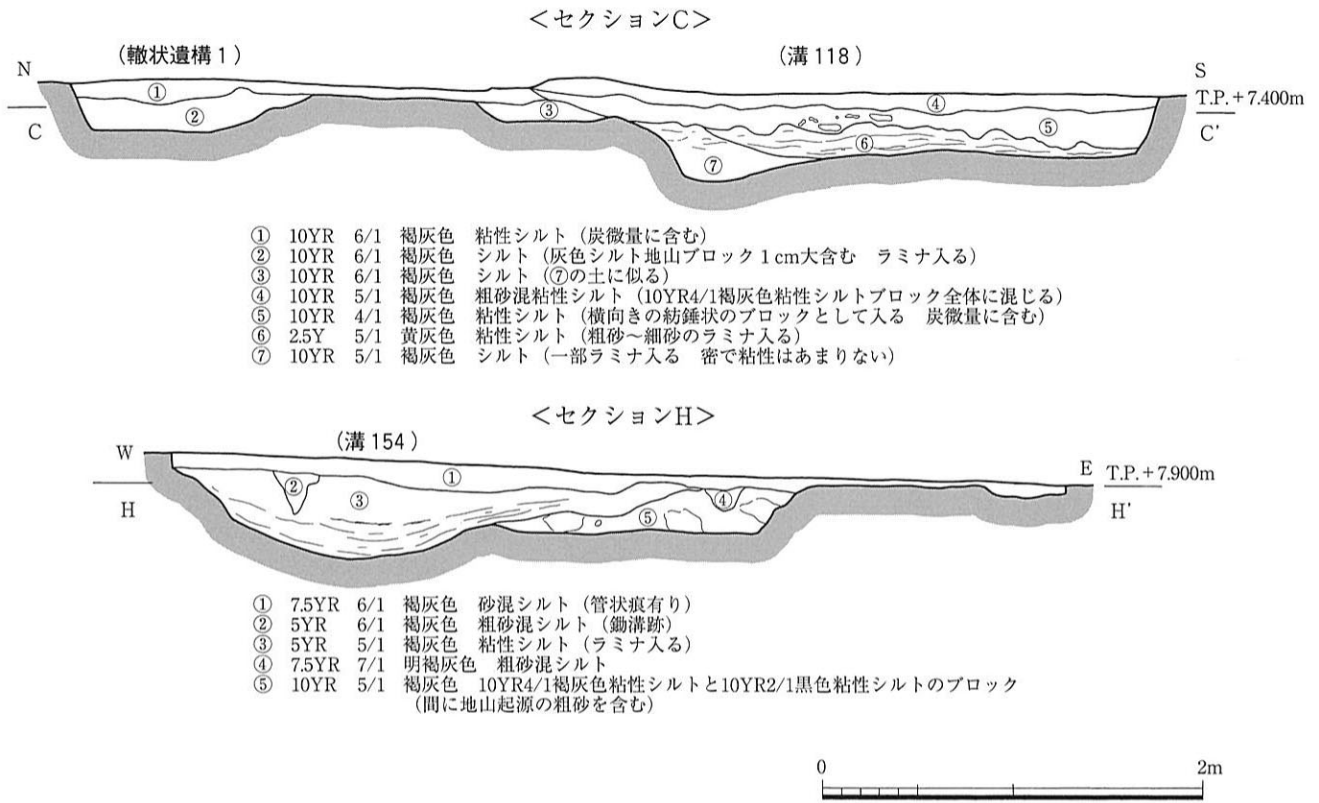
- | | |
|---|--------------------------------------|
| ① 10YR 5/1 褐色 粘性シルト (粗砂微量に入る 耕作土) | ⑦ 5RP 4/1 暗紫灰色 粘性シルト (粗砂を多く含む) |
| ② 7.5YR 6/1 褐色 粘性シルト (灰色粗砂含む 粘性 滞水性有り) | ⑧ 5RP 4/1 暗紫灰色 粘性シルト (ラミナ有り 滞水性有り) |
| ③ 5RP 5/1 紫灰色 粘性シルト (粗砂ラミナが入る) | ⑨ 2.5Y 6/3 にぶい黄色 粗砂 (灰白地山ブロック混じる) |
| ④ 5P 5/1 紫灰色 粘性シルト (粘性強い) | ⑩ 10YR 1.7/1 黒色 粘性シルト (滞水性有り) |
| ⑤ 5P 4/1 暗紫灰色 粘性シルト (粗砂ラミナ有り) | ⑪ 7.5YR 4/2 灰褐色 粗砂混粘性シルト |
| ⑥ 5RP 4/1 暗紫灰色 粗砂 (灰白地山ブロック3~5cm大を多く含む 流水性有り 上流の地山起源 間に滞水性の粘性シルトが3.5cmの厚みで入る) | ⑫ 10YR 3/1 黒褐色 灰白地山と混濁した粘性シルト (粗砂ない) |



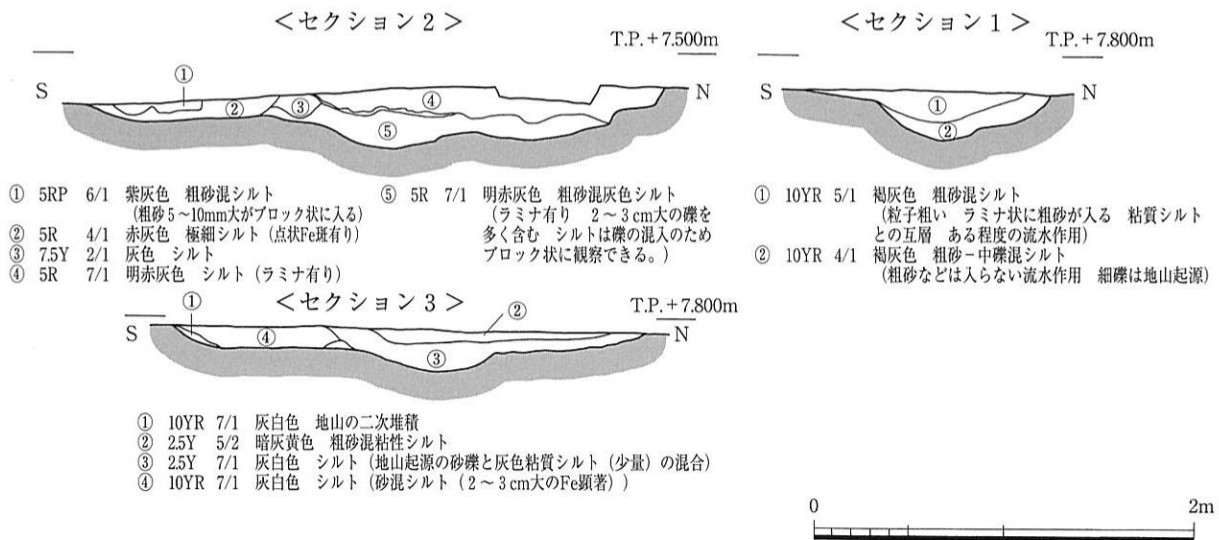
- | |
|---|
| ① 5Y 5/1 灰色 粘性シルト (第3層下層) |
| ② 5Y 4/1 灰色 粘性シルト (灰白色地山全体に混じる) |
| ③ 10Y 8/1 灰白色 粘性シルト (炭泥じりベースの地山の灰白シルトがブロック状に入る) |
| ④ 2.5Y 4/1 黄灰色 粘性シルト (密 粘性有り 滞水性有り) |
| ⑤ 10YR 5/1 褐色 シルト (炭微量に含む 粘性なし 粗砂微量 1cm大未満地山ブロック多く含む) |
| ⑥ 10YR 4/1 褐色 粘性シルト (炭微量に含む 灰白系地山ブロックが紡錘状に入る 粗砂微量 全体レンズ状堆積) |
| ⑦ 2.5Y 4/1 黄灰色 粗砂粘性シルト (ラミナ状に入る) |



第76図 第5面検出遺構断面図2



第77図 第5面検出遺構断面図3

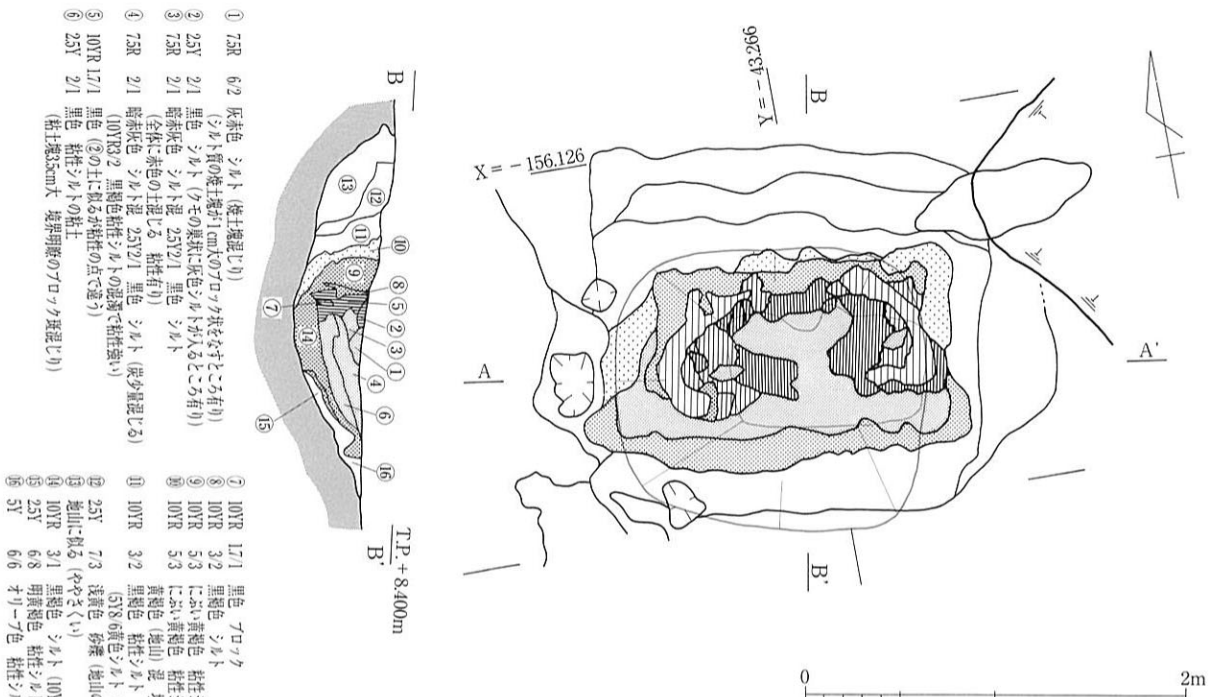


第78図 溝128断面図

平面プランは平行四辺形である。

遺構検出時、筆者は、遺構上部を覆っていた溝10の黒色の埋土だけが当遺構の埋土と考え掘削したため、東半部の堆積状況を欠落させることとなった。焼土坑33と同じく南向きに正方位で構える竈状の馬蹄形を呈する本体部が存在したと思われる。

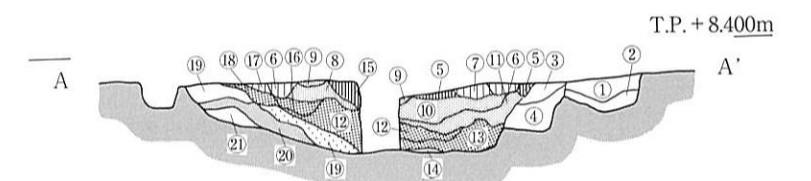
構築の方法は、焼土坑33と同様であるが、焼土と灰色粘土が互層をなす形で灰色粘土を貼っていることが断面の観察で顕著であった。



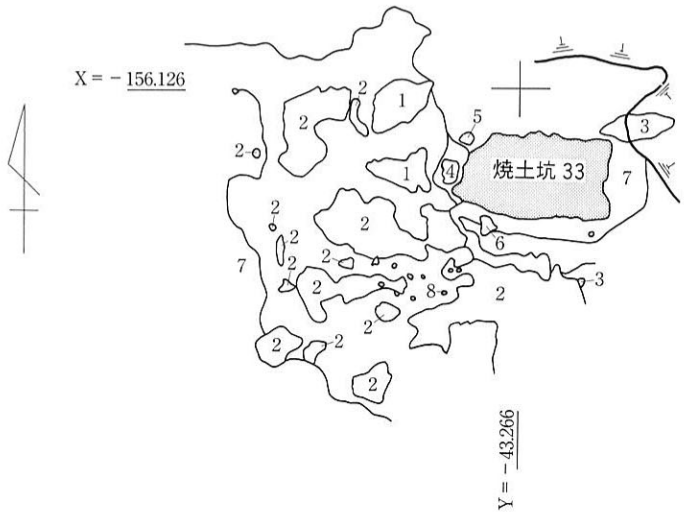
- ① 7.5R 6/2 灰赤色 シルト (焼土塊混じり)
(シルト中の焼土塊が1cm大のプロツクをなすところ有り)
- ② 2.5Y 2/1 黒色 シルト (クモの黒泥に灰赤色シルトが入るころ有り)
- ③ 7.5R 2/1 暗赤灰色 シルト混 2.5Y2/1 黒色 シルト
(全体に赤色の土混じる 粘性有り)
- ④ 7.5R 2/1 暗赤灰色 シルト混 2.5Y2/1 黒色 シルト (炭少量混じる)
(10YR3/2 黒褐色粘性シルトの混濁で粘性強い)
- ⑤ 10YR 1.7/1 黒色 (②の土に取る赤色の点で混る)
- ⑥ 2.5Y 2/1 黒色 粘性シルトの粘土
(粘土塊5cm大 境界明瞭のプロツク塊混じり)

- ⑦ 10YR 1.7/1 黒色 プロツク
- ⑧ 10YR 3/2 黒褐色 シルト 粘性シルト
- ⑨ 10YR 5/3 にぶい黒褐色 粘性シルト (Feの点状混有り)
- ⑩ 10YR 5/3 にぶい黒褐色 粘性シルト (境界不明瞭)
- ⑪ 10YR 3/2 黒褐色 粘性シルト (地山) と10YR4/3黄褐色 (地山) 混じる
(5YR6黄褐色シルトの二次堆積)
- ⑫ 2.5Y 7/3 淡黄色 砂礫 (地山の二次堆積)
- ⑬ 地山に似る (ややさかい)
- ⑭ 10YR 3/1 黒褐色 シルト (10YR3/2黒褐色粘土一部含む 粘性強い)
- ⑮ 10YR 6/8 明黄褐色 粘性シルト (10YR3/2黒褐色粘土を含む 粘性強い)
- ⑯ 2.5Y 6/6 オリーブ色 粘性シルト (黄濁した地山)

- 赤味 (焼土) 非常に強い部分 [本体]
- 赤味の強い部分
- 黒味の非常に強い部分
- 赤味と黒味の混合部分
- 黒味のやや強い部分

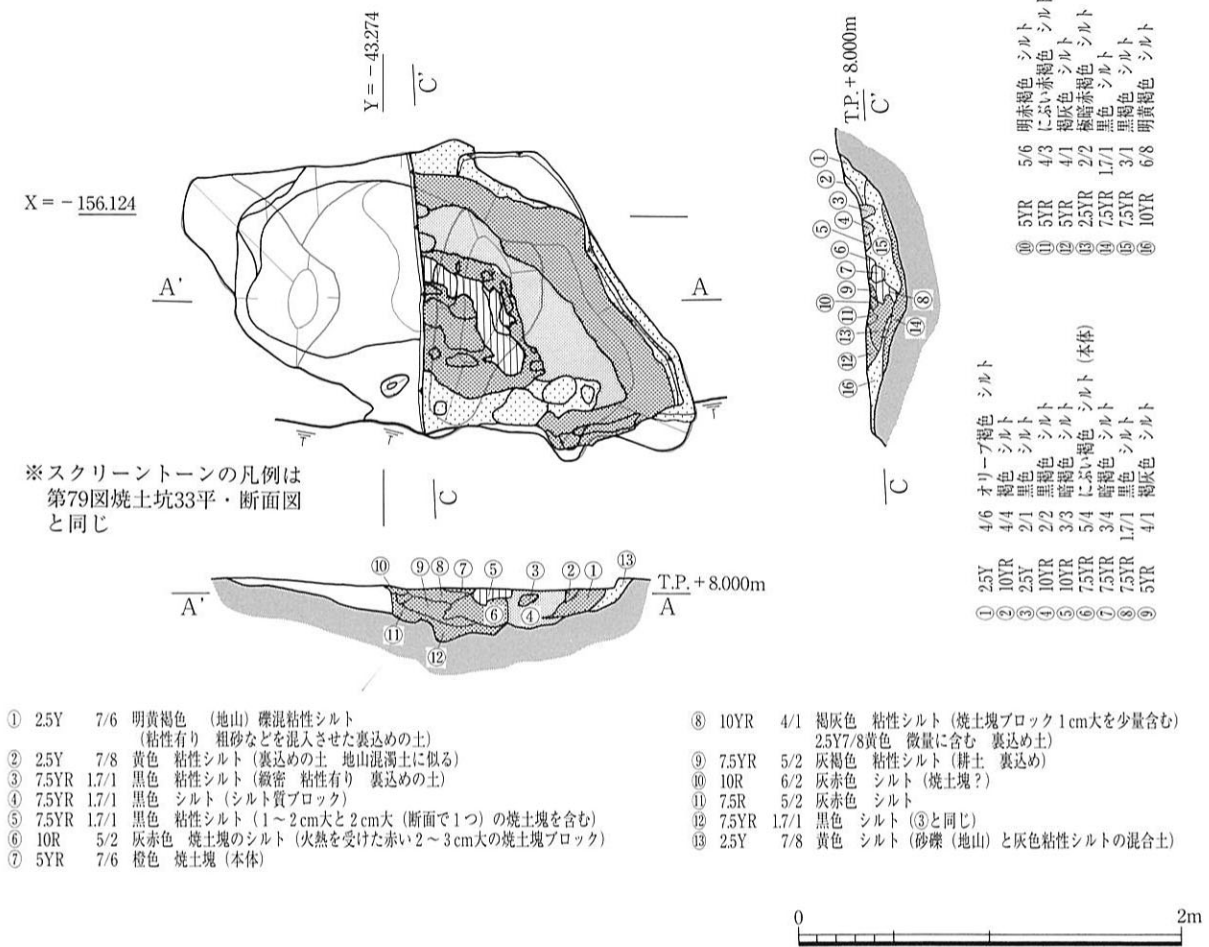


- ① 2.5Y 5/1 黄灰色 粘性シルト (7.5YR1.7/1黒色シルトブロック状に含む)
- ② 10YR 6/2 灰黄褐色 砂礫 (地山) 混シルト (黄褐色シルトブロック1~1.5cm大で少量含む)
- ③ 2.5Y 4/1 黄灰色 粘性シルト (2.5Y6/8にぶい黄色 (地山) に7.5YR1.7/1 黒色シルトが混じったもの)
- ④ 7.5YR 5/1 褐灰色 粘性シルト (地山起源)
- ⑤ 7.5YR 1.7/1 黒色 シルト
- ⑥ 7.5YR 7/6 棕色 粘性シルト (本体)
- ⑦ 7.5YR 6/3 にぶい褐色 シルト (焼土塊と混合する)
- ⑧ 2.5YR 7/6 棕色 シルト (焼土塊)
- ⑨ 7.5YR 2/1 暗赤灰色 シルト混2.5Y2/1黒色シルト (全体に赤色の土混じる 粘性有り)
- ⑩ 7.5YR 2/1 暗赤灰色 シルト混2.5Y2/1黒色シルト (炭少量混じる)
(10YR3/2黒褐色粘性シルトとの混合で粘性強い)
- ⑪ 7.5R 2/1 赤黒色 焼土混シルト
- ⑫ 10YR 3/1 黒褐色 シルト (10YR3/2黒褐色粘土一部含む 粘性強い)
- ⑬ 7.5YR 1.7/1 黒色 粘性シルト
- ⑭ 2.5Y 8/6 黄色 粘性シルト (地山起源)
- ⑮ 2.5YR 7/6 棕色 シルト (焼土塊)
- ⑯ 5YR 6/3 にぶい棕色 焼土混シルト
- ⑰ 2.5YR 7/8 棕色 シルト (焼土塊)
- ⑱ 10YR 5/2 灰黄褐色 粘性シルト (炭・木を少量含む)
- ⑲ 2.5Y 8/6 黄色 シルトに5YR1.7/1黒色シルト 混じる
- ⑳ 10YR 5/2 灰黄褐色 粘性シルト (炭・木を含む)
- ㉑ 2.5Y 7/6 明黄褐色 粘性シルト (5YR1.7/1黒色シルトブロック1~2 cm大を少量含む)



- 1. 炭を多く含む 褐灰色シルト
- 2. 褐灰色シルト
- 3. 灰白色粘性シルト
- 4. 炭混じり暗灰色シルト (第3-2層か)
- 5. 炭混じり灰白粘性シルト (地山と暗灰色シルトの混合)
- 6. 粗砂混暗灰色シルト (1cm大の黄濁シルトブロックを少量含む)
- 7. 褐灰色粘性シルト (地山)
- 8. 炭を含む (ピット群か)

第79図 焼土坑33平・断面図



第80図 焼土坑50平・断面図

焼土坑33、50は本体部分が特異な形を呈するため、投棄行為があったか、もしくは攪乱を受けた結果この様な形状となったことも考慮し、古地磁気計測を行なった。結果、焼土坑50については古地磁気のばらつきは少なく、遺構が形成された当初の位置からさほど動いていないであろうと推定された。

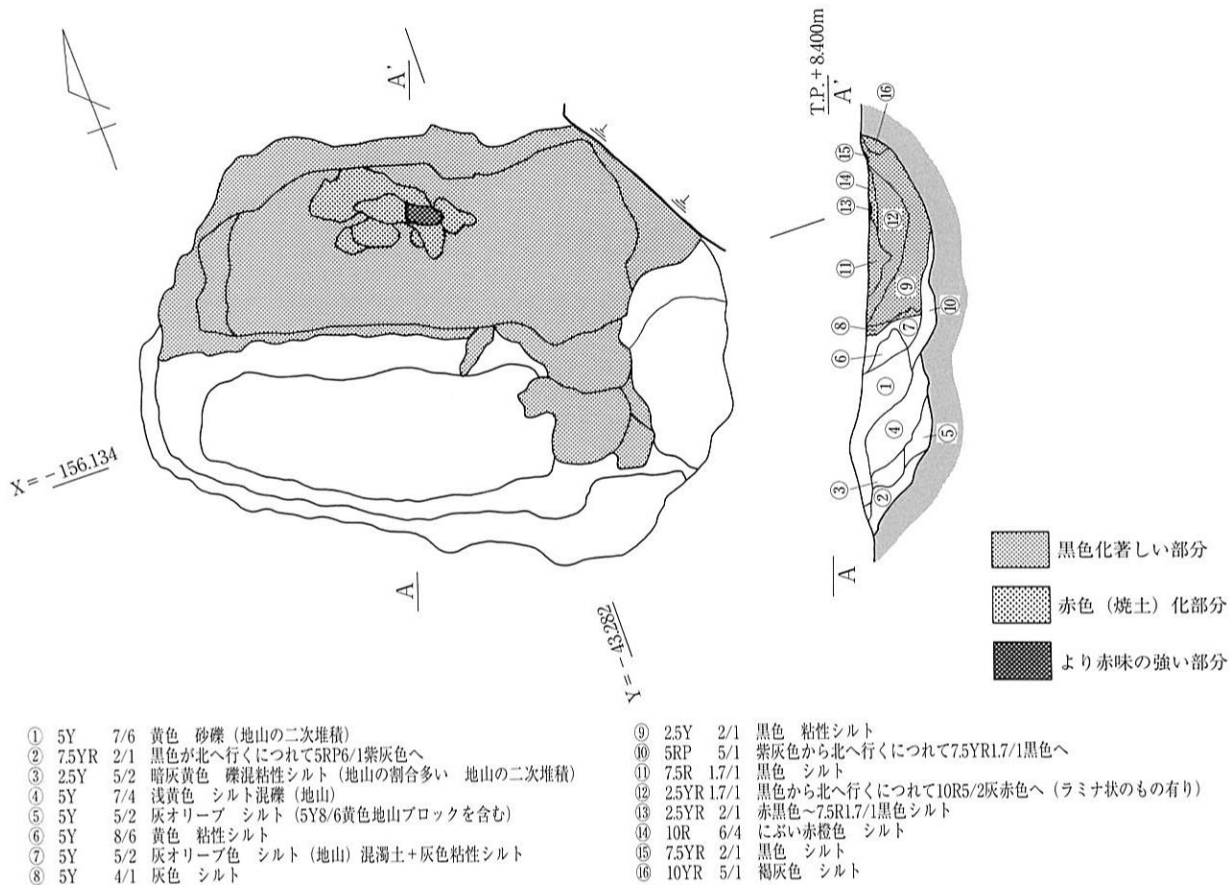
また、焼土坑33については、本体部分は攪乱を受けていないようであるが、少なからず古地磁気のばらつきが認められ、攪乱を受けた個所が部分的に存在する可能性が認められるということである。

焼土坑38 (第81図、図版40)

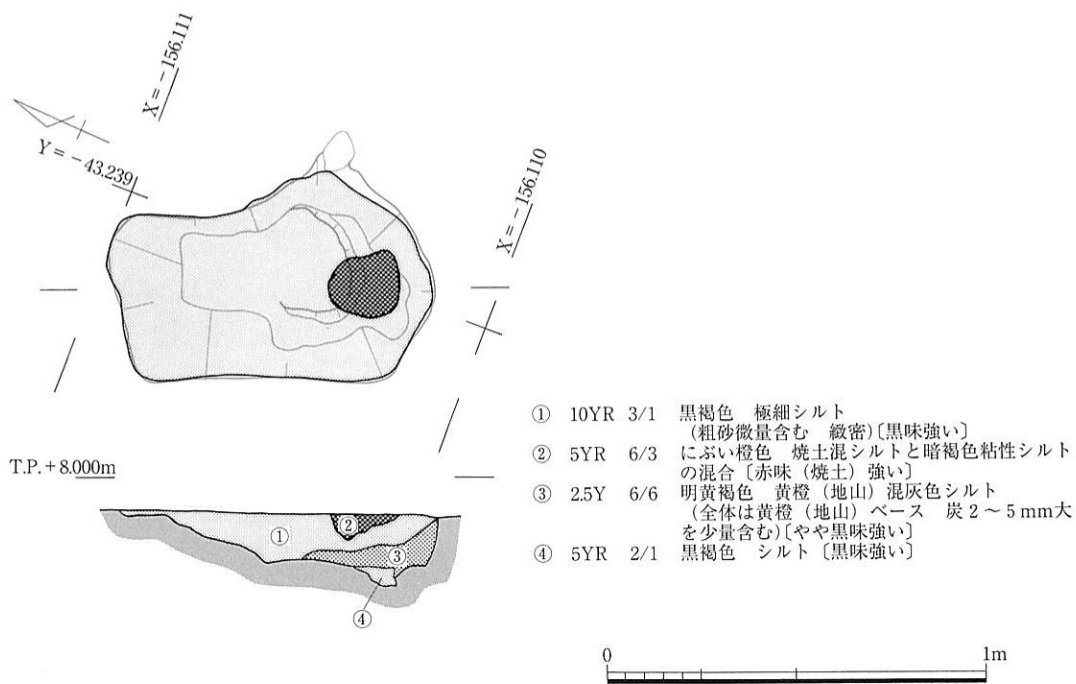
西地区西南部に位置する。平面プランは隅丸の長方形である。長辺3.0m、短辺2.2m、深さ0.28mを測る。断面を観察すると、底から、地山粘性シルト・砂礫地山混じりの暗灰粘性シルト・黒色シルトが堆積し、遺構検出面で焼土の塊を確認している。ただし、断ち割りの結果、今回検出している倒木痕と思われる土坑によく似た断面形状の堆積状況が認められることから、倒木痕の類の土坑に、焼土が混入したと見たほうがよさそうである。

焼土坑144 (第82図、図版40)

東地区南端、中央よりやや西側に位置する。平面プランはやや不定形な方形を呈する。長辺0.7m、短辺0.5m、深さ0.2mを測る。遺構の中央部東よりに平面プランでは直径0.2m、深さでは0.7mの半球状を呈する範囲で炭が分布する。この部位以外の埋土は5 Y R 6 / 3 にぶい褐色焼土混シルトと暗褐色粘性シルトの混合が主になるが、最上層の炭の分布範囲の直下の、さらに下方に黒味の強い炭が若干



第81図 焼土坑38平・断面図



第82図 焼土坑144平・断面図

混じったシルト層が2層重なり存在する。遺物は出土していない。

焼土坑は東地区南半部に集中する。焼土坑50と33、焼土坑50と38は東西方向および南北方向に軸を揃えている感があり、互いに10mの間隔に開いており、何らかの規格を有しているのであろうか。

焼土坑の性格が現状では確認できず、特に焼土坑38などはそれ自体の存在が検討を要するため、偶然の所産であることも否定できない。遺構の性格として、野外炉、竈、鍛冶炉、火葬施設等を考えたが、住居跡、他の生産施設跡、スラグ、骨片が検出されないなど、いずれも決め手に欠くが、自然科学的考察によると、焼土坑33が煮炊き用の竈の可能性が指摘されている。

轍状遺構 1、2 (第83図、図版40)

東地区南東隅に南北方向に少し湾曲しながら、1.45mの幅をもって並行して走る2本の溝が認められた。溝の間にはピット状の楕円形か不定円形の土坑が一定の間隔で存在した(轍状遺構1)。検出長は約13m、溝の深さは0.08m以下を測り、断面はU字形を呈する。楕円形の土坑は長辺0.5m強で、短辺0.4m前後である。深さは0.15m前後を測る。これらの土坑の間隔は0.4m程である。埋土には粗砂が主に認められた。

近接する平成7年度の大阪府教育委員会の調査でも同様の、恐らくはこれと接続するであろう轍状の遺構が検出されている。

この他、東隅にも同様の溝が2本並行している。幅は1.5mである。溝はわずかに窪む程度である(轍状遺構2)。

轍状遺構 3

東地区の中央やや南から東側にかけて東西方向に走る轍状遺構1、2に類似する数条の溝群である。轍状遺構1、2のように2本の溝が等間隔で平行することはなく単独で存在するものもある。

溝118 (第76・77図、図版39)

東地区中央部を東西方向、調査区を斜めに走る。東西方向を正方位にとり、ほぼまっすぐに走る。検出長は60.0mである。溝の底はT.P.+7.76~+7.28mを測り、東に傾く。西から東へ流れを持つことがわかる。ラミナが顕著に観察されることから常に流水作用が働いていたものと思われる。

溝の埋土は砂が多く、底の凹凸も顕著に見られることから流れは速かったものと思われる。

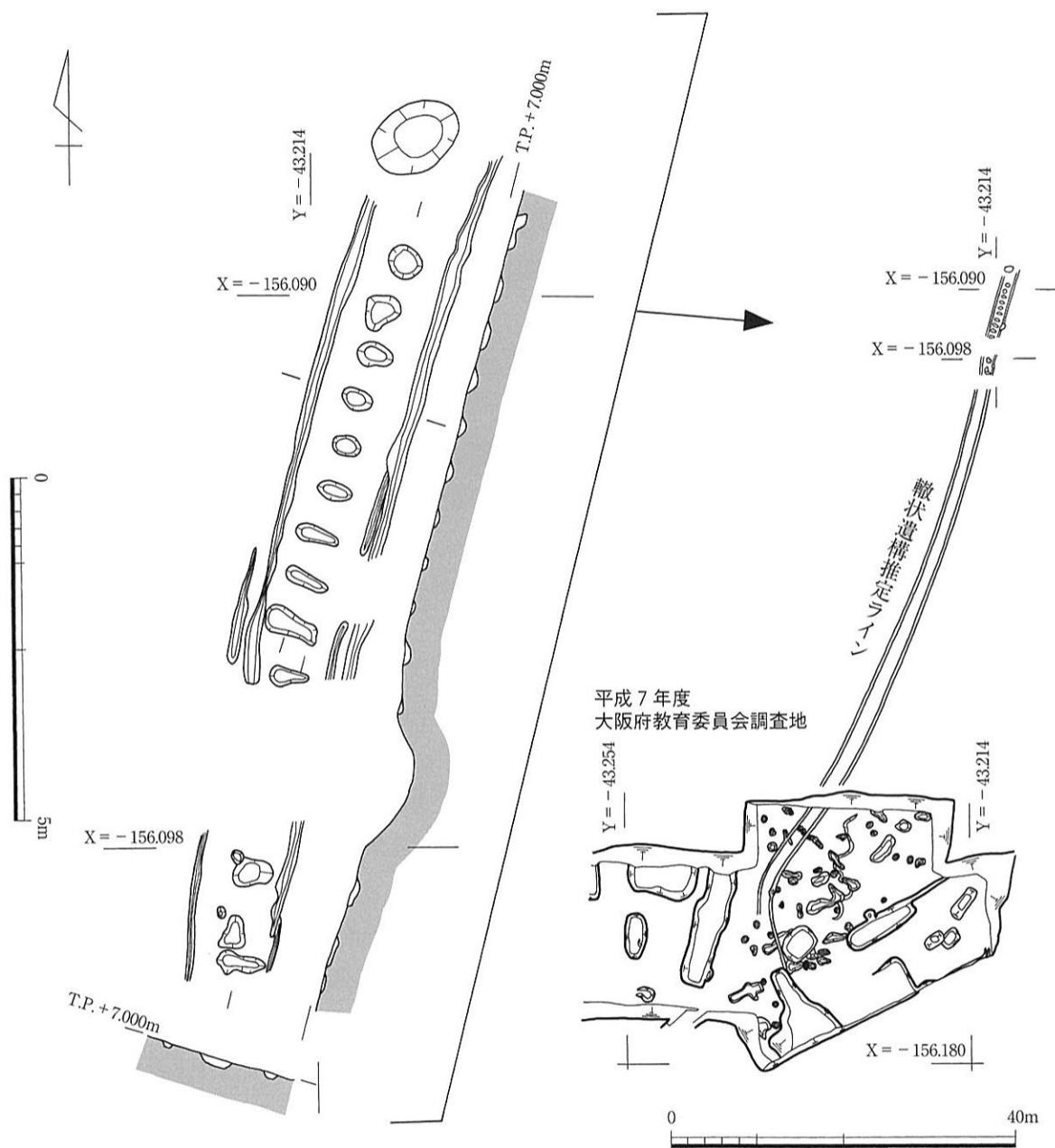
溝119 (第76図、図版39)

深さ0.2m前後、幅1.0~5.5m、検出長約32mで東は調査区外へ延びる。東西方向を正方位にとり、溝118とほぼ平行して走る。西端で少し北側に折れ、溝118に取り付く。溝の底はT.P.+7.75~7.64mを測り、東に傾く。西から東へ流れを持つことがわかる。溝118と同じくラミナが顕著に観察され常に流水作用が働いていたものと思われる。

溝118と溝119の土層断面を観察すると、溝119が溝118を切って入るようであるが、セクションFのように上層の埋土を共有する箇所もあり、若干溝119のほうが後出するが、ほぼ同時期に機能していたものと思われる。

溝176、土坑177 (第75図、図版40)

溝176は東地区南側、やや西よりに位置する。幅0.5~1.3m、深さ0.5mを測る。長さは約4mであるが、これに接続する北側の土坑177とした部分も同様の遺構と考えられることから、これと併せて5.5mとしたい。平面プランはどちらも袋状を呈する。西側で溝111に切られる。



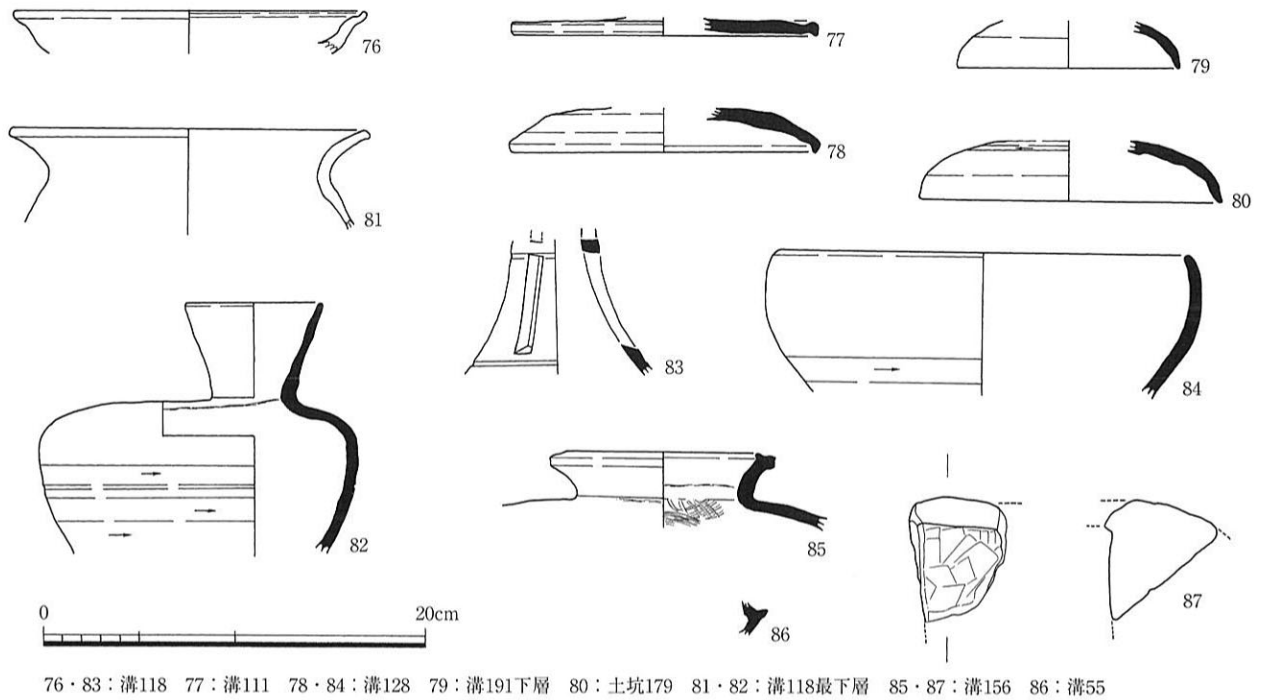
第83図 轍状遺構 1 平・断面図

溝145 (図版39)

東地区南端調査区外から延び、東へやや湾曲しながら北側で溝111にぶつかる溝である。N-20° ~ 40° - Eをとる。検出長は約11m、幅0.5m、深さ0.06~0.10mを測る。遺物は出土していない。

溝128 (第78図、図版39)

東地区北側に位置する。第6面直上で検出されているが、北側は第2層である洪水砂で広範囲に削平されており、この層を除去しての検出であることから、本来は第5面上に形成された遺構と思われる。東側の調査区外に延びる。西側を2層に途中を攪乱によって切られるが、検出長37.5m、幅1.0~1.5mを測る。T.P.+7.48~+7.32mを測り、東に傾斜する。N-68° - Wをとる。遺物は、古墳時代、古代の土師器、須恵器が出土している。



第84図 第5面検出遺構出土遺物

溝132

東地区の中央部よりやや北側、東地区の東端で溝128の北東側に位置する。第6面直上で検出されている。N-50°-Wをとる。溝128と同じく、本来は第5面上に形成された遺構と思われる。長さ約8m、深さ0.1m、幅0.3m、T.P.+7.57m前後を測り平坦である。南東端は土坑130へ取りつく。

土坑130

平面プランは長辺2.7m、短辺2.4mの若干いびつな形を呈する。深さ0.42mを測る。第6面直上で検出されている。溝128と同じく、本来は第5面上に形成された遺構と思われる。石鏃が出土している。

第5面出土の遺物 (第84図、図版47)

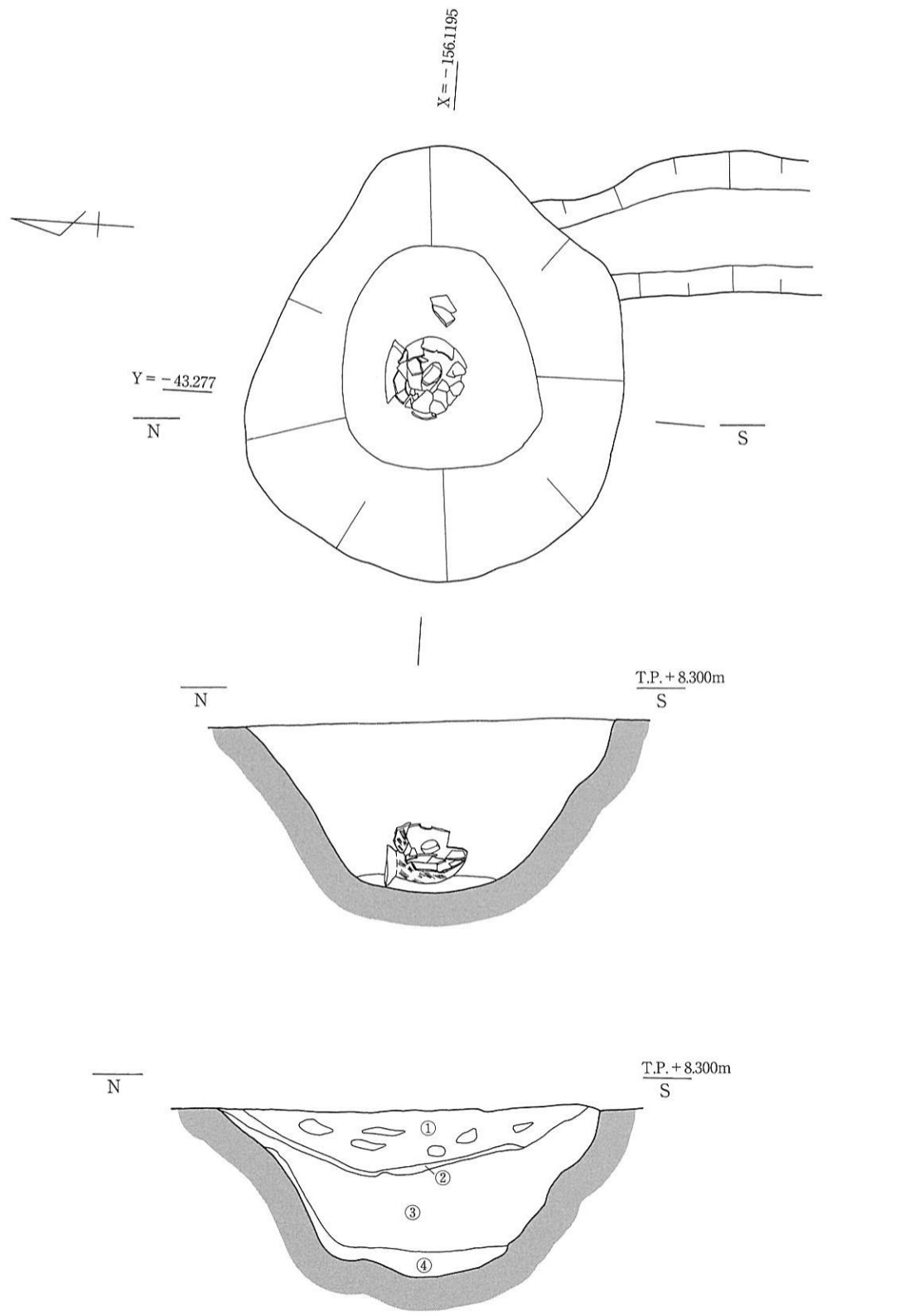
76は古代の土師器坏である。77~80は須恵器坏蓋である。81は土師器甕である。82は須恵器平瓶である。焼歪みが顕著である。83は須恵器高坏である。方形の透かし窓を持つ。84は鉄鉢形須恵器である。磨耗が激しい。85は須恵器甕、86は須恵器坏身である。

87は凝灰岩製の石製品である。欠落している部分が多いと思われる。表面の一面に鑿状工具による削りが入る。この部分は黒色に変色しており、火を受けている可能性が考えられる。二次的な使用として欠損部分の一面を砥石に転用している。この黒色の面が受け口状になっているようである。

第6面 (第88図、図版42)

灰色シルト層 (第5層) を掘削した面が第6面である。この面では土坑、溝を検出している。土坑192からは庄内式併行期の甕1基が逆さに伏せられたような状態で出土した。

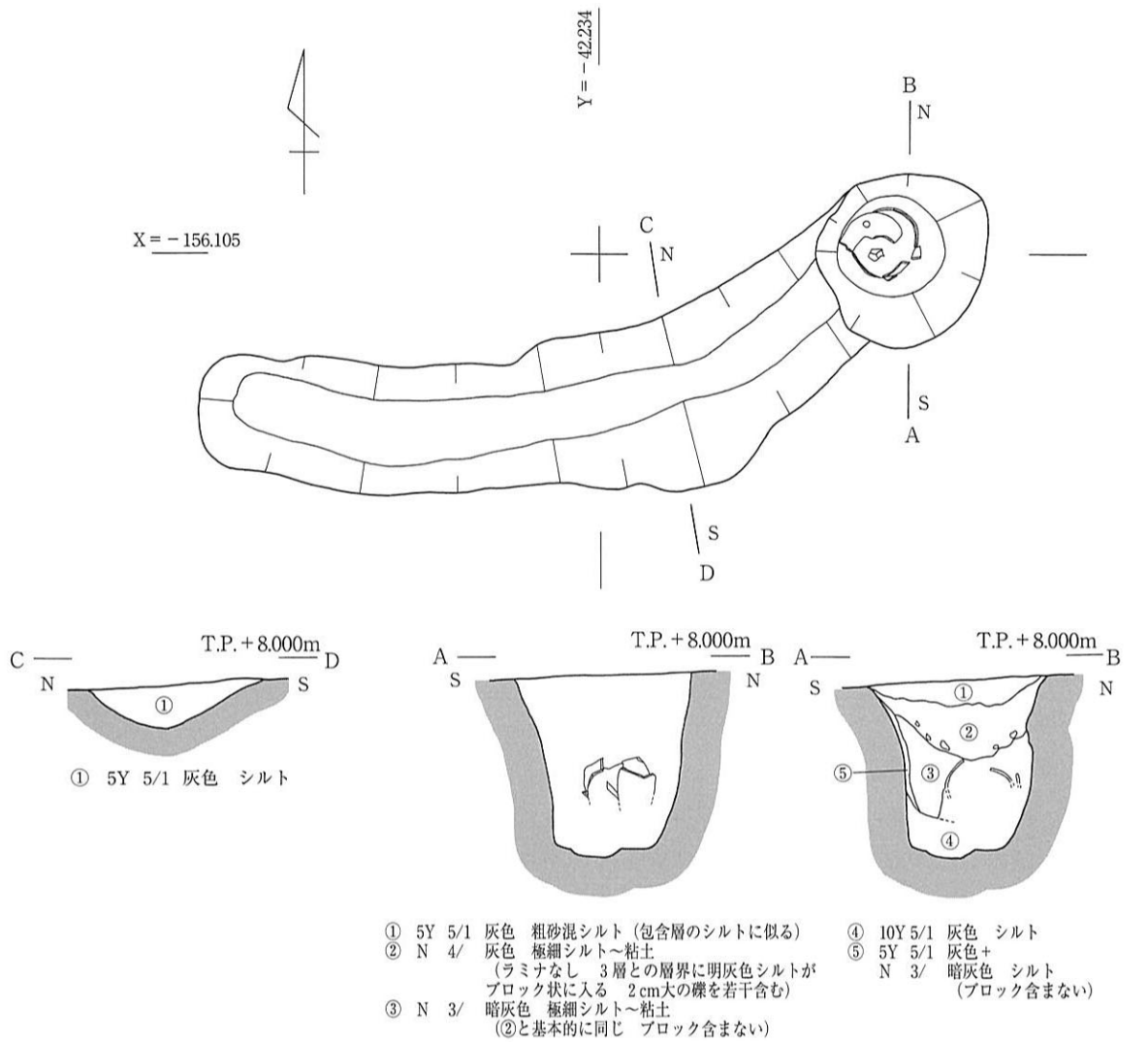
従来の調査では、第5層からは遺物の小片は若干出土するものの、これらは上層の遺物がクラック等に落ち込んだもので無遺物層の可能性が高い、と認識されていた。しかし、今回の土坑192の検出により、第5層の下にさらに古墳時代前期以前の遺構面が存在する可能性が極めて高くなった。



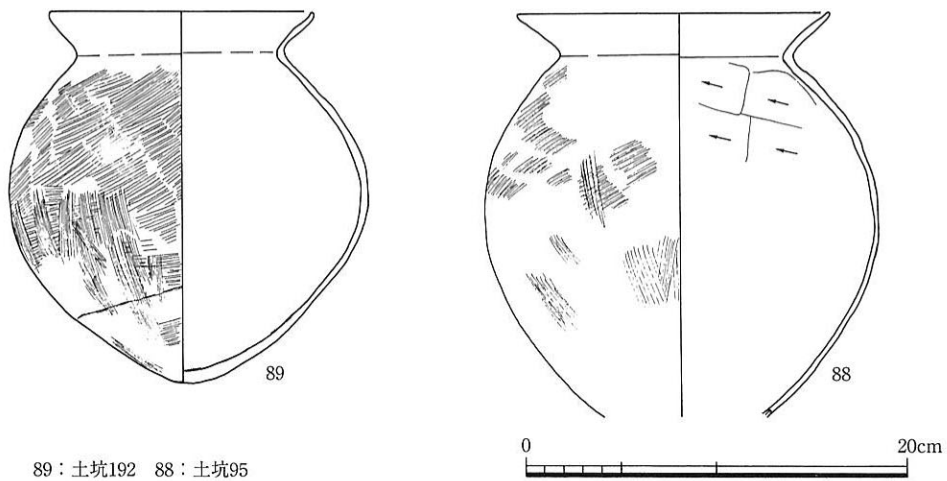
- ① 10YR 1.7/1 黒色 シルト (粗砂~細礫少量 黄色 (地山) ブロック 2~3 cm大 多く含む)
- ② 2.5Y 4/1 黄灰色 シルト (粘性有り)
- ③ 7.5Y 3/2 黒褐色 シルト (地山ブロック 2~3 cm大 少量含む 均質な土 ラミナはない)
- ④ 5YR 4/1 褐灰色 シルト



第85図 土坑95平・断・立面図



第86図 土坑192、溝200平・断・立面図



第87図 土坑95、土坑192出土遺物

土坑95（第85図、図版42）

西地区中央部より少し南に位置する。土坑3と重複し、その埋土である黒色シルトと第4層である黒色シルトの判別が難しかったため、地山と考えた黄色砂礫混シルト面まで下げた段階で遺構を検出している。この地点では明確に第6層といえる層は確認されなかった。このため確実に土坑95が第6面相当の遺構とはいえず、第5面相当の遺構となる可能性もあるが、出土遺物からほぼ同時期と考えられる土坑192との関係を考えれば、第6面相当の遺構としてよいと思われるため、ここに記述した。

平面プランは1.4×1.2mの楕円形を呈する。深さ0.53mを測る。

7.5Y R 3/2 黒褐色シルト等、黒褐色シルト系の土が主な埋土となり、若干地山起源の黄色シルトをブロックで含んでいるが、概ね均質な土である。

庄内式併行期の甕を土坑の底面に口縁部を南向きに納めていた。甕は、口縁部の一部および底部を欠く。これが土圧によって上部がひしゃげた状態で出土している。

甕（第87図-88、図版47）は体部外面に細かいタタキ（5条/cm）を比較的密に施した後、縦方向のハケ調整が体部中央より下位に施される。外面全体に煤が付着している。口縁端部は上方に摘み上げている。内面は横方向の篋削りが施されるが、器壁の磨耗が全体に激しく、体部中～下位部の調整の詳細はよくわからない。

土坑192、溝200（第86図、図版42）

東地区南端に位置する。土坑192は直径0.5mほどの、平面プランはほぼ円形のピット状の遺構である。深さ0.5mを測る。土坑から庄内式併行期の甕1基が逆さに伏せられたような状態で出土した。

埋土は第5層に類似する10Y 5/1 灰色シルト等、灰色系シルトが主にはいり、ブロック土等を含まない比較的均質な土の堆積であり、穏やかな堆積をしめすものであった。

溝200は土坑192に切られ、若干アールを描きながらその西側に伸びる。長さ1.95m、幅0.5m、深さ0.1mを測る。埋土には土坑192と近似し、5Y 5/1 灰色シルトが入る。遺物は出土していない。

土坑192より出土した甕（第87図-89、図版47）は体部外面にタタキを下方にまで比較的密に施された後、縦方向のハケ調整が体部中央より下位に施される。外面には煤が付着している。口縁端部は上方へ軽く摘み上げている。底部は丸みを帯びながらもわずかに存在し、底部径は2.1cmを測る。体部下位には粘土紐痕が見られた。

内面は篋削りの後粗くナデを施したようであるが、剥離著しく、調整の詳細は不明である。

土坑34（第89図、図版43）

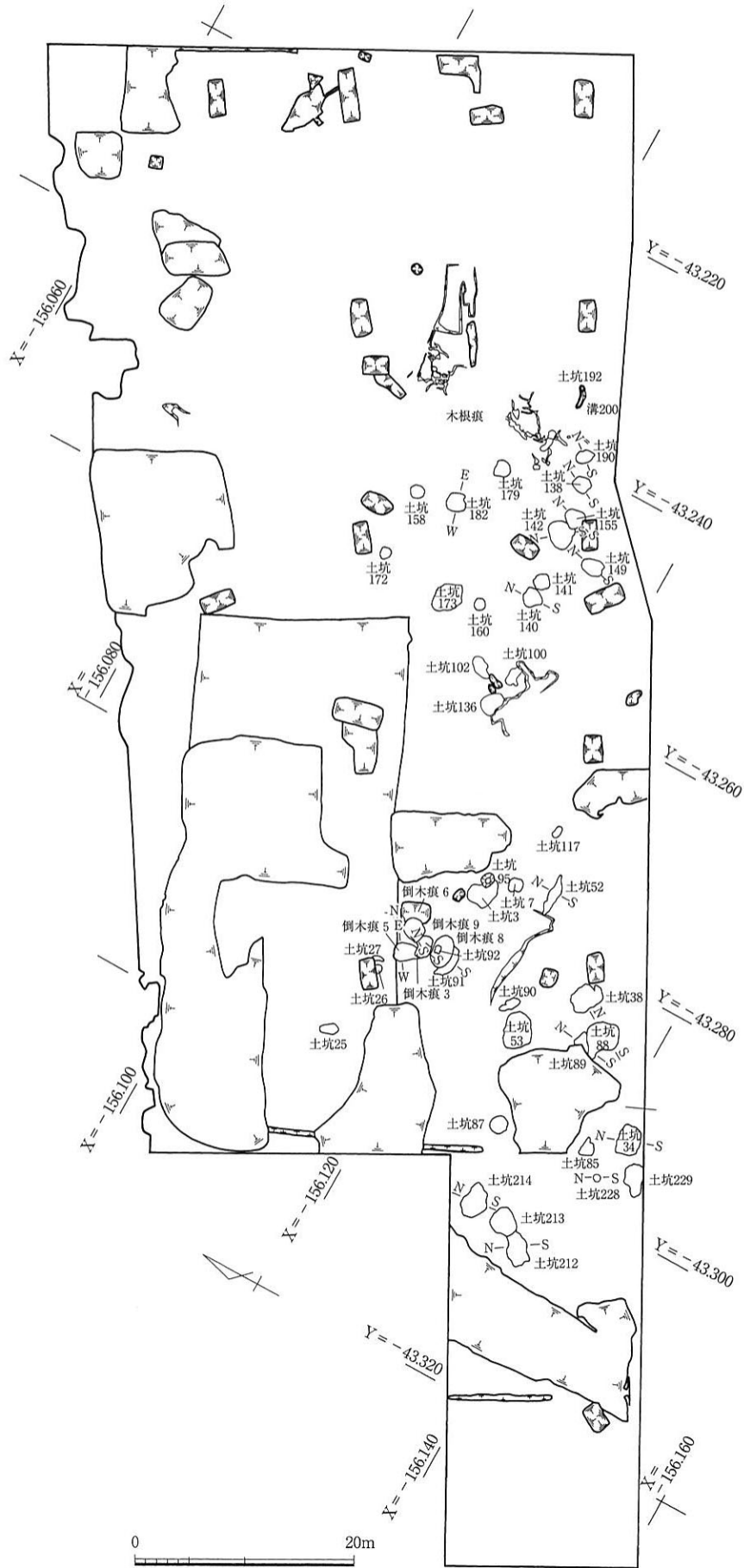
西地区、南西隅に位置する。長辺2.5m、短辺2.0m、深さ0.34mを測る。平面形は隅丸方形を呈する。地山起源の5Y 8/2 浅黄色の砂礫が中央に入り、土坑の縁辺部に5Y R 2/1、10Y R 2/2 黒褐色粘性シルトが入る。遺物は出土していない。

土坑52（第89図）

西地区、中央よりやや南側に位置する。長辺4.0m、短辺1.25m、深さ0.2mを測る。平面形は細長い形状を呈する。5Y 7/3 浅黄色の粘性シルトの下にもぐりこむように10Y R 2/1 等黒色系の土壌化したシルトが入る。遺物は出土していない。

土坑88（第89図）

西地区、西よりに位置する。平面形は径が3m前後の楕円形を呈する。主に地山起源の黄色系シルトで形成され、土坑の上層の縁部に土壌化の進んだ黒色系粘性シルトが入る。遺物は出土していない。



第88図 第6面遺構全体図

土坑89（第89図）

西地区、南西隅に位置する。平面形は一辺1mほどの不定な円形を呈する。深さ0.34mを測る。地山起源の5Y8/8黄色砂礫が、土坑周縁部の埋土を形成する2.5Y2/1黒色粘性シルトの下にもぐる形で中央部から下方に位置する。遺物は出土していない。

土坑138（第89図）

東地区南西隅に位置する。平面形は長辺が1.5m、短辺が1.3mを測る不定な円形を呈する。深さ0.5mを測る。地山起源の黄色系のシルトや砂礫が主体となり、土坑の上層、縁辺部を土壌化の進んだ黒色系のシルトが取り巻くように位置する。遺物は土師器片が出土している。

土坑140（第89図）

東地区中央より南側に位置する。平面形は径が1.8m程の不定な円形を呈する。深さ0.3mを測る。土壌化の進んだ黒色系のシルトが主体となり、地山起源の黄色系の砂礫混シルトが混じる。灰黄褐色を呈する部分も多い。遺物は出土していない。

土坑142（第89図）

東地区中央よりやや南に位置する。平面形は径が1.9m程の不定な円形を呈する。深さ0.6mを測る。地山起源の黄色系のシルトや砂礫が主体となり、土坑の縁辺部を土壌化の進んだ黒色系のシルトが取り巻くように位置する。遺物は出土していない。

土坑149（第89図）

東地区南西隅に位置する。平面形は長辺2.6m、短辺1.5m程の楕円形を呈する。深さ0.6mを測る。地山起源の黄色系のシルトや砂礫が主体となり、土坑の上層、南側の縁辺部を土壌化の進んだ黒色系のシルトが取り巻くように位置する。遺物は出土していない。

土坑155（第89図、図版43）

東地区中央よりやや南に位置する。土坑149を切る。平面形は径が1.4m程の不定な円形を呈する。深さ0.5mを測る。地山起源の黄色系のシルトや砂礫が主体となり、土坑の上層、北側の縁辺部を土壌化の進んだ黒色系のシルトが取り巻くように位置する。遺物は出土していない。

土坑182（第89図）

東地区中央に位置する。平面形は径が2.0mの不定な円形を呈する。深さ0.45mを測る。地山起源の黄色系のシルトや砂礫が主体となり、土坑の上層、西側の縁辺部を土壌化の進んだ黒色系のシルトが取り巻くように位置する。遺物は出土していない。

土坑190（第89図）

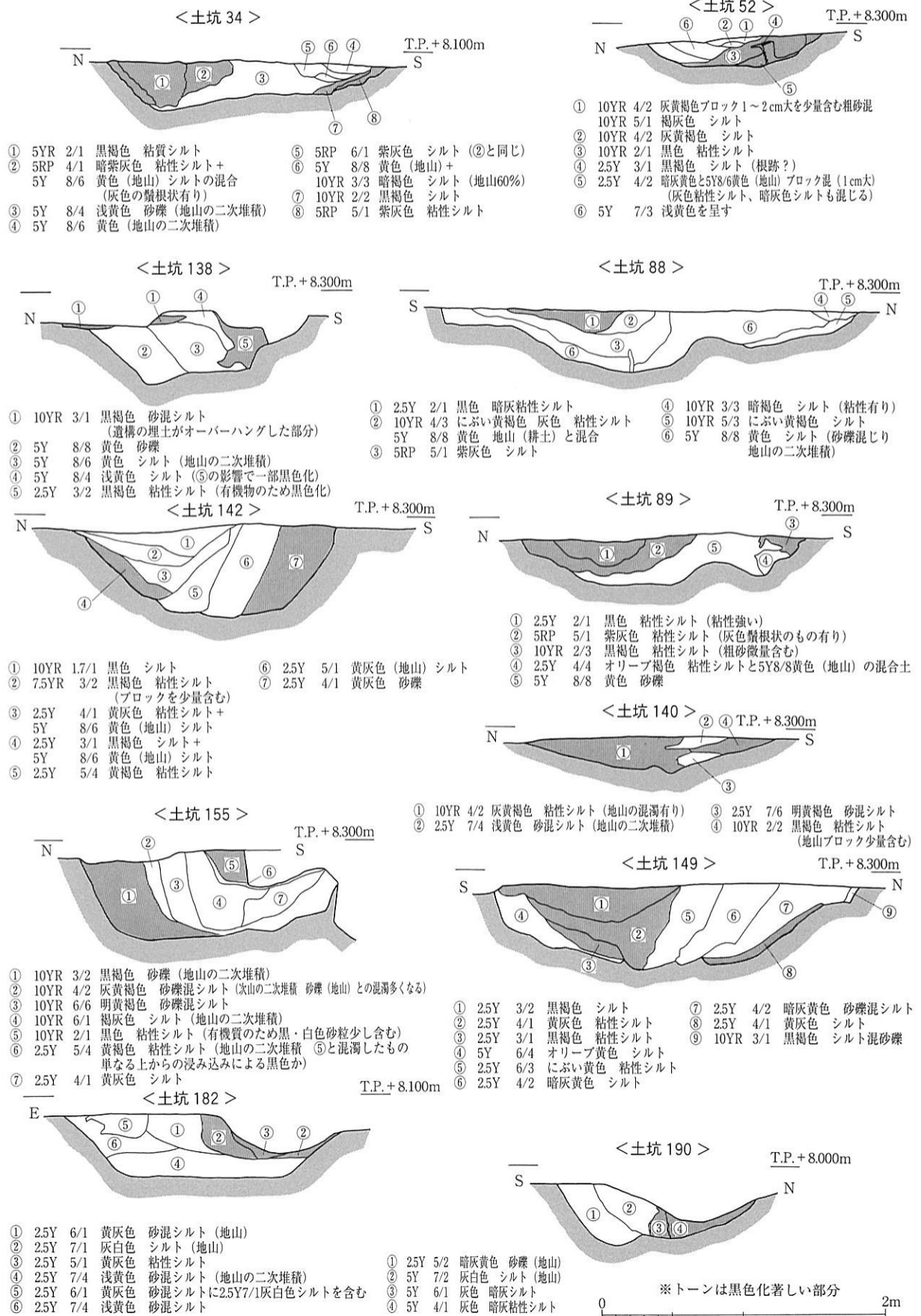
東地区中央南隅に位置する。平面形は径が1.4m程の不定な円形を呈する。深さ0.4mを測る。地山起源の黄色系のシルトや砂礫と土壌化の進んだ黒色系のシルトで構成される。遺物は出土していない。

土坑212（第90図、図版43）

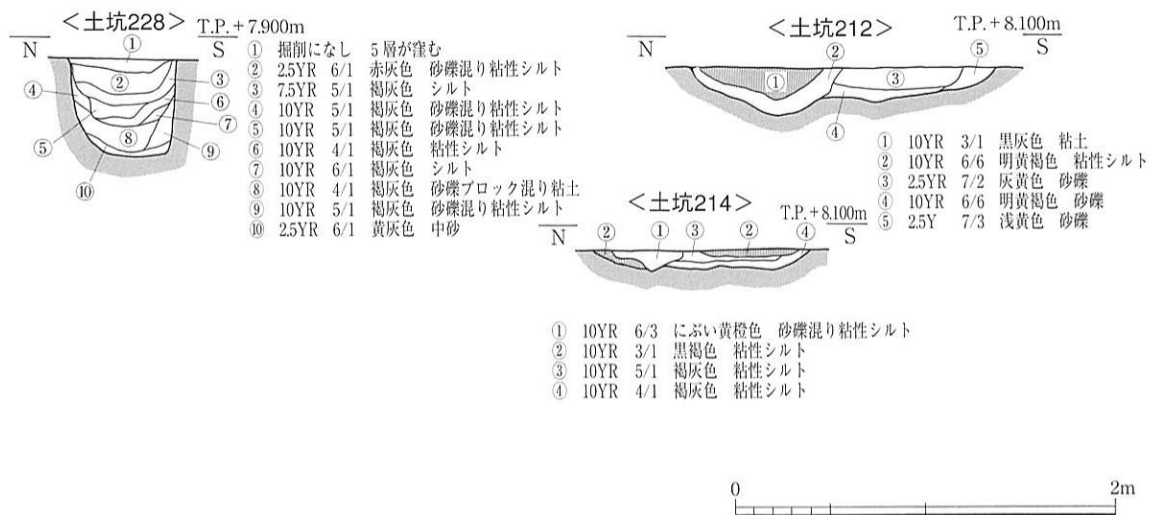
拡張地区北東隅に位置する。土坑213に切られている。平面形は長辺3.0m、短辺1.6m程の楕円形を呈する。深さ0.3mを測る。地山起源の黄褐色系の粘性シルトや砂礫が主体となり、土坑の上層、北側の縁辺部を土壌化の進んだ黒色系の粘土が取り巻くように位置する。遺物は出土していない。

土坑214（第90図、図版43）

拡張地区北東隅に位置する。平面形は長辺3.3m、短辺1.2m程の楕円形を呈する。深さ0.1mを測る。地山起源の黄褐色系の粘性シルトが主体となり、土坑の上層、南側の縁辺部を土壌化の進んだ黒色系の



第89図 第6面検出遺構断面図1



第90図 第6面検出遺構断面図2

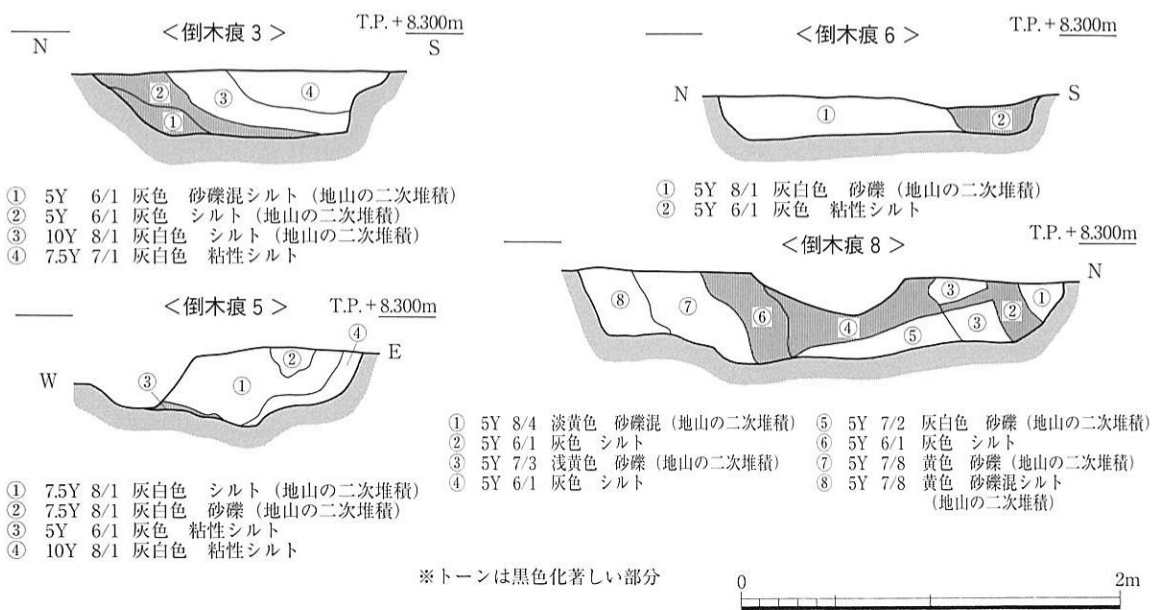
粘土が取り巻くように位置する。遺物は出土していない。

土坑228 (第90図)

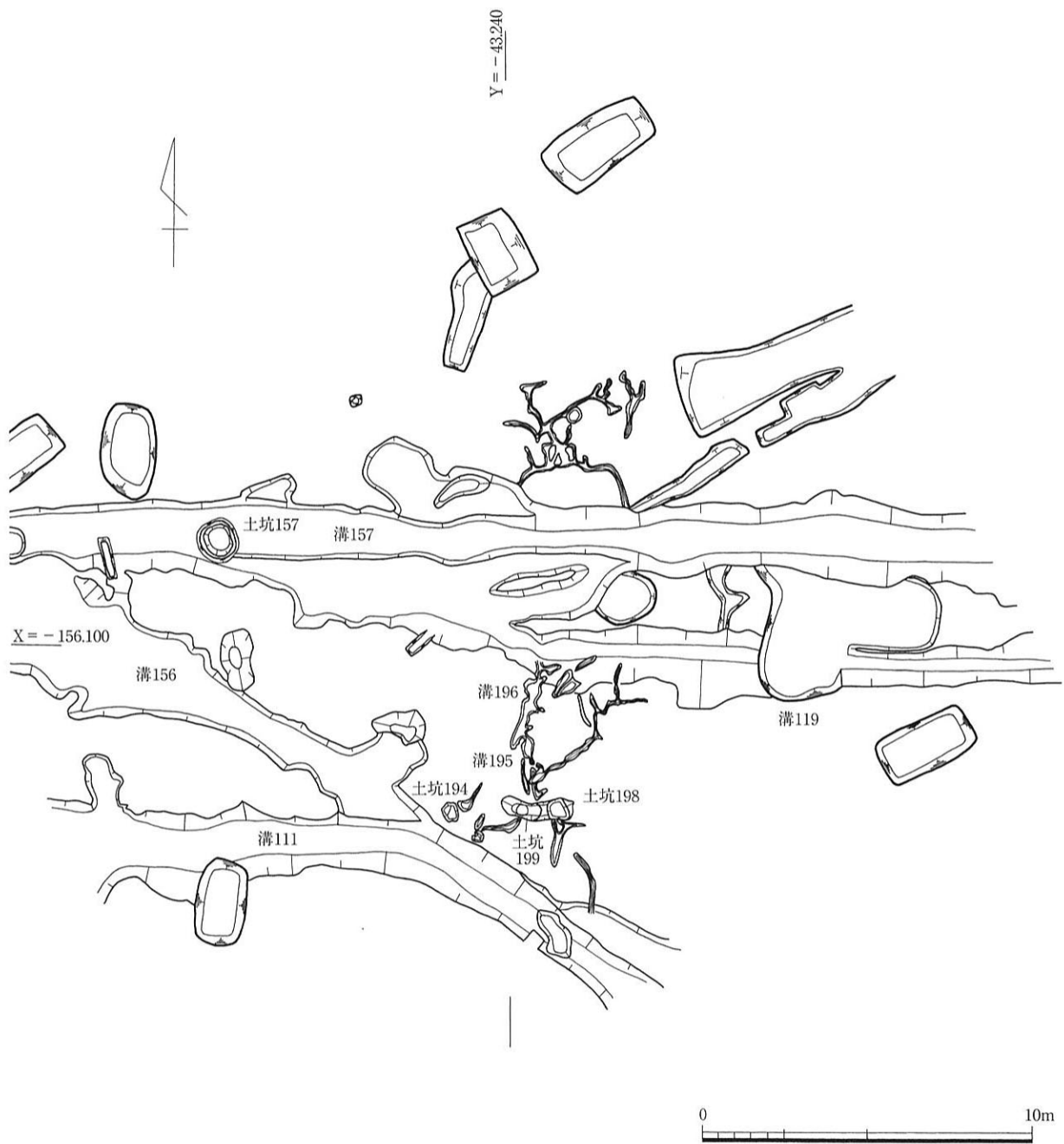
拡張地区東隅に位置する。平面形は直径0.5mほどの円形を呈する。深さ0.5mを測る。地山起源の褐灰色系の砂礫混粘性シルトが主体となっている。遺物は出土していない。

典型的な倒木痕は、樹木(多くは大木)が根ごと地面にひっくり返り生じた穴に周辺の土砂(腐葉土)が流れ込み、土壌化(黒色化)する。中央部、もしくは穴の片側は木の根によって抱き上げられたベースの土(黄色土)が盛り上がるように垂直方向に堆積する。その為、平面形では、土坑の周辺をリング状かドーナツ状もしくは半月状に黒色土の帯ができ、穴の中央部もしくは片側にはベースの土と似かよった土が堆積する。人為的に掘削が行われていないため、遺構の肩がはっきりしない。人為的に掘削および使用された土坑でないため、当然遺物もほとんど出土しない。

主に台風等の強風により起こる樹木の倒壊により生じる土坑と考えられ、風倒木痕とされることが多い。



第91図 第6面検出遺構断面図3



第92図 木根跡平面図

このような特徴をもとに、各土坑を検討すると、第89・90図及び図版43に掲載した土坑は土坑228を除き、およそその条件は満たすため倒木痕と考えられる。

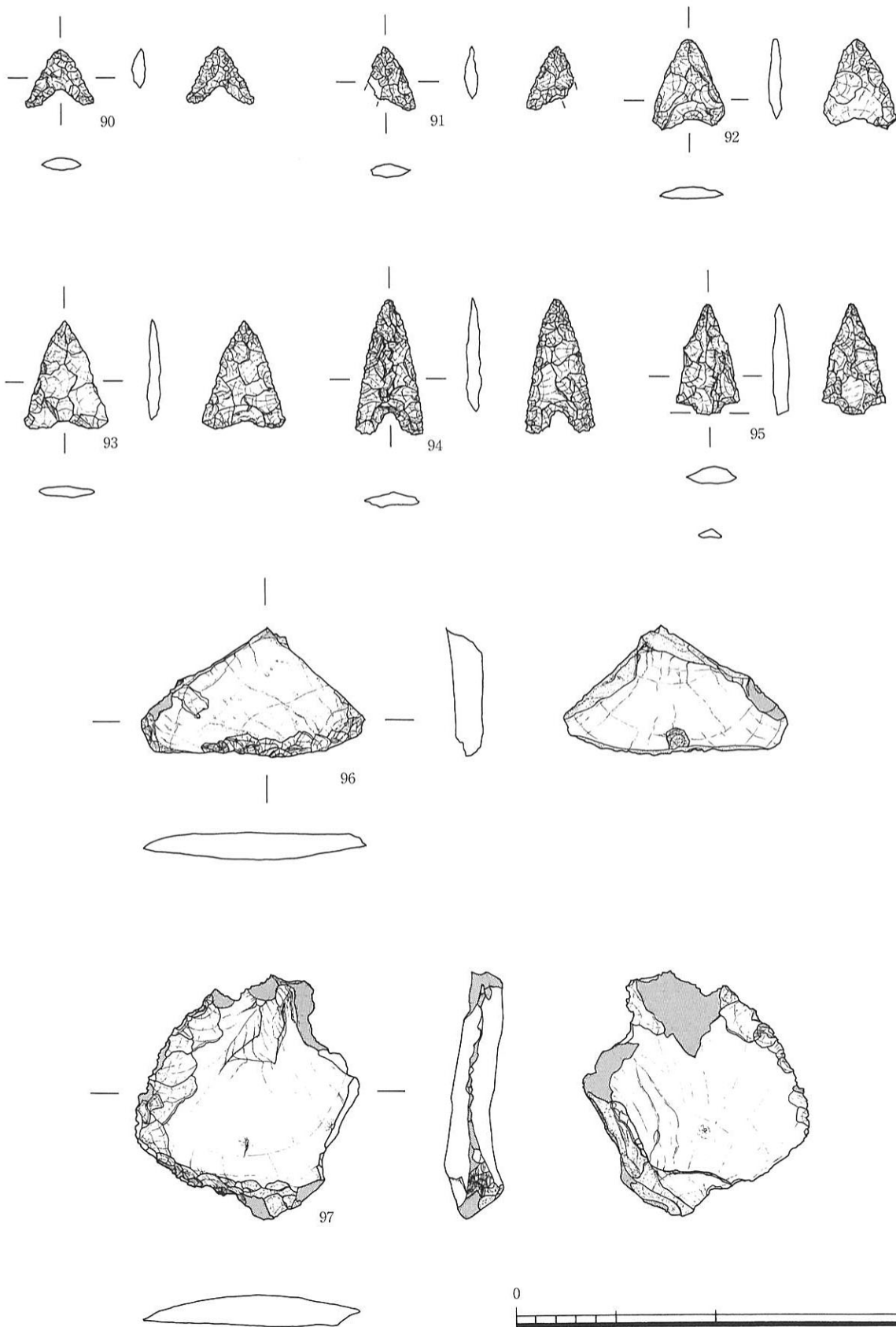
以下に述べる第91図に表した倒木痕は上述の土坑を検討した後に検出したため、人為的に掘削して作られた土坑と区別するため土坑にはそのまま倒木痕という名称を与えた。

倒木痕 3 (第91図)

西地区中央部やや北に位置する。平面形は長辺2.3m、短辺1.6m程の楕円形を呈する。深さ0.36mを測る。地山起源の灰色・灰白色系のシルトや砂礫が主体となる。遺物は出土していない。

倒木痕 5 (第91図)

西地区中央部やや北に位置する。倒木痕 3 に切られる。平面形は長辺2.3m、短辺1.6m程の楕円形を



90 : 土坑130 91 : 第5層 92 : 溝55 93・94・97 : 第6面 95 : 第6層 96 : 溝10

第93図 調査区内出土石器

呈する。深さ0.36mを測る。地山起源の灰色・灰白色系のシルトや砂礫が主体となる。遺物は出土していない。

倒木痕 6 (第91図)

西地区中央部やや北に位置する。倒木痕 9 に切られる。平面形は直径1.8m程のほぼ円形を呈する。深さ0.2mを測る。地山起源の灰色・灰白色系のシルトや砂礫で形成される。遺物は出土していない。

倒木痕 8 (第91図)

西地区中央部やや北に位置する。平面形は長辺2.9m、短辺1.6m程の楕円形を呈する。深さ0.5mを測る。地山起源の灰色・灰白色系のシルトや砂礫で形成される。遺物は出土していない。

木根跡 (第92図・図版42)

東地区中央南側で検出された。網の目状に広がる掘りの浅い遺構である。埋土には灰白色の砂混シルトが入っていた。木の根の痕と思われる。

調査区内出土石器 (第93図、図版48)

今回の調査では、確実に縄文時代以前と目される層および面は検出されていない。よって、ここに一括して石器の説明をすることにしたい。

石器は全てサヌカイト製である。二上山産であると思われる。

90～95は石鏃である。内、90～94は凹基無茎式である。90は土坑130より出土している。小型で精緻な造りであり、風化が激しい。前期～中期の製品か。91は拡張区 B14e 1 地区第 5 層出土である。縁の剥離が激しい。左側逆刺部が欠落している。92は西地区 B13b 7 地区の溝55より出土している。造りは粗雑である。抉り部分は浅い。風化が激しい。93は東地区 A13g 3 地区第 6 面出土である。92と同じく、造りは粗雑で、抉り部分は浅い。92、93とも晩期の製品と思われる。94は拡張区第 6 面出土である。長細く、縁は比較的丁寧加工されている。抉りは鋭く、深い。前期の製品か。95は拡張区 B14e 1 地区第 6 層出土である。作用部の中程にわずかに突起を持つ。有茎式である。晩期の製品である。

96、97は剥片の 2 次加工品である。96は西地区溝10より出土している。刃部が片面のみより加工されている。自然面を残す。風化が激しい。97は西地区 B14b 6 地区第 6 面より出土している。欠損部分が多く、刃の形状ははっきりしない。風化も激しい。

(参考文献)

- ・古代の土器研究会『都城の土器集成』I、II 1992、1993
- ・大阪府教育委員会『陶邑』III 1978
- ・大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター『日置荘遺跡』1995
- ・中世土器研究会『概説 中世の土器・陶磁器』1995
- ・(財)大阪府文化財調査研究センター『東奈良遺跡』1998

表5 (その4) 遺物出土遺構一覧表

遺構番号	性格	大区画	小区画	遺構面	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	主要遺物	備考
2	鋤溝群	西	B13-c8	第2面	-	-	-	須恵器壺片、土師器羽釜片	
3	鋤溝群	西	B13-c8・d8・e9・e10	第3-1面	-	-	-	土師器皿、瓦器境(瓦器IV-1?IV-2)、土師器羽釜、須恵器片、須恵器鉢片	
4	鋤溝群	西	B13-b9	第3-2面	-	-	-	土師器皿、瓦器境(III、IV-1)、土師器羽釜、土師器甕、炉壁、瓦質羽釜、須恵器坏蓋(IV)須恵器片	
5	土坑	西	B13-b9	第3-2面より上	10.00	4.70	0.12	土師器皿、瓦器境、近世陶磁(備前か)、近世施釉土師器皿、近世青磁染付	
6	土坑	西	B14-d9	第3-2面	1.00	0.50	0.02	中世土器片	
7	土坑	西	B14-d9	第3-2面	1.00	0.60	0.05	瓦器境片、土師器羽釜片	概乱で一部削平
10	溝	西	B13-c7・c8・c9・c10	第4-1面			本文中	瓦器境片(II-3?III-1)、須恵器坏身・蓋、須恵器壺・甕、土師器高坏、石鉢	
11	溝	西	B13-d8	第4-1面			本文中	中世土器片	
12	土坑	西	B13-c9	第4-1面			本文中	土師器皿、瓦器境(IV-1)	
14	土坑	西	B13-b9	第4-1面	0.80	0.40	0.08	瓦器皿、土師器皿、土師器羽釜	土坑5内にある
24	溝	西	B13-c8	第5面			本文中	須恵器壺	
29	土坑	西	A14-j1	地山直上	4.00	1.00	0.34	須恵器壺	不定形
39	土坑	西	B13-e10	第5面	-	-	-	瓦質三足、土師器境	土坑34へ
53	土坑	西	B13-c9	第5面	3.40	2.35	0.37	土師器片(中世の皿か)	倒木痕
54	溝	西	B13-b7	第5面			本文中	土師器片(羽釜か)	
55	溝	西	B13-b6・b7・b8	第5面			本文中	土師器壺片、須恵器壺片、須恵器坏蓋(II)・坏身(II-5)、土師器羽釜か、石器	
95	土坑	西	B13-b8	第5面			本文中	庄内甕	
96	溝	西	B13-b8	第5面	3.00	4.30	0.13	土師器壺片	
102	土坑	西	B13-a7・b7	第5面	2.80	1.20	0.29	土師器片	不定形
111(上層)	溝	東	B13-a4・a5・a6・b5	第4・5面			本文中	土師器片(古墳時代か)、須恵器片(古代か)	
111	溝	東	B13-a4・a5・a6・b5	第4・5面			本文中	須恵器壺、土師器片、土師器壺、土師器坏C(飛鳥?奈良初)、須恵器坏蓋(IV)、須恵器短頸壺、須恵器長頸壺	
111(下層)	溝	東	B13-a4・a5・a6・b5	第4・5面			本文中	須恵器壺	
116	窪み	東	B13-a5	第4面	3.00	2.00	-	須恵器壺	不定形
118(上層)	溝	東	A13-j2・j3・j5・j6	第4・5面			本文中	土師器壺、土師器坏、(8C頃か)、土師器壺(7?8C頃か)、須恵器坏身(II-4)、須恵器高坏(長脚2段スカシ(II-5)、須恵器壺	
118	溝	東	A13-j2・j3・j5・j6	第4・5面			本文中	土師器壺	
118(最下層)	溝	東	A13-j2・j3・j5・j6	第4・5面			本文中	土師器壺(6C頃か)、須恵器壺	
119	溝	東	A13-j3・j4・j5 B13-a2・a3・a4・j2	第4・5面			本文中	土師器高坏(9C頃か)、土師器壺、須恵器片(坏か)、須恵器壺、須恵器坏身(II-4)	
119畦部(上層)	溝	東	A13-j3・j4・j5 B13-a2・a3・a4・j2	第4・5面			本文中	須恵器坏蓋(II-5)、土師器壺	
119(下層)	溝	東	A13-j3・j4・j5 B13-a2・a3・a4・j2	第4・5面			本文中	土師器片	
120	土坑	西	B13-a4	第5面	2.00	1.00	0.20	土師器壺か	不定形
122	土坑	西	B13-b7	第5面	1.00	0.70	0.02	土師器片(甕か、古墳時代か)	不定形
128	溝	東	A13-g4・A13-h3	第6面			本文中	土師器壺、須恵器壺、須恵器坏身(II-3~5)、須恵器鉢、須恵器坏蓋(IV?)	
129	土坑	東	A13-g3	第6面	0.75	0.30	0.07	土師器片、土師器坏Cか(飛鳥時代か)	
130	土坑	東	A13-g3 A13-H3	第6面			本文中	石鉢	
131	土坑	東	A13-g3	第6面	16.00	4.50	0.30	土師器壺・鉢、須恵器鉢形	不定形、落ち込み
132	溝	東	A13-g3	第6面			本文中	土師器把手(古代)	
133	溝	東	A13-f3	第6面	2.30	0.40	0.07	中世土師器片	
138	土坑	東	A13-a5	第5面	1.50	1.30	0.55	土師器壺片か(古墳時代か)	倒木痕
139	溝	東	B13-a4	第5面	2.50	0.30	0.08	土師器壺片(古墳時代)、土師器壺(古墳時代か)、須恵器壺片、	
146	鋤溝	東	B13-b5	第5面	3.00	0.10	-	土師器片	
150	溝	東	A13-j2	第4面			本文中	須恵器坏身(III)、土師器壺	
151	溝	東	B13-a4	第5面	1.60	0.30	0.04	土師器片(古墳時代)	
152	溝	東	B13-a5	第5面	3.00	0.67	0.05	土師器片(古墳時代か)	溝111上層か
153	溝	東	B13-a5	第5面	2.00	0.50	0.20	土師器片(古墳時代か)	溝111上層か
154	窪込み	東	A13-j1・j2	第5面	6.50	4.30	0.20	須恵器高坏、土師器壺片、土師器片(坏Cか、7C頃か)	上層、不定形
156	溝	東	B13-a5・a6 A13-j5・j6	第5面			本文中	弥生甕(V様式)、土師器壺(古墳時代)、土師器(古墳時代)、須恵器高坏、須恵器壺	
157	窪み	東	A13-j6	第5面	0.50	0.50	-	須恵器壺、土師器壺片、土師器壺片(古墳時代)	溝118へ吸収
159	土坑	東	B13-b5	第5面	-	-	-	砥石?、土師器片(甕か、古墳時代か)	土坑149へ吸収
160	土坑	東	B13-a6	第5面	1.15	1.10	0.15	土師器片	溝111内
170	溝	東	B13-a5・a6	第5面	3.00	0.30	0.05	須恵器壺(古墳時代)、土師器片	
171	溝	東	B13-a6	第5面	1.50	0.80	0.04	土師器片、須恵器片か(瓦器かも、焼成不良)	
172	土坑	東	A13-j6	第5面	1.15	1.20	0.08	土師器片	
175	溝	東	B13-a4	第6面			本文中	土師器片、土師器壺、須恵器壺	
176	土坑	東	B13-a4・a5	第5面			本文中	土師器片(古墳時代甕か)	
177	土坑	東	B13-a5	第5面			本文中	土師器壺(古墳時代)	
178	土坑	東	B13-a5	第5面	4.00	2.00	0.14	土師器壺(古墳時代)	
179	土坑	東	B15-a5	第5面	1.70	0.80	0.33	土師器片、須恵器坏蓋(II-5)	
180	溝	東	B15-a5	第5面	2.70	0.35	0.08	土師器片、須恵器壺(古代)	
191	溝	東	A13-a5	第5面	-	-	-	須恵器坏身(III-IV)	溝111の下
192	土坑	東	B13-a3	第7面			本文中	庄内甕	
193	土坑	東	A13-i2	第6面	0.60	0.35	-	土師器壺(古墳時代か)	
194	土坑	東	B13-a5	第6面	0.60	0.45	0.04	土師器片(古墳時代か)	木根痕
195	溝	東	B13-a4	第6面	1.00	0.15	0.01	土師器片	木根痕
196	溝	東	B13-a4	第6面	2.75	0.45	0.06	土師器片	木根痕
201	溝	披	B14-d2・e1・e2	第2面			本文中	土師器皿、土師器羽釜、須恵器鉢、平・丸瓦、瓦質鉢鉢、備前鉢鉢(16C)、染付碗、青磁、白磁(IV類)、	
202	溝	披	B14-d1	第2面			本文中	瓦質壺、瓦器境、須恵器鉢鉢、信楽焼鉢鉢、染付片	
203	鋤溝群	披	B14-e3	第2面	-	-	-	染付片(18C)	
204	土坑	披	B14-e2	第4-2面			本文中	瓦器境	
231	井戸	披	B14-d1・d2	第2面	5.00	4.80	-	須恵器壺(古墳時代)、平瓦(中世)	

小結

今回の調査では主に耕作に関係する遺構が検出された。

先述したように、当地は大和川の河川敷にあたり、調査以前は更地であった。ただし、昭和の中頃まで耕作地として使用されていた事が昭和35年撮影の航空写真や大阪府発行の昭和36年作成（1/3000）の地形図にうかがえる。

調査区の北半部は川の流水作用により削平を受けて第6層まで消失する箇所があり、同一のレベルで検出した面といえども同時期に形成されたとは言えない部分も多い。

大和川が宝永元年（1704年）に付け替えられて以降の耕作面については、鋤溝等の耕作痕が川と平行しているか、もしくは直交する形となる。大和川の付け替え以前は東西南北のほぼ正方位に走る耕作痕や畦畔が検出される。

耕作面の初現は出土遺物から、中世前期にさかのぼり昭和まで連綿と続くと考えられる。

遺物や遺構から第1面が現地表面、第2面が1704年以降の耕作面、第3面が中世・近世耕作面、第4面が中世耕作面である。

この内第4面、第5面では耕作に伴う用水設備と考えられる溝が数条検出された。溝の方向は大別して2つに分かれる。

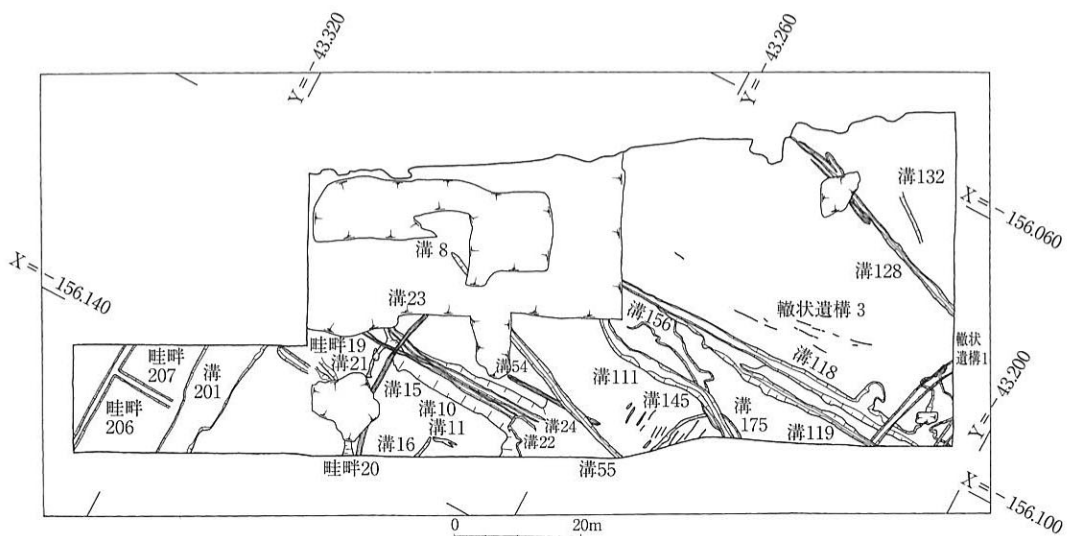
溝10およびその下から検出された溝22・24、溝54、溝118、溝119は正方位をとり東西に走る。

第5面で検出された溝54以外はいずれも第4面の段階で、浅い水溜り状の遺構として検出されているが、溝118・119は第5面の段階で掘削され、溝としての機能が果たされていたものと思われる。

正方位にプランをとる遺構は、これらの溝の他に、第2面の溝201、畦畔、耕作痕が挙げられる。轍状遺構3も概ね東西方向に痕跡が見られる。焼土坑33・50の「本体部」も正方位で南に構える。このように耕作痕等が連綿と同一方向を踏襲することから、中世以降の当地域の基本的な地割りであったものと考えられる。

もう一つは東西方向より15°ほど南に振る溝の一群である。溝55、溝156、溝128がこれにあたる。

溝55・156は第5面から検出されており、溝128は第6面から検出されている。



第94図 (その4) 調査区内主要溝・畦畔位置関係図

その他、溝132はN-50°-W、溝156はN-60°-Wを測るが、方向に少し開きがあり、一群として捉えるには躊躇するものである。

溝10と溝118との間隔は約26.0m(約1/4町)を測り、溝55と溝128との間隔は約56.0m(約半町)を測る。なお、溝132と溝156の間隔は43m(約2/5町)を測る。

このように1町の分割を基準とした何らかの規格をもとに溝が掘削された可能性が考えられる。

正方位を基準とする規格が当地の地割として近世まで踏襲されたことを考えると、南へ15°ほど振る溝群はさらに古く考えられる。ただし、溝54と溝55との切り合い関係はこれと矛盾している。

さらに、第4面から検出された溝111は蛇行しており、方向においては両方の性格を持つものである。規格の移行期に当たっては、基準の併行もしくは混乱をきたしているのかもしれない。

断っておくが、表5に見られるように、遺構出土の遺物は概して少なく、出土する遺物も古墳時代の遺物が多い。そのため、古代以降の可能性が高いと考えられる遺構でも時期の判別は難しい。

これら第5面相当の正方位に東西に走る溝で溝118から奈良時代の土師器坏・甕が下限の遺物として出土している。第4-1面で検出された溝10からは瓦器細片が出土している。

西方向より15°ほど南に振る溝の一群では溝128より奈良時代の須恵器蓋が出土している。溝132からも土師器把手が出土している。

出土する遺物量が少なく、確たることは言えないが、8世紀以降13世紀以前に地割りの規格が正方位を基準とするように変わった可能性が考えられる。よって当地の溝は古代から中世に至るある段階で計画的に掘削され、正方位(東西方向)に規格されていく。

溝の底は総じて若干西側が高いため、流れの方向は現在の和川の流れとは反対で、緩やかに西から東へ流れる。

当地の地形は西側の上町台地南端から延びる段丘と東側の瓜破台地とに挟まれる形で存在する氾濫原・扇状地性低地に当たる。明治18年日本陸軍測量の『仮製日本図』によると、標高10m弱を測る。泉北丘陵から延びる地形に影響され、等高線のラインはほぼ東西方向に引くことができる。当地は南側から北側に緩やかに傾斜するため、東西方向の比高差は少ない。よって和川と逆の方向に緩やかに流れることは不自然ではない。

周辺の水利用を考えた場合、和川今池遺跡のほぼ真西に接するように存在する、と推定される古代の人工池である依羅池の存在や、東側に位置した旧西除川の存在を考慮せねばならないであろうが、現状では溝との関係は不明である。

日本書紀、古事記の崇神天皇条や日本書紀推古天皇15年(607年)冬条に依羅(網)池造営の記事が見られるように、早くから灌漑の進んだ土地であったことがうかがえる。よって、古代の早い時期から計画的に水利用が行われていた可能性は高いものと思われ、今回の調査で検出された溝群の一部もこのような段階で掘削されたものかもしれない。今後の周辺の調査成果で、さらに実態が明らかにされていくものと期待される。

(参考文献)

- ・大和川・今池調査会『大和川・今池遺跡』—第1地区発掘調査報告—1979
- ・大阪府教育委員会・財団法人大阪文化財センター 『城山(その3)』1976
- ・大阪府教育委員会・財団法人大阪文化財センター 『河内平野遺跡群の動態I』1987

第5章 自然科学分析

第1節 大和川今池遺跡（その3・その4）発掘調査に係る微化石分析

渡辺正巳（文化財調査コンサルタント(株)）

はじめに

大和川今池遺跡は大阪府松原市天美西地内に立地する。また、大阪府のほぼ中央、いわゆる「河内平野」の南端を東から西に流れる大和川の南岸に位置する。

本報告は、大和川今池遺跡（その3・その4）発掘調査に伴い財団法人大阪府埋蔵文化財調査研究センターが川崎地質株式会社に委託して実施した微化石分析調査の一部をまとめ直したものである。またすでに、渡辺（2000）において大和川今池遺跡（その1～4）での地域花粉帯が設定されている。本報告では、花粉層序学的手法を用いて遺構32、土坑95、土坑192の「埋まり方」について考察した。

試料および分析方法

分析試料は、第95図に示す3地点（遺構32、土坑95、土坑192）で採取された。

第96～101図の左端に各地点の模式柱状図および試料採取深度を示している。ただし土坑95の試料「1」は最下位層より出土した土器内部より取り出したもので、深度を正確に示してはいない。土坑192の試料「I」は下位層より出土した土器内部より取り出し、試料「L」、「M」、「U」はそれぞれ下位層、中位層、上位層から採取したもので、深度を正確に示してはいない。

花粉分析処理は渡辺（1995）、プラント・オパール分析処理は藤原（1976）のグラスビーズ法に従った。

IV帯d亜帯～b亜帯層準の堆積物について

後述のように遺構32、土坑192、土坑95の各遺構を埋める「土」は、いずれもIV帯D亜帯～B亜帯（IV帯C、B亜帯は渡辺（2000）で設定。IV帯D亜帯は、後述のように今回、C亜帯の下位に設定した。）に相当する花粉組成を示す。以下で分析結果に若干の考察を加え、各遺構毎に特徴を述べる。

また分析結果として示す花粉ダイアグラムでは、各種類毎に木本花粉総数を基数とした百分率を算出しスペクトルで示した。プラント・オパールダイアグラムでは、各種類毎に1グラムあたりの含有数を算出しスペクトルで示した。

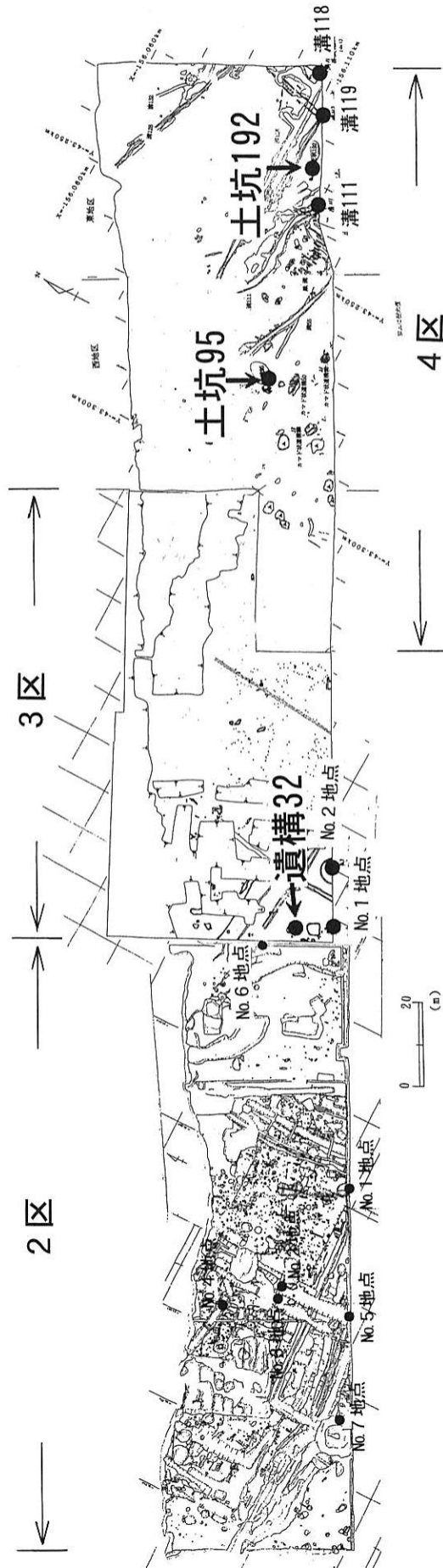
（1）遺構32

第96・97図に花粉ダイアグラムおよびプラント・オパールダイアグラムを示す。

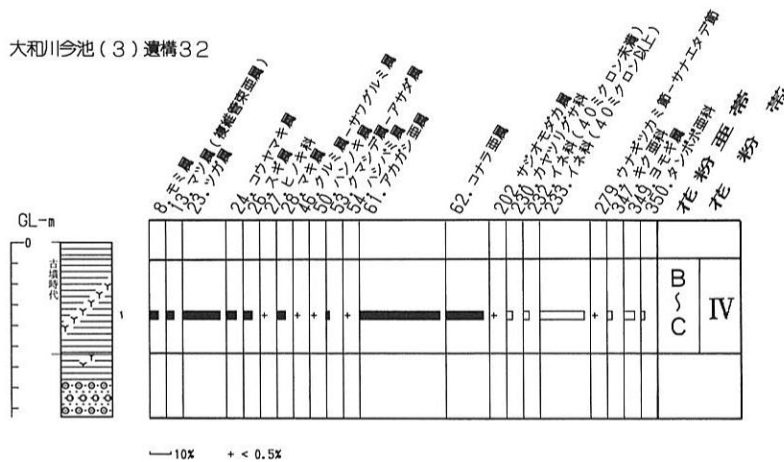
得られた花粉組成は、IV帯BあるいはC亜帯に相当した。IV帯B、C亜帯は、（その3）地区では第6遺構面と第5遺構面との間に位置し（渡辺, 2000）、遺構32の断面観察結果と一致する。また、プラント・オパール組成も同層準の結果（渡辺, 2000）に類似する。したがって遺構32埋土と遺構近辺に分布する同時期の堆積物が同様の環境下で堆積したことは明らかである。

（2）土坑192

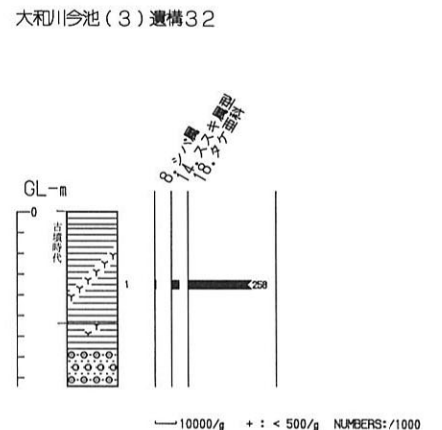
第98、99図に花粉ダイアグラムおよびプラント・オパールダイアグラムを示す。



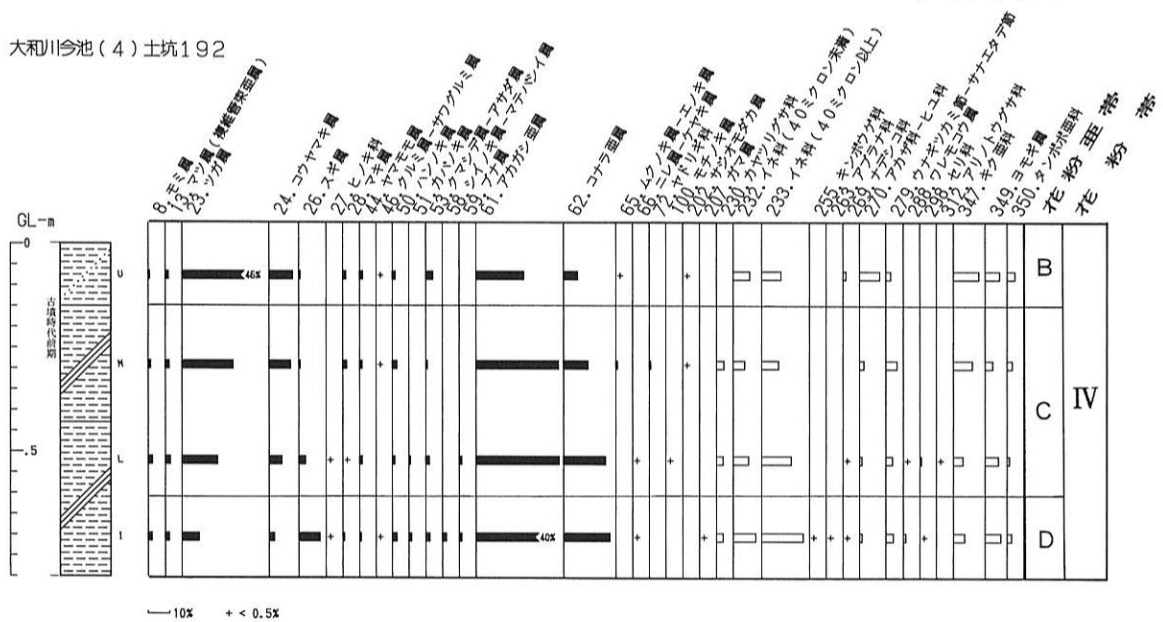
第95図 調査地点の配置



第96図 遺構32の花粉ダイアグラム



第97図 遺構32のプラント・オパールダイアグラム



第98図 土坑192の花粉ダイアグラム

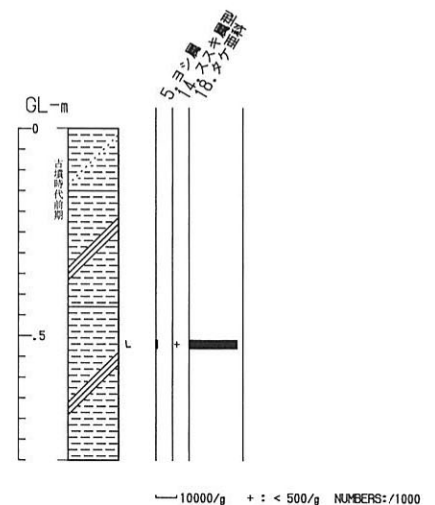
大和川今池（4）土坑192

花粉組成について、土器内（試料I）、土坑下部から上部の順（試料L～U）で漸移的な組成変化が認められる。また、IV帯の示す時期と出土土器から推定される土坑の埋積時期は一致する。プラント・オパール分析は一部の試料が対象であったが、同層準から得られた組成と極めて類似する。

（3）土坑95

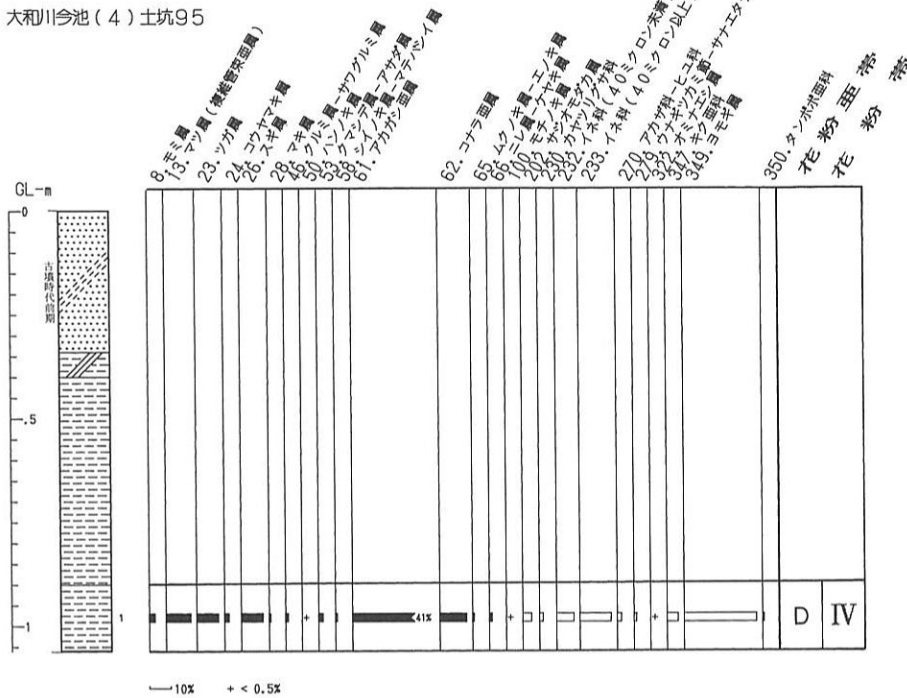
第100・101図に花粉ダイアグラムおよびプラント・オパールダイアグラムを示す。

得られた花粉組成はIV帯D垂帯相当の花粉組成を示した。また、IV帯の示す時期と出土土器から推定される土坑の埋積時期は一致する。さらに、得られたプラント・オパール組成は遺構32、土坑95から得られた組成と極めて類似する。



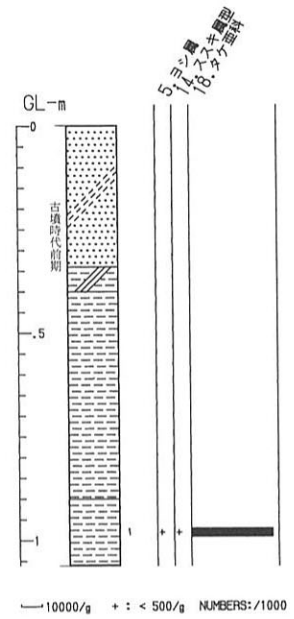
第99図 土坑192のプラント・オパールダイアグラム

大和川今池(4)土坑95



第100図 土坑95の花粉ダイアグラム

大和川今池(4)土坑95



第101図 土坑95のプラント・オパールダイアグラム

遺構32、土坑95、土坑192の「埋まり方」

発掘時の担当者による観察では、土坑192内の埋土は（人為的に）埋め戻したような状態ではなかった。また、前述の様に花粉組成は漸移的に変化した。以上のことから土坑192内埋土は、土器内の堆積物が土坑最下部の堆積物（ただし、土器内部の試料と、土坑下部の試料の採取深度についてのデータは無い。また、土器内に土が詰まったプロセスも判明していない。）であり、古墳時代前期以降に下部から上部にかけて連続して自然に堆積したと考えられる。また、土坑192内の土が自然に堆積したと仮定し、最下部に相当すると考えられる土器内試料「I」でスギ属花粉が上位のC亜帯に比べやや高率なことから、C亜帯と分けて試料「I」をD亜帯とした。

一方でIV帯C、B亜帯層準は遺跡内のやや低い地域で認められ、遺構周辺の低地を埋めた堆積物であると推定される。また上位のIV帯a亜帯層準以浅が水田耕作土であることから、IV帯B亜帯層準が遺跡内に水田を作るための整地（埋め立て）に伴う「埋土」である可能性も指摘できる。しかし土坑192が自然に埋まったと考えられ、同時期の同じ様相を示すIV帯D～B亜帯層準が人為的な「埋め土」であるとは考えにくい。したがって、遺構32、土坑95についても古墳時代前期以降に自然に埋まったものと考えられる。

渡辺（2000）で示したように広くIV帯期の遺跡内や周辺には、開放された土地（たとえば水田や草原など）が広がっていたと考えられる。（その3）地区から（その4）地区のIV帯D～B亜帯層準が黒色粘土（腐植質粘土）層であることから、堆積時に分布域には湿地環境が広がっていたと考えられる。しかし、イネ科（40ミクロン以上）花粉の出現率がやや高いもののイネのプラント・オパールは検出されないことから、IV帯D～B亜帯層準の分布域が水田であった可能性は低い。

まとめ

遺構32、土坑95、土坑192の「埋まり方」について、以下のことが明らかになった。

- 1) 各遺構には、地域花粉帯IV帯D～B亜帯に対応する黒色粘土が充填していた。
- 2) 出土遺物より推定される各遺構の埋積時期と花粉帯の示す時期が一致した。
- 3) 土坑192の花粉組成変遷が漸移的であったことなどから、土坑192は自然に埋積したと考えられる。
- 4) 上位に耕作土層が重なることと分布状況から、各遺構を充填する土が整地（埋立て）に伴う「埋土」である可能性も指摘される。しかしこのことは、上記の土坑192の堆積状況から否定される。
- 5) IV帯D～B亜帯層準の黒色粘土層は湿地環境（水田の可能性は低い。）下で、自然に堆積したものであると考えられる。土坑192のほか、遺構32、土坑95も同様である。

引用文献

- ・藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－. 考古学と自然科学, 9, p. 15-29.
- ・渡辺正巳（1995）花粉分析法. 考古資料分析法, 84, 85. ニュー・サイエンス社.
- ・渡辺正巳（2000）大和川今池遺跡（その1～4）発掘調査に係る微化石分析. 大和川今池遺跡報告書, 財団法人大阪府文化財調査研究センター.

第2節 大和川今池遺跡（その4）焼土坑の自然科学的考察

渡辺正巳（文化財調査コンサルタント株式会社）・渡辺栄次（国立名古屋工業技術研究所）

はじめに

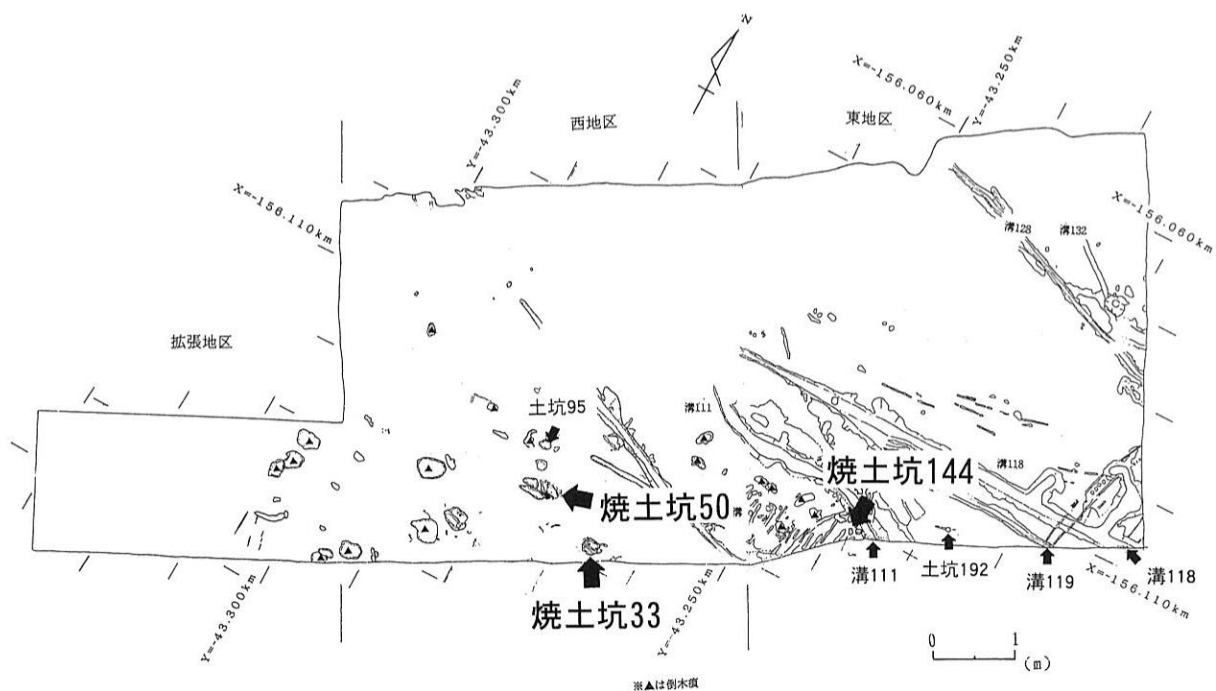
本報告は、大和川今池遺跡（その4）の調査に伴って検出された「焼土坑」の性格を明らかにするために、財団法人大阪府文化財調査研究センターが川崎地質株式会社に委託して行った自然科学分析を総括したものである。

大和川今池遺跡は、大阪府のほぼ中央を東西に流れる大和川の左岸、堺市と松原市の境界に位置する複合遺跡である。

分析試料について

分析した試料は、大阪府文化財調査研究センターと協議の上、採取したものである。

第102図に試料採取地点を示す。今回は、花粉分析、植物珪酸体分析、 ^{14}C 年代測定、強熱減量試験、有機炭素・窒素分析、残留磁気測定、加熱重量測定、XRD鉱物分析の諸分析を行った。



第102図 試料採取地点

分析方法

1. 花粉分析

焼土坑を埋める有機質土を構成する有機物の種類および花粉組成から各焼土坑の違いを明らかにするために、花粉分析を行った。また、花粉分析処理は渡辺（1995）に従った。

2. 植物珪酸体分析

焼土坑を埋める有機質土中の植物珪酸体組成から各焼土坑の違いを明らかにするために、植物珪酸体

分析を行った。また、植物珪酸体分析処理は藤原（1977）のグラスビーズ法に従い行った。

3. ^{14}C 年代測定

焼土坑を埋める有機質土の示す年代から各焼土坑の違いを明らかにするために、 ^{14}C 年代測定を行った。年代測定には、液体シンチレーションカウンターによる β 線計数法を用いた。

4. 強熱減量

焼土坑を埋める有機質土中の全炭素量から各焼土坑の違いを明らかにするために、強熱減量測定を行った。測定は、地盤工学会基準 J S F T 221-1190に従い行った。

5. 有機炭素、窒素測定

焼土坑の利用状況を推定するために、焼土坑周辺の有機炭素と窒素の分布を調べた。有機炭素と窒素測定にあたり、HClによる前処理を行い無機炭素を溶解した。その後、CHNコーダーを用いて試料中の有機炭素および窒素の測定を行った。

6. 残留磁気測定

試料が熱を受けたことを確かめるために、残留磁気測定を行った。測定には夏原技研製リング・コア型スピナー磁力計（SMD88型）を用いた。また、交流消磁には夏原技研製DEM86012型を用いた。

7. 加熱重量測定

土壌試料の加熱状況を推定するために、土壌試料の加熱重量測定を行った。土壌試料は有機物を過酸化水素処理した後、NaClを添加、水洗・乾燥後粉末試料（有機物分解土試料）とした。有機物分解土試料約2gを白金るつぽに入れ電気炉中で加熱（105℃、220℃、400℃、600℃）後、デシケーター中で冷却、秤量した。

8. XRD（X線回折）鉱物分析

土壌試料中の鉱物組成の違い、変化から試料が受けた温度を推測するために、XRD（X線回折）鉱物分析を行った。土壌試料は有機物を過酸化水素処理した後、定法に従ってナトリウム飽和の粉末試料としたものをガラス製のホルダーに入れ、30kV、30mAで銅をターゲットとして測定した。

分析結果

1. 花粉組成の特徴および、プレパラート観察結果

第103図に花粉ダイアグラムを示す。

焼土坑33では、花粉、孢子ともにほとんど含まれていなかった。また、観察用プレパラートには、葉片と考えられる細胞が僅かに観察され、炭はほとんど含まれていなかった。

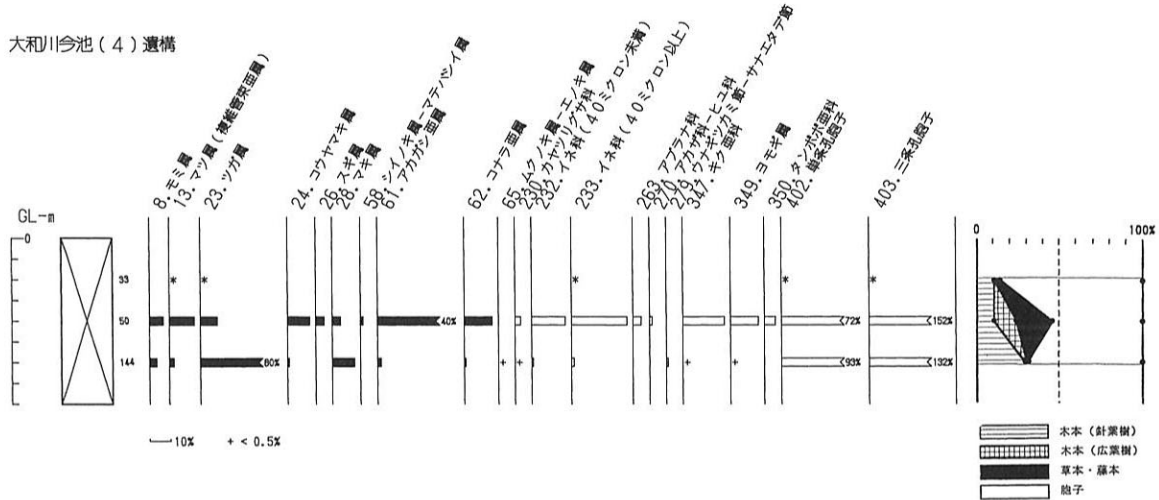
焼土坑50では、孢子化石の他、アカガシ亜属花粉が多く認められた。また、観察用プレパラートには、炭状の黒色片が目立つほか、葉片と考えられる細胞が観察された。

焼土坑144では十分な量の花粉化石が検出できた。検出された花粉化石のほとんどはツガ属であった。また、孢子化石も多く認められた。観察用プレパラートには、葉片と考えられる細胞は焼土坑50と同程度に認められるが、炭状の黒色片はあまり目立たなかった。

2. 植物珪酸体組成の特徴

第104図に植物珪酸体ダイアグラムを示す。

分析した全試料でタケ亜科が多産し、ヨシ属を伴っていた。また、焼土坑144でのみスキ属型が産出しなかった。



第103図 花粉ダイアグラム

3. ¹⁴C年代測定

測定結果を表6に示す。

4. 強熱減量試験

強熱減量試験結果を表7に示す。

5. 有機炭素・窒素分析

第105～110図に有機炭素、窒素分析結果を示す。

有機炭素についてみると、焼土坑33西側では、基点であるピットの切られた壁から10cmの地点では、含有量が少なく、そこから含有量は少しずつ上昇して、少し離れた地点（30cm）で最大含有量を示すピークが認められた。更にそれから離れるに従って、逆に含有量が低下していく傾向が認められた。150cm付近を中心にややピークが認められるが、全体としてほぼ一定の値で推移するように思われる。

焼土坑33東側は焼土坑の中心からほぼ40cm離れた地点が基点となっている。南北それぞれの調査線は共に、基点の含有量が一番高い値を示し、離れるに従い低下する傾向を示した。

同様の傾向は窒素でも認められた。

焼土坑50では、中央の赤褐色がかった地点から北へ向かうに従って、有機炭素量が増加している。このことは焼土坑33西側における有機炭素の分布変化に近い傾向であると考えることが可能である。それに対して、窒素は全般的にほぼ同じ値であるが、A地点に比べて、低い値を示した。

6. 残留磁気測定

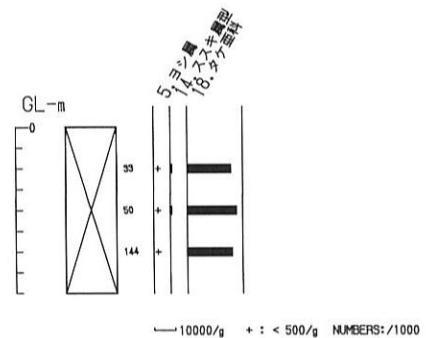
1) 地磁気偏角の決定

国土地理院の1990年の磁気偏角図から読取った6.7° Wを使用した。

2) 消磁強度の決定

各焼土坑のパイロッ

大和川今池(4)遺構



第104図 植物珪酸体ダイアグラム

表6 ¹⁴C年代

試料 No.	¹⁴ C年代 (y. B. P.)	δ ¹³ C (‰)	補正 ¹⁴ C年代 (y. B. P.)	暦年補正 ¹ (cal y.)	測定番号 (Bata-)
1 4 4	2,990 ± 50	-25.9	2,980 ± 50	BC1380 ~ 1030	129900
3 3	4,780 ± 60	-25.8	4,760 ± 60	BC3655 ~ 3485 BC3475 ~ 3370	129901
5 0	4,680 ± 50	-26.2	4,670 ± 50	BC3630 ~ 3575 BC3535 ~ 3355	129902

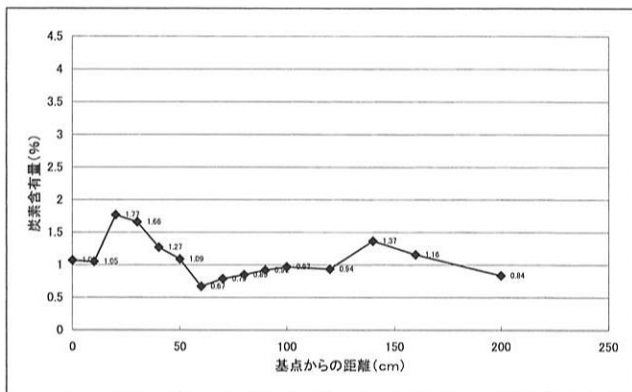
表7 強熱減量試験結果

試料 No.	土粒子の密度 (ρ_s g/cm ³)	自然含水比 (W _n %)	強熱減量試験 (Li %)
33	2.443	67.2	14.3
50	2.438	57.6	14.7
144	2.488	37.4	11.1

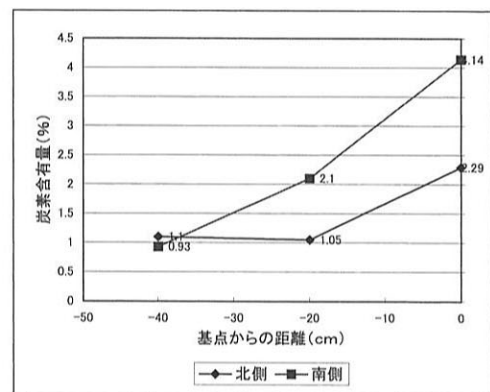
トサンプルの段階交流消磁を磁化の安定性を確かめるために行った（第111・112図）。

Y I - 8は10mTで二次磁化成分が無くなり、やや不安定であるが原点に向う直線となっている。

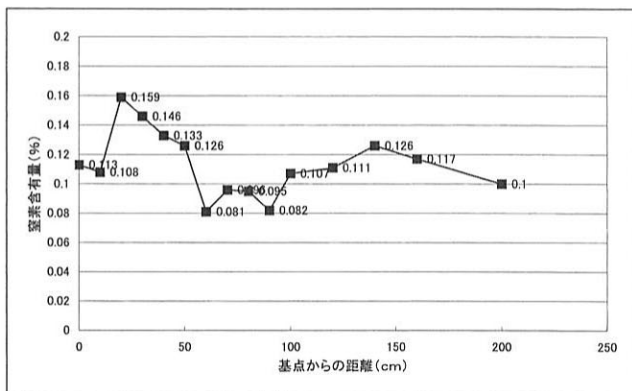
Y I - 23は5mTで二次磁化成分が無くなったとみられ、あとは原点に向う直線で表される一次磁化のみとなっている。



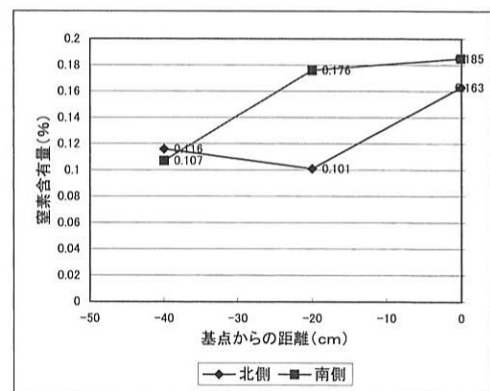
第105図 焼土坑33西側における炭素含有量の分布



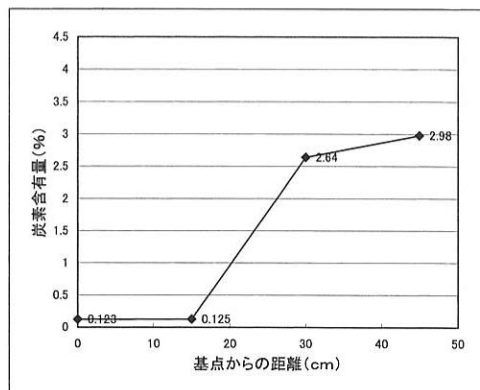
第106図 焼土坑33東側における炭素含有量の分布



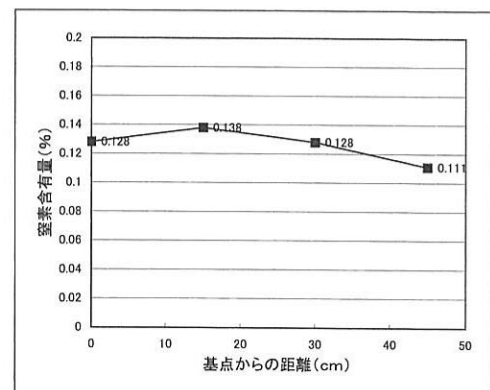
第107図 焼土坑33西側における窒素含有量の分布



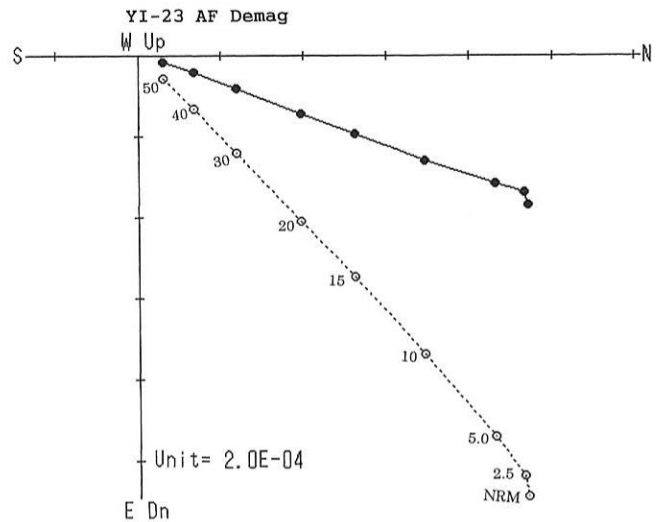
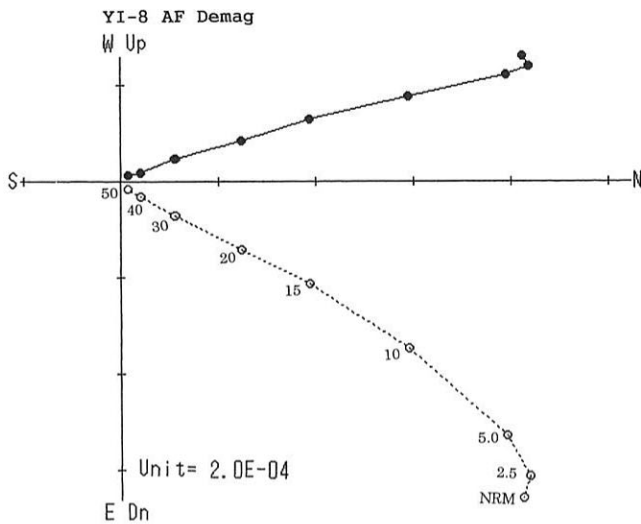
第108図 焼土坑33東側における窒素含有量の分布



第109図 焼土坑50における炭素含有量の分布



第110図 焼土坑50における窒素含有量の分布



第111図パイロットサンプルY1-8の直交スペクトル

第112図パイロットサンプルY1-23の直交スペクトル

黒丸は水平成分、白丸は鉛直成分を表している。S(南)、N(北)、E(東)、W(西)は水平成分の方向、Up(上向き)、Dn(下向き)は鉛直の方向である。白丸の横に記した数字は交流消磁の強度で、単位はmT(ミリテスラ)である。この図で、丸印の間をむすんだ直線がその消磁段階で消された磁化スペクトルとなる。磁化の各成分は図上では直線上に並ぶ点の列で表される。特に古地磁気試料のような単純な受熱を持った試料では問題とする初期磁化は減点に向かう直線として表される。

以上の結果より、2焼土坑の最適消磁強度を15mTと判断し、残りの試料について15mTで消磁を行い、残留磁気を測定した。

3) 残留磁気の測定

残留磁気測定結果を第113~115図、表8~11にまとめた。

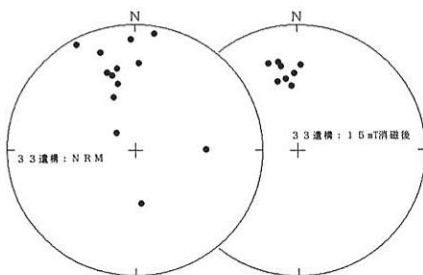
表8~10は、個々の試料の熱残留磁気測定結果(Di, Ii)である。

表11に消磁前と消磁後についての、磁気方向の平均値(Dm, Im)、誤差角(α_{95})と信頼度係数(k)、および平均磁気強度を示した。試料数nは平均値(Dm, Im)を計算した試料数で、括弧内の数字は全測定試料数である。

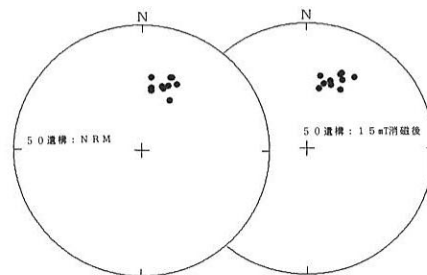
第113・114図に消磁前と消磁後の磁化方向の等面積投影図を示した。

焼土坑33のNRM(自然残留磁化)の測定結果は大きくばらついた結果であった。消磁後の測定結果も平均磁化方向から大きくはずれる事から5試料を除外することになった。除外した試料は攪乱を受けた部分または焼けていない場所から採取したものと考えられる。除外後の測定結果の誤差角 α_{95} は6.2度であり、まとまりの悪い試料であった。

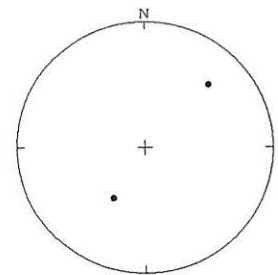
焼土坑50は消磁前も消磁後も大きな違いは無く、パイロットサンプルが示すように二次磁化成分が少しあるものの原点に向う安定な磁化である。測定結果の信頼度係数kは100程度で信頼度の高いデータ



第113図 焼土坑33の消磁前と消磁後の残留磁化方向の等面積投影図



第114図 焼土坑50の消磁前と消磁後の残留磁化方向の等面積投影図



第115図 焼土坑144の残留磁化方向の等面積投影図

表8 焼土坑33の熱残留磁気測定結果

交流消磁前				交流消磁後 消磁強度=15 mT		
試料名	偏角 (Di) E	伏角 (Ii)	強度 ×10 ⁻³ emu	偏角 (Di) E	伏角 (Ii)	強度 ×10 ⁻³ emu
YI-1	-22.1	52.0	0.57	-38.7	48.7	1.91
YI-2	-14.8	44.1	1.10	-16.0	42.1	4.52
YI-3	-47.1	73.1	2.07	-103.6	83.0	4.37
YI-4	-12.7	33.5	0.62	-10.8	32.0	6.41
YI-5	-186.1	54.7	0.16	-184.1	47.0	0.82
YI-6	-19.5	18.1	1.68	-12.3	28.4	6.39
YI-7	-28.3	4.9	12.6	-24.2	7.9	52.4
YI-8	-17.5	37.3	1.08	-18.3	27.7	4.59
YI-9	89.3	43.7	1.05	66.3	53.9	8.22
YI-10	-2.3	12.3	0.55	2.4	31.9	1.92
YI-11	-20.0	34.6	0.79	-8.8	41.3	2.21
YI-12	9.4	6.2	0.79	-2.3	38.2	2.01
YI-13	2.7	31.0	0.78	-5.2	46.8	1.92
平均磁化強度			1.83			

表9 焼土坑50の熱残留磁気測定結果

交流消磁前				交流消磁後 消磁強度=15 mT		
試料名	偏角 (Di) E	伏角 (Ii)	強度 ×10 ⁻³ emu	偏角 (Di) E	伏角 (Ii)	強度 ×10 ⁻³ emu
YI-21	28.7	51.9	10.4	29.2	45.1	6.21
YI-22	21.7	43.3	8.06	27.2	38.2	4.81
YI-23	18.9	46.3	14.8	20.5	44.9	10.4
YI-24	22.1	36.9	22.6	24.7	34.1	16.2
YI-25	17.1	45.3	16.9	18.9	42.3	12.3
YI-26	27.5	39.7	1.87	33.6	32.4	1.12
YI-27	20.9	37.1	7.97	24.0	35.3	5.97
YI-28	7.4	40.7	1.77	10.5	40.8	1.22
YI-29	8.9	50.0	4.45	14.7	45.3	2.53
YI-30	8.6	47.7	2.47	11.3	49.3	1.29
平均磁化強度			9.13			

といえる。消磁後の誤差角 α_{95} は4.2度と大きい値となり、ややまとまりに欠ける結果であった。

両焼土坑の磁化強度は $10^{-2} \sim 10^{-4}$ emuで、焼土としては平均的な温度で焼成された試料であった。

焼土坑144は磁化方向がバラバラで、磁化強度も低かった。試料採取場所の焼成温度が低い、あるいは攪乱を受けた場所で

表10 焼土坑144の熱残留磁気測定結果

試料No.	偏角 (Di) E	伏角 (Ii)	磁化強度 $\times 10^{-3}$ emu
Y1-14	44.9	29.9	2.77
Y1-15	-148.7	50.8	1.49

あったなどの原因が推定される。また磁化強度が低いことから、遺構表面が削平を受けた可能性も指摘できる。

表11 古地磁気測定結果 (平均磁化方向)

焼土坑名	試料数 n	Dm (° E)	Im (°)	α_{95} (°)	k	平均磁化強度 emu
焼土坑33	13	-8.5	41.1	21.1	4.8	1.83×10^{-3}
	8 (13)	-9.0	36.2	6.2	80.4	
焼土坑50	10	18.3	44.1	4.5	115.6	9.13×10^{-4}
	10	21.8	41.0	4.8	101.0	

上段は交流消磁前、下段は交流消磁後

7. 加熱重量測定

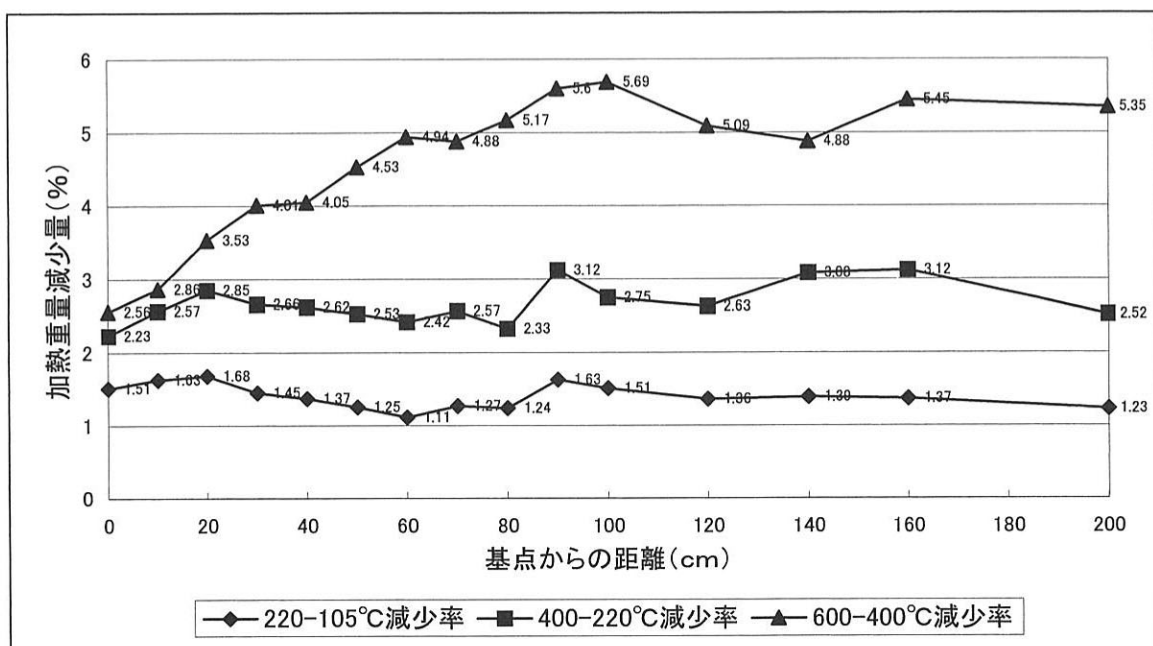
第116・117図に、焼土坑33各地点の加熱重量減少量 (各加熱温度重量の差) を示す。

いずれの試料でも、400℃までの加熱重量減少量はほぼ一定であった。これに対し400-600℃間の加熱重量減少量は、中心から80cmくらいまでは増加傾向を示し、その後ほぼ一定になることが解った。

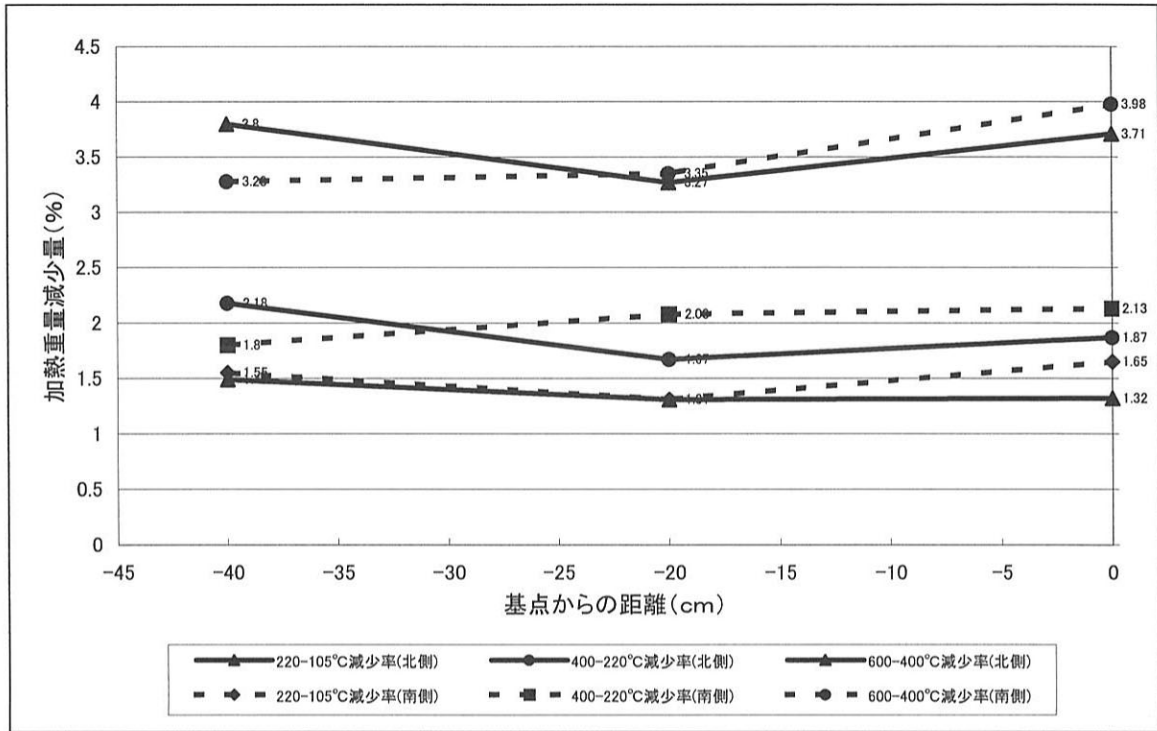
これらのことから、全試料について400℃程度までの熱を受けて分解する物質 (鉄およびアルミニウムなどの水酸化物、非晶質物質) は元々試料中に少ないか含まれなかったことが解る。それに対して中心から80cm付近までの試料では、さらに400℃程度以上の熱を受けたために元々試料中に含まれていた粘土鉱物が分解され、消滅したと考えられる。

8. XRD 鉱物分析

第118~121図に調査地点中央部から20、120、140cm地点でのXRD分析結果を示す。第118・120図



第116図 焼土坑33西側における加熱重量減少量変化



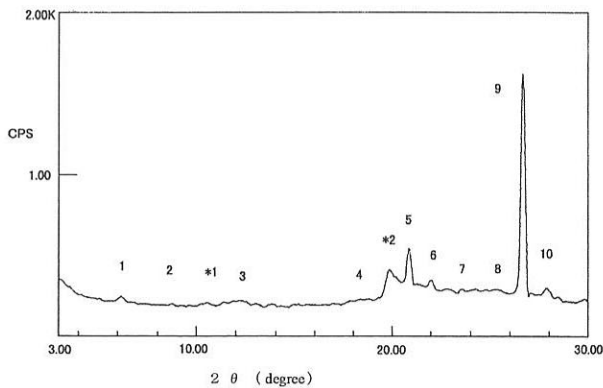
第117図 焼土坑33東側における加熱重量減少量変化

は加熱処理を施さない未処理試料、第119・121図は600℃電気炉内で加熱焼成した試料の分析結果である。

調査地点中央部から20cm地点は、赤褐色になっていた。未処理試料では、特に石英が多い他長石などの一時鉱物が多く含まれる。そのほかには、目立った鉱物は少ない。河川流域でよく見られる土壌鉱物組成に類似した特徴を有するが、粘土鉱物などの二次鉱物がほとんどみられない。わずかにクロライトと考えられる粘土鉱物がみられる程度である。加熱焼成試料では長石のピークが幾分高くなっているが、未処理試料とほとんど同じ結果を示している。

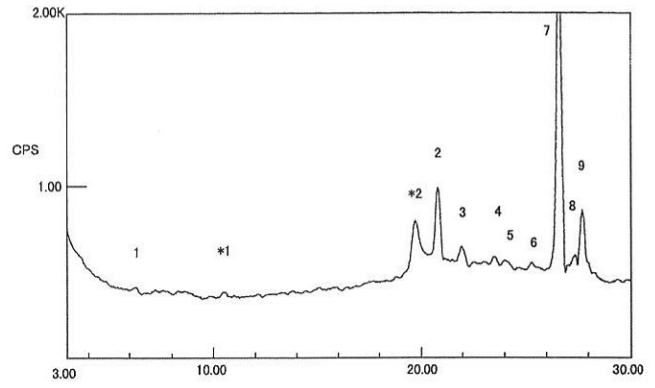
このことから20cm地点試料には、特に600℃までの温度で熱変成したり、熱分解したりするような鉱物が含まれていないことが解る。

調査地点中央部から120cm地点の未処理試料では、20cm地点の試料で認められなかった二次鉱物と考えられる1：1型粘土鉱物のカオリナイトが高いピークを示すほか、アルミニウムの水酸化物である



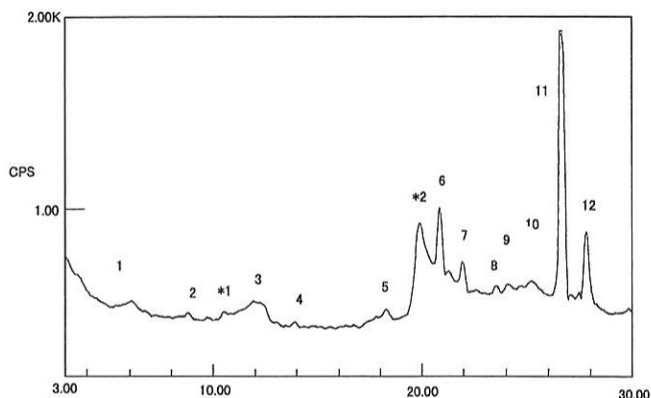
1: Chlorites 2: Micas or Illites 3: Kaolinite 4: Gibbsite or Chlorites 5: Quartz
6: Felspars 7: Felspars 8: Felspars 9: Quartz 10: Felspars
*1: unidenty *2: base line peak

第118図 焼土坑33西側—20cm地点のXRD結果

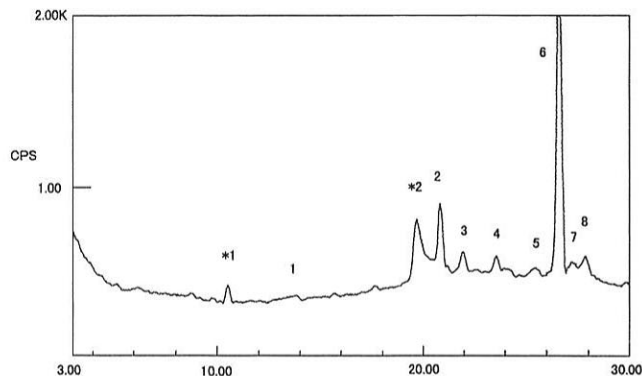


1: Chlorites 2: Quartz 3: Felspars 4: Felspars 5: Felspars 6: Chlorites 7: Quartz 8: Felspars
9: Felspars
*1: unidenty *2: base line peak

第119図 焼土坑33西側—20cm地点のXRD結果(600℃焼成)



1: Chlorites 2: Micas or Illites 3: Kaolinite 4: Felspars 5: Gibbsite or Chlorites 6: Quartz
7: Felspars 8: Felspars 9: Felspars 10: Chlorites 11: Quartz 12: Felspars
*1: unidenty *2: base line peak



1: Kaolinite 2: Quartz 3: Felspars 4: Felspars 5: Felspars 6: Quartz 7: Felspars 8: Felspars
*1: unidenty *2: base line peak

第120図 焼土坑33西側-120cm地点のXRD結果

第121図 焼土坑33西側-140cm地点(600°C焼成)のXRD結果

ギブサイトと思われるピークも若干認められる。一方非晶質のピークなどは認められなかった。

調査地点中央部から140cm地点の加熱焼成試料は、20cm地点の試料とほとんど同じパターンを示し、カオリナイトのピークがほとんど見られなかった。おそらくカオリナイトが600°Cで熱分解して消失したと考えられる。

焼土坑の性質について

1. 有機炭素、窒素分析結果より

各焼土坑の炭素・窒素分析値が連続的に変化し、各焼土坑とも攪乱を受けたものである可能性は低い。

竈の中央部分では火力が強いため有機炭素、窒素は熱分解して、揮散し、土壤中より消失する。生物系材料を高温で熱分解した場合、残渣成分である灰は、たとえばカルシウムやカリウムなどの無機系化合物からなる。無機系化合物はそのまま土壤中に付加され、残存する可能性が高い。この場合、灰の成分は燃料となる木の種類によって異なる。一方、中央から離れるほど火力が低下し熱分解により揮散・消失する有機炭素、窒素の量は減少する。低温では炭などが土壌表面に残るが、土壌内部に入り込むことは希であり、燃焼した地点から移動・消失する可能性が高いと思われる。

煮炊きに利用した場合、食材中に含まれる有機物（たとえば、タンパク質や脂肪など）が煮零れ、有機炭素や窒素が土壌に付加される場合がある。中央部では高熱のため付加された有機炭素や窒素は消失することから、有機炭素、窒素の濃度は中央からやや離れて環状に高濃度になることが予想される。

今回の各焼土坑での有機炭素、窒素の分布はまさに環状であり、焼土坑が煮炊きに利用した「竈」の跡である可能性が指摘できる。

2. 残留磁気測定より

焼土坑33、50では 10^{-2} ~ 10^{-4} emuの磁化強度を示し、熱を受けたことが明らかである。一方で焼土坑33では、消磁後のNRM測定結果が大きくはずれることから、攪乱を受けた可能性も指摘できる。しかし受けた熱が低く、磁化方向が定まらなかった可能性が高い。

3. 加熱重量測定より

中心部が400°C以上の熱を受けたことは明らかであり、中心から80cm程度までが熱の影響を受けてい

たと推定される。

4. XRD 鉱物分析より

20cm地点の未処理試料と加熱処理試料及び、140cm地点の加熱処理試料のXRD結果（第116・117・119図）との間には、きわめて高い類似性が認められる。同様の結果は0cm地点（基点）や10cm、30cm地点でも認められた。一方で、120cm地点の未処理試料には粘土鉱物が認められる。焼土坑内側の土が均質であると仮定すると、低くとも600℃程度の熱が中央部では加えられ、粘土鉱物が熱変成したと考えられる。ただし現時点では、加えられた熱の上限度は不明である。

5. その他の分析結果より

強熱減量結果と花粉分析結果は一見反するように思われる。最も炭素量の多い焼土坑33で花粉化石および植物起源の物質が少なく、炭素量の少ない焼土坑144で花粉化石および植物起源の物質が多く検出された。このことは焼土坑33の試料中の炭素の多くが、腐植酸として含有されていたことを示唆する（腐植酸はアルカリ可溶のため、花粉分析処理中に溶解・除去される）。

また炭状物質がほとんど含まれていなかったことから、焼土坑を埋める黒色土は土坑内での燃焼による「炭」ではなく、自然条件下での土坑内の堆積物、あるいは「自然堆積物」を焼土坑内に持ち込んだものである可能性が高い。

焼土坑33、50は内側に土が貼り付けてあることから、明らかな「遺構」(人工的なもの)である。上記の分析結果と合わせると、焼土坑33、50内に認められた「黒色土」は、自然条件下での土坑内の堆積物ではなく、焼土坑内に人為的に持ち込まれたことが解る。

一方プラント・オパール分析では、焼土坑144でのみスキ属型が検出されず、他の焼土坑33、50と異質な傾向を示した。同様の傾向は¹⁴C年代、強熱減量でも認められ、焼土坑144が他の焼土坑と異質であることが窺える。また焼土坑144では人為的な「構造」が明瞭でなく、「遺構」であるか否か明らかではない。したがって、焼土坑144を埋める黒色土には自然条件下での土坑内の堆積物である可能性も残る。また、3つの焼土坑は同一遺構面上に存在するが、幾つかの分析で焼土坑144が異質なことから、焼土坑144と他の2焼土坑が異なる時期に使用された可能性もある。

まとめ

諸分析を実施した結果、焼土坑について以下のことが明らかになった。

- (1) 焼土坑33の中心部から30cm以内の範囲が、600℃以上の熱を受けていることが解った。
- (2) 有機炭素、窒素の分布から、焼土坑33が煮炊き用の竈であった可能性が指摘できた。
- (3) 焼土坑33、50については赤色土に攪乱を受けた様相はほとんどなかった。しかし焼土坑33については、一部の試料で磁化方向が不安定であり、焼け土が攪乱された可能性も若干残る。
- (4) 焼土坑内の黒色土中の「炭」含有量は必ずしも多くなく、むしろ腐植酸を多く含む。
- (5) 焼土坑33、50内の黒色土は、「自然堆積物」を焼土坑に持ち込んだものである可能性が高い。
- (6) 焼土坑144内の黒色土には、自然条件下での土坑内の堆積物である可能性も残る。
- (7) 焼土坑144に関しては焼成温度が低く、後に攪乱を受けた場所であった、あるいは焼土坑表面が削平を受けたなどの可能性が指摘できる。
- (8) 焼土坑144は幾つかの分析で他の焼土坑と様相を異にした。同一遺構面上で検出されるものの、他の2焼土坑と使用時期を異にする可能性も指摘できる。

引用文献

- ・藤原宏志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究 (1) - 数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法 - . 考古学と自然科学, 9, p. 15 - 29.
- ・Hirooka, K., 1971: Archaeomagnetic study for the past 2,000 years in Southwest Japan. *Mem. Fac. Sci., Kyoto Univ., Ser. Geol. Mineral*, 38, 1 67 - 207.
- ・広岡公夫, 1977: 考古地磁気および第四紀古地磁気研究の最近の動向. 第四紀研究, 15, 200 - 203.
- ・中島正志・夏原信義, 1980: 考古地磁気年代推定法. 考古学ライブラリー-9, ニューサイエンス社.
- ・中島正志・谷崎有里, 1990: 考古地磁気試料の交流消磁実験. 福井大教育紀要.
- ・Shibuya, H., 1980: Geomagnetic secular variation in Southwest Japan for the past 2,000 years by means of archaeomagnetism. 大阪大基礎工修論, 54p.
- ・渡辺正巳, 1995: 花粉分析法. 考古資料分析法, 84, 85. ニュー・サイエンス社
- ・Zijderveld, J. D. A., 1967: A. C. demagnetization of rocks: analysis of results. In *Methods in paleomagnetism*, Collinson *et al.* (eds.), 254 - 295, Elsevier Pub. Com.

第3節 大和川今池遺跡（その2）出土木製品の分析

吉村佐紀恵（元興寺文化財研究所 保存科学センター）

大和川今池遺跡出土遺物のうち、既刊報告書である『大和川今池遺跡（その1・その2）』に掲載の木製品について、以下の分析を行った。

1. 遺物名および分析内容（報番号は報告書掲載遺物番号）

- | | |
|------------------------------|-----------------------------|
| 1 No.17 曲物(報730)側板の内側表面の黒色部分 | 2 No.24 刀子柄(報722)差込み内部の黒色部分 |
| 3 No.42 栓(報739)上部の黄白色付着物 | 4 No.48 底板(未報告)表面の褐色部分 |

2. 使用機器および分析条件

・フーリエ変換型赤外分光光度計（FT-IR）（日本電子(株)製 JIR-6000）

赤外線を試料に照射することにより得られる、分子の構造に応じた固有の周波数の吸収を解析し、化合物の種類を同定する。

・エネルギー分散型蛍光X線分析装置（XRF）（セイコーインスツルメンツ(株)製 SEA5230）

試料の微小領域にX線を照射し、その際に試料から放出される各元素に固有の蛍光X線を検出することにより元素を同定する。ナトリウムより重い元素が検出可能である。（モリブデン管球使用、管電圧50kV、真空条件下）

・金属顕微鏡（(株)オリンパス製 BH2-UMA）

3. 分析方法および結果

1 No.17 曲物（報730）

a) 方法 側板の内側表面の黒色部分を極微量採取し、FT-IRで分析を行った。

（黒色部分は膜を形成していないため黒色部分のみを採取することが不可能であり、分析試料には木質部も含まれた）

次に、カミソリの刃を用いて黒色表面を含む層の断面の切片を作製し顕微鏡で観察した。

b) 結果 FT-IRによる分析の結果、黒色部分を含む層は、漆より渋を塗布した可能性が高いと考えられた（第126-a,b図、第127図は漆のスペクトル、第128図は柿渋のスペクトル）。また、色が黒いことより、渋に黒色微粒子を混和した可能性もあると思われた。

顕微鏡観察の結果、表面に約90 μ mの褐色層が確認された（第122図）。

2 No.24 刀子柄（報722）

a) 方法 差込み内の黒色部分を極微量採取し、FT-IRで分析を行った。

次に、メスを用いて黒色物質を顕微鏡で観察した。

b) 結果 FT-IRによる分析の結果、炭化物と思われる吸収が現れた（第129・130図は炭のスペクトル）。また、顕微鏡観察で、黒色物質は、炭化したヒノキの組織であることが判った（第123図）。

3 No.42 栓（報739）

a) 方法 上部の黄白色付着物を極微量採取し、XRFおよびFT-IRで分析を行った。

b) 結果 XRFによる分析の結果、主な元素として鉄（Fe）、カリウム（K）、アルミニウム（Al）、ケイ素（Si）が検出された。いずれも、土壌に由来する成分と考えられた（第131図）。

FT-IRによる分析の結果、土壌成分の吸収と共に有機物の吸収がみられることより、物質の種

類は不明（タンパク質ではない）であるが使用痕の可能性があると考えられた（第132図）。

4 No.48 底板（未報告）

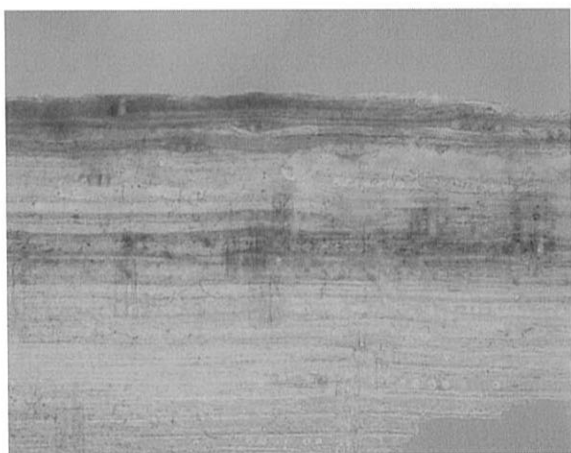
a) 方法 表面の褐色部分を極微量採取し、FT-IRで分析を行った。

（褐色部分は膜を形成していないため褐色部分のみを採取することが不可能であり、分析試料には木質部も含まれた）

次に、カミソリの刃を用いて褐色表面を含む層の断面の切片を作製し顕微鏡で観察した。

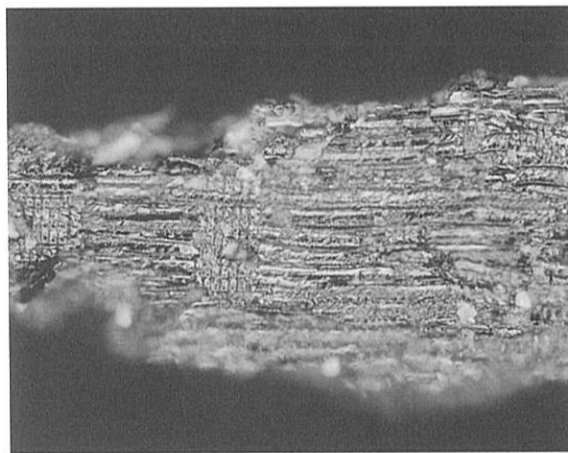
b) 結果 FT-IRによる分析の結果、褐色部分を含む層は、漆より渋を塗布した可能性が高いと考えられた（第127・133図は漆のスペクトル、第128図は柿渋のスペクトル）。

顕微鏡観察の結果、表面に約90 μ mの褐色層が確認された（第124図）。



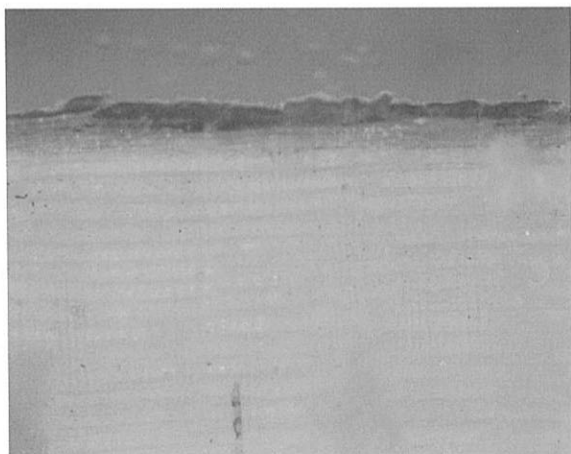
($\times 75$ 落射・暗視野)

第122図 No.17曲物側板褐色部分の断面



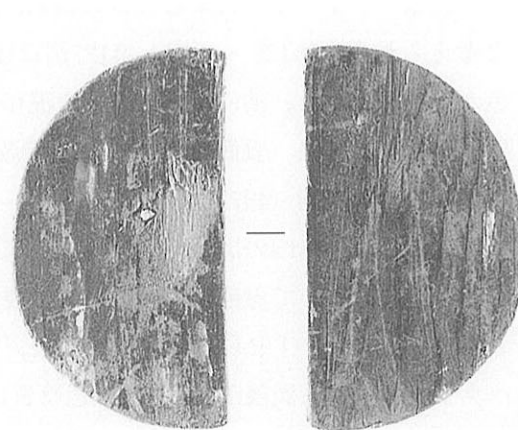
($\times 75$ 落射・暗視野)

第123図 No.24刀子柄黑色部分の断面

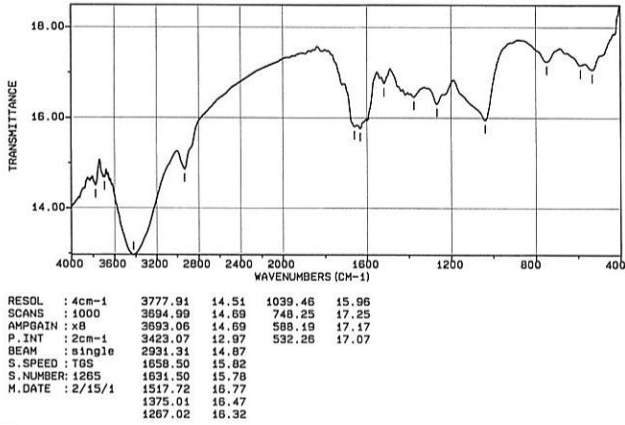


($\times 75$ 落射・暗視野)

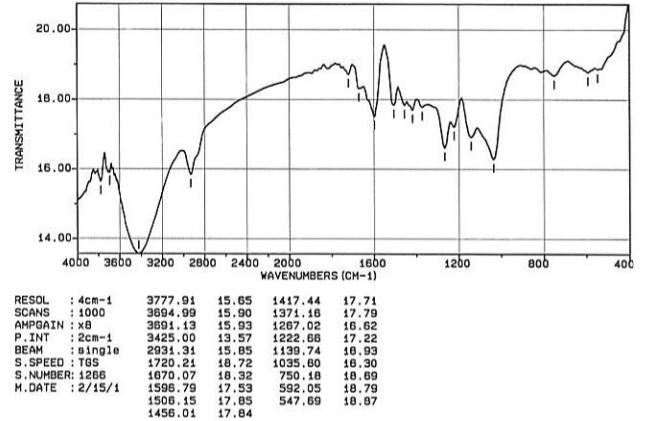
第124図 No.48底板表面褐色部分の断面



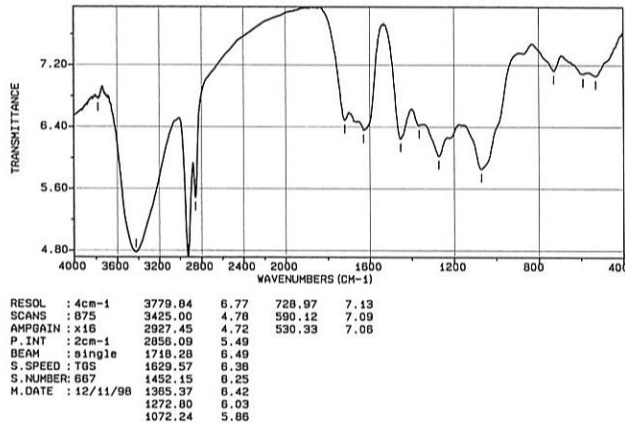
第125図 No.48底板表面・裏面



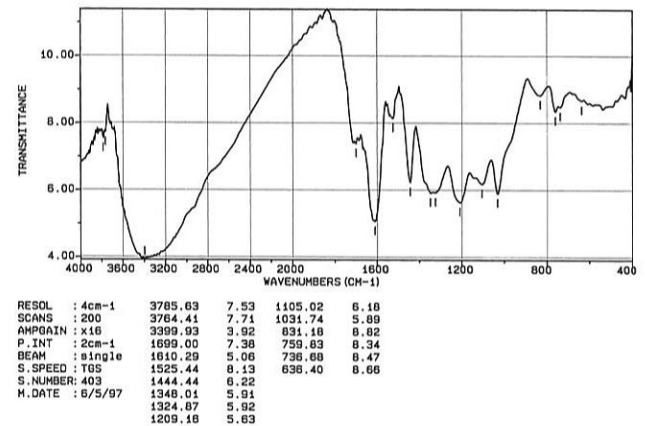
第126-a図 No.17側板内側黒色部分の赤外吸収スペクトル



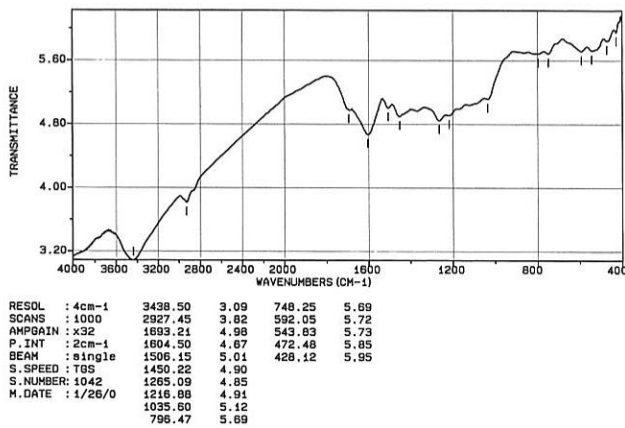
第126-b図 No.17側板木質の赤外吸収スペクトル



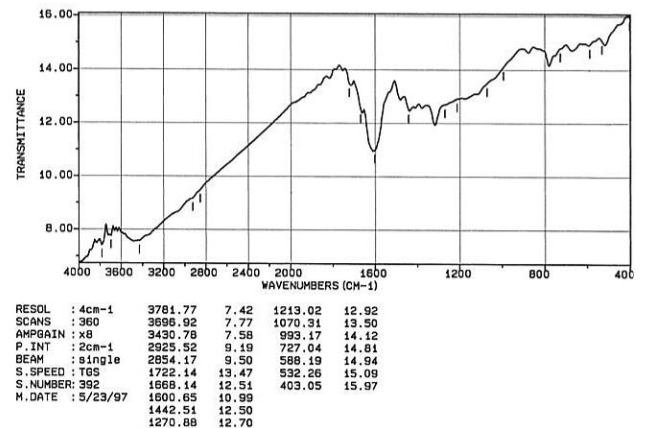
第127図 漆の赤外吸収スペクトル



第128図 柿渋の赤外吸収スペクトル



第129図 No.24刀子柄内部黒色物質の赤外吸収スペクトル

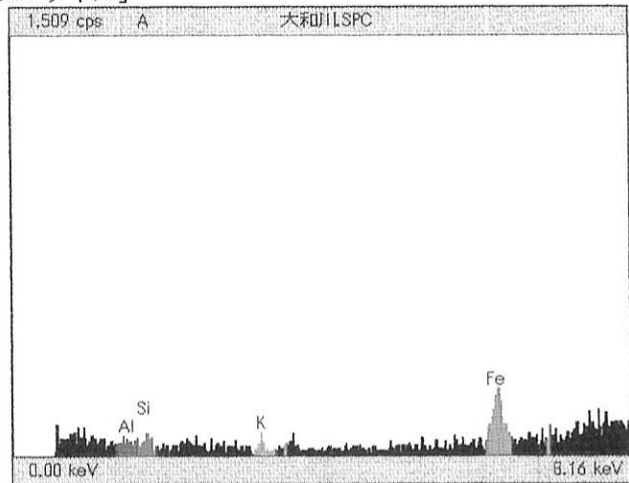


第130図 木炭の赤外吸収スペクトル

[測定条件]

測定装置	SEA5230
測定時間 (秒)	180
有効時間 (秒)	173
試料室雰囲気	真空
コリメータ	φ 0.1 mm
励起電圧 (kV)	50
管電流 (μA)	1000
コメント	98228 大和川今池No.42の 黄土色付着物

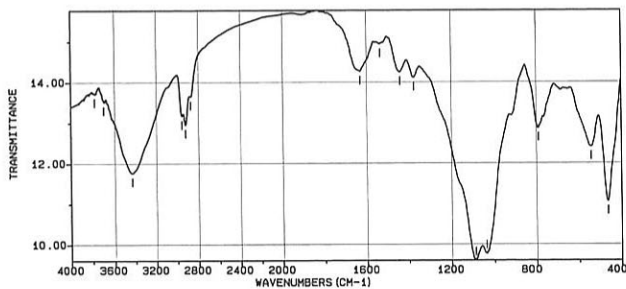
[スペクトル]



[結果]

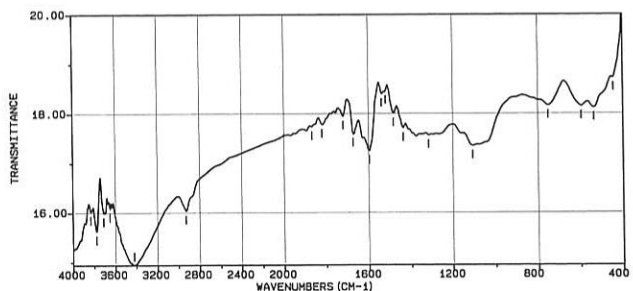
Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	ROI (keV)
26	Fe	鉄	Kα	2.115	6.23- 6.57
13	Al	アルミニウム	Kα	0.538	1.36- 1.61
19	K	カリウム	Kα	0.435	3.17- 3.46
14	Si	ケイ素	Kα	0.677	1.61- 1.87

第131図 No.42栓上部黄白色付着物のXRFスペクトル



RESOL : 4cm-1	3779.84	13.72	1089.60	9.61
SCANS : 1000	3696.92	13.53	1039.46	9.78
AMP GAIN : x8	3432.71	11.77	790.88	12.87
P. INT : 2cm-1	2954.45	13.17	543.83	12.41
BEAM : single	2921.65	12.96	454.77	11.06
S. SPEED : TGS	2871.52	13.65		
S. NUMBER: 1049	1629.57	14.27		
M. DATE : 1/27/0	1535.08	14.94		
	1440.58	14.25		
	1375.01	14.12		

第132図 No.42栓上部黄白色付着物の赤外吸収スペクトル



RESOL : 4cm-1	3831.91	16.03	1586.79	17.25	443.55	18.73
SCANS : 1000	3777.91	15.63	1537.01	18.41		
AMP GAIN : x8	3710.42	16.00	1517.72	18.47		
P. INT : 2cm-1	3650.63	16.09	1481.08	18.01		
BEAM : single	3423.07	14.95	1436.73	17.71		
S. SPEED : TGS	2827.45	16.04	1317.16	17.57		
S. NUMBER: 1263	1866.78	17.74	1108.95	17.35		
M. DATE : 2/14/1	1818.57	17.78	752.11	18.17		
	1720.21	17.95	585.90	18.15		
	1673.93	17.60	536.12	18.12		

第133図 No.48底板表面褐色部分の赤外吸収スペクトル

第6章 まとめ

(その3)の調査から得られた成果をまとめると、以下のようになる。

1. 旧石器時代・縄文時代の石製品の検出

泉北丘陵から上町台地に続く洪積台地上において、大和川今池遺跡と旧西除川を媒介とする南花田遺跡などを含む地域が旧石器時代・縄文時代の石製品をともなう時期の拠点となる可能性を示す。

2. 自然地形に沿って東西方向に流れる自然流路(最終面)の検出

東側に向かって低くなる旧地形の確認。

3. 古墳時代の耕作面(第5面)の検出

古墳時代における生産域の状況を確認。

4. -i9地区から出土した古墳時代後半頃の遺物の検出

大和川今池遺跡周辺における須恵器窯存在の可能性を指摘。

5. -i9地区に代表される整地土の堆積状況の把握

古代から中世へと移行する中での、大規模な土地開発や整地行為にともなう土地利用の変化と、開発以前の環境復元の可能性を指摘。

6. 乾・湿地化の様相を示す遺構面(第4・5面東側)の検出

古墳時代から平安時代に相当する遺構面の検出。多数の足跡や轍跡がみられ、さらに、鉄分沈着層と細砂層が入り乱れている状況を確認。

7. 条里に則った水田耕作跡(第3・4面)の検出

検出した水田耕作跡の畦畔が正方位を示し、当時の条里に則ることから、この地域における条里施行時期が平安時代であることを指摘。

8. 12世紀から15世紀に相当する多様な輸入陶磁器の検出

一般の集落域から出土する輸入陶磁器としては細片ではあるが、多様なものが多くみられることから、中世から近世における、交通・物流の隆盛な地域であることを指摘。

9. 中世から近世に続く耕作面(第1・2面)の検出

10. 現代における不法投棄の状況確認

(杉本)

(その4)の調査結果から得られた成果をまとめると、以下のようになる。

1. 中世前期から現代まで続く耕作面の検出

第4-1・2面(中世)では溝・畦畔を検出、第1～第3面及び第5面では耕作痕を検出。

これにより、中世段階では、平成9年度の調査で検出された居住地域に対し、耕作地域が明らかになった。

2. 第4面～第6面で耕作に伴う用水設備と考えられる溝を検出

正方位をとり東西に走る溝と、東西方向より15°ほど南に振る溝の検出から、8世紀以降13世紀の間に地割りの規格が正方位を基準とするように変わった可能性を指摘。

企画性が認められるこれらの溝群と、古代の溜池である依羅池の伝承から古代以降に大規模開発が行われた可能性を指摘。

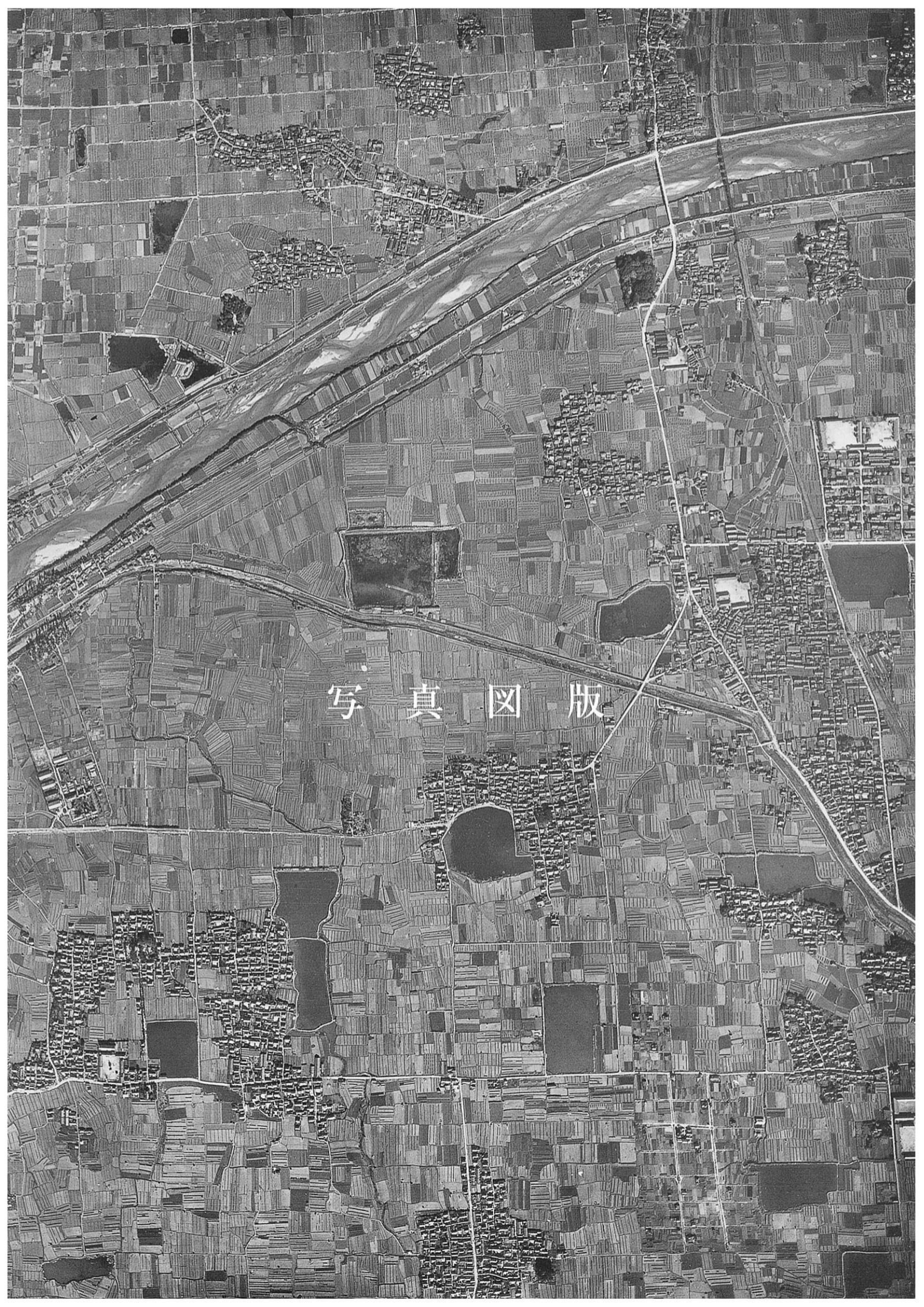
3. 第4面～第6面で西側が若干高い溝底の検出

現在の和川の流れと反対方向に流れる溝であるが、泉北丘陵から伸びる地形に影響されることから、和川と逆の方向に流れることが不自然でないことを指摘。

4. 第5面（古墳時代～中世）で竈の可能性ある焼土坑を検出
5. 第6面（古墳時代以前）で風倒木痕を多数検出
6. 縄文時代の石製品の検出
7. 第5面で大阪府教育委員会平成7年度の調査で検出されたものと同様と思われる轍状遺構の検出
(岡本)

今回の調査では、調査区全域に現代の攪乱が著しかったため、特に（その3）では、遺構面の検出に困難をともなった。現代の攪乱は地山層まで達するものが多く、調査区が無残にも虫食い状態になってしまった。高度経済成長期における乱開発や産業廃棄物の不法投棄などによる攪乱である。発掘調査の対象となるまでは、遺物・遺跡の包蔵地であると確認されていなかった場所ではあるが、検出した遺構の無残な情景を目の当たりにして、とても残念な気持ちになったことは言うまでもない。地域開発と文化財行政との和やかな調整が、今後一層推し進められることを願う起因となる発掘調査であった。

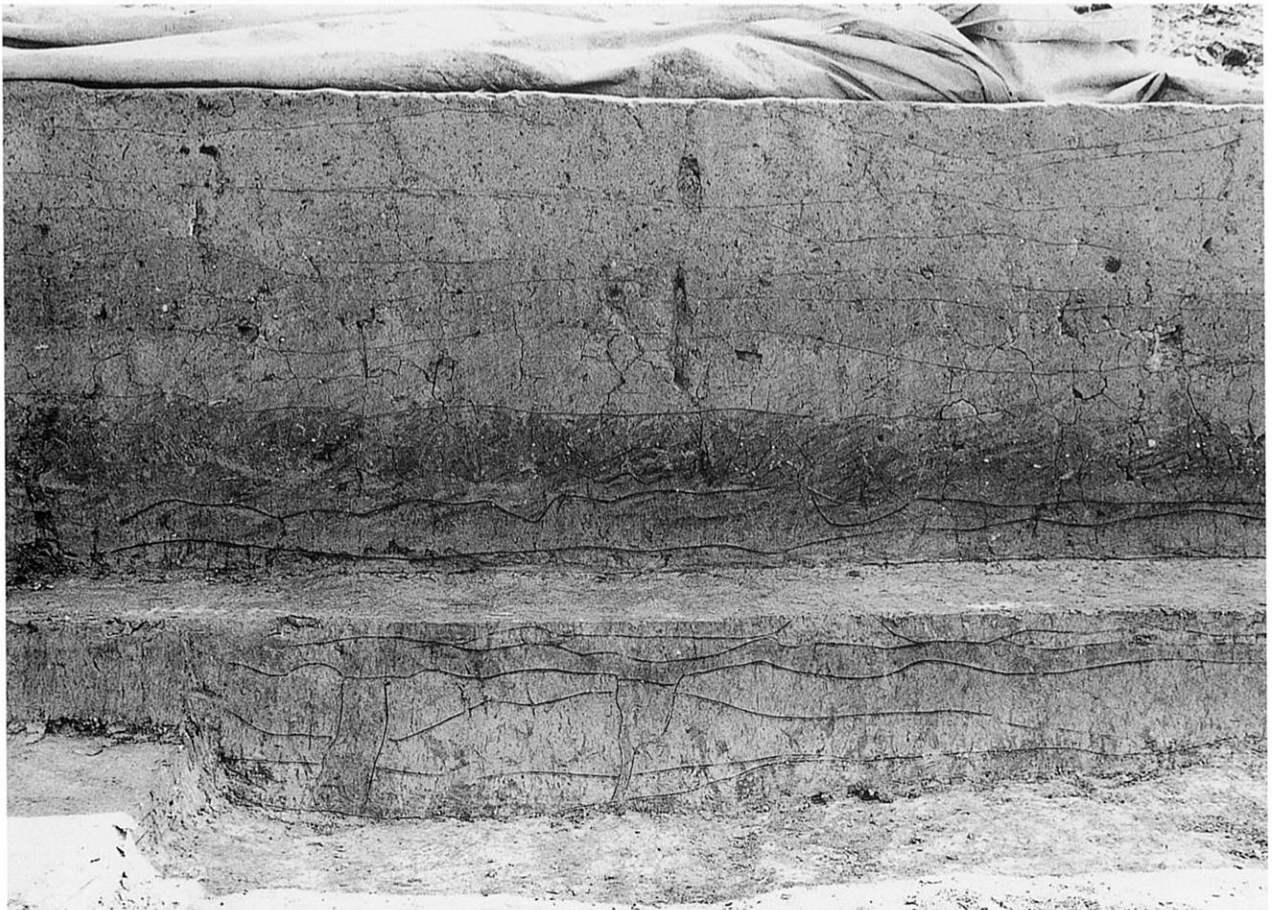
今回の調査の成果では、特にひとつの区域からまとまって出土した遺物（-i9地区出土の遺物）から多くのことを考察することができた。しかしながら、旧石器時代・縄文時代の石製品にともなう遺構面が不明であるなど、さらなる問題が生じ、また古墳時代の中心的な集落域が不明瞭であることなど問題も多く残っている。ここでは、成果をまとめることにとどめ、今後の検討課題として受けとめた上で、和川今池遺跡における古環境の復元や各時期にわたる変遷について、今回の成果が一助になるものと確信するとともに、今後のさらなる発掘調査の成果により、和川今池遺跡の実態が一層明らかにされていくものと期待したい。
(杉本)



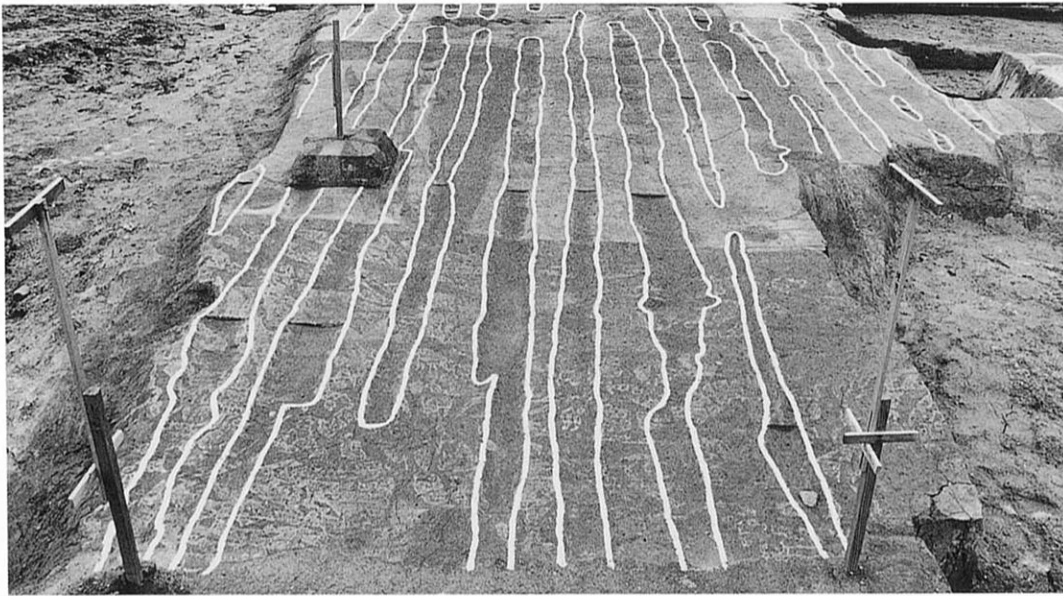
写真図版



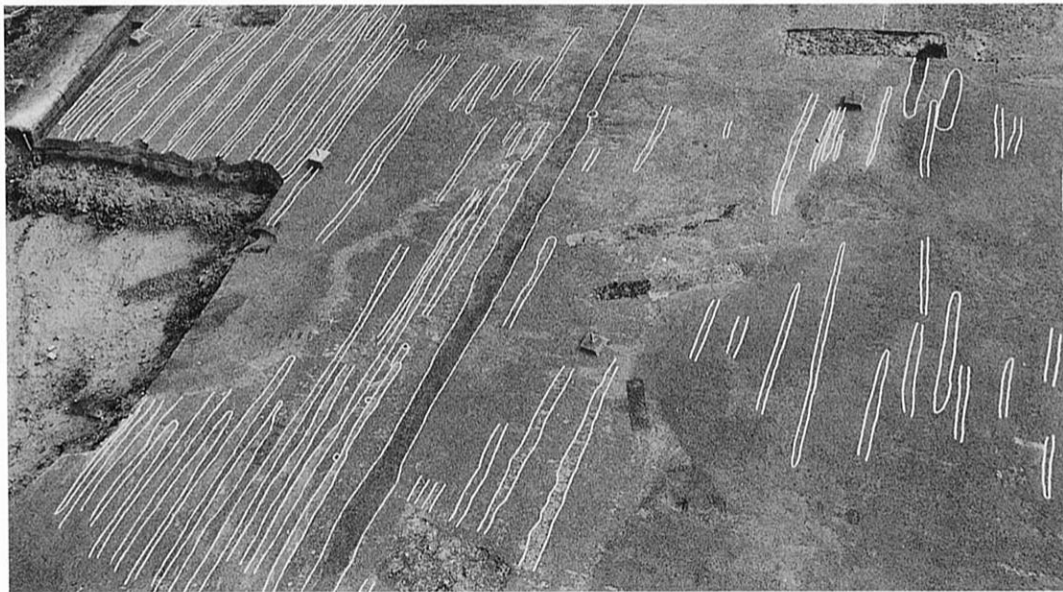
1. 調査区 全景 (南から)



2. 南壁断面 (北から)



1. 第1面 鋤溝群 (南から)



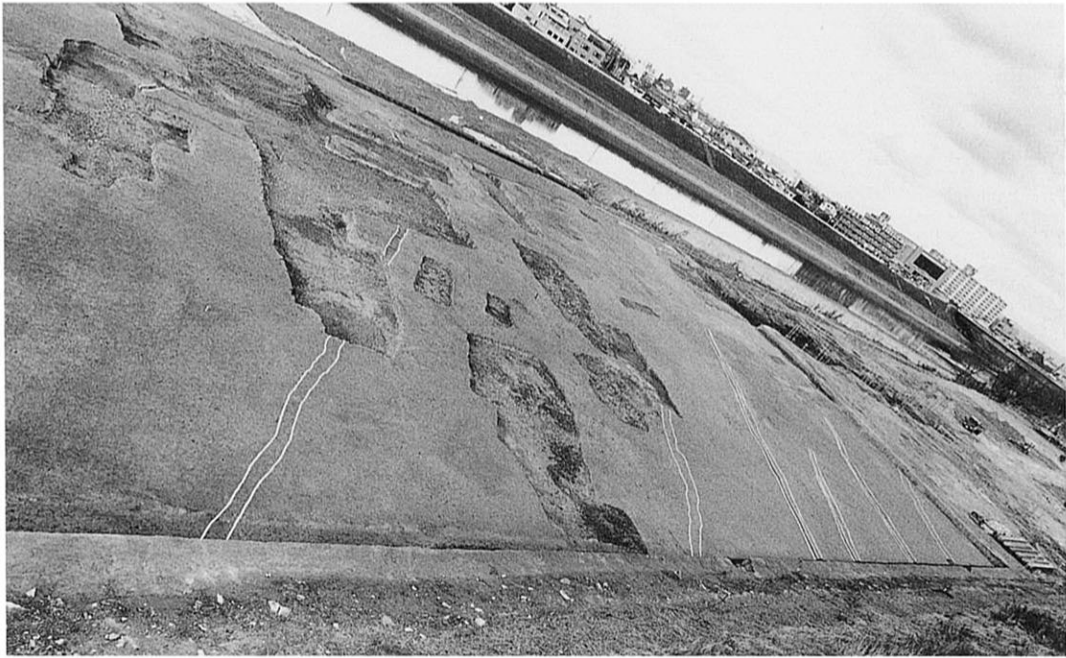
2. 第2面 鋤溝群 (北から)



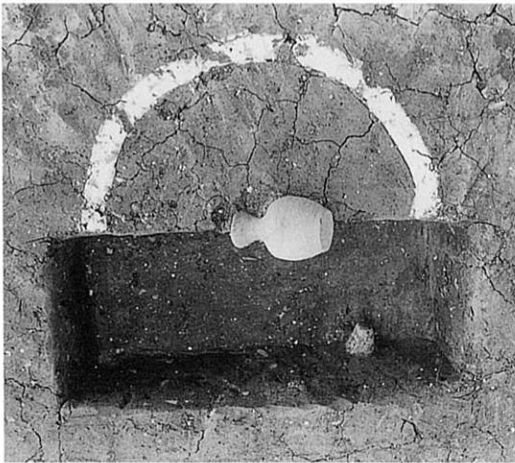
3. 第2面 鋤溝群 (南から)



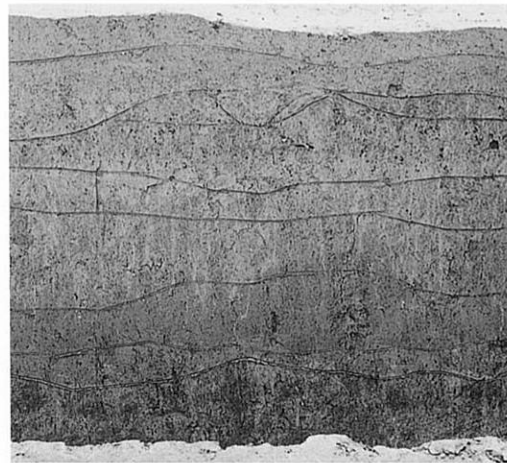
1. 第3面 全景 (南から)



2. 第4面 全景 (南から)



3. 第4面 ピット22遺物出土状況 (南から)



4. 第4面 畦畔検出状況 (北から)



1. 第5面 全景 (南から)



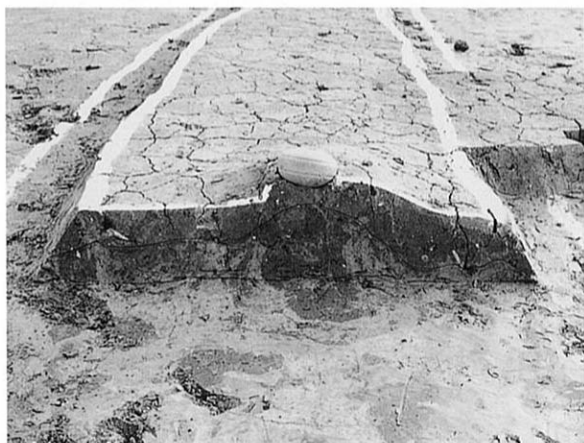
2. 第5面 畦畔全景 (南から)



3. 第5面 足跡 (南から)



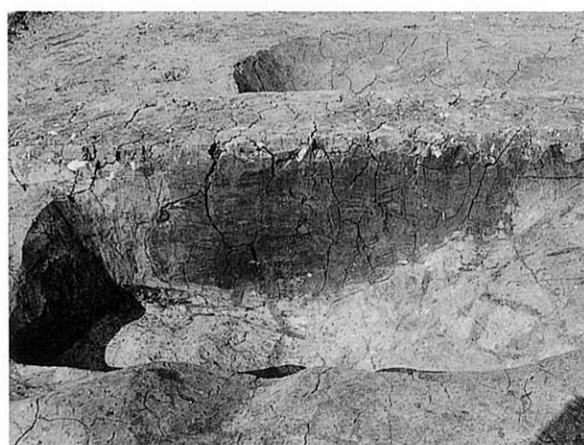
1. 第5面 土器溜り遺物出土状況 (南から)



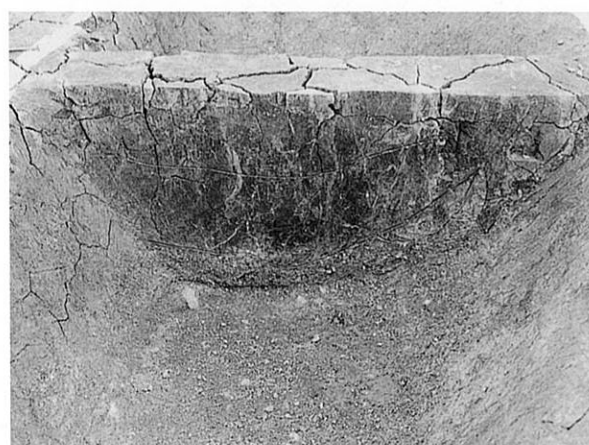
2. 第5面 畦畔19遺物出土状況 (北から)



3. 第5面 畦畔20遺物出土状況 (西から)



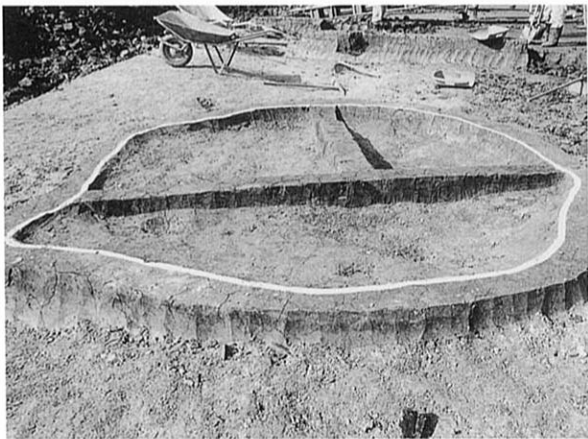
4. 第5面 不定形土坑32断面 (南から)



5. 第5面 不定形土坑16断面 (西から)



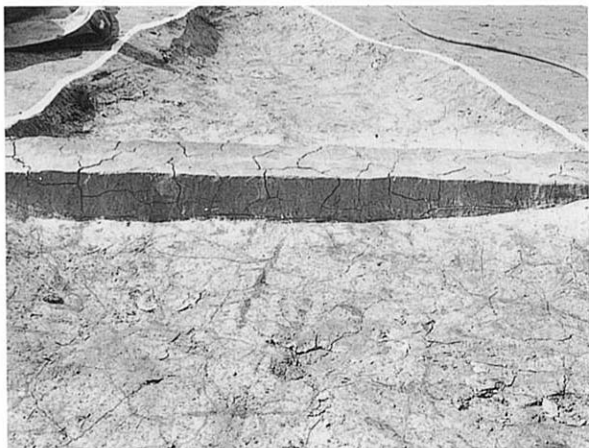
1. 第6面 西半全景(南から)



2. 第6面 不定形土坑24全景(南東から)



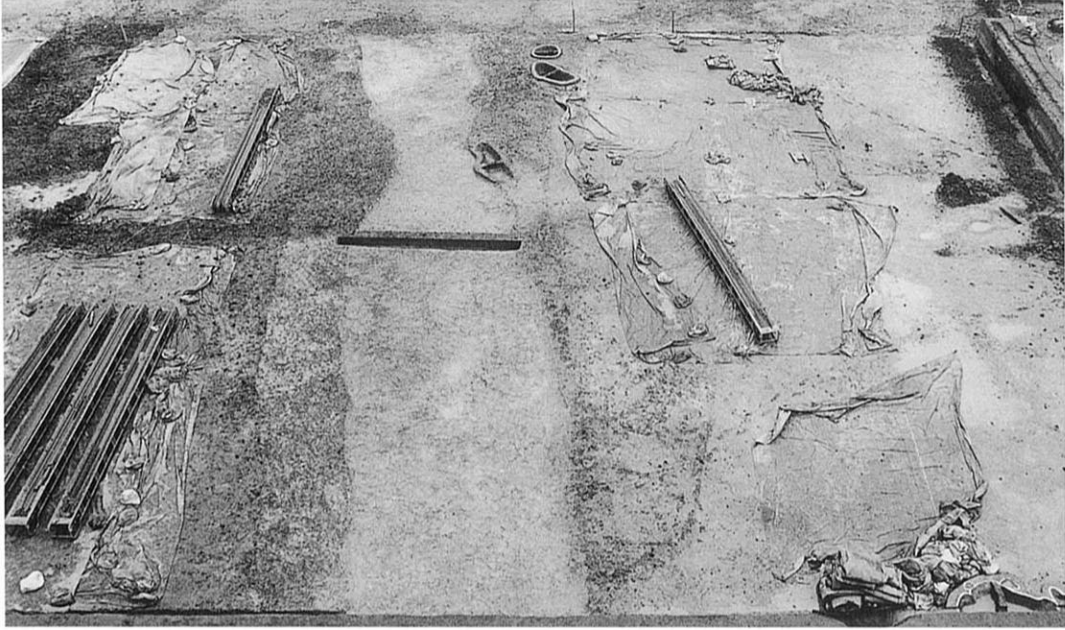
3. 第6面 不定形土坑29断面(南東から)



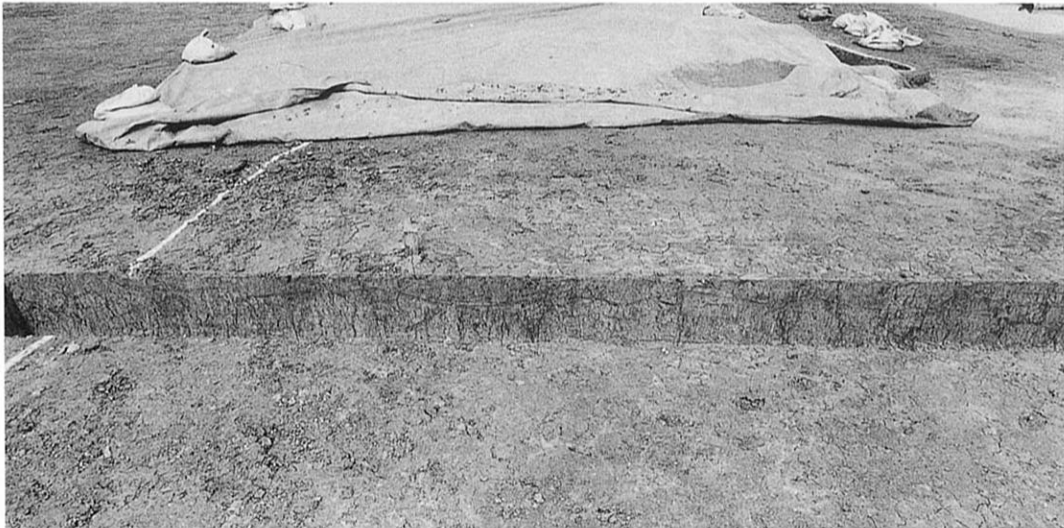
4. 第6面 不定形土坑20断面(南東から)



5. 第6面 足跡



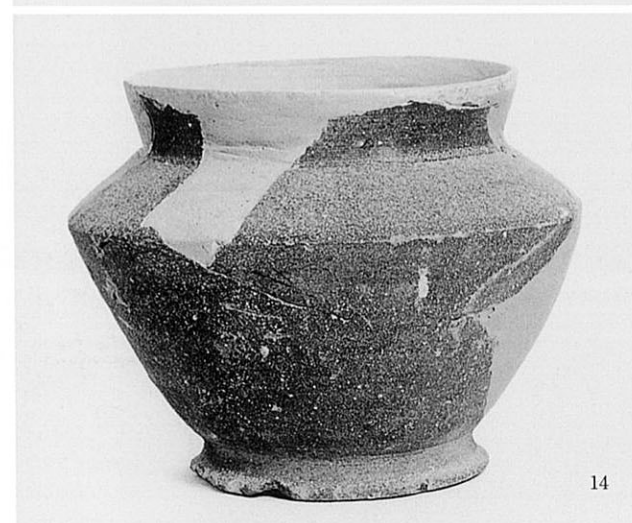
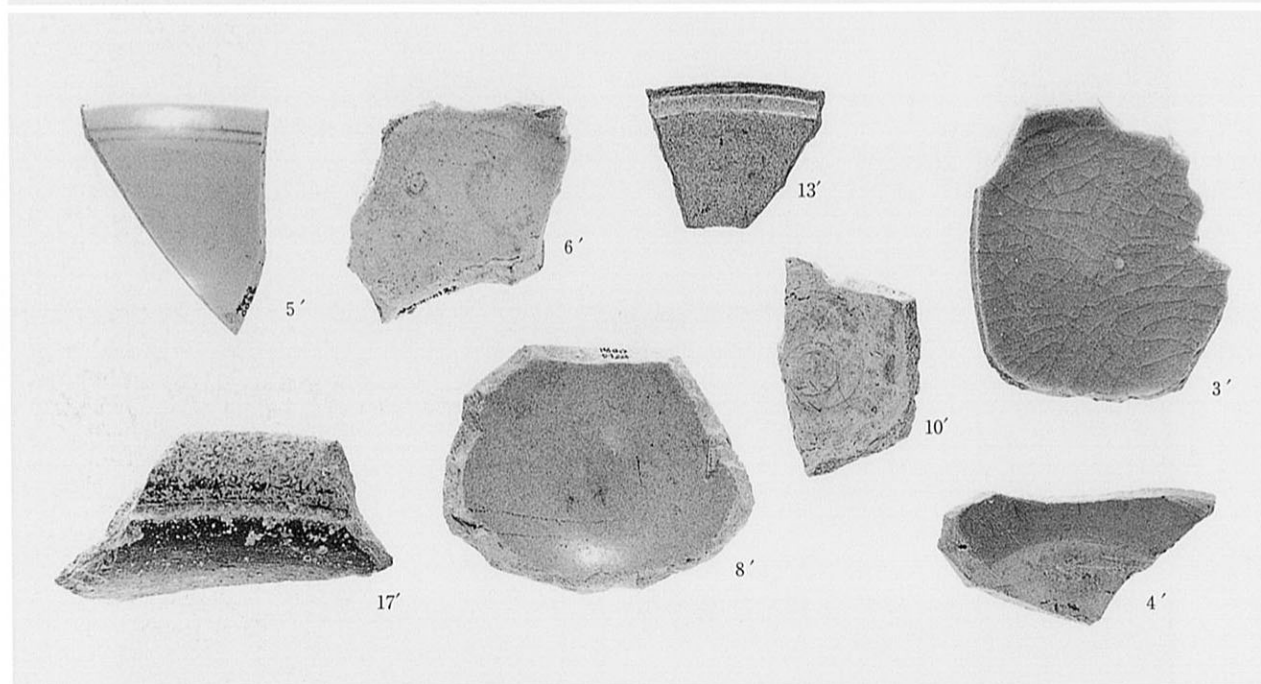
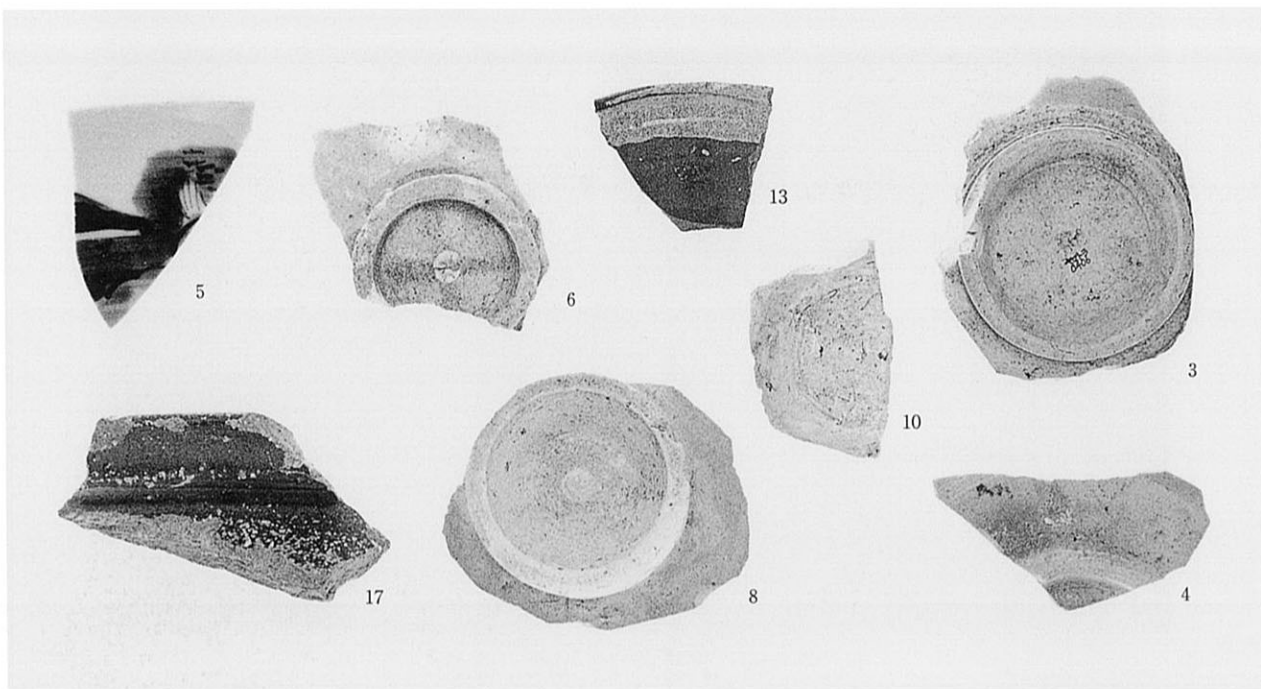
1. 第 6 面 自然流路 a 全景 (南から)

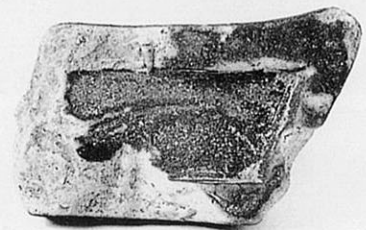
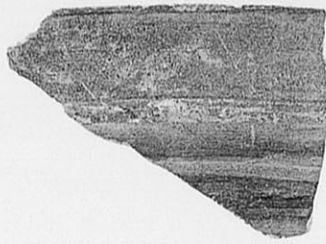
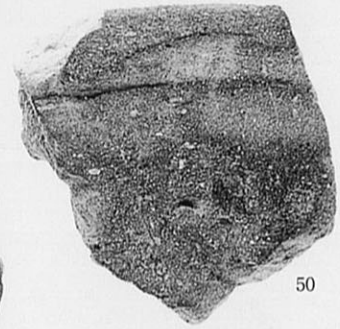
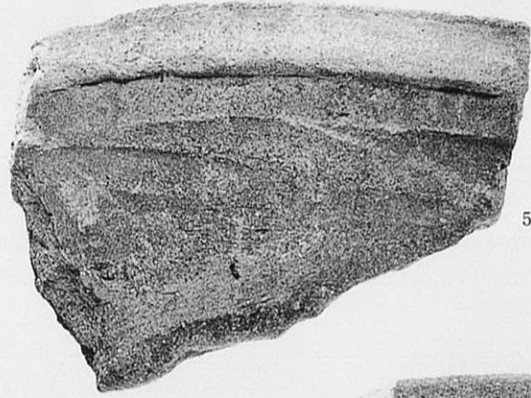
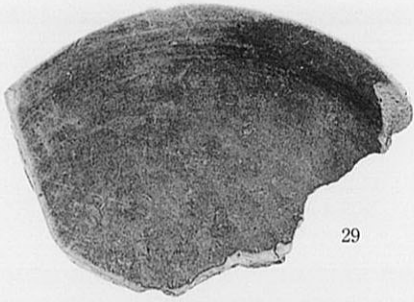


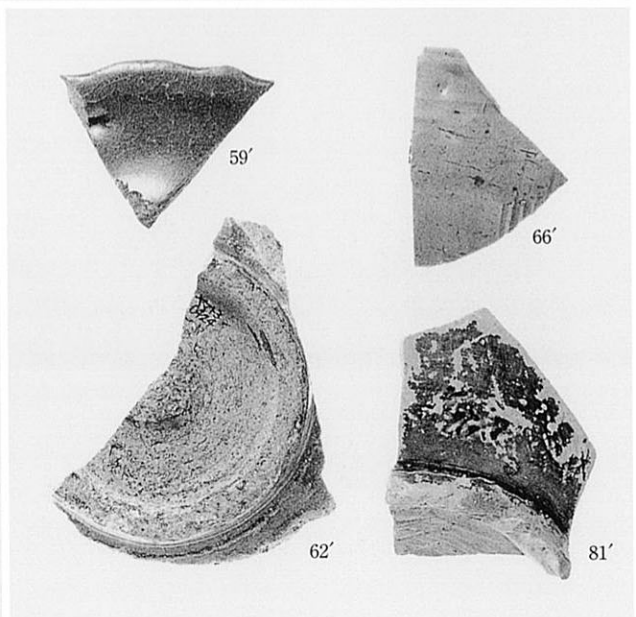
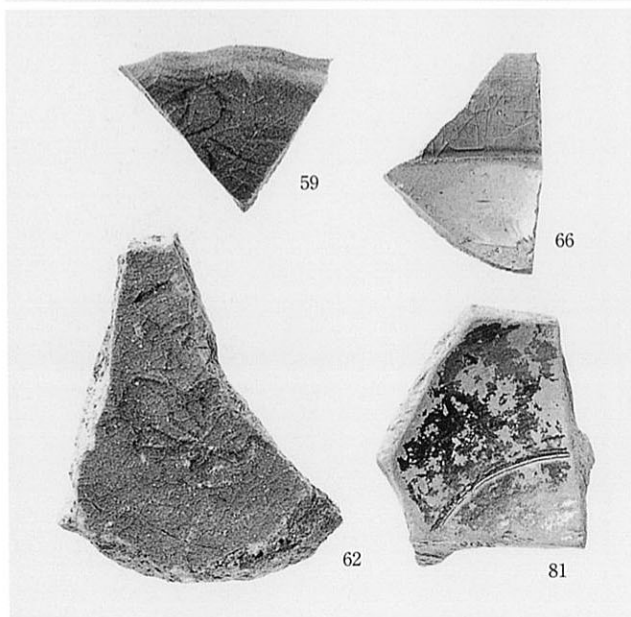
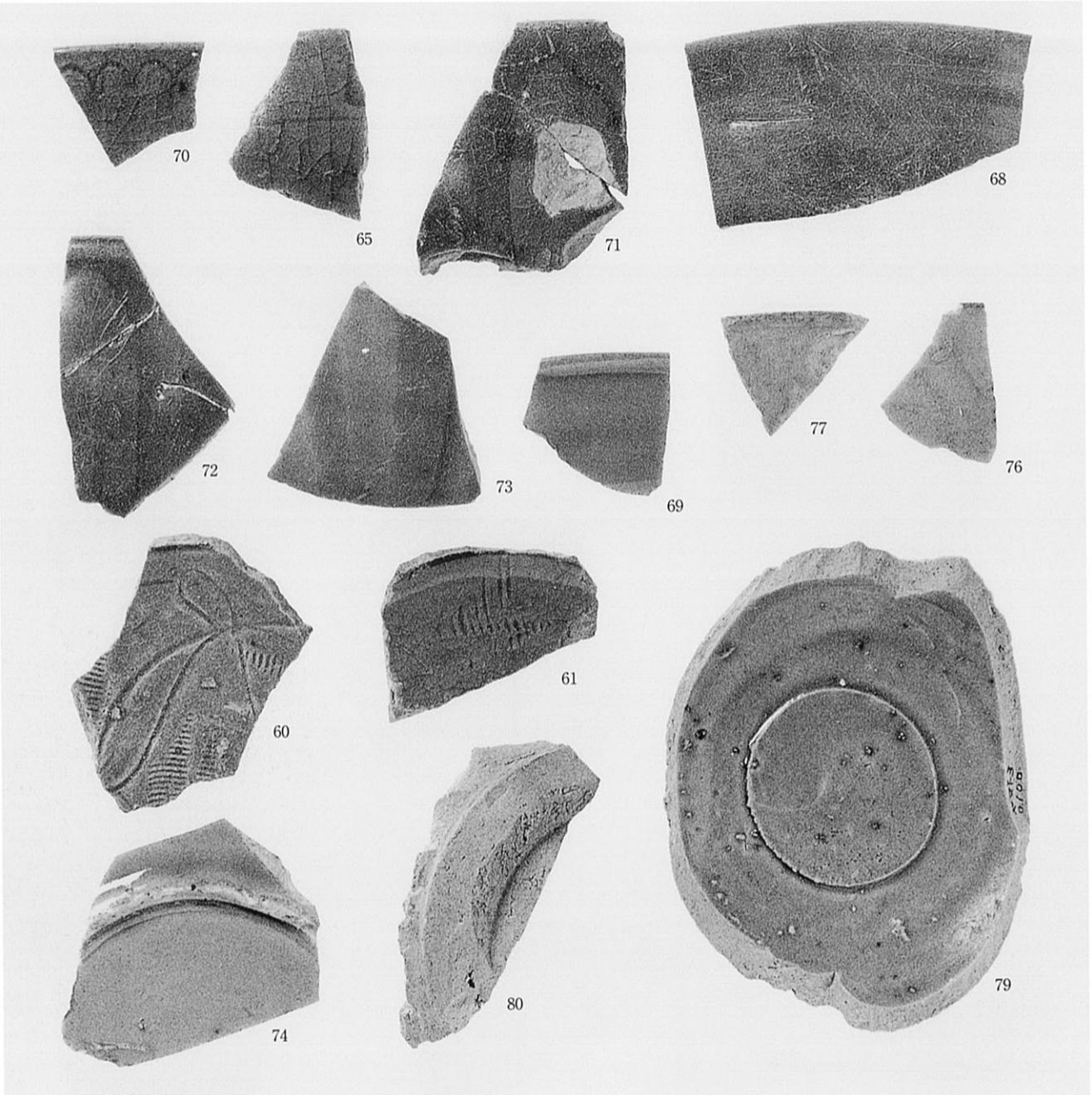
2. 第 6 面 自然流路 a 断面 (南から)

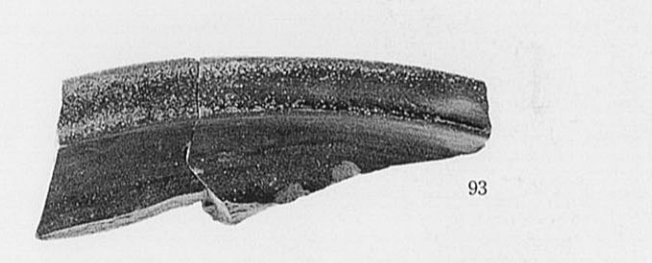
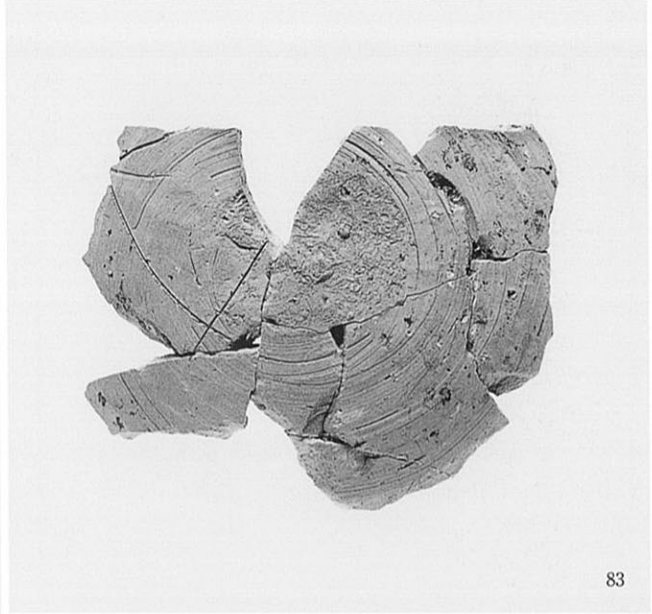


3. 最終面 自然流路跡全景 (南から)









88

83

84

92

93

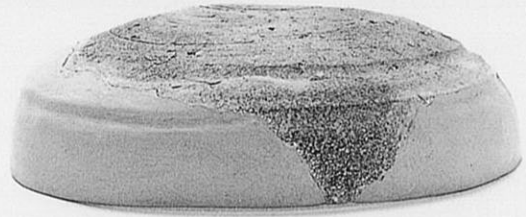
89

90

95



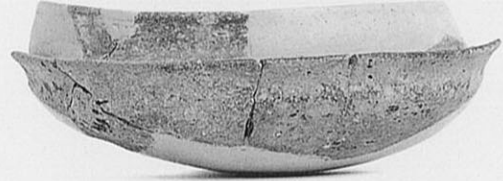
96



104



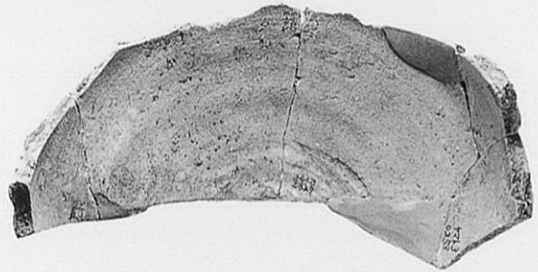
98



108



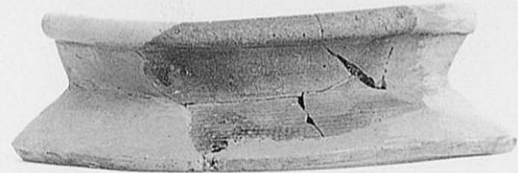
99



149



100



151



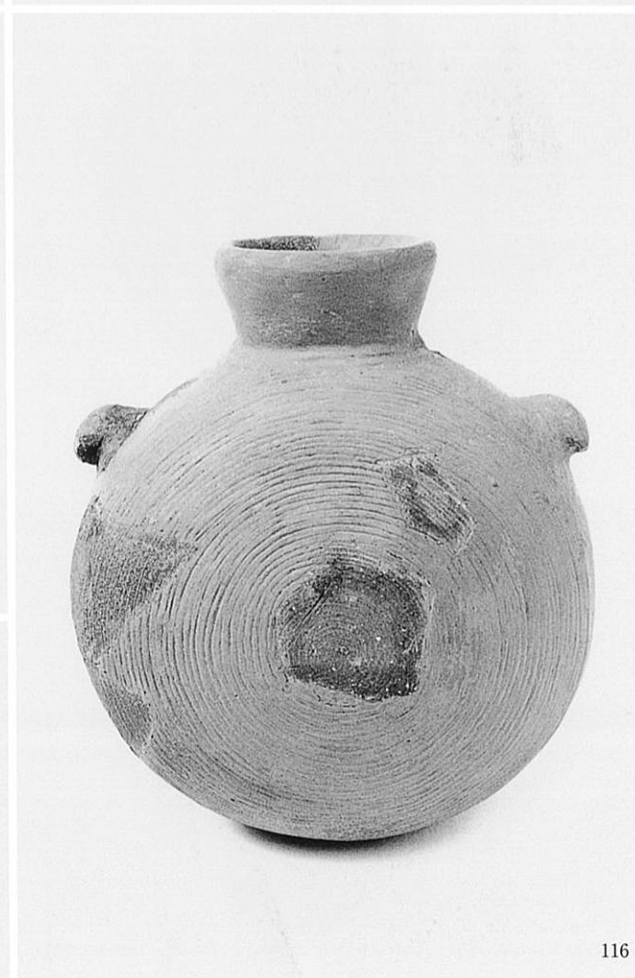
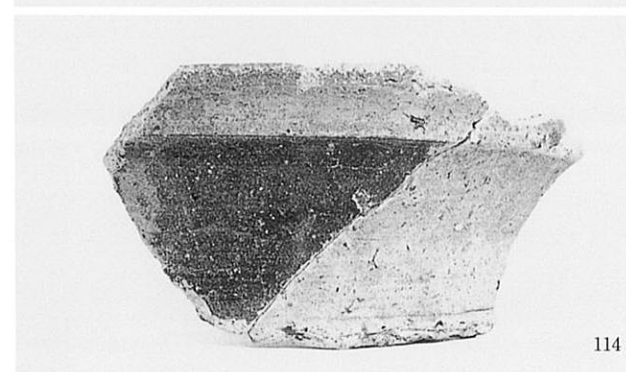
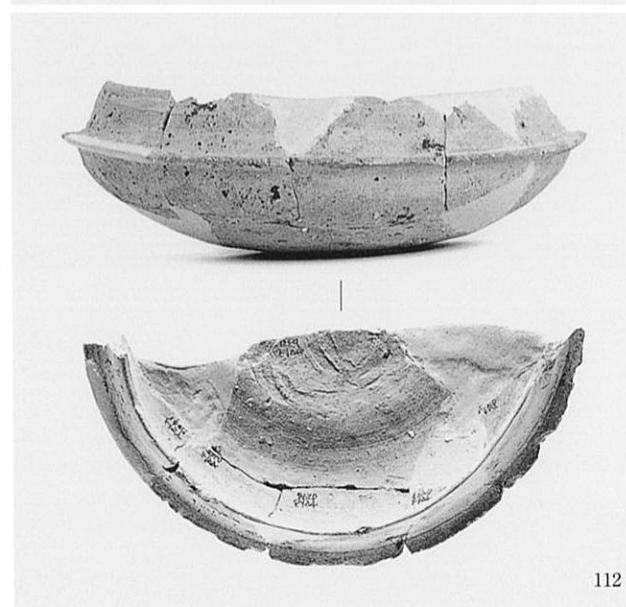
102

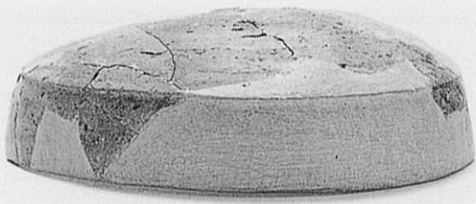


103

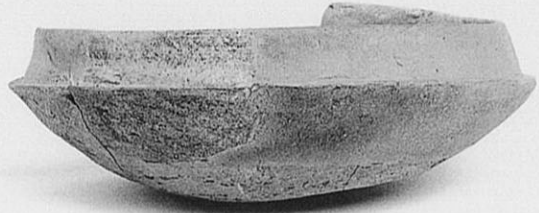


106

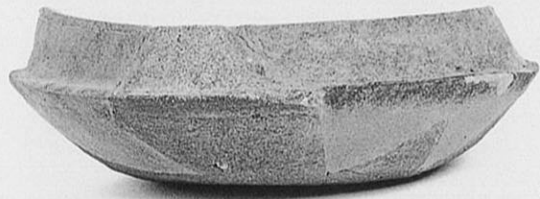




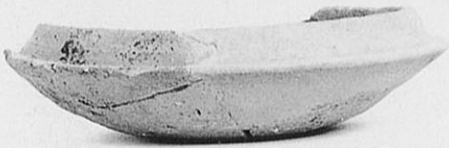
117



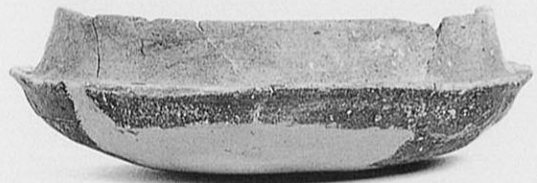
125



126



120



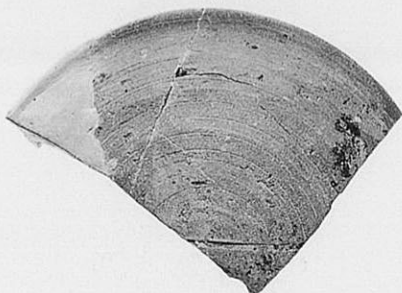
123



124



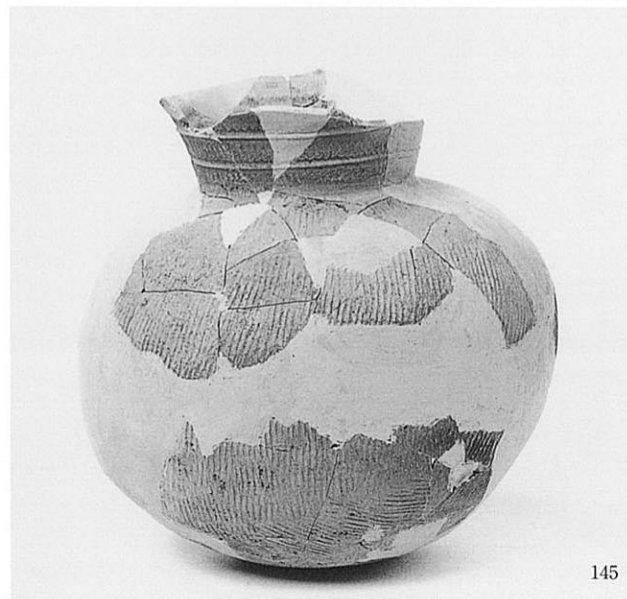
127

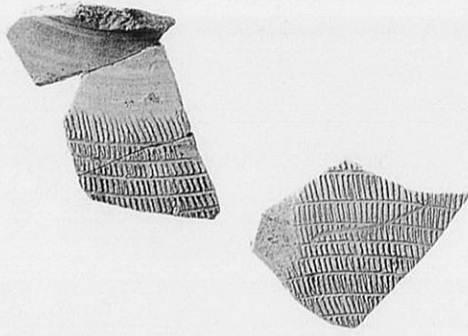


121

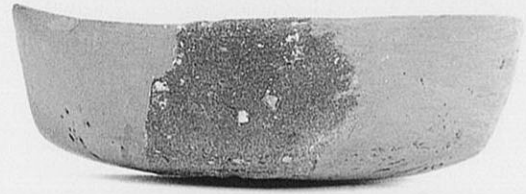


129





170



155



161



165



179



177



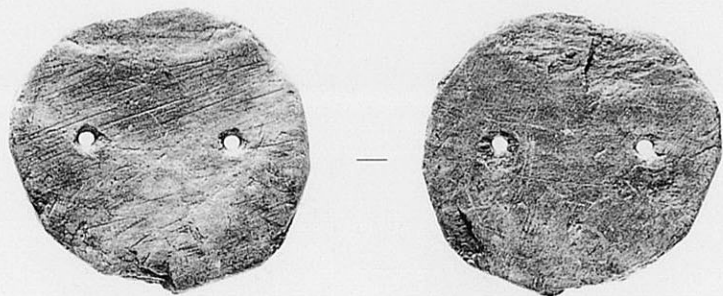
172



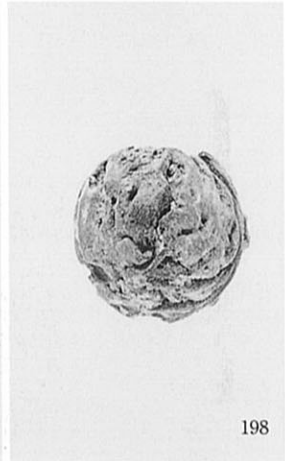
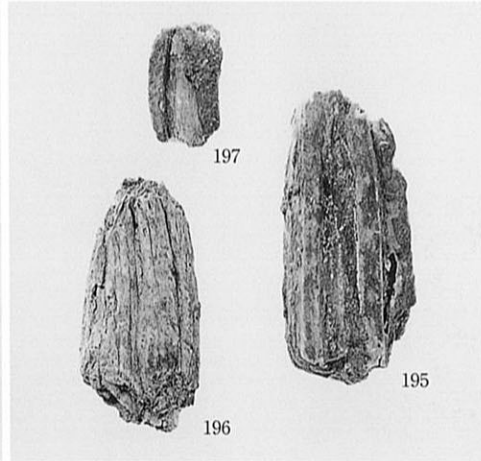
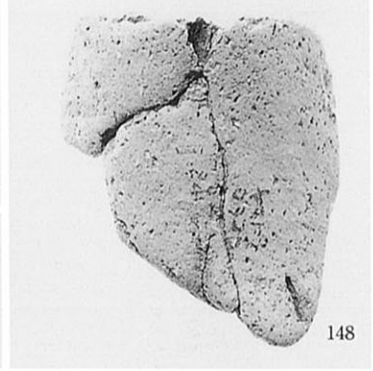
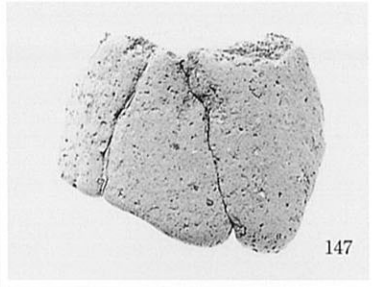
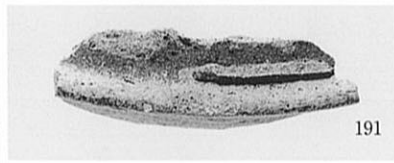
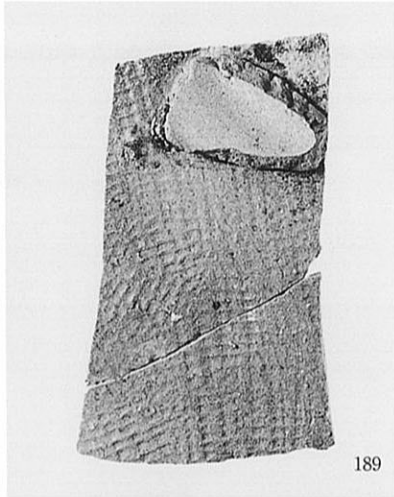
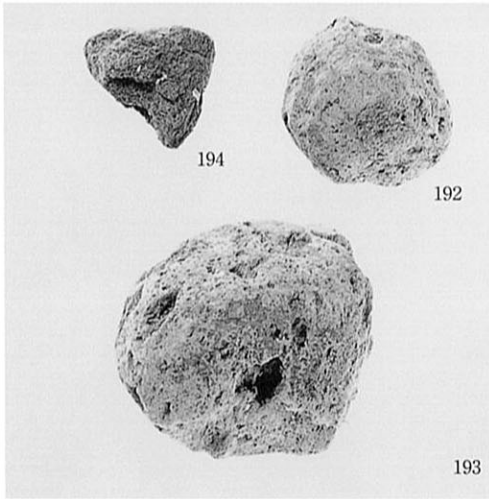
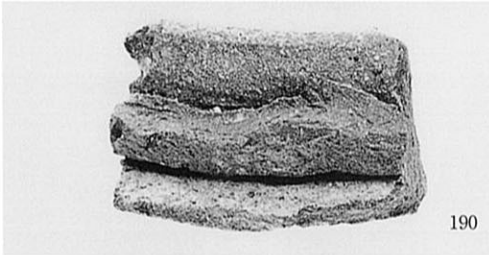
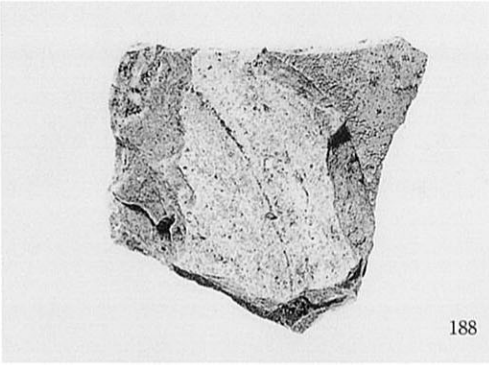
187



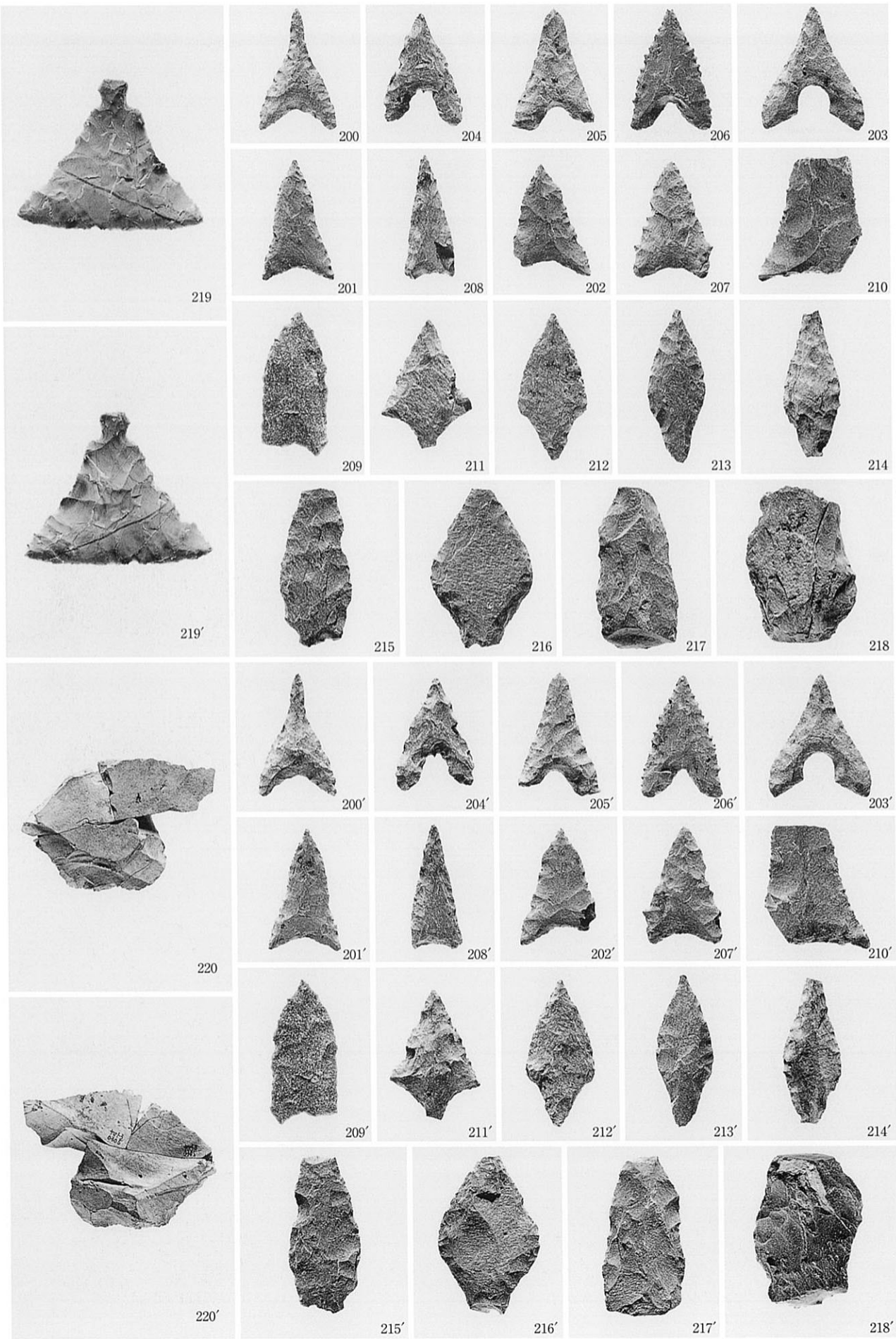
185

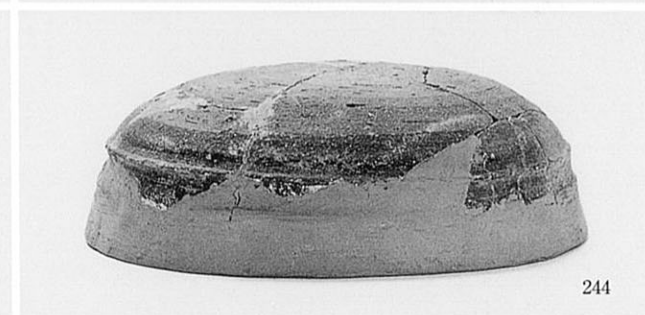
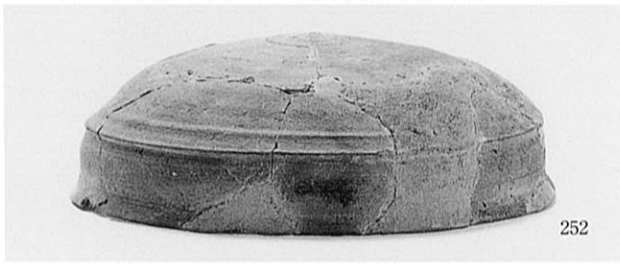
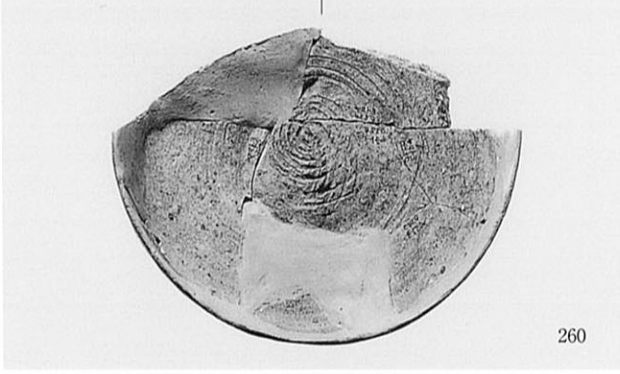


186



図版 18
石製品





260

252

242

245

249

273

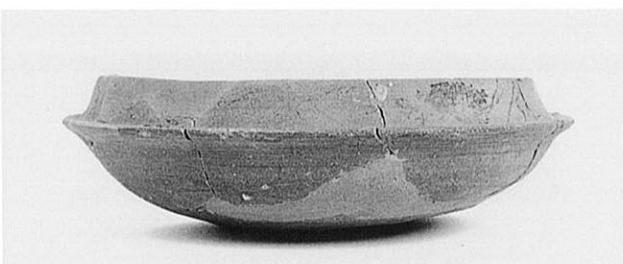
272

238

248

244

239



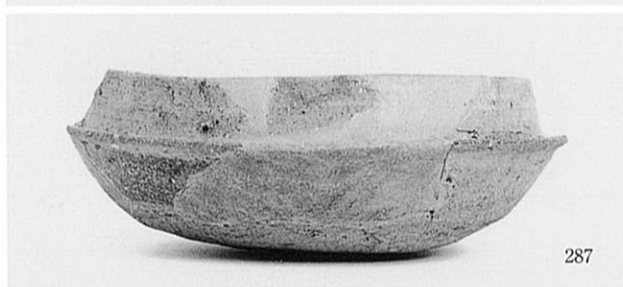
284



314



280



287



289



290



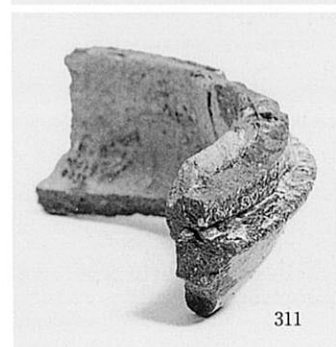
299



300



319



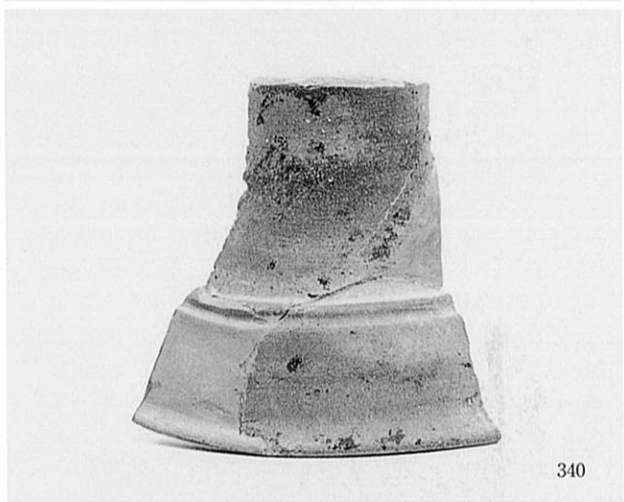
311



307



288





352



355



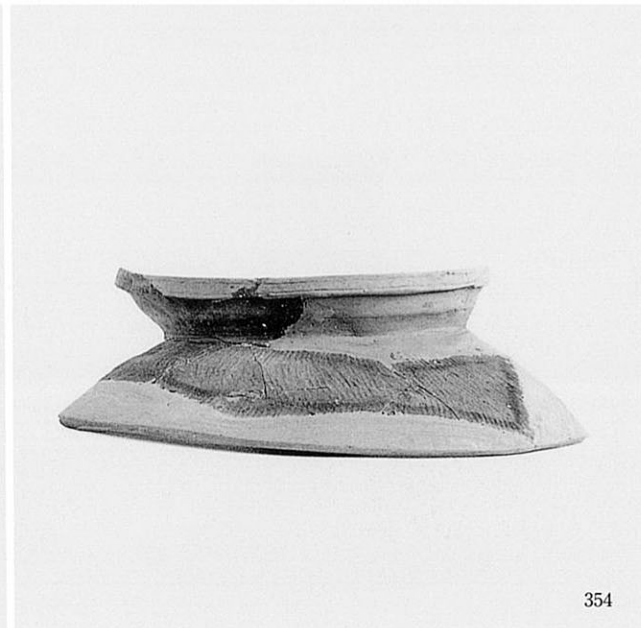
359



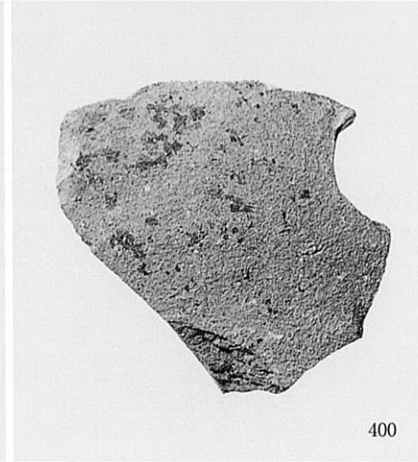
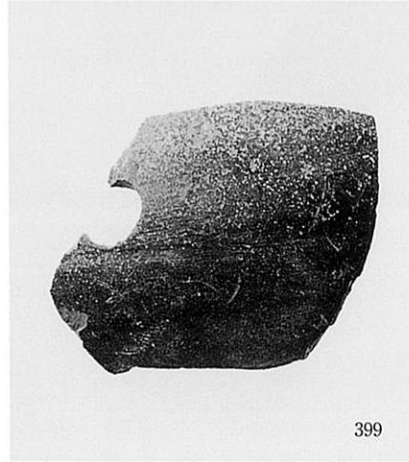
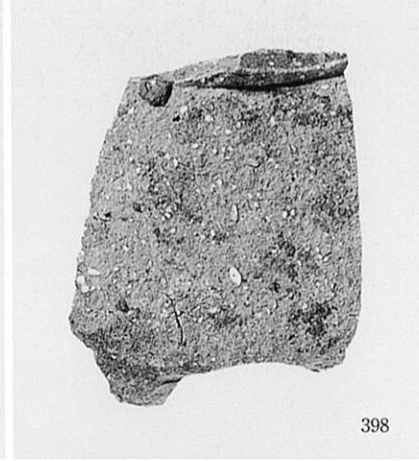
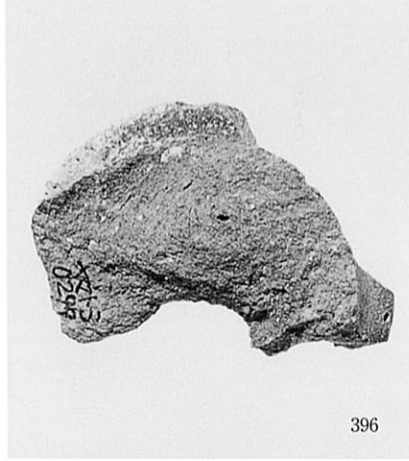
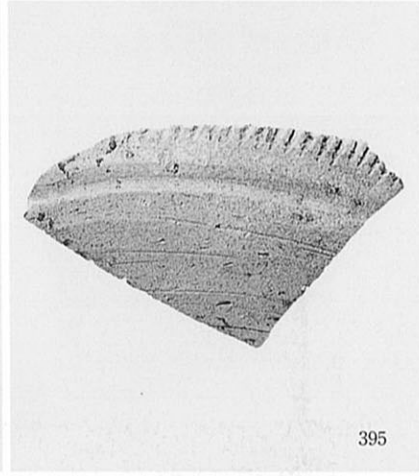
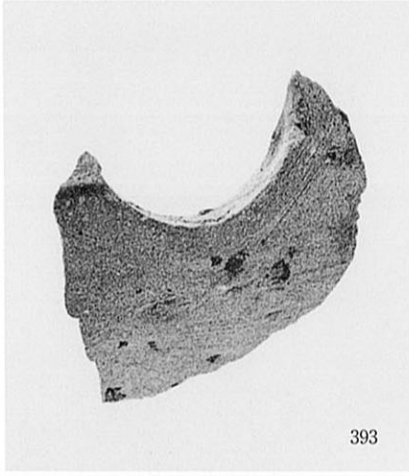
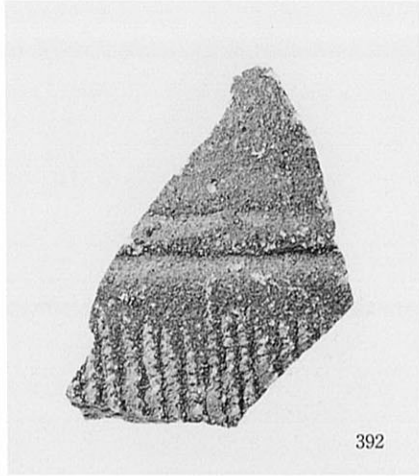
371

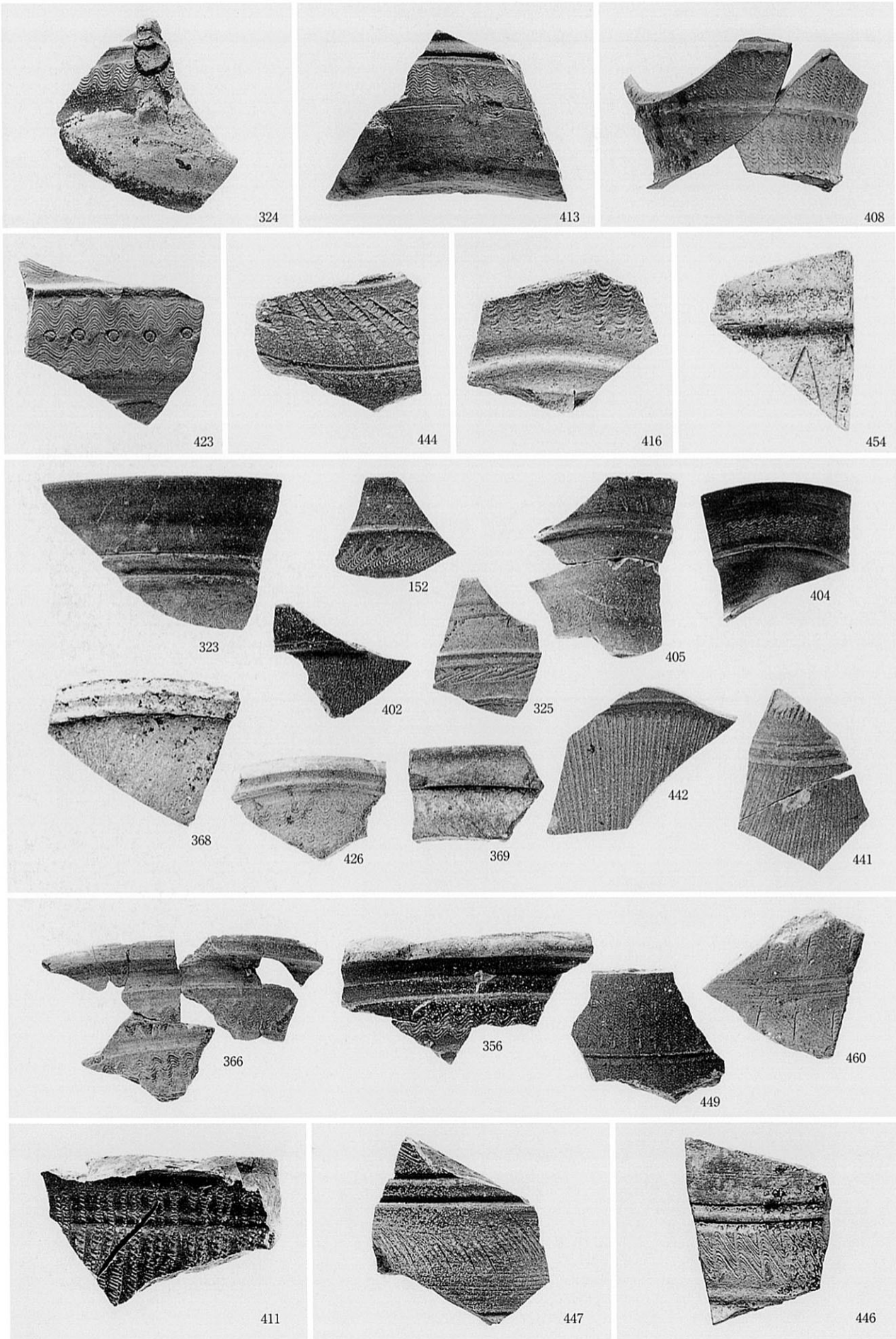


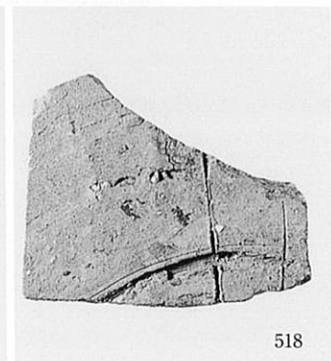
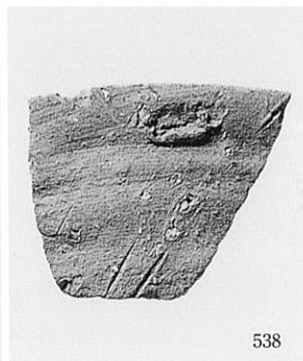
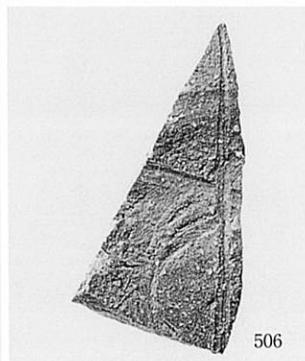
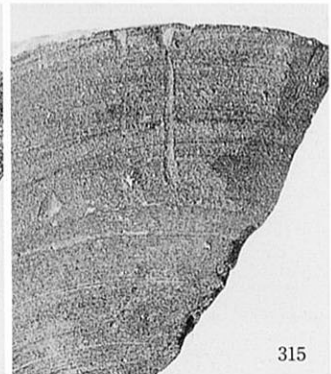
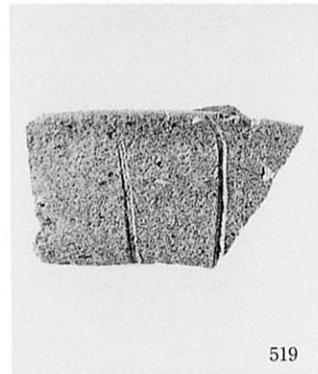
353

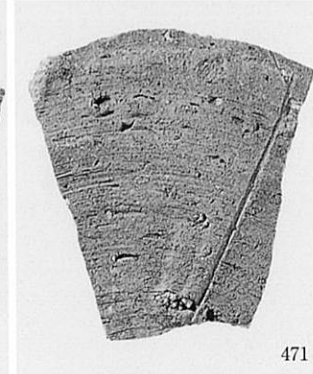
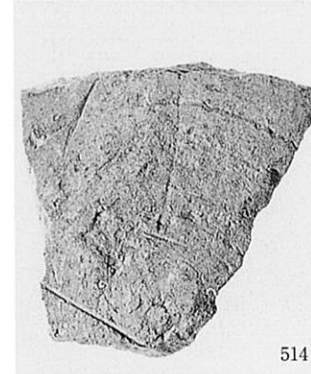
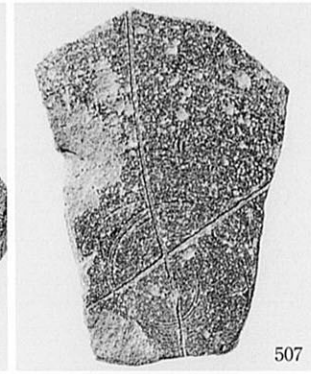
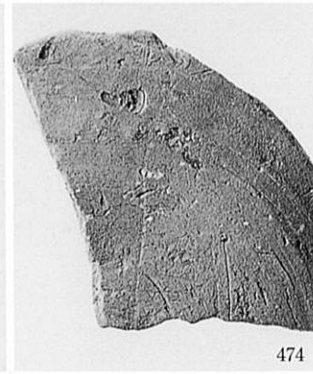
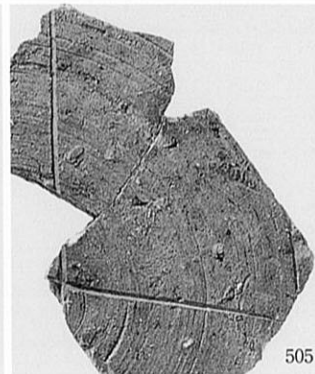
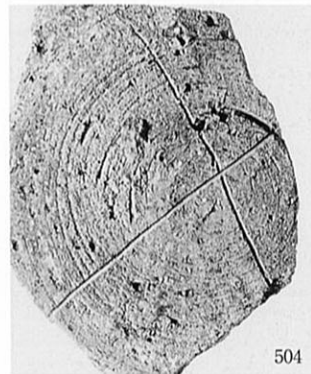
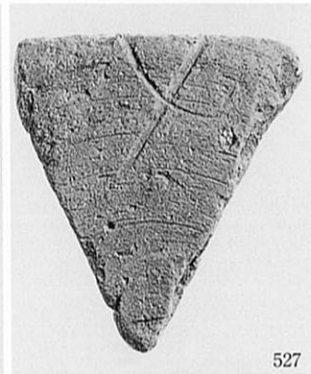
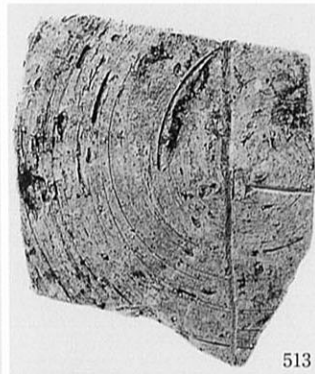
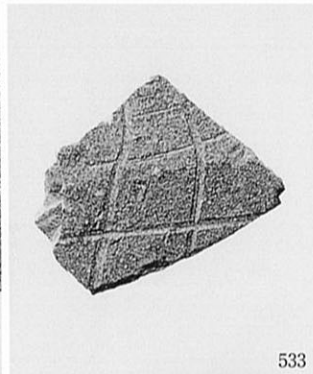
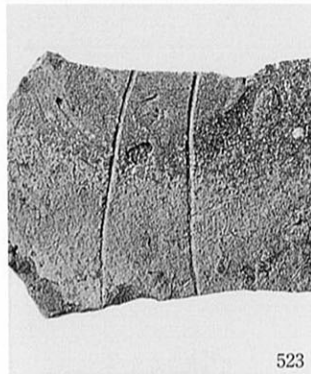
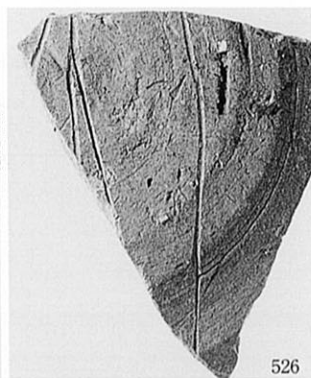
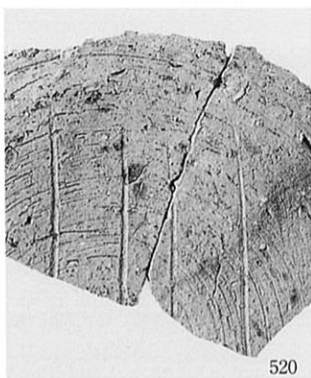


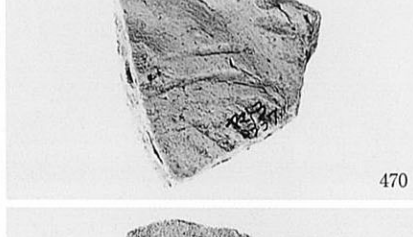
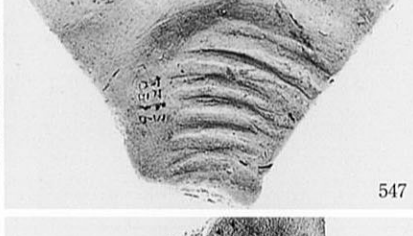
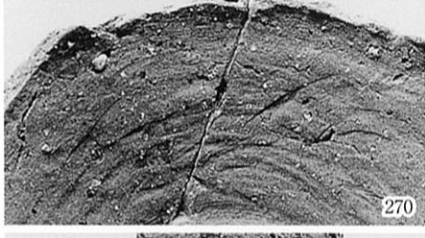
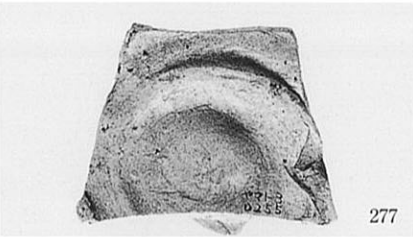
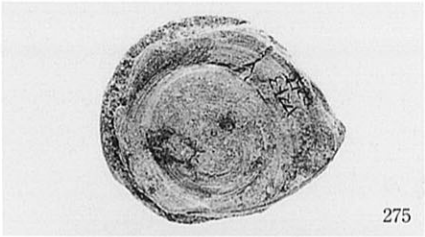
354

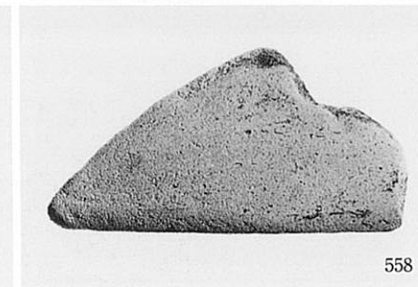
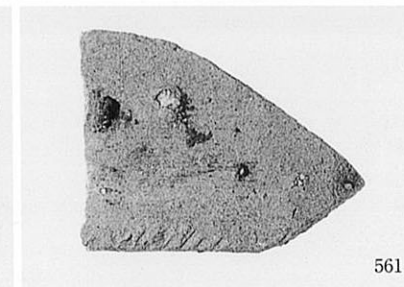
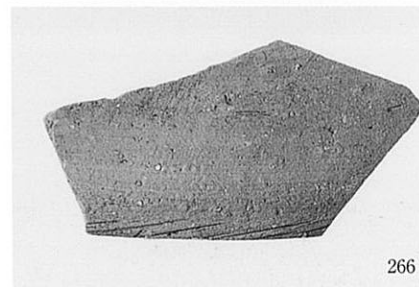
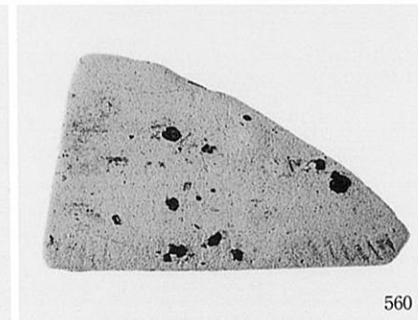
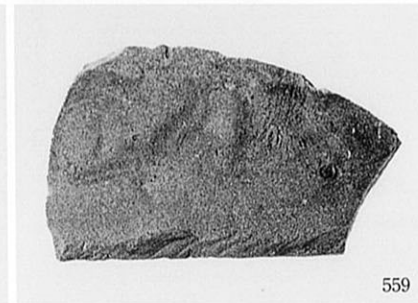
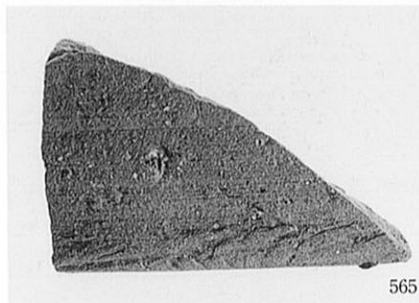
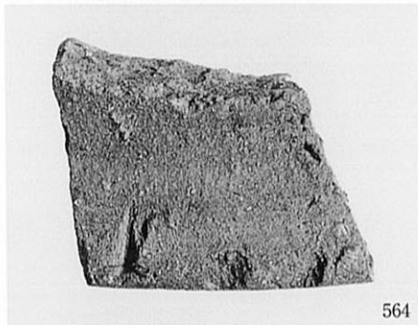
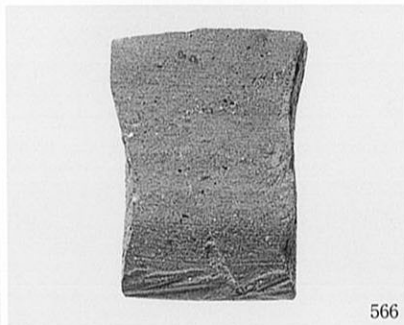
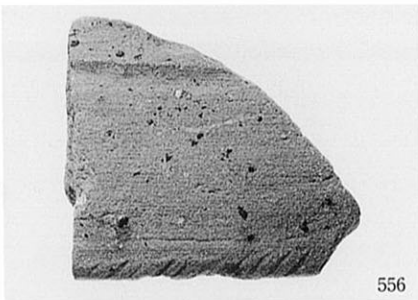


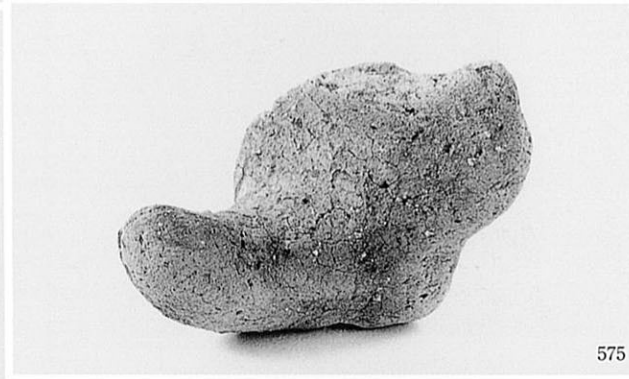
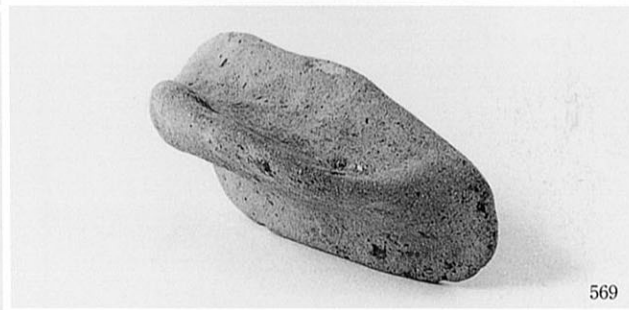
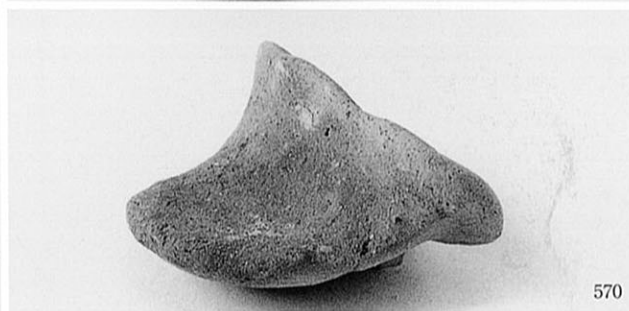


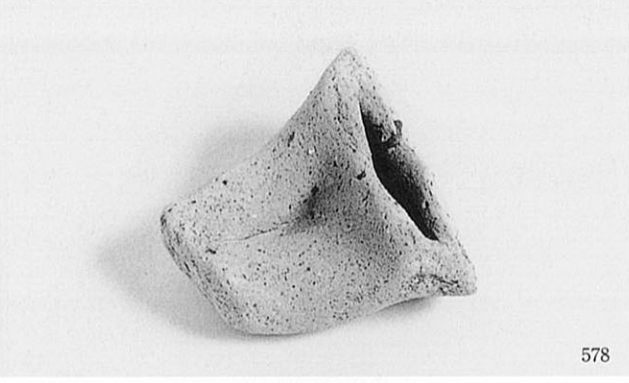












578



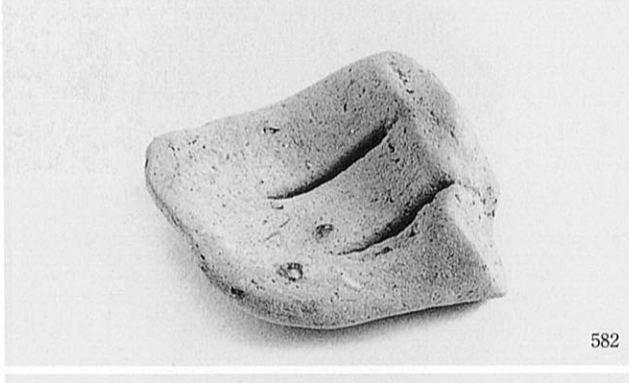
579



580



581



582



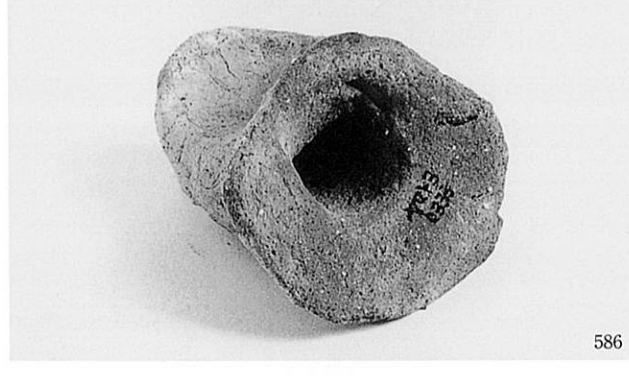
583



584



585

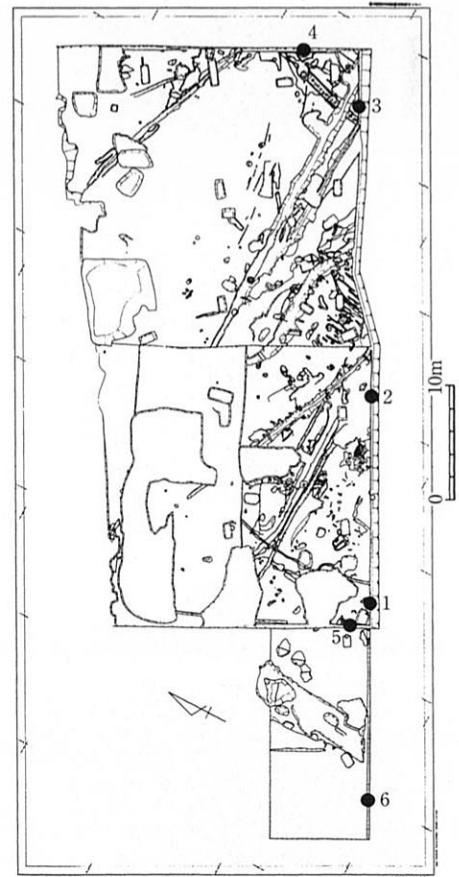
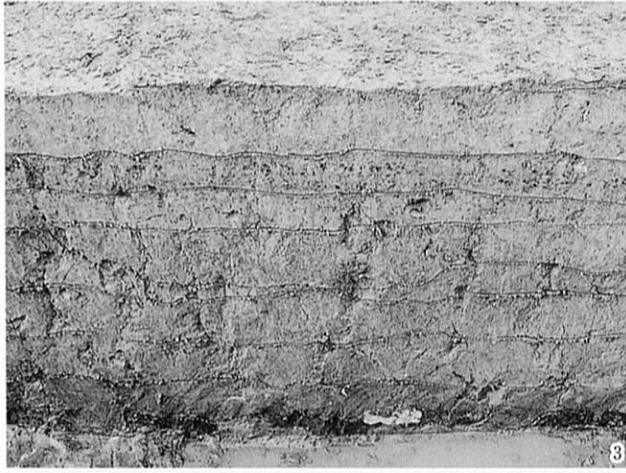
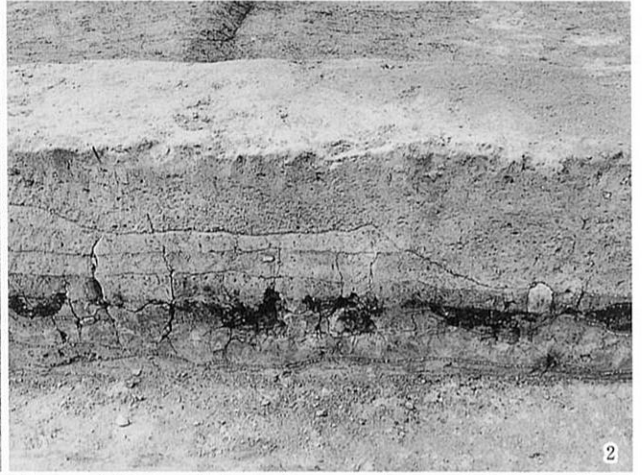
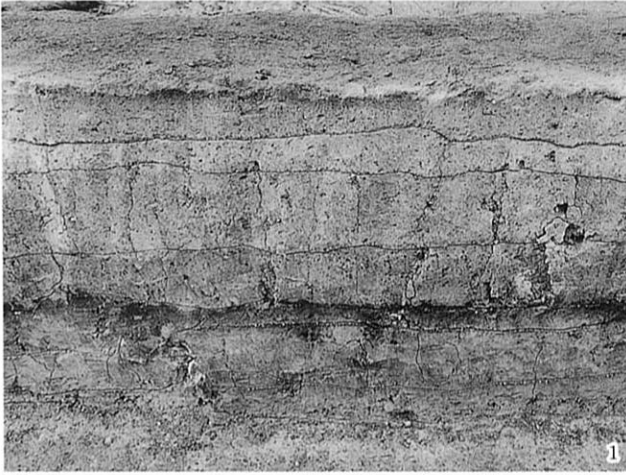


586



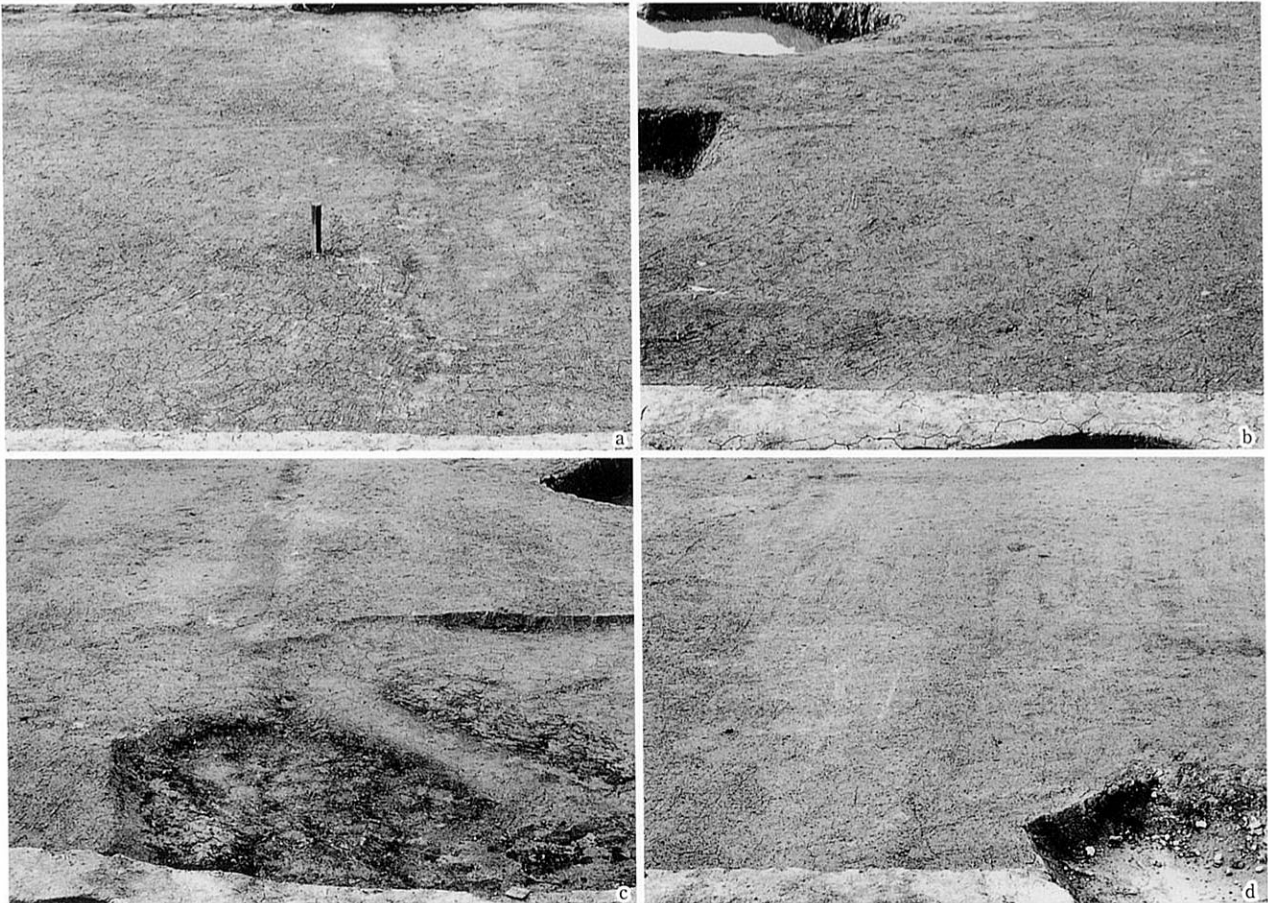
587

図版31
(その4) 調査区断面

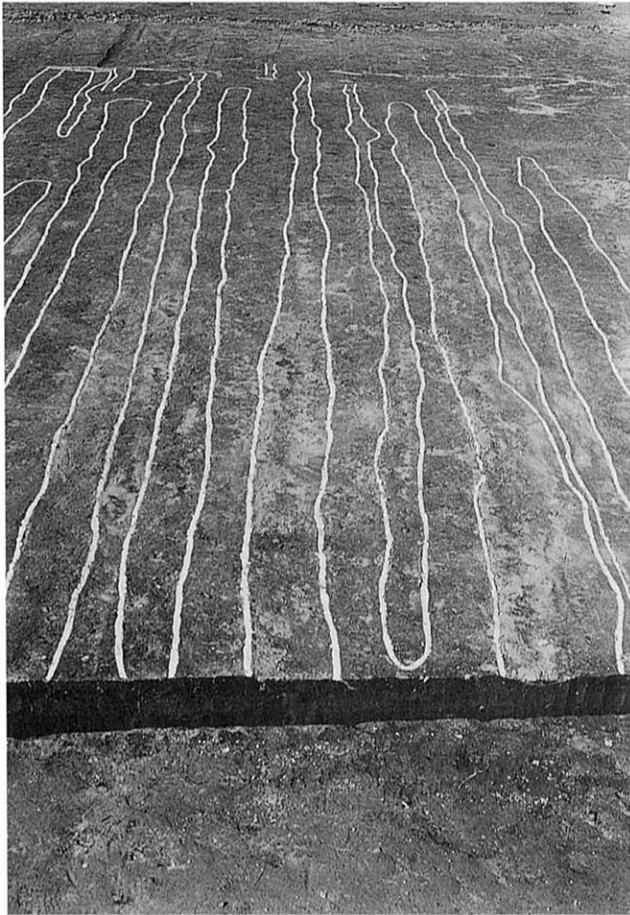




1. 西地区第2面 (南から)



2. 東地区第2面 {アルファベット順に西から東へ撮影} (南から)



1. 鋤溝群203 (南から)



2. 同遺物出土状況



3. 溝201 (南から)



4. 西地区第3-1面 (南から)



1. 西地区第3-2面 (南から)



2. 東地区第3-2面西側 (南から)



1. 西地区第4-1面 (南から)



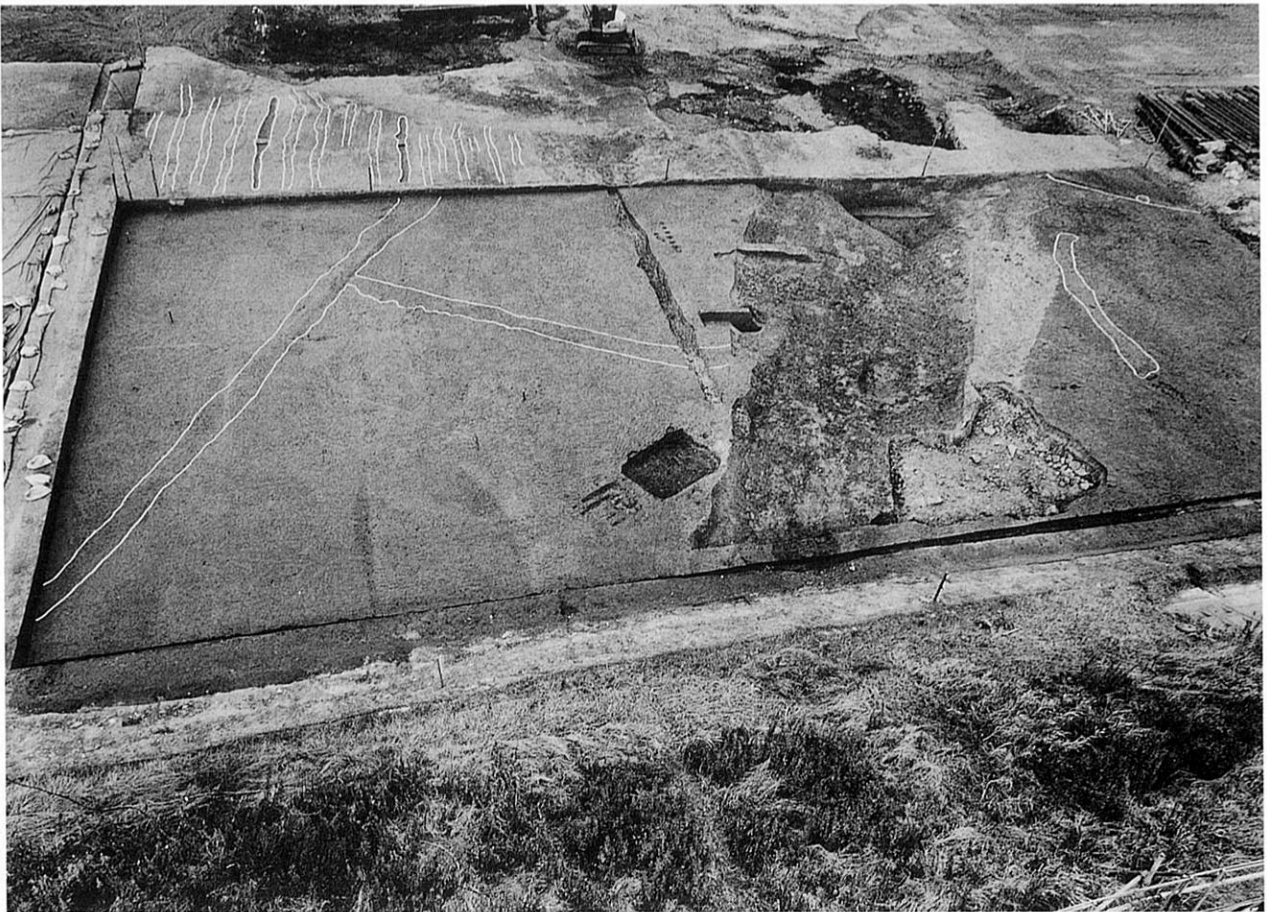
2. 西地区第4-2面 (南から)



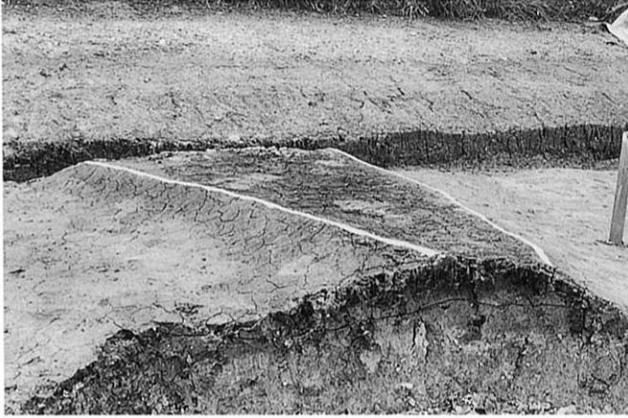
1. 東地区第4-1面 (東から)



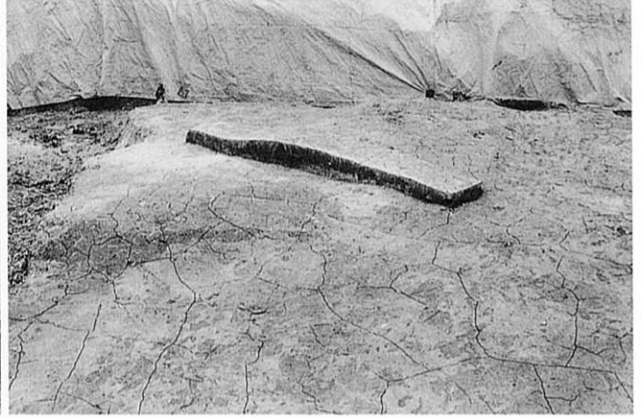
2. 東地区第4-2面 (東から)



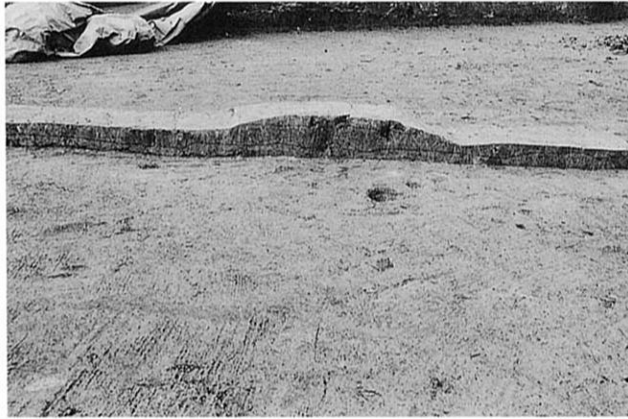
3. 拡張地区第4面 (南から)



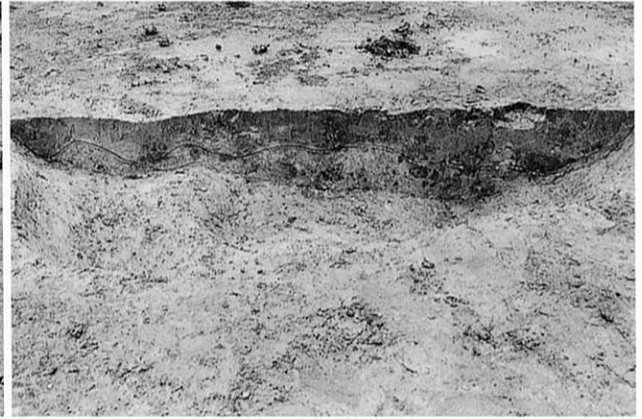
1. 畦畔20 (北から)



2. 畦畔19断面 (東から)



3. 畦畔206断面 (南から)



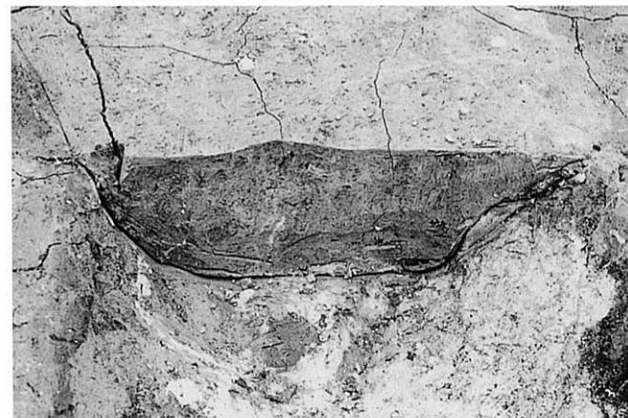
4. 土坑12断面 (南から)



5. 溝10・溝22・溝24断面 (西から)



6. 溝13断面 (北から)



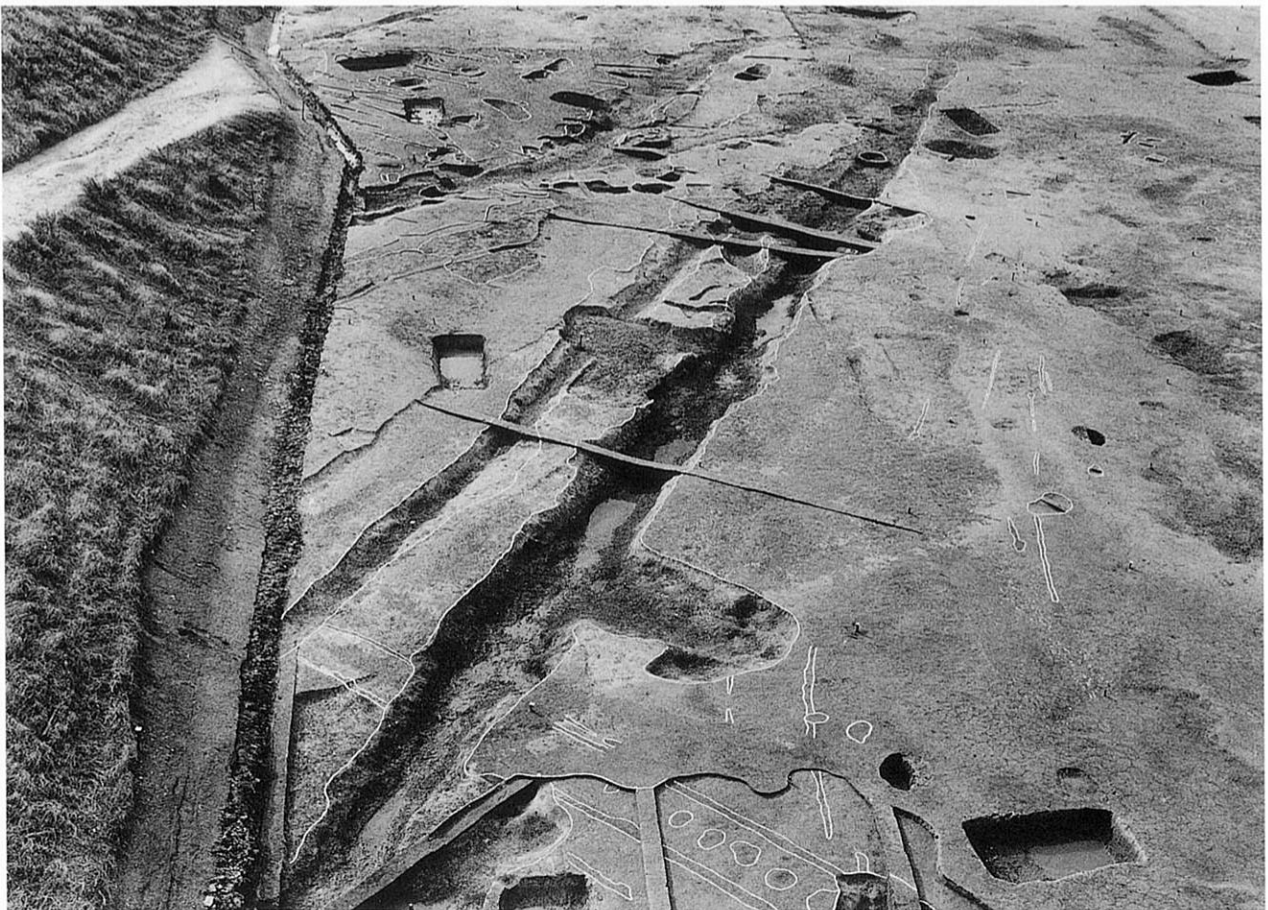
7. 溝15断面 (北から)



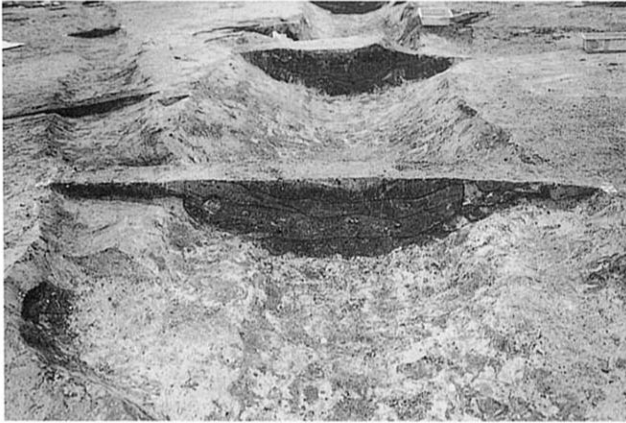
8. 土坑17断面 (北から)



1. 西地区第5面（東から）



2. 東地区第5面（北東から）



1. 溝54・溝55断面 (東から)



2. 溝145断面 (北から)



3. 溝128 [セクション1] (東から)



4. 溝154断面 (南東から)



5. 溝118・溝119 [セクションG] (東から)



6. 溝118・溝119 [セクションD] (西から)



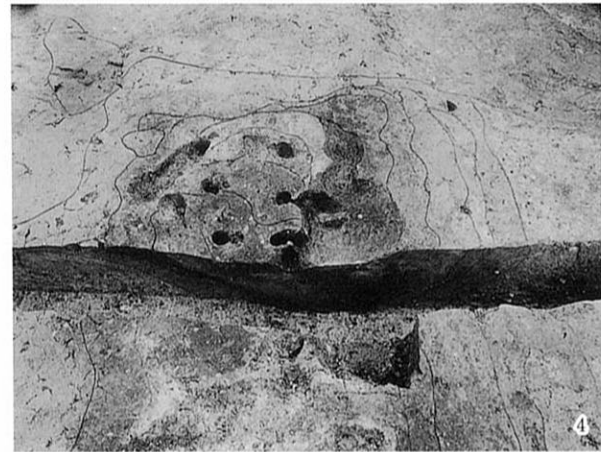
7. 溝118 [セクションD (アップ)] (西から)



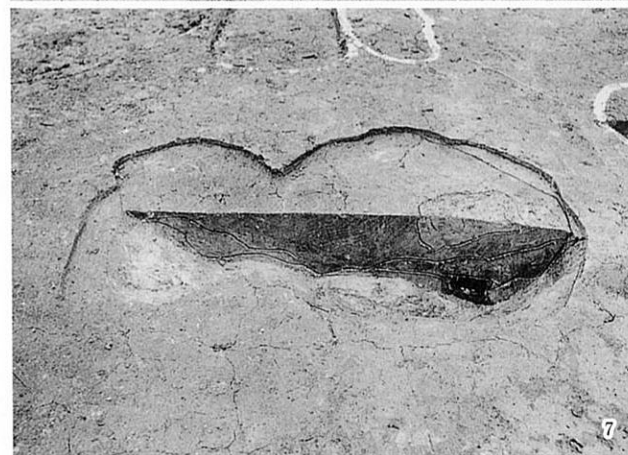
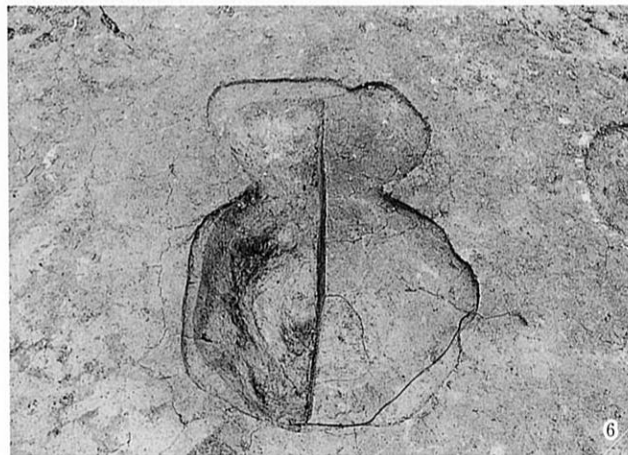
8. 溝119 [セクションD (アップ)] (西から)



1. 焼土坑50検出状況 (北から)、2. 同上断面 (東から)



3. 焼土坑38検出状況 (南から)、4. 同上断面 (西から)



6. 焼土坑144検出状況 (南から)、7. 同上断面 (西から)



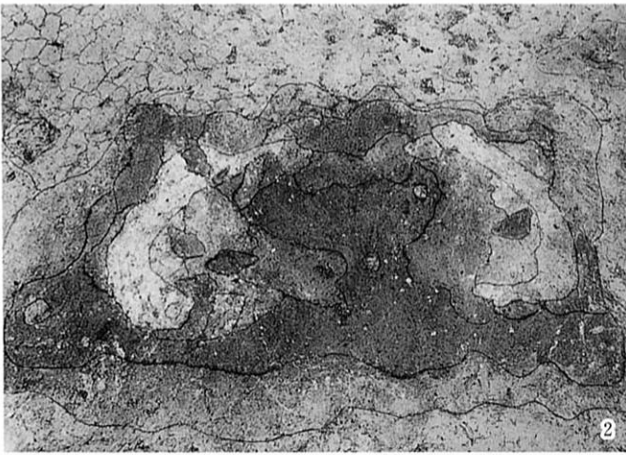
5. 轍状遺構1 (南から)



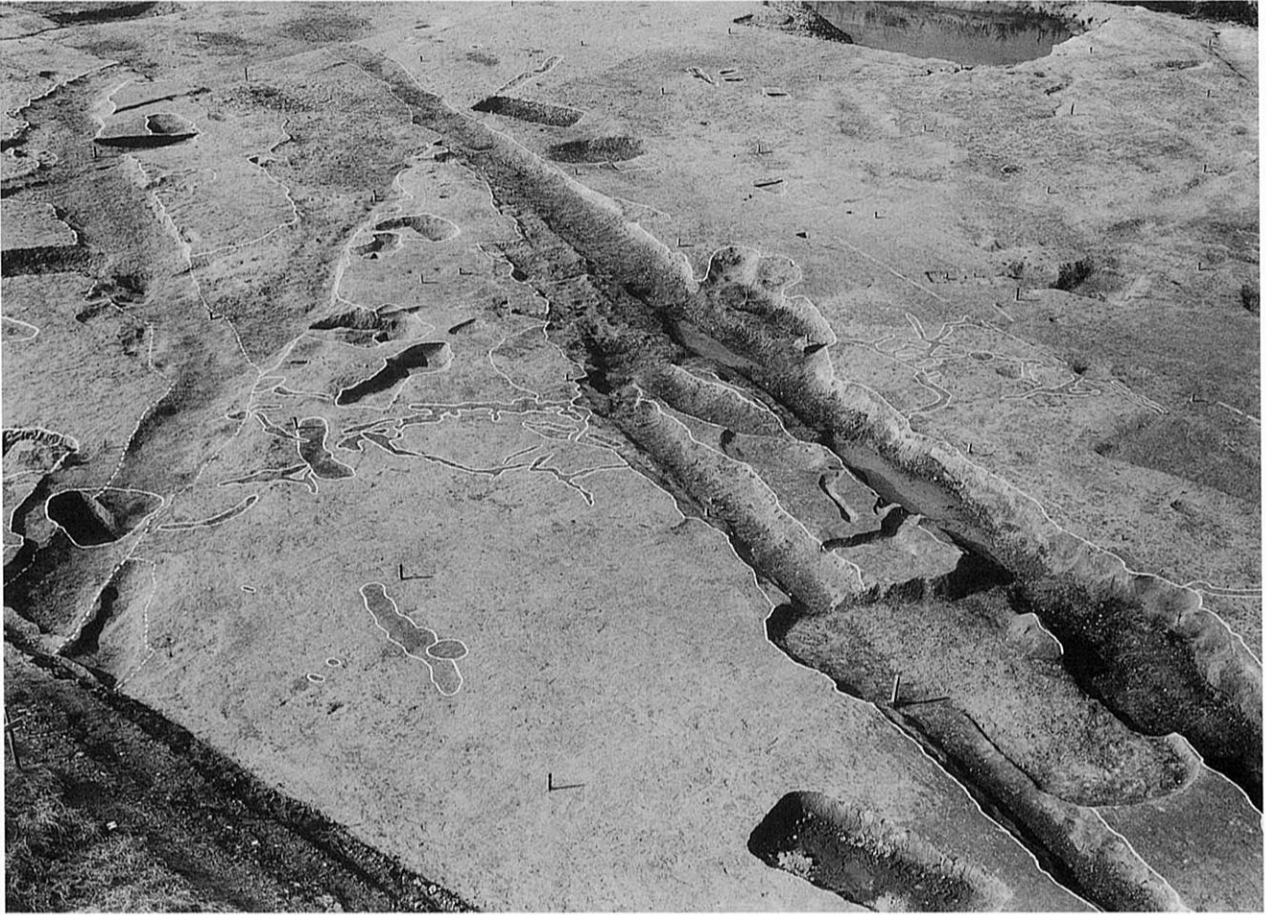
8. 土坑177断面 (西から)



1. 拡張地区第5面 (南から)



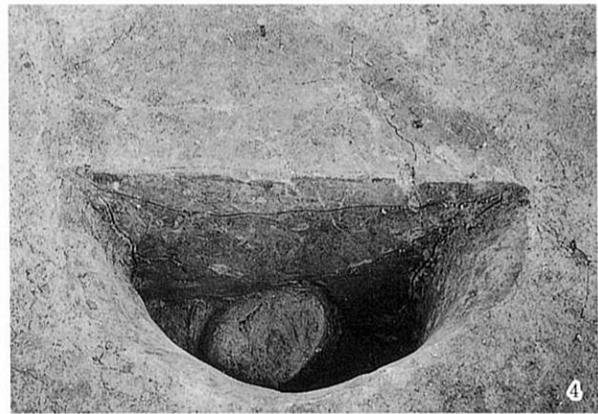
2. 焼土坑33検出状況 (南から)、3. 同上周辺部 (南西から) 4. 同左断面 (西から)、5. 同上完掘 (南から)



1. 木根跡周辺 (東から)



2



4



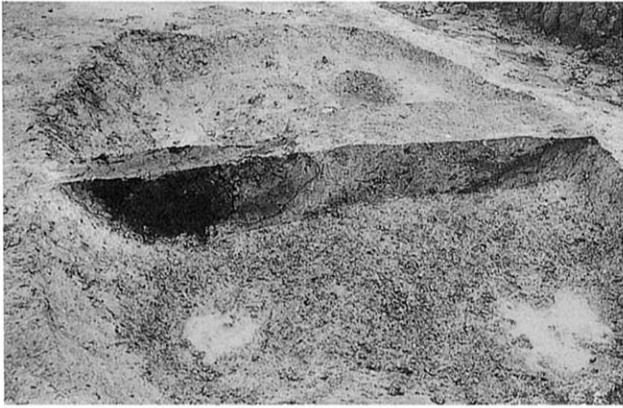
3



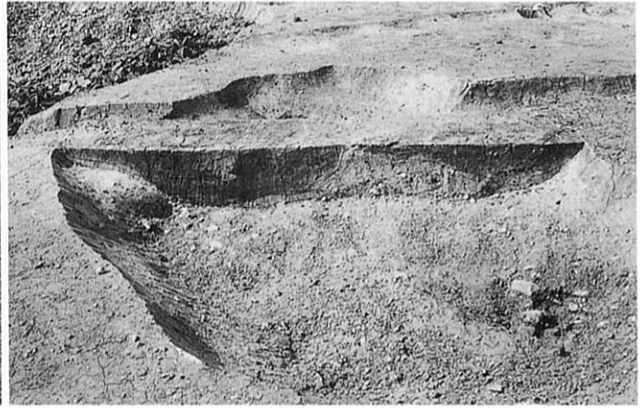
5

2. 土坑95断面 (東から)、3. 同上遺物出土状況 (西から)

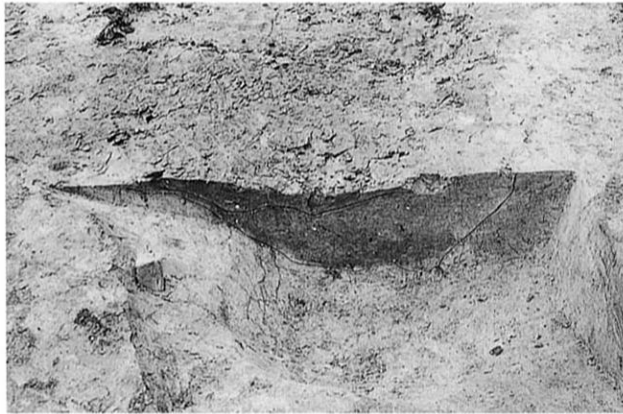
4. 土坑192断面 (南西から)、5. 同上遺物出土状況 (東から)



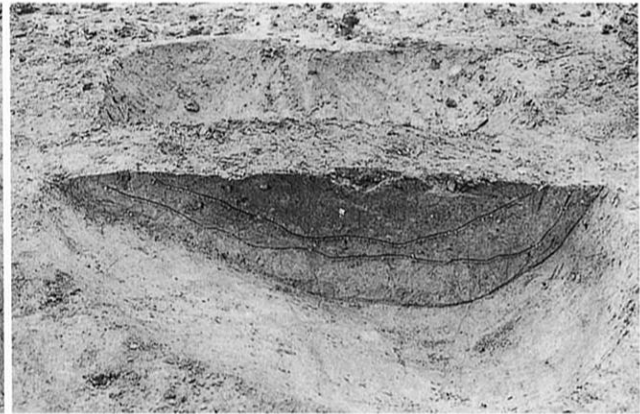
1. 土坑34断面 (西から)



2. 土坑53断面 (東から)



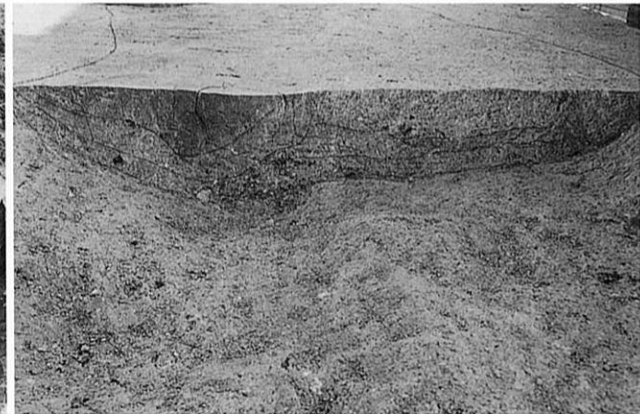
3. 土坑91断面 (東から)



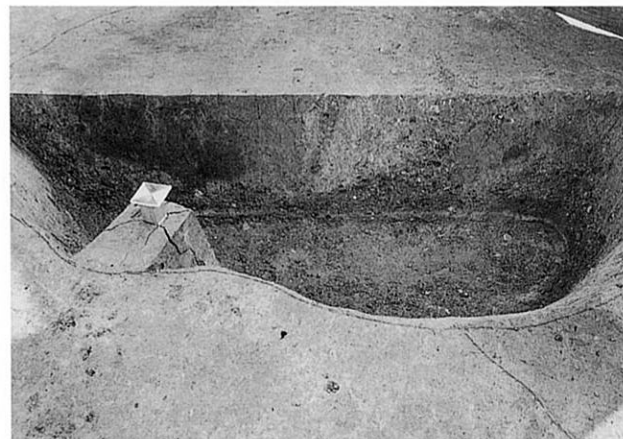
4. 土坑92断面 (西から)



5. 土坑155断面 (西から)



6. 土坑212断面 (西から)

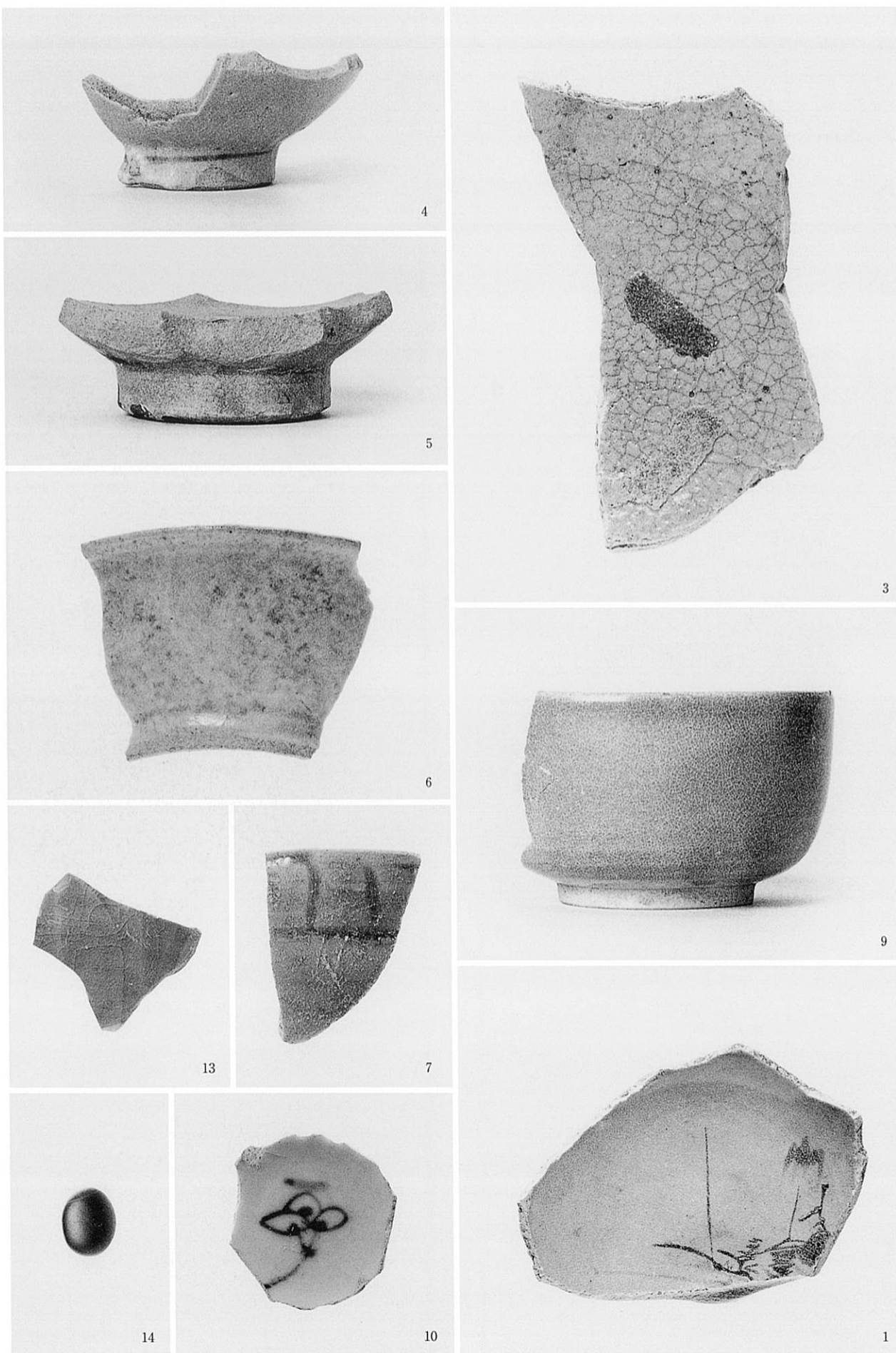


7. 土坑213断面 (南西から)

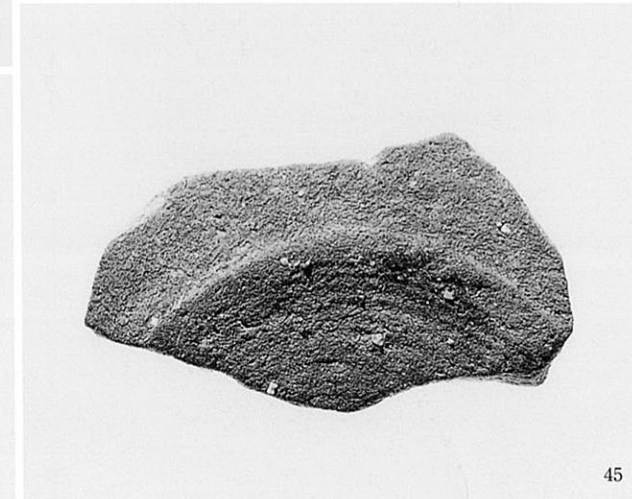
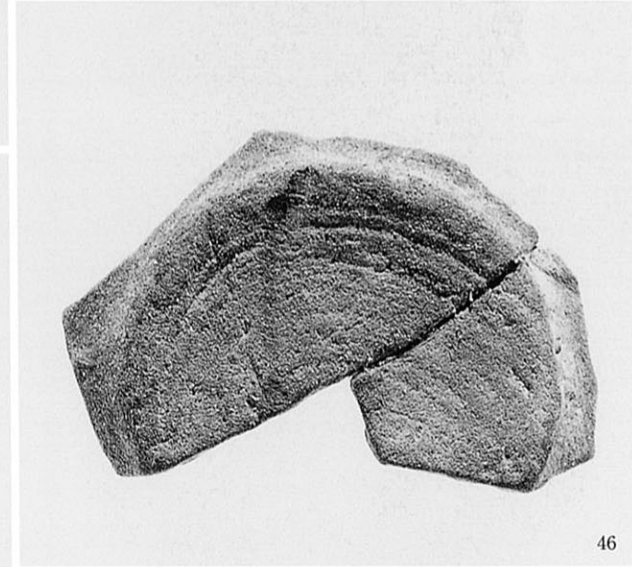
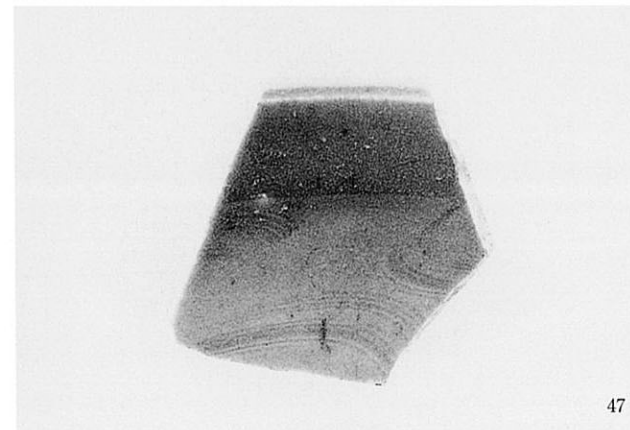
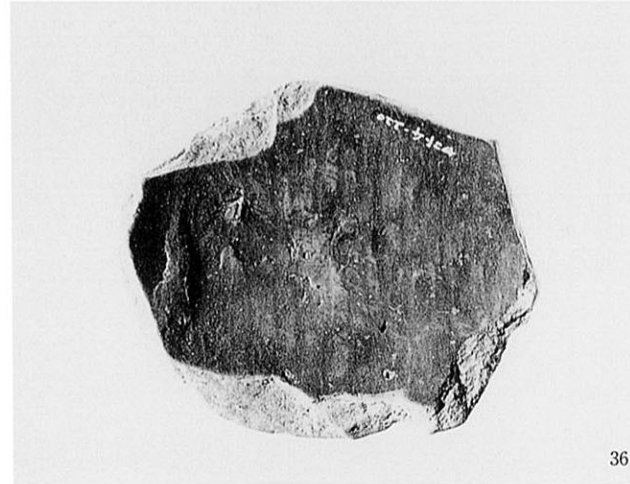
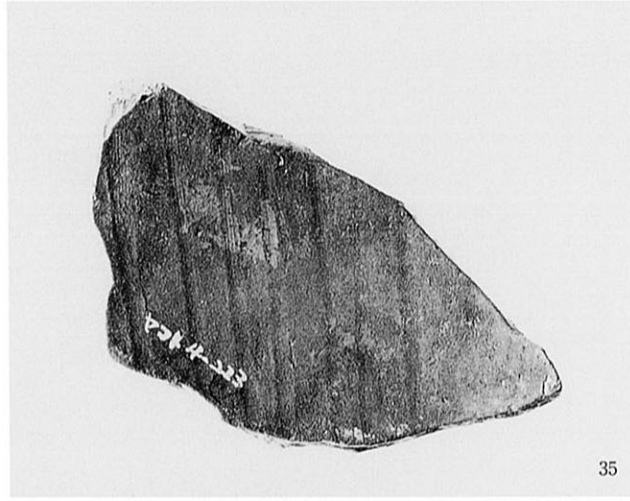
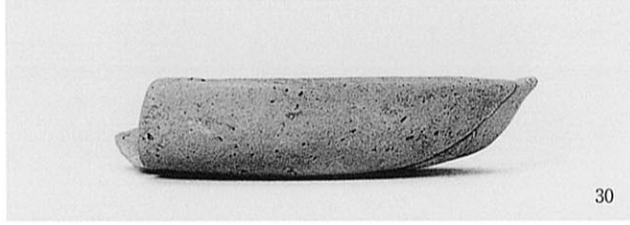
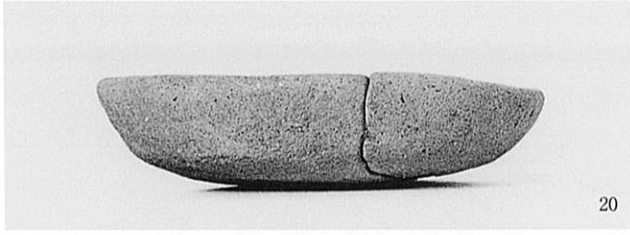


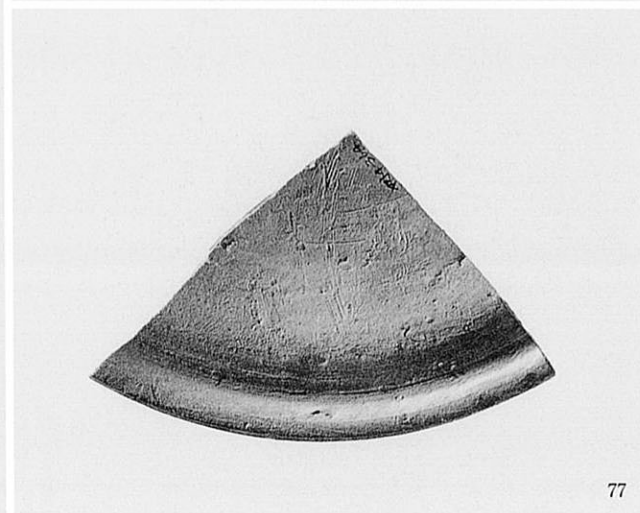
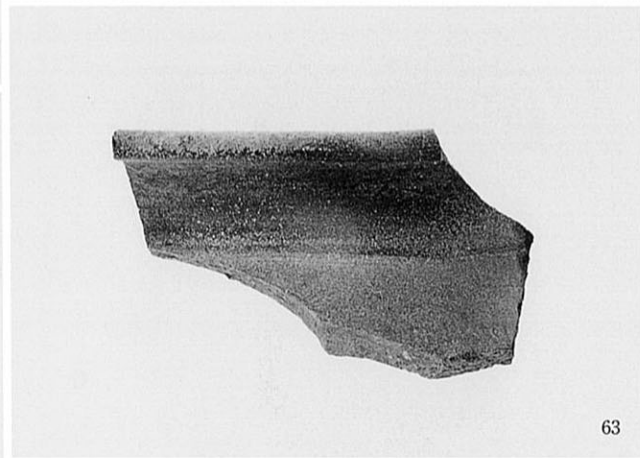
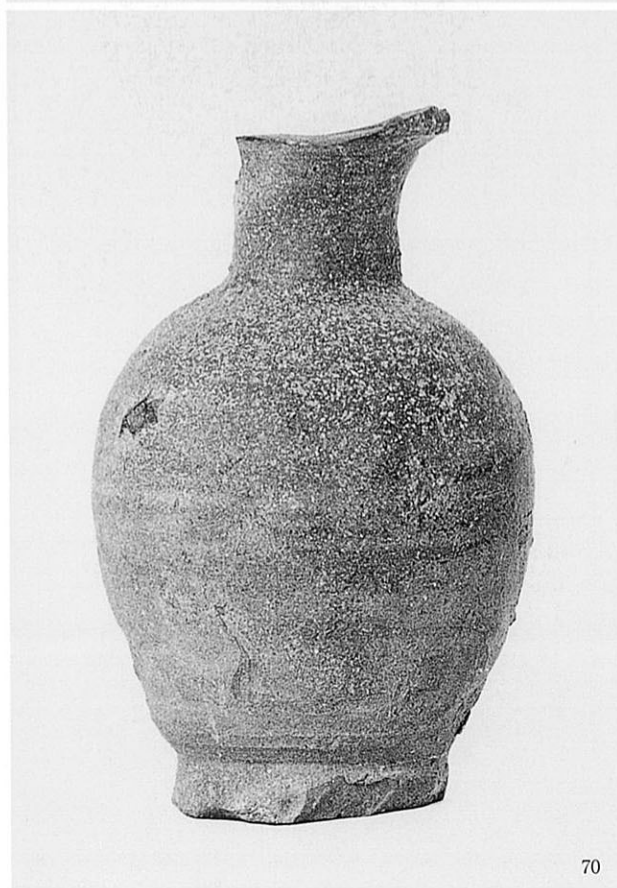
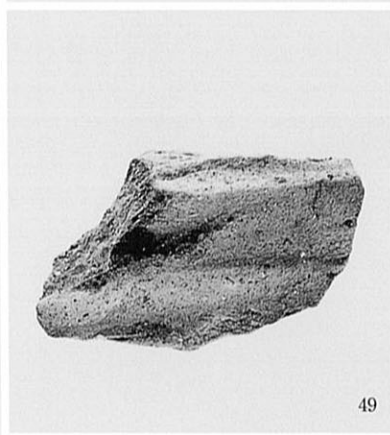
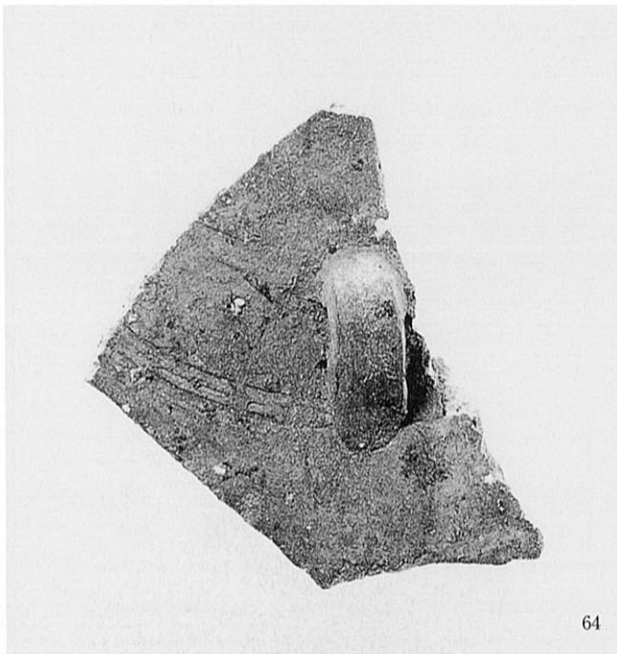
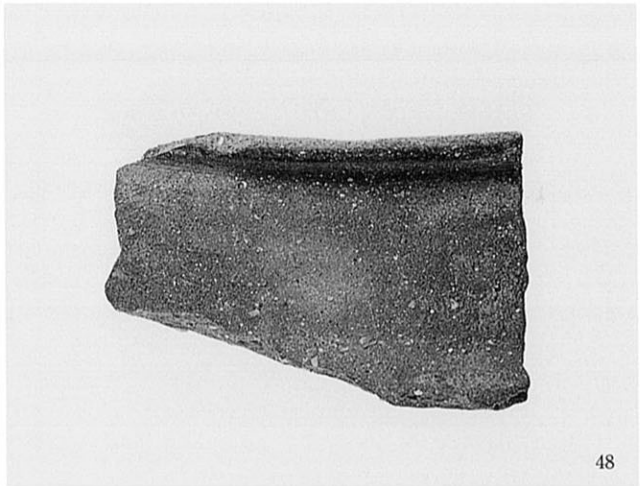
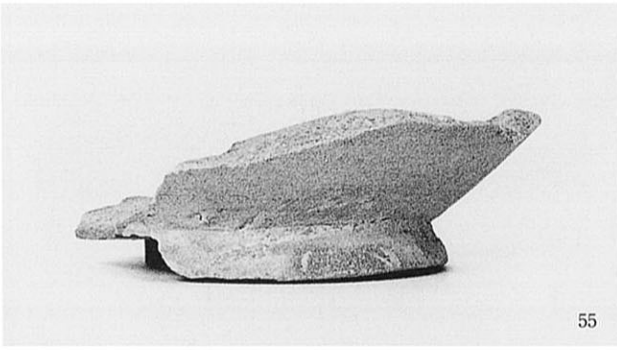
8. 土坑214断面 (西から)

図版44 (その4) 出土遺物1

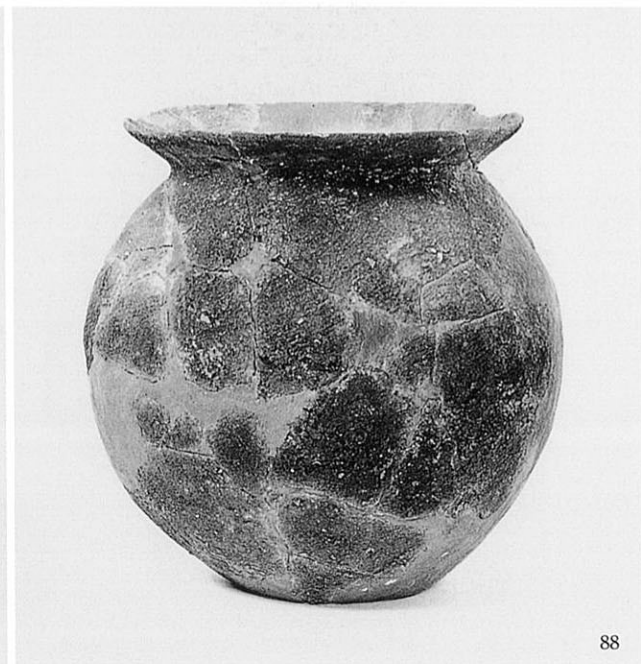
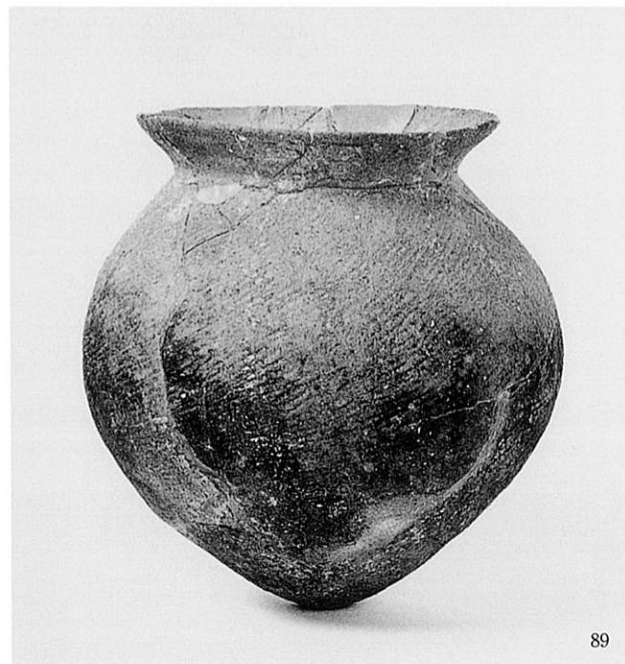
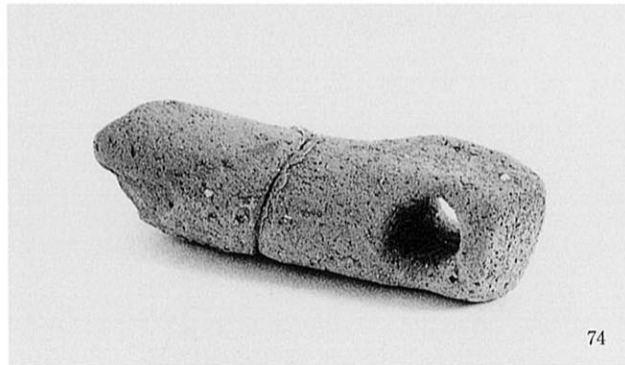
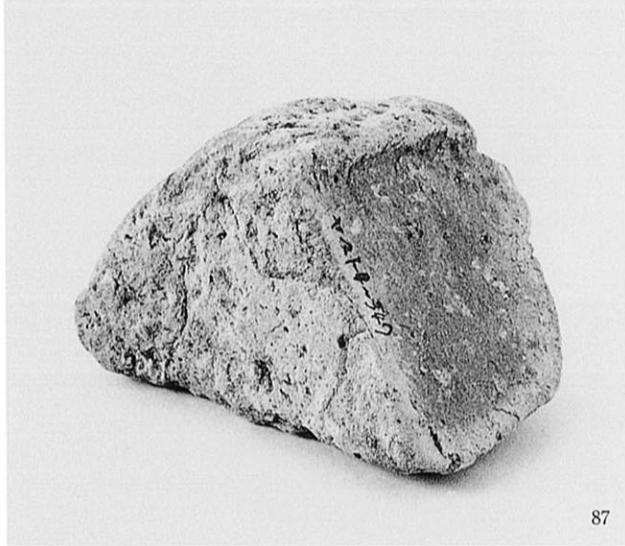
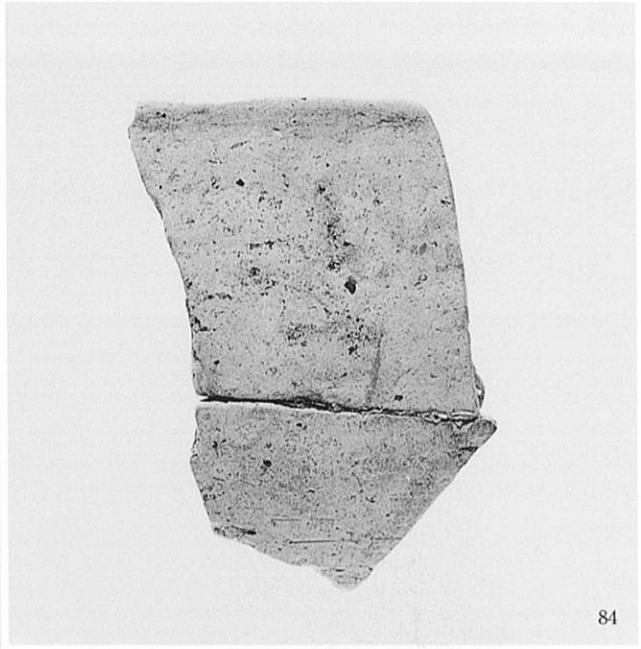
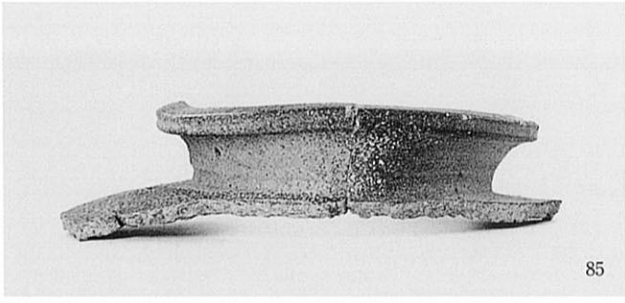


1・3～5・7：第2層（洪水砂）、6：東地区南北セクション、9・10：溝202、13・14：第3-1～2層

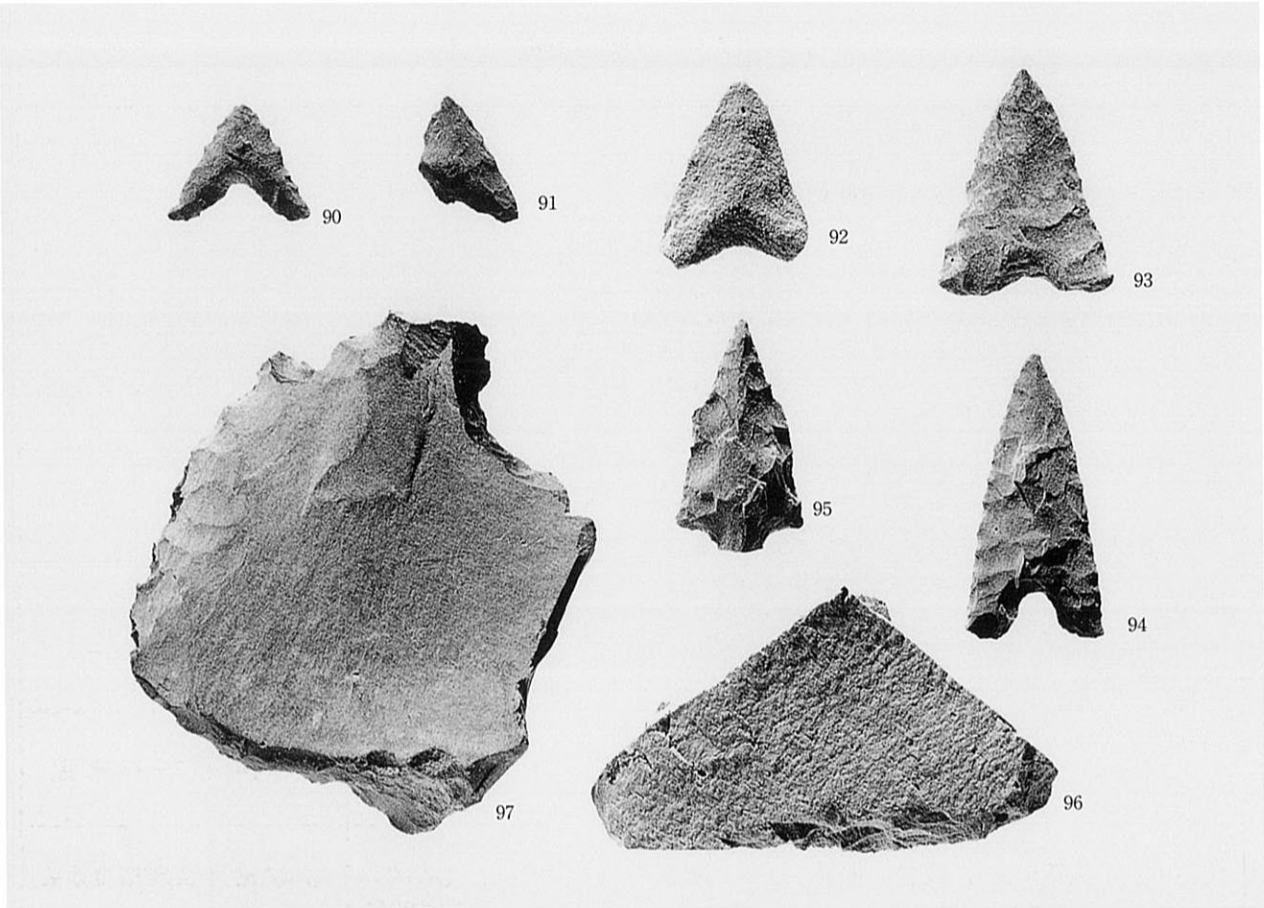




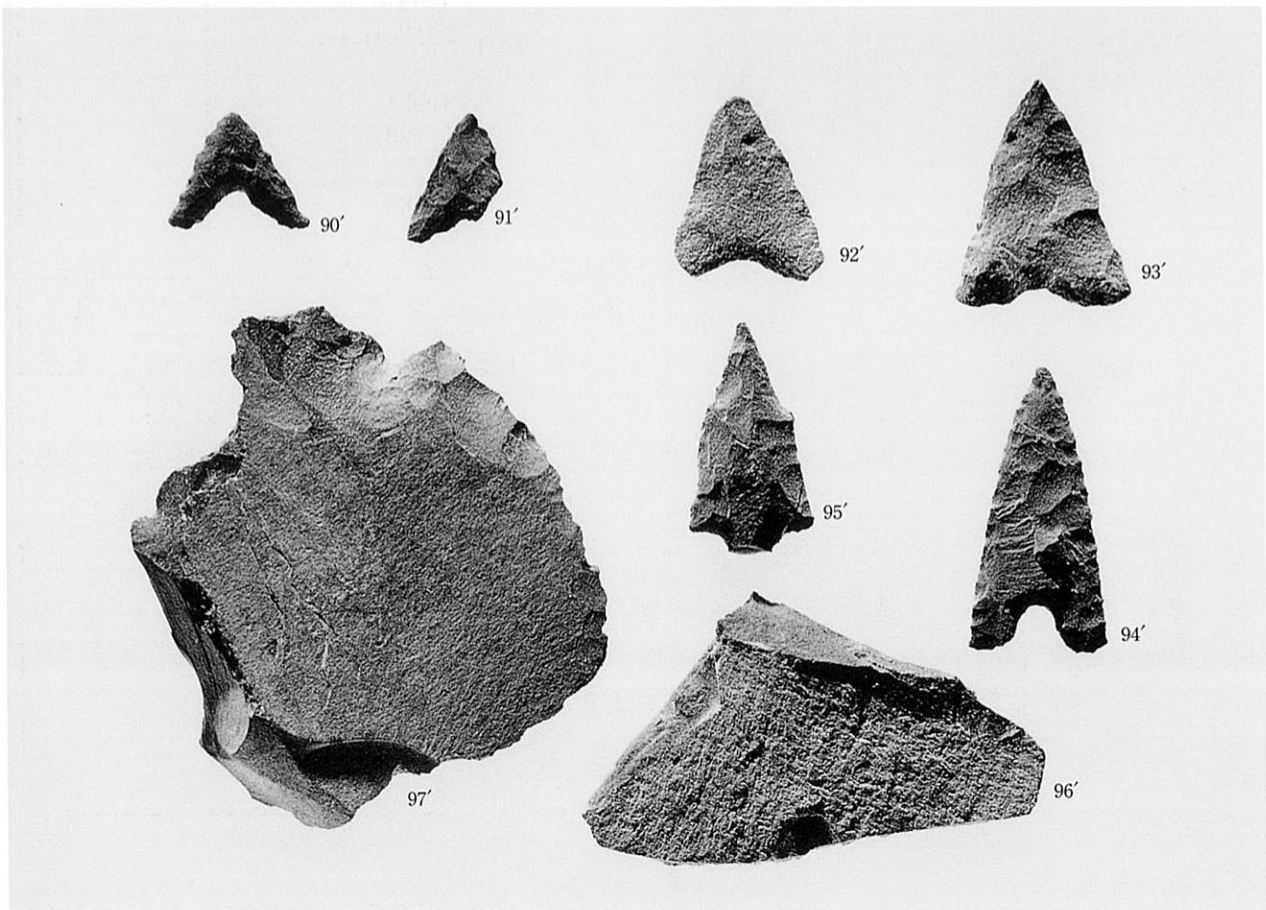
48・49・51・55：第4-1層、63：溝10上層、64：第4-1面直上、70：第5層、77：溝111



74：第5層、82：溝118最下層、84：溝128、85・87：溝156、88：土坑95、89：土坑192



[石器] 90：土坑130、91：第5層、92：溝55、93・94・97：第6面、95：第6層、96：溝10



同上：裏面

報 告 書 抄 録

ふりがな		やまとがわいまいけいせき						
書名		大和川今池遺跡（その3・その4）						
副書名		大和川高水敷整備事業に伴う発掘調査報告書2						
巻次								
シリーズ名		（財）大阪府文化財調査研究センター調査報告書						
シリーズ番号		第65集						
編著者名		村上富喜子・杉本清美・岡本圭司・渡辺正巳・渡辺栄次・吉村佐紀恵						
編集機関		（財）大阪府文化財調査研究センター						
所在地		〒590-0105 大阪府堺市竹城台3丁21番4号 TEL 072-299-8791						
発行年月日		2001年9月30日						
ふりがな 収蔵遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺構番号					
やまとがわ 大和川 いまいけ 今池 (その3) (その4)	おおさかふ 大阪府 まつばらし 松原市	27217	12	34° 35′ 33″	135° 31′ 22″	1997年 3月27日 } 1998年 3月26日 1997年 5月26日 } 1998年 3月25日	4,800㎡ 5,800㎡	大和川高水敷 整備事業
収蔵遺跡	種別	時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
大和川今池 (その3) (その4)	畑 水田	近代 近世 中世 古代 (古墳～平安) 縄文時代		・ 鋤溝 ・ 畦畔 ・ 溝 ・ 焼土坑 ・ 土坑 ・ 不定形土坑 ・ 井戸 ・ 自然流路		陶磁器、瓦、瓦質土器、瓦器、土師質土器、土師器、須恵質土器、須恵器、石製品、焼土塊、骨片、種子、木製品、鉄製品		・ 平安時代の条里制水田 ・ 古墳時代の遺物を含む整地土

財団法人 大阪府文化財センター
南部調査事務所蔵書
(第013389号)

(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第65集

松原市天美西所在

大和川今池遺跡 (その3・その4)

－大和川高水敷整備事業に伴う発掘調査報告書2－

2001年9月30日

編集・発行 (財)大阪府文化財調査研究センター

〒590-0105 堺市竹城台3丁21番4号

TEL 072-299-8791

印刷 株式会社 中島弘文堂印刷所

